

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

石崎 曲り田 遺跡

— I —

1983

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

石崎 曲り田 遺跡

— I —

1983

福岡県教育委員会



石崎丘陵を西北部から望む



a 支石墓



b 6号褒棺墓

序

「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第8集 石崎曲り田遺跡-I が刊行の運びとなりました。今回の報告は1980年度に調査を実施しました、我国の水稻耕作開始期の遺跡として注目を集めた、二丈町石崎所在曲り田遺跡の埋蔵文化財の調査記録の一部であります。

とくに初期の甕棺から出土した鉄製品等については、九州大学医療技術短期大学部上原周三先生に分析をお願いし、その結果を本書に収録させていただいたことは望外の喜びであります。

玄界灘からの寒風ふきすさぶ中、調査に協力いただいた地元の方々、更にまた調査に全面的に協力していただいた建設省九州地方建設局の方々に心からお礼申しあげます。

本書が文化財の保護と活用に御利用いただければ幸甚に存じます。

昭和58年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. この報告は1980年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道 202号線今宿バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の調査記録である。
2. 甕棺内出土の金属器および赤色顔料については九州大学医療技術短期大学部上原周三助教授に分析をお願いし、玉稿を頂いた。
3. 本報告の執筆分担は下記のとおりである。

I	橋口 達也
II - 1	橋口 達也
2 - 1)	中間 研志
2)	中間 研志
3)	橋口 達也
4)	橋口 達也
5)	橋口 達也
3 - 1)	中間 研志
2)	中間 研志
3) - a	中間 研志
3) - b	中間 研志
c	橋口 達也
d	上原 周三・長 哲二
III	橋口 達也
4. 遺物の実測・製図は橋口・中間が行った。又遺構図の製図は豊福弥生の協力を受けた。遺構および甕棺の撮影は橋口が、その他の遺物と航空写真は九州歴史資料館の石丸洋による。
5. 遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館で行った。
6. 本書の編集は橋口が行った。

本文目次

	頁
I. 序 章	1
1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
3. 位置と環境	5
II. 発掘調査の記録	11
1. はじめに	11
2. 遺 構	14
1) 歴史時代の遺構	14
a. 竪穴住居跡	14
b. 掘立柱建物	16
c. 井戸・溝	20
2) 古墳時代の遺構	21
3) 弥生時代の遺構	22
a. 竪穴住居跡	22
b. 甕棺墓	27
4) 夜臼期の遺構	39
a. 竪穴住居跡	39
b. 支石墓	53
5) 包含層	55
a. 曲り田の包含層	55
b. 堤田包含層	57
3. 遺 物	59
1) 歴史時代の遺物	59
a. 土器・土製品	59
イ) 遺構に伴う土器・土製品	59
ロ) 包含層出土の土器・土製品	68
ハ) 小結	75
b. 石製品	76
c. その他	78

2) 古墳時代の遺物	78
a. 土器	78
b. 石製品	83
3) 弥生時代の遺物	84
a. 土器・土製品	84
イ) 遺構に伴う土器・土製品	84
ロ) 包含層出土の土器・土製品	105
b. 石器	143
c. 甕棺	146
イ) 甕棺	146
ロ) 人骨	159
ハ) 棺内出土の遺物	162
ニ) 曲り田甕棺の編年の位置	164
d. 11号甕棺内出土はりがね状金属器および赤色顔料の蛍光X線分析	167
4) 堤田出土の遺物	171
III. まとめ	179

図版目次

- 巻頭図版 1 石崎丘陵を西北部から望む
- 巻頭図版 2 a. 支石墓
b. 6号甕棺墓
- 図版 1 a. 遺跡遠景 1 (西側から望む)
b. 遺跡遠景 2 (南側から望む)
- 図版 2 a. 遺跡俯瞰 1 (西側から)
b. 遺跡俯瞰 2 (西側から)
- 図版 3 a. 遺跡俯瞰 3 (南側から)
b. 遺跡俯瞰 4 (南側から)
- 図版 4 a. 遺跡俯瞰 5 (東側から)
b. 遺跡俯瞰 6 (東側から)
- 図版 5 a. 遺跡俯瞰 7 (西南側から)
b. 遺跡俯瞰 8 (北側から)
- 図版 6 a. 一貴山銚子塚俯瞰 (東南側から)
b. 二塚古墳俯瞰 (北側から)
- 図版 7 a. 遺跡全景 1 (東南側から)
b. 遺跡全景 2 (南側から)
- 図版 8 a. 4号住居跡
b. 27号住居跡
- 図版 9 a. 1号掘立柱建物
b. 2号掘立柱建物
- 図版 10 1号掘立柱建物柱穴
- 図版 11 a. 2号掘立柱建物柱穴
b. 1・2・3号住居跡
- 図版 12 a. 31号住居跡
b. 35号住居跡
- 図版 13 a. 1号甕棺出土状態
b. 2号甕棺出土状態
- 図版 14 a. 2号甕棺内人骨および石剣切先出土状態

- b. 2号甕棺内石鏃出土状態
- 図版 15 a. 3号甕棺出土状態
b. 3号甕棺出土状態
- 図版 16 a. 4号甕棺出土状態
b. 5号甕棺出土状態
- 図版 17 a. 6号甕棺出土状態
b. 6号甕棺出土状態
- 図版 18 a. 6号甕棺内人骨出土状態
b. 7号甕棺出土状態
- 図版 19 a. 7号甕棺出土状態
b. 8・9号甕棺出土状態
- 図版 20 a. 8号甕棺出土状態
b. 9号甕棺出土状態
- 図版 21 a. 10号甕棺出土状態
b. 4号甕棺出土状態
- 図版 22 a. 11号甕棺出土状態
b. 支石墓出土状態
- 図版 23 a. 8号住居跡
b. 17号住居跡
- 図版 24 a. 18号住居跡
b. 33号住居跡
- 図版 25 a. 13・16・17・18号住居跡
b. 13・16・17・18・33号住居跡
- 図版 26 a. 13・16・17・18・33・40・41・42号住居跡
b. 13・39・40・41・42号住居跡
- 図版 27 a. W-3区トレンチ
b. W-3区トレンチ東壁土層
- 図版 28 W-3包含層 西壁の土層
- 図版 29 a. 堤田1号トレンチ西壁土層
b. 堤田2号トレンチ西壁土層
- 図版 30 a. 4号住居跡出土土器
b. 27号住居跡出土遺物
c. 1号溝出土遺物

- d. 包含層須恵器
- e. 包含層土師器
- f. 包含層出土内黒土器
- 図版 31 a. 27号住居跡出土土器
- b. 1号溝出土土器
- c. 包含層出土須恵器
- d. 包含層出土土師器
- e. 包含層出土土師器
- f. 包含層出土瓦器・緑釉・青磁
- 図版 32 a. 包含層出土の青磁・瓦
- b. 遺構出土の石製品
- c. 包含層出土滑石製石鍋
- 図版 33 a. 東北隅土師穴出土土師器
- b. 35号住居跡内柱穴出土土師器
- c. 35号住居跡内柱穴出土土師器
- d. 包含層出土土師器
- 図版 34 a. 包含層出土土師器
- b. 1号住居跡出土土器
- c. 滑石製紡錘車
- 図版 35 a. 1号住居跡内3号Pit出土土器
- b. 2号住居跡出土土器
- 図版 36 a. 2号住居跡出土土器
- b. 31号住居跡出土土器
- 図版 37 a. 31号住居跡出土土器
- b. 35号住居跡出土土器
- 図版 38 a. 35号住居跡出土土器
- b. 35号住居跡柱穴内出土前期土器
- 図版 39 a. 37号住居跡出土土器
- b. 43号住居跡出土土器
- c. 南西トレンチ出土土器
- 図版 40 包含層出土土器(1)
- 図版 41 包含層出土土器(2)
- 図版 42 包含層出土土器(3)

- 図版 43 包含層出土土器 (4)
- 図版 44 包含層出土土器 (5)
- 図版 45 包含層出土土器 (6)
- 図版 46 包含層出土土器 (7)
- 図版 47 包含層出土土器 (8)
- 図版 48 包含層出土土器 (9)
- 図版 49 a. 包含層出土土器 (10)
b. 出土石器
- 図版 50 a. 2号甕棺
b. 3号甕棺上甕
c. 3号甕棺下甕
d. 3号甕棺下甕
- 図版 51 a. 4号甕棺上甕
b. 4号甕棺下甕
c. 5号甕棺上甕
d. 5号甕棺下甕
- 図版 52 a. 6号甕棺
b. 7号甕棺上甕
c. 7号甕棺下甕
d. 7号甕棺下甕
- 図版 53 a. 10号甕棺上甕
b. 10号甕棺下甕
c. 11号甕棺
d. 11号甕棺
- 図版 54 a. 1号甕棺下甕
b. 8号甕棺上甕
c. 8号甕棺下甕
d. 9号甕棺上甕
e. 9号甕棺下甕
- 図版 55 a. 2号甕棺内出土石器
b. 1号井戸出土木器
c. 11号甕棺内出土鉄製品
d. 柱穴出土のガラス玉

- 図版 56 堤田1トレンチ出土土器(1)
- 図版 57 a. 堤田1トレンチ出土土器(2)
- b. 堤田2トレンチ出土土器
- c. 堤田トレンチ出土石器

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 遺跡位置図1 (縮尺1/50,000)	6
第 2 図 遺跡位置図2 (縮尺1/10,000)	7
第 3 図 遺跡付近地形図 (縮尺1/2,000)	9
第 4 図 遺構配置図 (縮尺1/100)	さしこみ
第 5 図 27号住居跡 (縮尺1/60)	15
第 6 図 4号住居跡 (縮尺1/60)	16
第 7 図 1号掘立柱建物 (縮尺1/80)	17
第 8 図 2号掘立柱建物 (縮尺1/80)	19
第 9 図 1・2・3号住居跡 (縮尺1/60)	23
第 10 図 5・9・10号住居跡 (縮尺1/60)	24
第 11 図 31号住居跡 (縮尺1/60)	25
第 12 図 35号住居跡 (縮尺1/60)	26
第 13 図 1号甕棺墓・2号甕棺墓 (縮尺1/20)	28
第 14 図 3号甕棺墓 (縮尺1/20)	30
第 15 図 4号甕棺墓 (縮尺1/20)	31
第 16 図 5号甕棺墓 (縮尺1/20)	32
第 17 図 6号甕棺墓 (縮尺1/20)	33
第 18 図 7号甕棺墓 (縮尺1/20)	34
第 19 図 8号甕棺墓・9号甕棺墓 (縮尺1/20)	35
第 20 図 10号甕棺墓 (縮尺1/20)	36
第 21 図 11号甕棺墓 (縮尺1/20)	37

第 22 図	7・8号住居跡（縮尺1/60）	40
第 23 図	11・12・14・23・24・43号住居跡（縮尺1/60）	42
第 24 図	13号住居跡（縮尺1/60）	43
第 25 図	15・21号住居跡（縮尺1/60）	44
第 26 図	16号住居跡（縮尺1/60）	45
第 27 図	17号住居跡（縮尺1/60）	46
第 28 図	18号住居跡（縮尺1/60）	47
第 29 図	19・25・26・32号住居跡（縮尺1/60）	48
第 30 図	33号住居跡（縮尺1/60）	49
第 31 図	28・29・30・37・38号住居跡（縮尺1/60）	50
第 32 図	34・36号住居跡（縮尺1/60）	51
第 33 図	39・40・41・42号住居跡（縮尺1/60）	折込
第 34 図	支石墓（縮尺1/15）	54
第 35 図	W-3・W-4 トレンチと土層図（縮尺1/60）	56
第 36 図	堤田1・2号トレンチ土層図（縮尺1/60）	58
第 37 図	4号住居跡出土土器・瓦（縮尺1/3）	60
第 38 図	27号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	62
第 39 図	1号掘立柱建物出土土器（縮尺1/3）	64
第 40 図	2号掘立柱建物出土土器（縮尺1/3）	65
第 41 図	1号溝出土土器（縮尺1/3）	65
第 42 図	2号溝出土土器（縮尺1/3）	66
第 43 図	各ピット出土土器（縮尺1/3）	67
第 44 図	包含層出土須恵器（縮尺1/3）	69
第 45 図	包含層出土歴史時代土師器（縮尺1/3）	71
第 46 図	包含層出土黒色土器・瓦器・緑釉・磁器・瓦（縮尺1/3）	74
第 47 図	各遺構出土石製品（縮尺1/3）	76
第 48 図	包含層出土滑石製石鍋（縮尺1/3）	77
第 49 図	1号井戸出土木器（縮尺1/3）	78
第 50 図	北東隅土師穴出土土師器（縮尺1/3）	79
第 51 図	35号住居跡内柱穴出土土師器（縮尺1/3）	81
第 52 図	包含層出土古墳時代土師器（縮尺1/3）	83
第 53 図	滑石製紡錘車（縮尺2/3）	83
第 54 図	1号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）	85

第 55 図	1号住居跡内3号Pit出土弥生土器 (縮尺1/3)	87
第 56 図	2号住居跡出土弥生土器 (その1) (縮尺1/3)	89
第 57 図	2号住居跡出土弥生土器 (その2) (縮尺1/3)	90
第 58 図	5号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	91
第 59 図	6号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	92
第 60 図	9号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	93
第 61 図	10号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	94
第 62 図	31号住居跡出土弥生土器 (その1) (縮尺1/3)	96
第 63 図	31号住居跡出土弥生土器・灰陶 (その2) (縮尺1/3)	98
第 64 図	35号住居跡出土弥生土器 (その1) (縮尺1/3)	100
第 65 図	35号住居跡出土弥生土器 (その2) (縮尺1/3)	102
第 66 図	35号住居跡内柱穴出土弥生前期土器 (縮尺1/3)	103
第 67 図	37号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	104
第 68 図	43号住居跡出土弥生土器 (縮尺1/3)	105
第 69 図	南西トレンチ包含層出土弥生土器 (縮尺1/3)	106
第 70 図	黒色包含層出土土器 (その1) (縮尺1/3)	109
第 71 図	黒色包含層出土土器 (その2) (縮尺1/3)	111
第 72 図	黒色包含層出土土器 (その3) (縮尺1/3)	113
第 73 図	黒色包含層出土土器 (その4) (縮尺1/3)	115
第 74 図	黒色包含層出土土器 (その5) (縮尺1/3)	117
第 75 図	黒色包含層出土土器 (その6) (縮尺1/3)	119
第 76 図	黒色包含層出土土器 (その7) (縮尺1/3)	121
第 77 図	黒色包含層出土土器 (その8) (縮尺1/3)	122
第 78 図	黒色包含層出土土器 (その9) (縮尺1/3)	124
第 79 図	黒色包含層出土土器 (その10) (縮尺1/3)	128
第 80 図	黒色包含層出土土器 (その11) (縮尺1/3)	130
第 81 図	黒色包含層出土土器 (その12) (縮尺1/3)	132
第 82 図	黒色包含層出土土器 (その13) (縮尺1/3)	134
第 83 図	黒色包含層出土土器 (その14) (縮尺1/3)	136
第 84 図	黒色包含層出土土器 (その15) (縮尺1/3)	138
第 85 図	黒色包含層出土土器 (その16) (縮尺1/3)	140
第 86 図	弥生各遺構出土石器 (その1) (縮尺1/2)	144
第 87 図	弥生各遺構出土石器 (その2) (縮尺1/2)	145

第 88 図	1号甕棺下甕 (縮尺1/6)	146
第 89 図	2号甕棺 (縮尺1/8)	147
第 90 図	3号甕棺 (縮尺1/8)	148
第 91 号	4号甕棺 (縮尺1/8)	150
第 92 図	5号甕棺 (縮尺1/8)	152
第 93 図	6号甕棺 (縮尺1/8)	153
第 94 図	7号甕棺 (縮尺1/8)	154
第 95 図	8号甕棺・9号甕棺 (縮尺1/6)	156
第 96 図	10号甕棺 (縮尺1/8)	157
第 97 図	11号甕棺 (縮尺1/8)	159
第 98 図	甕棺口縁部 (縮尺1/4)	160
第 99 図	タタキ痕拓影 (縮尺2/3)	161
第 100 図	2号甕棺内出土の石器 (縮尺2/3)	163
第 101 図	蛍光X線分析装置図.....	167
第 102 図	バックグランド・スペクトル.....	168
第 103 図	試料A (赤色顔料) のスペクトル.....	169
第 104 図	試料B (はりがね) のスペクトル.....	169
第 105 図	堤田1トレンチ出土土器 (その1) (縮尺1/3)	172
第 106 図	堤田1トレンチ出土土器 (その2) (縮尺1/3)	174
第 107 図	堤田1トレンチ出土土器 (その3) (縮尺1/3)	176
第 108 図	堤田2トレンチ出土土器 (縮尺1/3)	177
第 109 図	堤田出土石器 (縮尺2/3)	178
第 110 図	堤田出土砥石 (縮尺1/2)	178

I. 序 章

I . 序 章

1. はじめに

建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委託を受けた一般国道202号線今宿バイパス関係の埋蔵文化財の発掘調査の進行状況は第1表に示すとおりである。これらの発掘調査の成果は現在まで「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」として第1集～第7集が刊行されている(第2表)。

今回第8集で報告を行うのは第28地点、糸島郡二丈町石崎所在「曲り田遺跡」の調査であるが、収録するのは遺構編と遺物の一部である。夜臼期以前の遺物と考察等は諸般の事情で今回は割愛せざるを得なかった。この部分は第9集として早急に刊行するように努力したい。

2. 調査の経過

1980年度に建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委託を受けた発掘調査地点は、糸島郡二丈町石崎・上深江所在の遺物散布地としてあげられていた第28地点・第29地点であった。調査は1980年11月25日～1981年3月27日の間に行った。

上深江地区の第29地点は、一貫山川の両側が散布地としてあげられていた。現況は川の両側が他の部分に比してやや高くなり自然堤防状をなしていた。この地域はかつて耕地整理が行われており、その際現状の地形になったものと考えられたが、念のため川の西側の水田に幅3m×長さ33mのトレンチを設け発掘した(第2図)。河原と同じ高さで礫層が現われ、この地点は本来一貫山川の氾濫原であったことが確認された。

第28地点は南北に走る石崎の低丘陵の中央部の鞍部に位置する。一見谷間ともいえるこのような地形的条件は、今までの私どもの経験からいうならば遺構の存在をあまり期待し得ないのであった。路線決定にあたって、以上のことと発掘地点の北側に隣接する約30mの大形古墳の存在等を考慮して、現在の路線におちついたものと考えられる。

発掘はまず丘陵西側の水田に幅2m、長さ30mのトレンチを設け発掘したが、この部分は耕作土の下に地表下160cmまで黒色粘土が堆積し、平安期のものを中心として、夜臼式土器、弥生式土器等の少量の遺物を包含しており、丘陵部にはこれらの時期の遺構の存在が予測された。

第 1 表 今宿バイパス埋蔵文化財発掘調査の実績及び予定一覧

地点 番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 所 要 区 間			44年度	45年度	46年度	
			長 さ	幅	面 積				
1	遺物散布地	福岡市西区大字拾六町	34 ^m	28 ^m	520 ^{m²}	45 ^{m²}			
2	"	"	52	50	2,600	63			
3	湯納遺跡	"	280	40	11,200	168		1,200	
3	"	"	30	20	600				
4	宮の前遺跡	"	110	40	4,400	400			
5	高崎1・2号墳	"	36	15	540	160			
6	大又遺跡	"	57	20	1,140	300		900	
6	高崎3・4・5号墳	"	40	15	600	200		249	
7	須恵器散布地	"	55	20	1,100	27			
8	弥生散布地	"	33	39	1,287				
9	若八幡古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000		1,100		
10	馬場遺跡	福岡市西区飯氏	70	70	4,900		290		
11	鏡原遺跡	"	70	50	3,500		550		
12	条里遺跡	福岡市西区大字飯氏 ～糸島郡前原町篠原	3,000	40	120,000				136
13	古野遺跡	糸島郡前原町大字有田・篠原	150	40	6,000				482
14	上鐘子遺跡	糸島郡前原町大字有田	70	30	2,100				304
15	遺物散布地	"	300	30	9,000				
16	古墳2基	糸島郡前原町	30	30	900				
17	遺物散布地	"	100	30	3,000				
18	遺物散布地	"	40	30	1,200				
19	今宿高田遺跡	福岡市西区大字今宿字高田	50	40	2,000				
19'	今宿大塚南遺跡	福岡市西区大字今宿	100	40	4,000				
20	今宿小塚遺跡	福岡市西区大字今宿女原	30	40	1,200				
21	遺物散布地	糸島郡前原町	250	20	5,000				
22	"	"	50	40	2,000				
23	"	"	100	20	2,000				
24	"	"	230	20	4,600				
25	"	"	150	20	3,000				
26	"	"	200	20	4,000				
27	"	"	300	30	9,000				
28	石崎曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	200	30	6,000				
29	遺物散布地	糸島郡二丈町大字上深江	100	40	4,000				
30	"	糸島郡二丈町大字深江	100	40	4,000				
31	"	"	100	30	3,000				
(32)	鎮懐石 八幡宮裏古墳	"							
(33)		糸島郡二丈町大入							
(34)	赤岸遺跡	"							

既 調 査 面 積								残調査 予定面積	備 考
47年度	48年度	53年度	54年度	55年度	57年度	計			
						45 ^{m²}	0 ^{m²}	調査不要	
						63	0	"	
4,612						5,980	0	発掘調査終了、報告書既刊	
	450					450	0	"	
						400	0	消 減	
						160	0	発掘調査終了、報告書既刊	
						1,200	0	"	
						449	0	"	
						27	0	調査不要	
						0	0	消 減	
						1,100	0	保存確定、報告書既刊	
						290	2,000	一部調査終了、報告書既刊	
						550	2,000	"	
		3,360				3,496	0	調査終了、一部報告済、56年度報告	
						482	0	調査終了、報告書既刊	
630						934	0	"	
							4,500		
							0	路線変更のため調査不要	
							0	"	
							1,000	旧追1	
					2,000	2,000	0	旧追2、58年度報告予定	
	650					650	0	旧追2、調査終了、報告書既刊	
	500					500	0	旧追3 "	
							1,000		
							400		
							400		
							900		
							600		
							800		
							1,800	58年度調査予定	
				2,000			0	調査終了、今回一部報告	
				100			0	遺構なし	
			3,000				0	調査終了、56年度報告	
							0	調査不要	
			100				0	調査終了、56年度報告 (二丈浜玉道路)	
			30				0	調査終了、遺構なし (二丈浜玉道路)	
			224			350	0	56年度報告(二丈浜玉道路)	

その下は砂層となり、かなり厚い層のようであったが湧水が激しいため掘り下げることができなかった。この砂層の状態、上深江地区、深江地区の調査、諸工事現場の掘削時の観察等からすると、この付近まで汀線がはいりこんでいたものと想定できる。

丘陵鞍部はほぼ中央部を南北に農道が走り、農道の西側の小字は曲り田、東側は堤田となっている。曲り田地区は全面発掘を行い、鞍部の南に向いた部分を中心に縄文前期、夜臼期、弥生期、奈良・平安期の遺構が集中し、西南部の斜面はこれらの時期の包含層が形成されていた。包含層は一部発掘を行ったが、表土下3m以上もあり、期間と安全確保の点から1980年度の調査は断念し、堤田地区のトレンチ調査の結果により1981年度に調査を行うか否かを決することとした。

第 2 表 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

番 号	副 題	収録した遺跡	報 告 者	備 考
第 1 集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯 納 遺 跡 宮の前遺跡・E地点 高 崎 古 墳 群 大 又 遺 跡	浜 田 信 也 酒 井 仁 夫 浜 田 副 島 邦 弘	1969年調査 1970年報告
第 2 集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若 八 幡 古 墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳 田 康 雄 ・ 浜 田 ・ 副 島 永 井 昌 文 柳 田 ・ 副 島 ・ 浜 田	1970・71年調査 1971年報告
第 3 集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高 崎 古 墳 群 大 又 遺 跡	栗 原 和 彦 上 野 精 志	1971年調査 1973年報告
第 4 集	福岡市西区大字拾六町所在 湯納遺跡の調査	湯 納 遺 跡	青 峰 重 範 松 本 昂 也 林 弘 也 山 本 輝 雄 栗 原 ・ 上 野 馬 田 弘 稔	1971・72年調査 1976年報告
第 5 集	福岡市西区・糸島郡前原町所在 遺跡の調査	湯 納 遺 跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡 今宿小塚遺跡 糸島平野条里及び 古野遺跡 上 籙 子 遺 跡	沢 村 仁 松 本 ・ 林 細 川 隆 英 粉 川 昭 平 弓 場 紀 知 栗 原 ・ 柳 田 上 野 ・ 馬 田	1971・72・73年調査 1977年報告
第 6 集	糸島郡前原町大字波多江所在 「波多江遺跡」の調査	波 多 江 遺 跡	松 本 ・ 林 大 澤 正 巳 丸 山 雍 成 橋 口 達 也 高 橋 章 馬 田	1978年調査 1982年報告
第 7 集	糸島郡二丈町深江・大入地区所在 遺跡の調査	塚 田 遺 跡 鎮懐石八幡宮裏古墳 赤 岸 遺 跡	大澤・橋口・中間 橋 口 達 也 中 間 研 志	1979年調査 1982年報告
第 8 集	石崎・曲り田遺跡 I	曲 り 田 遺 跡	橋 口 達 也 中 間 研 志 上原周三・長哲二	1980・81年調査 1983年報告

堤田地区には2×10mのトレンチを2ヶ所設定し調査を行った(第3図)。結果は両者ともに、奈良・平安期、弥生後期の包含層とからなり、遺構は確認できなかった。遺構の存在する地点は曲り田地区の発掘結果からすると、現在、果樹園・雑草地となっている低平な部分が想定された。したがって堤田地区の全面調査は行わないこととした。これに伴い、曲り田地区の包含層の調査は、この部分の工事が2m以上の盛土部分であること等も考慮して、調査は後世の人々に託することとした。

調査関係者は下記のとおりである。

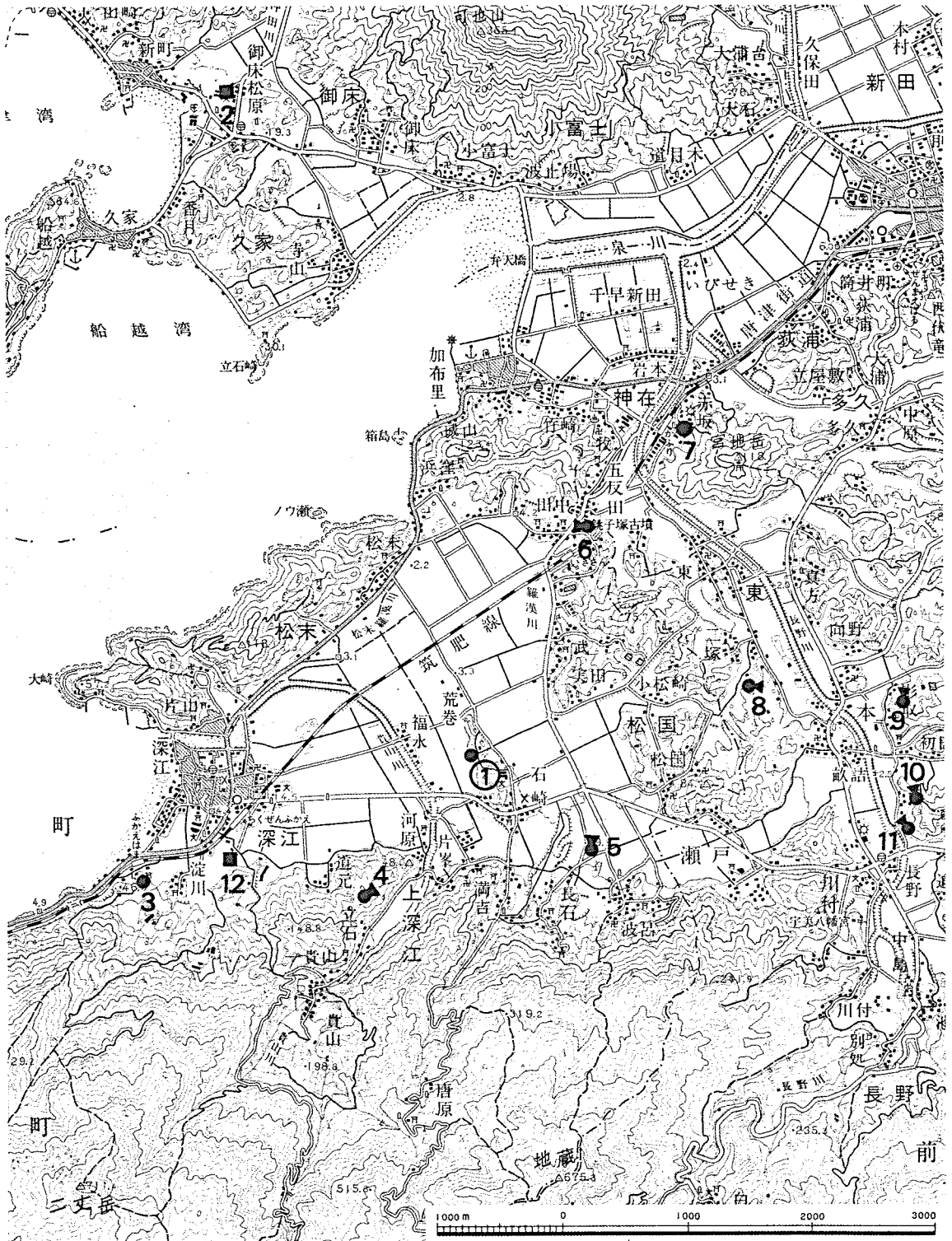
総括	福岡県教育委員会	教育長	友野 隆
		文化課長	藤井 功
庶務・会計		文化課主任主事	三瓶 寧夫
調査担当		文化課主任技師	橋口 達也
		〃	中間 研志

なお、寒風吹きすさぶ中、文化課井上裕弘、木下修、馬田弘稔、佐々木隆彦の諸兄には実測に来援され感謝にたえない。又、二丈町教育委員会社会教育課、糸島農協一貴山支所、地元石崎地区、上深江地区の皆さまの御協力をたまわり、調査が順調に進行したことに対して深い感謝の念を表したい。

3. 位置と環境

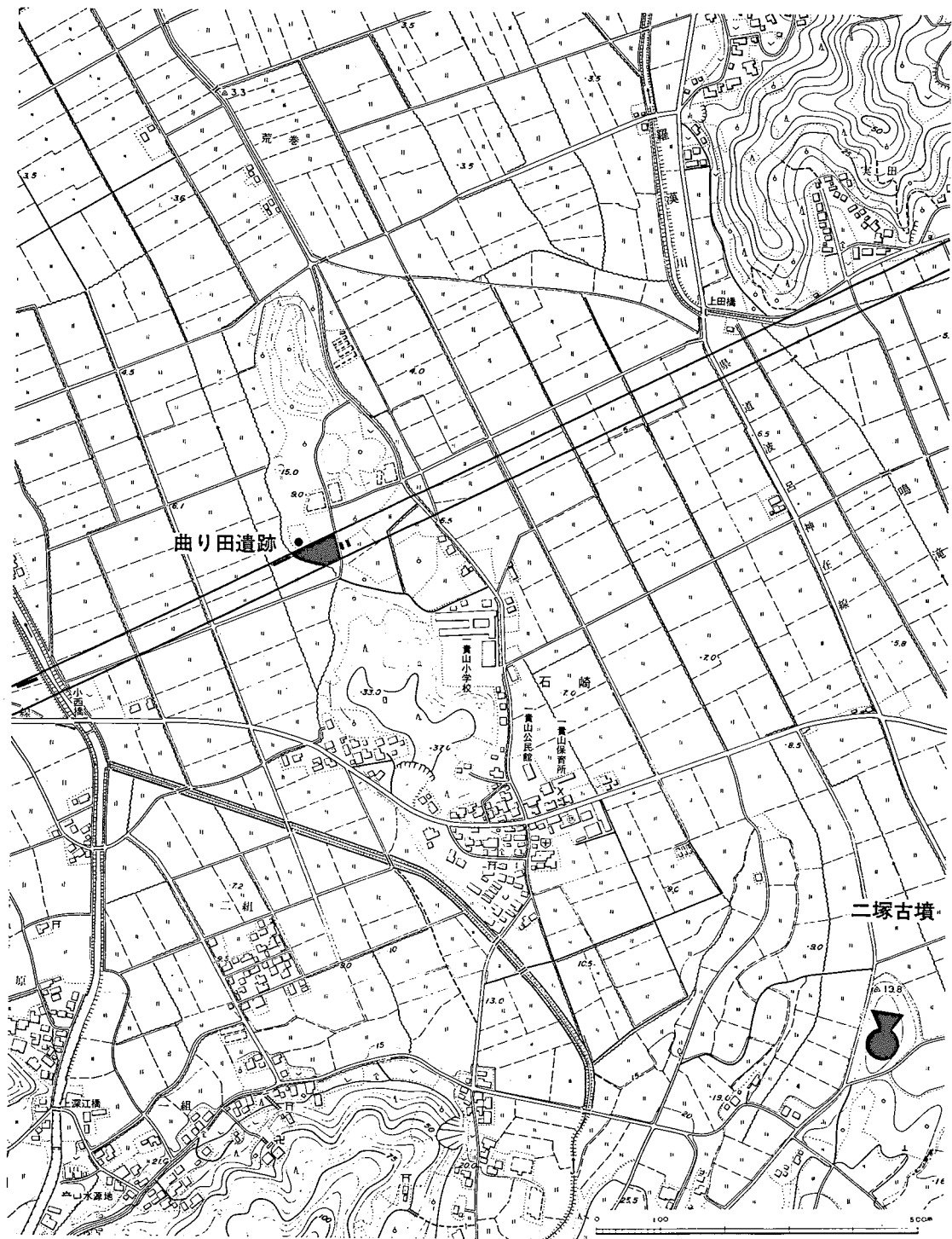
糸島郡二丈町深江・一貴山地区は現在では広大な水田地帯を形成している。しかしながら前項で述べたように、調査等の結果から石崎丘陵付近まではかなり後世まで汀線がはいりこんでいたことは確実であり、このことから類推すると国鉄筑肥線沿線の一貴山川東側も同様の状態であったと考えられる。地名からいってもかなり奥まで海浜にちなんだものが多く、まさに名前のごとく、深く入江がはいりこんでいたものと思われる。

石崎曲り田遺跡は深江・一貴山地区のほぼ中央部に脊振山系から派生した南北にはしる独立低丘陵上に位置するが、当時は海浜に面し、東南部の後背地に低湿地をひかえたまさに稲作受容期の聚落形成の最適地であったことを指摘できる。この石崎の丘陵を母胎としてこの地域の弥生時代の発展が行われたと思われる。しかしながら、未だこの地域での調査の不十分な現状では詳しく立入る段階ではないが、曲り田遺跡には甕棺内より磨製石剣切先、石鏃2を出土し、戦闘により殺傷されたと思われるものが存在する。これは別稿で論じているように土地争い・水争いに係る結果である(註1)。いずれにしても他地域と同様、この地でも弥生時代は激動の時代であった。とともに、地理的好条件をも加味して、少量ではあるが、無文土器・金海式灰



1. 石崎曲り田遺跡 2. 御床松原遺跡 3. 鎮懐石八幡宮裏古墳 4. 徳正寺古墳 5. 二塚古墳
 6. 一貫山銚子塚古墳 7. 釜塚古墳 8. 東二塚古墳 9. 横枕古墳 10. 日明11号墳
 11. 日明3号墳 12. 塚田遺跡

第1図 遺跡位置図1 (縮尺1/50,000)



第 2 図 遺跡位置図 2 (縮尺1/10,000)

陶等も出土しているように、対外的交流の窓口の一つであったといえよう。

古墳時代になるとこの地域には3基の前方後円墳が知られ、周囲の丘陵部には多くの古墳が形成されている。国指定史跡「銚子塚古墳」をはじめとするこれらの古墳は、東に隣接する長野川流域の前方後円墳群・釜塚等のグループと同一の単位をなすものであるか否かの判断は現時点ではきわめて困難であるが、両者ともに「伊都」の西の玄関口をおさえるにふさわしい交通の要衝の地を占めている。

歴史時代になってもやはりこの石崎丘陵がこの地域の中心をなしたものと思われ、奈良・平安時代の遺構・遺物も多く出土した。若干ではあるが瓦も出土しており、付近に寺院跡等の存在も考えられる。終末期の前方後円墳である二塚古墳の西側に広大な低台地があり、寺院跡を想定するには最も適しているように見受けられる。

ところで玄界灘に面した唐津から遠賀川流域までの地域で、日本の稲作は開始されたとされている。現在これらの地域で知られているこの時期の主要な遺跡は、唐津市菜畑遺跡、唐津市宇木汲田遺跡周辺、佐賀県浜玉町五反田遺跡、曲り田遺跡、福岡市有田遺跡、福岡市板付遺跡、福岡県新宮町夜臼遺跡等である。これらの遺跡は各単位平野もしくは水系の中心部を占め、その後の発展の母胎となったものであることはよく理解できる。ところが唐津から順にみてくると、菜畑、宇木汲田、五反田ともにその基盤となる地域はそうたいして広大なものではなく、きわめて小じんまりとしたまとまりをもっているようである。たとえば二丈町吉井の福吉川の形成する沖積地に面して晩期前半の広田遺跡が知られ、又竹戸遺跡は奈良時代の駅家をも想定し得るような掘立柱建物群も存在する(註2)。又この付近からはかって銅剣、銅製の鐙状の両小枝をつけた鉄剣(槍)等を出土した甕棺も知られ(註3)、この地域が小さいながらも一つのまとまりをなしていたとは確実である。

広田遺跡は菜畑、曲り田遺跡等とも共通した立地をもち、これらは必然的に晩期後半へとひきつがれていると思われる。したがって付近には夜臼期の遺構も存在するものと思われる。

このように考えるならば、稲作開始期の聚落遺跡は、たとえば宇木汲田と五反田の間の横田川の形成する沖積地、福吉川の形成する沖積地等の小単位で今後発見される可能性が大きいといえる。

註1 橋口達也「Ⅲ. 磨製石剣嵌入人骨について、2. 考古学的意義」 穂波町教育委員会

『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書第1集 1976 所収

橋口達也「弥生時代の戦い」柏書房刊『日本歴史地図』参考資料編 1982 所収

2 福岡県教育委員会「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」 1980

二丈町教育委員会「竹戸遺跡」二丈町文化財調査報告 第1集 1979

3 中山平次郎「筑前国糸島郡福吉村吉井発見物と推定すべき銅剣及異式の鉄剣」考古学雑誌15-4 1925



第 3 図 遺跡付近地形図(縮尺1/2,000)

II. 発掘調査の記録

II. 発掘調査の記録

1. はじめに

曲り田遺跡では第3表に示すように、掘立柱建物2棟、溝2、井戸2、竪穴住居跡43棟、甕棺11基、小形支石墓1基を検出し、西南部の斜面には2m程の厚い包含層が形成されていたので、その部分のトレンチ調査も行った(第4図)。多くの遺構が狭い範囲のなかで重複していたため、遺構検出には困難をきわめた。奈良・平安期のものは比較的容易であったが、弥生時代以前の遺構が複雑に重複する部分では北端の輪郭のみはわかっているが、全容の把握は困難なものが多く、遺構検出のためやむなく遺構面を徐々に下げていったため、結果的には上層の弥生中期・後期の遺構をかなりとばしてしまっている。したがって今回は、発掘時に確実にその住居跡のものとして取上げた遺物のみを報告する。下層の夜白期の住居跡を発掘する際に、これら上層の土器がかなり混入していたが、これは発掘に忠実に、夜白期の遺物をとりあつかう際に一緒に報告し、判明する分については、どの遺構に伴うものかを明らかにしたい。

13号住居跡の東部と16号住居跡の北部の床面下には縄文前期土器が出土したが、住居跡等の遺構があるものか否かは明らかにできなかった。

夜白期の住居跡は遺跡中央部の南向きの部分に30棟分集中している。又南端には支石墓1基が検出され、この時期の墓地は発掘地点より南側に展開するものと思われる。この時期の包含層は主として遺跡西側に形成されていた。

17号・33号住居跡の西端から、35号住居跡の南半の下層、39号・41号・42号住居跡の上層には板付I式の包含層が形成されていた。夜白期の住居跡の上層でも若干の板付I式土器が出土しているが、この時期の遺構は発掘区域内では検出されなかった。さきに述べた現在果樹園・雑草地となっている東北側、南側の低平な部分のいずれかへ移っているものとする。

板付II式の古期から前期後半頃にかけては、夜白期の住居跡が営まれた部分に甕棺墓群がつくられている。同時期の包含層も板付I式の包含層の上層に少量ではあるが形成されている。したがって板付II式期の住居跡も近辺にあったことは確実である。

次に中期初頭～前葉の円形住居跡が1棟みられるが、これは東北隅にあり、これより東北側の低平な部分にこの時期の住居跡が営まれていることは明らかである。包含層中にも量的には少ないが、この時期の遺物が含まれている。

弥生時代後期の住居跡は9棟分ほぼ夜白期の住居跡と重複して検出された。包含層ではこの

時期の遺物が最も多く、西南部のトレンチでは地表下3mを越える部分で地山に達し、包含層は厚さ2m程であったが、この部分は最上部に若干奈良期の遺物を含んでいたが、地山に達するまで主体は弥生後期後半のものであった。

古墳時代には発掘区域内では、遺構といえるようなものはなかった。

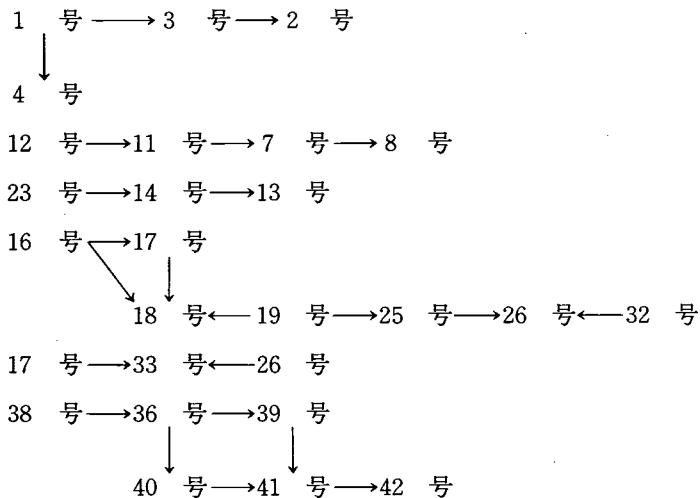
奈良時代後期頃から平安時代初期にかけて、またこの場所に住居跡・工房跡等が営まれたことは4号・27号住居跡、掘立柱建物2棟、井戸・溝等の存在が示すとおりである。西南部の包含層の最上部で奈良時代の墨書土器が出土した(第4図)。

包含層の調査は先にのべた西南部のトレンチと、遺構実測用の基準線N-S、0線から西側を5mごとにW-1~W-4区に区割して、W-1・W-2区については遺構の上面から斜面にかけて形成されていた包含層の遺物を取りあげ、W-3区については幅3m内外のトレンチ調査を、W-4区については一部3・5区にまで広げたトレンチ調査を行った。

以上の部分はだまかにいうと上層を奈良~平安時代、中層は弥生時代、下層は夜白期の遺物を出す、W-1区に関してはさきにものべたように、板付I式、板付II式の包含層も形成されていた。

堤田地区には遺構の有無を確認するためのトレンチを2本設定して調査したが、この部分は地形的には谷状をなしており、弥生後期の遺物を主体とする包含層が形成されていたが、遺構は確認されなかった。

住居跡の切合い関係は、重複がはげしいので、まちがいはあろうかと考えるが、発掘時に確認したかぎりでは以下のとおりである。(古→新の関係で示す。)



以下順を追って遺構・遺物について説明を加える。

第 3 表 遺 構 一 覧 表

遺構番号	遺構の形態	時 期	備 考	遺構番号	遺構の形態	時 期	備 考	
1号掘立柱建物	2間×5間	平安初期		26号住居跡	方 形	夜 白	鍛冶遺構	
2号掘立柱建物	2間×5間	平安初期		27号住居跡	方 形	奈良後半		
1号溝		平安初期		28号住居跡	方 形	夜 白		
2号溝		奈良末期		29号住居跡	方 形	夜 白		
1号井戸	円 形	(平安初期)		30号住居跡	方 形	夜 白		
2号井戸	円 形	(")		31号住居跡	長 方 形	弥生後期中頃		
1号住居跡	円 形	弥生中期前半	掘立柱建物	32号住居跡	方 形	夜 白		ベッド状遺構あり
2号住居跡	方 形	弥生後期後半		33号住居跡	方 形	夜 白		
3号住居跡	方 形	弥生後期		34号住居跡	方 形	夜 白		
4号住居跡	方 形	奈良末期		35号住居跡	長 方 形	弥生後期後半		
5号住居跡	方 形	弥生中期前半		36号住居跡	方 形	夜 白		
6号住居跡	方 形	弥生後期後半		37号住居跡	方 形	弥生後期後半		
7号住居跡	方 形	夜 白		38号住居跡	方 形	夜 白		
8号住居跡	方 形	夜 白		39号住居跡	方 形	夜 白		
9号住居跡	方 形	弥生後期		40号住居跡	方 形	夜 白		
10号住居跡	方 形	弥生後期後半		41号住居跡	方 形	夜 白		
11号住居跡	方 形	夜 白		42号住居跡	方 形	夜 白		
12号住居跡	方 形	夜 白		43号住居跡	方 形	弥生後期後半		
13号住居跡	方 形	夜 白		1号甕棺	小 児 棺	弥生前期		
14号住居跡	方 形	夜 白		2号甕棺	成 人 棺	"		
15号住居跡	方 形	夜 白		3号甕棺	成 人 棺	"		
16号住居跡	方 形	夜 白		4号甕棺	成 人 棺	"		
17号住居跡	方 形	夜 白		5号甕棺	成 人 棺	"		
18号住居跡	方 形	夜 白		6号甕棺	成 人 棺	"		
19号住居跡	方 形	夜 白		7号甕棺	成 人 棺	"		
20号住居跡	方 形	夜 白		8号甕棺	小 児 棺	"		
21号住居跡	方 形	夜 白		9号甕棺	小 児 棺	"		
22号住居跡	方 形	夜 白		10号甕棺	成 人 棺	"		
23号住居跡	方 形	夜 白		11号甕棺	成 人 棺	"		
24号住居跡	方 形	夜 白		支 石 墓	円形土壇	夜 白	小 形	
25号住居跡	方 形	夜 白						

2. 遺 構

1) 歴史時代の遺構

a. 竪穴住居跡

発掘調査範囲の東端に1軒、中央やや西寄りの夜臼期住居跡等が激しく切り合う斜面にも1軒が検出された。いずれも、各項で詳述する如く、厳密な意味での竪穴式の住居跡とも言えない性格を有する類である。

27号竪穴住居跡（第5図）

2号掘立柱建物の南辺の9・10・11号の3柱穴に切られ、28・34・35・36・37・38号の各住居跡より新しく営まれる。南面した斜面に、南北方向4.8m+ α 、東西に4.4mの長方形プランの竪穴を掘っている。北壁際で0.3mの深さを測り、床面は北半1.5m幅の程度は平坦面をなし、以南は斜面となり、削除されたものと考えられる。

中央に、壁の焼けた不整形の細長い掘り込みがみられ、その中に鞆羽口が検出された。そこを中心にパンケース1箱分の鉄滓が出土しており、この竪穴が、小鍛冶関係の工房的な性格を持つことを示している。主柱穴は同時期の他遺跡例から4本かと考えられるが、整然とつながるものが見出せず明らかにし得ない。通常見られるような壁際付設の竈も検出されず、この遺構が、通有の住居跡と異なり、上記の性格を有する類であることを裏付ける。なお、後述する如く、当竪穴より移動式竈片が出土していることを付言しておく。

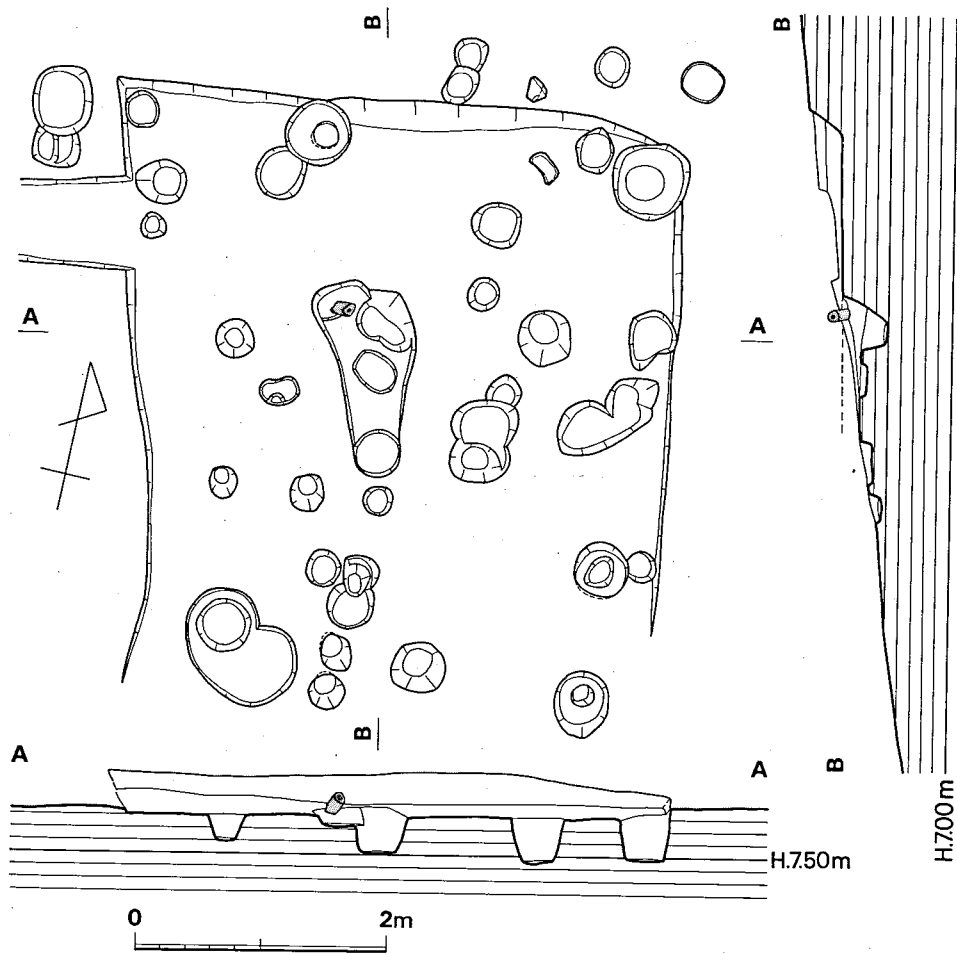
遺物は、須恵器杯蓋・杯身・高台付の大口径の杯、土師器の手握ね状小皿・ミニチュア、移動式竈片、鞆羽口、それと内黒土師碗小片の混入がみられる。(第38図) 以上の出土遺物より、当竪穴の時期は、奈良時代の末に近い後半代と考えられる。なお、鉄滓は現在科学分析中であり、追って結果は報告されるであろう。

4号竪穴住居跡（第6図）

発掘範囲の東端に、1・9・10号住居跡を切って営まれる。東半部は現農道敷地下にあり、全容は明らかにできない。方形区画に一段掘り下げ、壁際に幅0.5~0.8mの幅広い周溝をめぐ



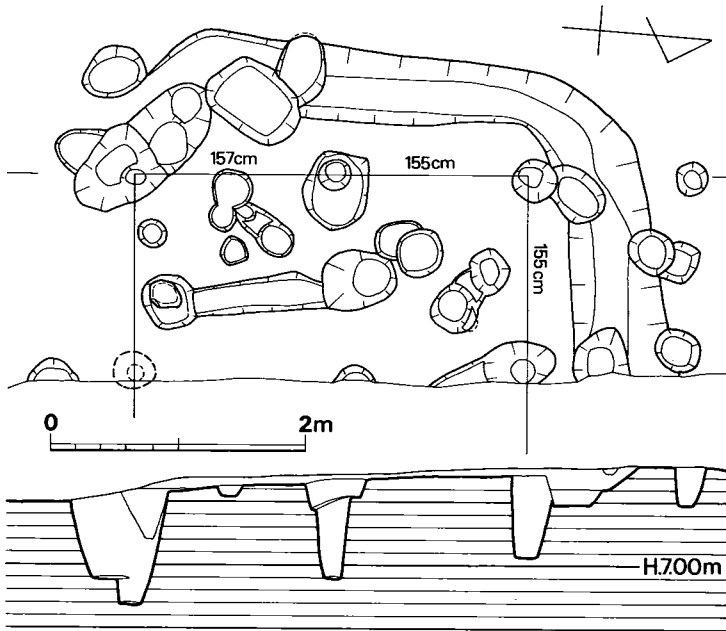
第4図 遺構配置図(縮尺1/100)



第 5 図 27 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

らせる。床面は北壁側の周辺地山より僅か0.1m弱低いのみで、竪穴式住居とするには疑問も感ぜられる。柱穴は、南北に2間、東西に1間分が検出されている。柱穴間の心々距離は1.55~1.57mを測り、31cm≒1尺とした場合、5尺等間と考えられる。柱穴は0.65~0.90mといずれも深い。南北方向軸線は、真北より11°23'西へ振れている。調査できなかった東半分は何間分延びるか明らかではないが、おそらく、南北2間×東西3間の半竪穴的な東西棟であったと考えられる。炉或いは竈等の諸施設は認められない。

遺物は周溝を中心にいくらかみられる。須恵器杯蓋・甕片、土師器杯・皿、内黒土師器片、瓦片などが出土した。(第37図) これらの遺物より、当遺構は、奈良時代の末頃を中心とした時期の所産と考えられる。即ち、前記の小鍛冶工房と考えた27号住居跡とほぼ同時期か、若干降る年代が与えられる。



第 6 図 4 号住居跡 (縮尺1/60)

なお、出土遺物の中に瓦が1片だけみられ、更に黒色包含層からも1点出土しているが、これだけでは瓦葺きであったと考えることはできない。近辺のいずれかの台地上に在った古代寺院あたりから拾って来て何かに転用されたものかと考えられる。本遺跡の南西2.3kmの谷間に奈良期創建と伝えられる夷巍寺跡(二丈町大字一貴山字大仏)もあり、また、南東0.7kmの台地上は寺院建築に好

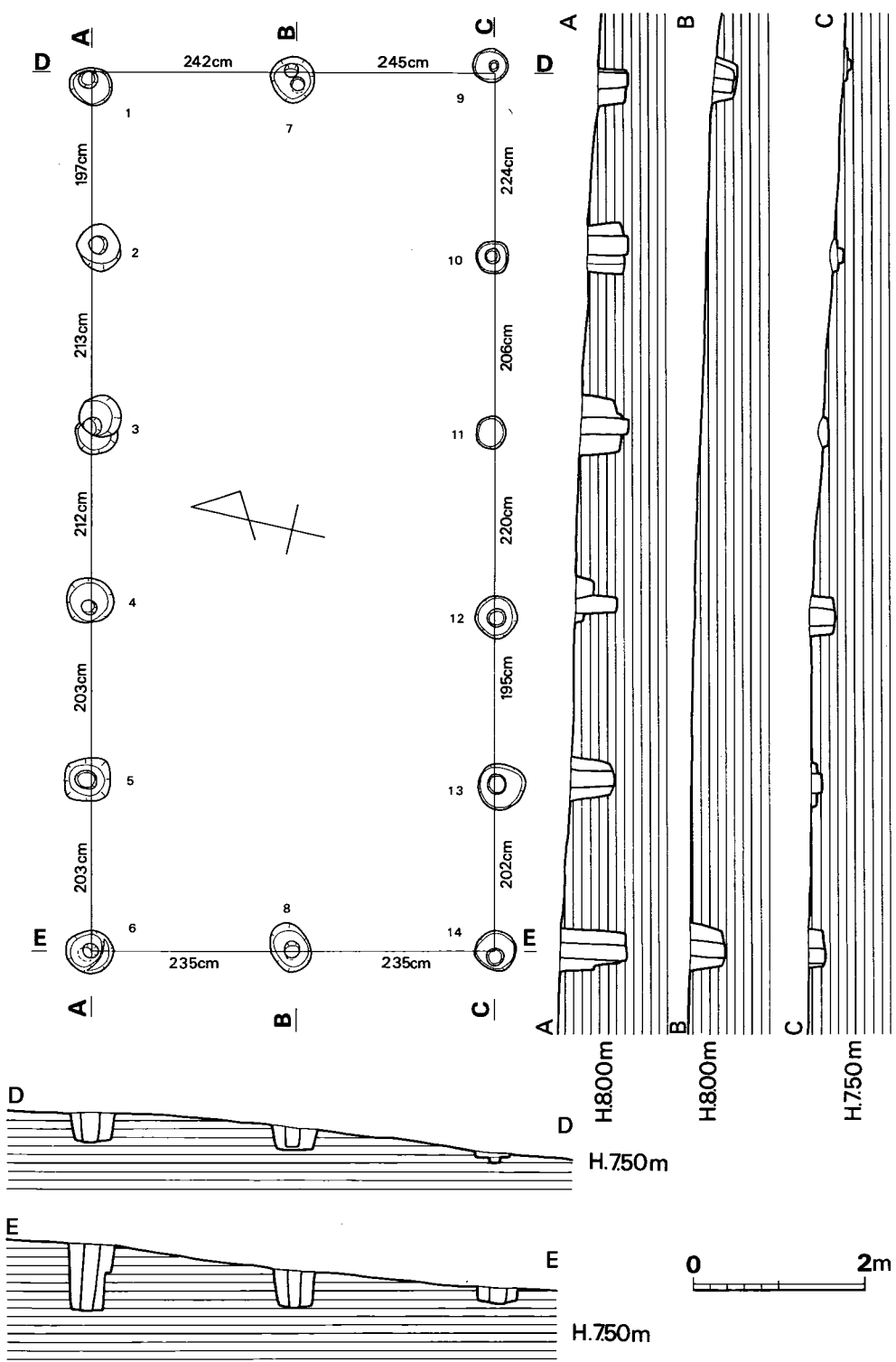
適地である。本遺跡はこれらの古代寺院とも関係のあった人々の居住した地のひとつでもあったろうと考えることは想像に難くない。続いて後述する掘立柱建物等の存在をも併考すると、更にその感は強くなるであろう。

b. 掘立柱建物

遺跡北半の台地上の南縁部に、2×5間の東西棟が隣接して検出された。両者は主軸が若干ずれるが、同時併存した可能性が強い。両者の間隙は、2.0m幅で、両棟の桁行各柱間距離とほぼ同一であり、この間隙は計画的に計って空けられたことが視える。この間隙は屋根が葺かれ通路として馬道的なものとして用いられたものであろう。

1号掘立柱建物(第7図)

2棟の掘立柱建物のうち東側のもので、梁行2間・桁行5間の東西棟であり、主軸は真北より18°53'20"西に振れる。柱間心々距離は各々若干の差があるが、桁行平均2.075m、梁行平均2.39mであり、一尺≒29.5cmとすると、各々7尺・8尺の柱間寸法をとっている。この遺構は他のすべての遺構を切っており、東南隅寄りの諸柱穴は上半をかなり削平されている。柱穴掘



第 7 图 1 号掘立柱建物 (縮尺1/80)

方は直径0.5mの略円形をなし、2号掘立柱建物のそれと比べて全体にやや小さい。柱根跡は深いもので0.8mあり、その径は0.17~0.22mと、これも2号掘立柱建物のそれと比べて小さめの柱を使用していたと考えられる。

各柱穴内より、須恵杯口縁小片、土師杯・大椀・甕口縁片等が出土しており、これらの遺物は8C後半~9C前半代の年代幅が与えられる。よってこの建物はこれらの時期を上限とする築営と考えられる。

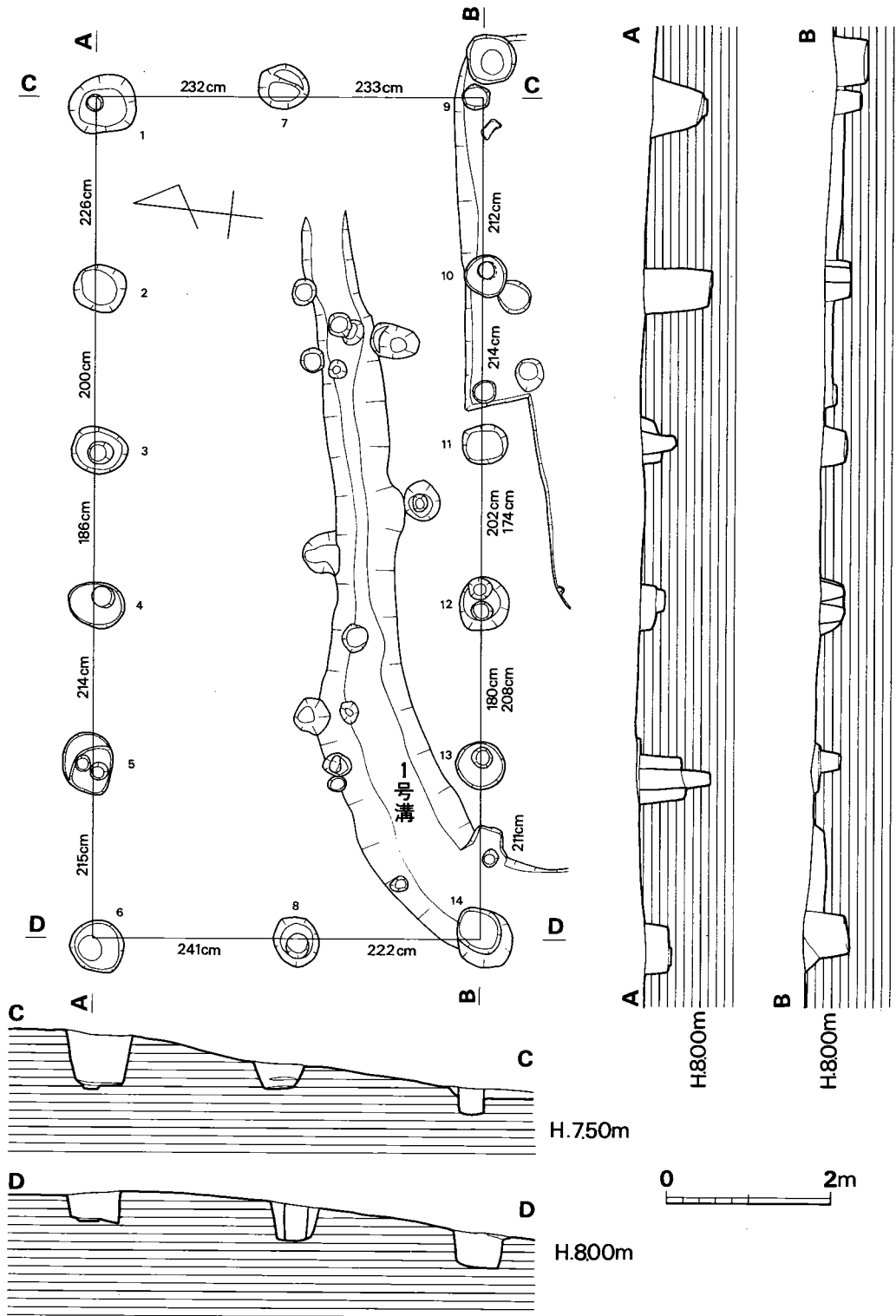
2号掘立柱建物（第8図）

2棟の掘立柱建物のうち西側のもので、梁行2間・桁行5間の東西棟であり、主軸は真北より19°03′西に振れる。柱間心々距離は各々若干の差があるが、桁行平均2.06m、梁行平均2.32mであり、1尺≒29.5cmとすると、各々7尺・8尺の柱間寸法をとっている。この遺構は他のすべての遺構を切っており、1号溝・27号住居跡より新しい。柱穴掘方は直径0.8~0.5mの略円形をなし、やや大きい。柱根跡は深いもので地山面より0.9mもあり、その径は0.25~0.3mとかなり大きいものである。

時期の判定できる出土遺物は、12号柱穴からの須恵器高台付杯片、土師器高台付椀片の2点のみであり、8C末~9C初頭代の年代が与えられる。ただ、1号溝より新しいことを併考すると、この建物の初築は、8C末前後を上限とする時期と考えられる。

以上の2棟の掘立柱建物は、隣接して建てられて同時併存した状況が考えられることは前に述べた。それにしても主軸方位の違い、柱穴掘方の規模の違い、柱根跡から推定される柱径の差異などの疑問点が浮かんでくる。出土遺物を検討してみると、より新しい部分から比較してみると、土師器の高台部分の変化は、2号掘立柱建物出土のものに、より古相が覗かれる。以上の諸点から、2号掘立柱建物が先に建てられ、後に1号掘立柱建物が隣接して付設されたものと想定したい。ちなみに4号住居跡の柱列方位は2号掘立柱建物とほぼ一致しており、8C末の年代が与えられている。半竪穴的な掘立柱建物への過渡的構造を示すこの遺構が、物置小屋或いは使用人用住居として2号掘立柱建物と併存した可能性も考えられないこともない。

2棟の掘立柱建物の年代を再び考えてみよう。各柱穴掘方埋土出土遺物は小片ばかりで量も少なく、しかもそれらは上限を示すのみである。糸島地域の土師器を中心とした平安時代土器編年の確立がなし得ていない現状で、これだけの少量のうちでどれ程年代を下降させ得るものか如何ともし難い。目を転じて、包含層出土の歴史時代遺物（第43~48図）を見てみると、奈良後半期までの遺物、平安中期以降の遺物を除いて、図示しなかったものも含めて最も目についたものが、土師器杯であった。これらは径13cmを中心としたもので、器形的特徴も奈良期に



第 8 图 2 号 掘 立 柱 建 物 (縮尺1/80)

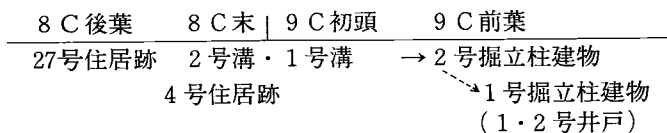
は上げられないものである。他の土師器甕・内黒土師器等もほぼ同時期と考えられ、大宰府近辺の状況とも比較して、大旨9C前半代としたい。このように遺跡全体からみての出土量の圧倒さからも考えて、他にこの期の遺構も皆無でもあり、両掘立柱建物の年代は9C前半代であるとしたい。

なお、これらの掘立柱建物の方位について若干ふれておこう。前述の如く1号掘立柱建物の主軸は真北より18°53'20"西に振れていた。この方位は、前原町三雲遺跡周辺における条里の方向、前原町波多江遺跡館跡(9C前葉~9C末)(註1)の主軸方位、及び同遺跡周辺の条里方向等の数値がN20°Wを示していることとほぼ符合する。更に、二丈町竹戸遺跡Ⅲ期(9C終末)(註2)の建物もN21°~25°Wを示している。このように9C代の糸島地方の各遺跡建物は、条里を意識してその方向にそろえて建てる傾向が指摘出来よう。更にこれらの曲り田・波多江・竹戸の各建物がいずれも2×5間の規格であることも偶然ではないこととして指摘されよう。

註1 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集上巻」 1982

2 福岡県教育委員会 「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」 1980

まとめとして、歴史時代遺構の変遷を示しておきたい。(矢印方向→は、古→新を示す)



c. 井戸・溝

1号井戸(第21図)

遺跡東半中央に位置し、掘立柱建物の面より一段低い面に検出された。偶然にも11号甕棺墓(倒立単棺)と重複して発見された。詳細は、甕棺墓の項で示されるので参照されたい。

直径1.45mの円形の壙を掘り、偶々甕棺があったので、上半部を破碎してその胴部片を壙壁に並べ、立てかけている。甕棺下半(倒立棺なので実際は甕頸部以上)はそのまま置いて井戸わくとみなして用いる。掘り方は甕棺墓のそれよりひとまわり大きく、いくらか浅い。底面レベルは、標高6.80mで、掘立柱建物の面より1.8m低い。本井戸の現状での深さは0.75mしかないが当時の地形的状況を想定するに、この程度で十分に湧水が得られたものと考えられる。

遺物は、棒状木器片(第49図)の他に、土師器杯小片、黒色土器小片等がみられたが、図示し得ない。年代を断定され得る類は皆無であるが、ほぼ掘立柱建物に伴うものではないかと考

え、9C前葉頃のものと推定するに止めたい。

2号井戸（第33図）

掘立柱建物の面より一段下がった南側のほぼ中央部に、35・39・41号住居跡を切ってつくられる。径1.10mの円形プランの壙を深さ0.6m掘り下げる。底面レベルは標高6.50mであり、1号井戸のそれより低い。底面近くは砂質埋土が認められ、埋土中より、土師器杯小片、内黒土師器小片等が出土した。図示し得るものはなく、時期の断定は難しいが、1・2号掘立柱建物、1号井戸等と同じく9C前葉前後に営まれたものと推定される。

1号溝（第8図）

2号掘立柱建物と重複して、東西に9m延びて、西端で南へ直角に曲がり、長さ1.5mまで残存する。南端は段落ちで消える。幅1.3～0.6m、深さ0.3mの浅い類である。2号掘立柱建物の南西隅14号柱穴に切られている。埋土中よりかなりの土師器杯小片が出土したが、図示し得たのは第41図のみである。出土遺物から9C初頭前後の遺構とされる。この遺構の性格は現状では南半が残らない為に明らかに出来ないが、4号住居跡のように、住居跡に関係するものか、或いは更に大きな建物の廻りの雨落ち的な溝となるかとも考えられよう。

2号溝（第4図）

27号住居跡の北西隅近くから西に3.3m延びて、直角に曲がり、南へ0.8m分まで残る。34号住居跡を切り、27号住居跡との切合い関係は明らかにし得なかったが、出土遺物の比較から、27号住居跡より新しいことが判かった。1号溝とほぼ併行しており、何らかの関係ありと考えられる。出土遺物から8C末前後の年代とされよう。

2) 古墳時代の遺構

北東隅土師穴（第9図）

発掘範囲の北東隅の、1～3号竪穴住居跡が混然と切り合う中に、古墳時代土師器のみを出土する穴が検出された。径0.85mの略円形プランをなし、深さ0.6m程度をなす。5Cの後半に近い中頃の土師器甕・高杯・鉢・小型丸底壺等が出土した。（第50図）

この遺構の性格は明らかでないが、弥生後期の35号住居跡内の柱穴のうちの一つや、黒色包含層からも、本遺構と相前後する時期の土器が出土しており、発掘範囲外に何らかの遺構が存在していると考えられる。或いは、奈良～平安期の整地等の地業で竪穴住居跡が削平されてしまった可能性もある。

3) 弥生時代の遺構

a. 竪穴住居跡

1号住居跡（第9図）

発掘区東北隅で2号・3号・4号・5号・9号住居跡等と複雑に重複していた。発掘開始当初にまずこの住居跡を掘り、円形住居跡1棟分と考えていたが、発掘をすすめるにしたがい、方形住居跡2棟分もあることに気づいた。方形住居跡はそれぞれ2号・3号住居跡とした。断面観察によると、1号→3号→2号の順につくられている。また古墳時代のピットも1個検出した。遺物は弥生時代中期前葉のものと後期後葉のものが出土した。又遺物を多く含む柱穴を図示したごとくP1、P2、P3としたが、P1、P2はともに2号住居跡に伴うものと考えられ、P3の所属する遺構は不明である。

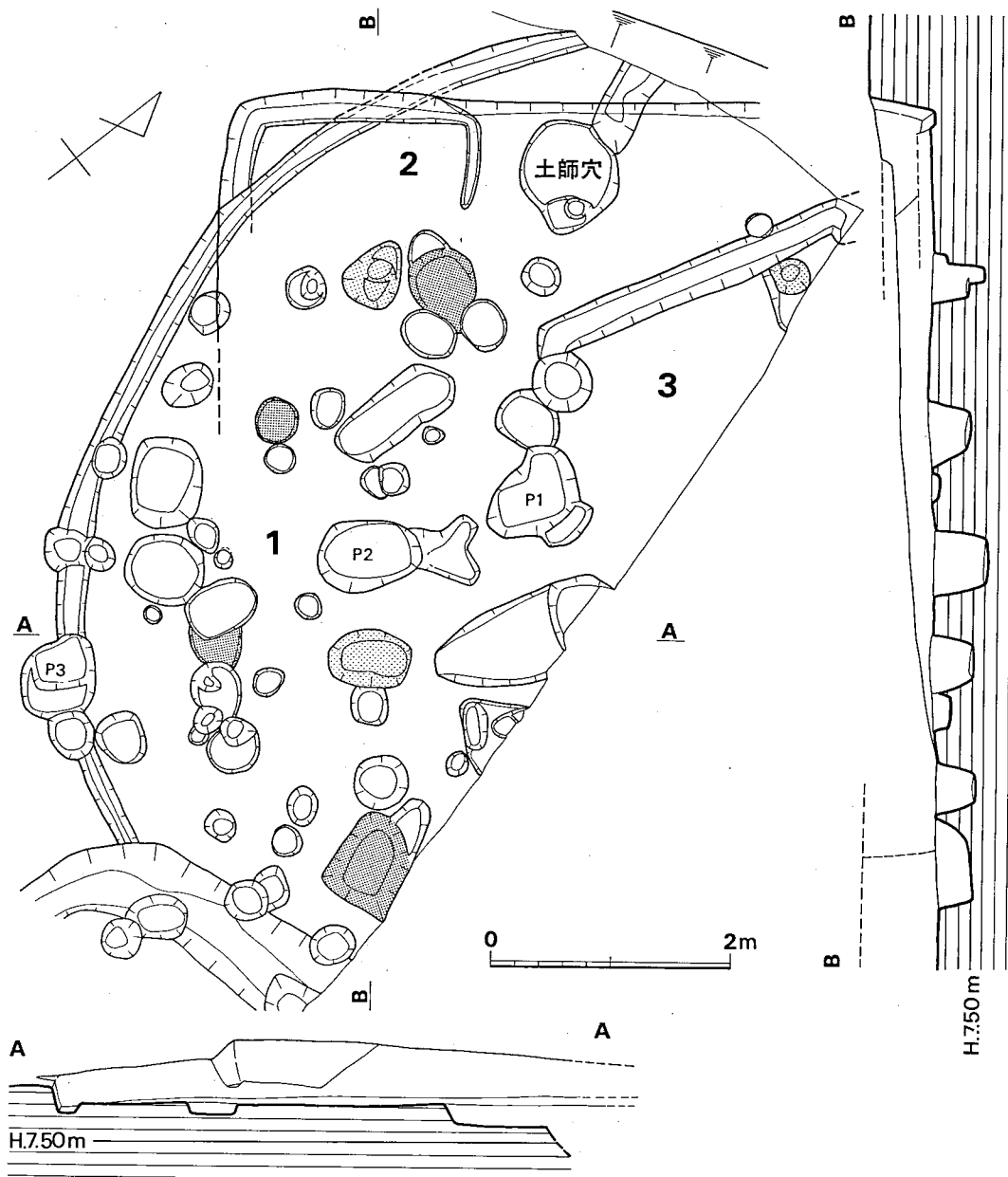
1号住居跡は復原径10.6～10.8m程の円形住居跡で、周溝をめぐらし、8本柱の建物と推定できる。現状では4個の柱穴が確認できる。中期前葉に属するものとする。

2号住居跡（第9図）

先にのべた理由で全容は把握できないが、4本柱をもつ方形住居跡である。周溝をめぐらしているが、西北隅より幅175cmのところまで直角にまがる。本来ベッド状遺構をもつものかとも思われる。柱間の間隔は325cm～340cmを測り、ほぼ方形を呈する。後期後葉に属するものとする。

3号住居跡（第9図）

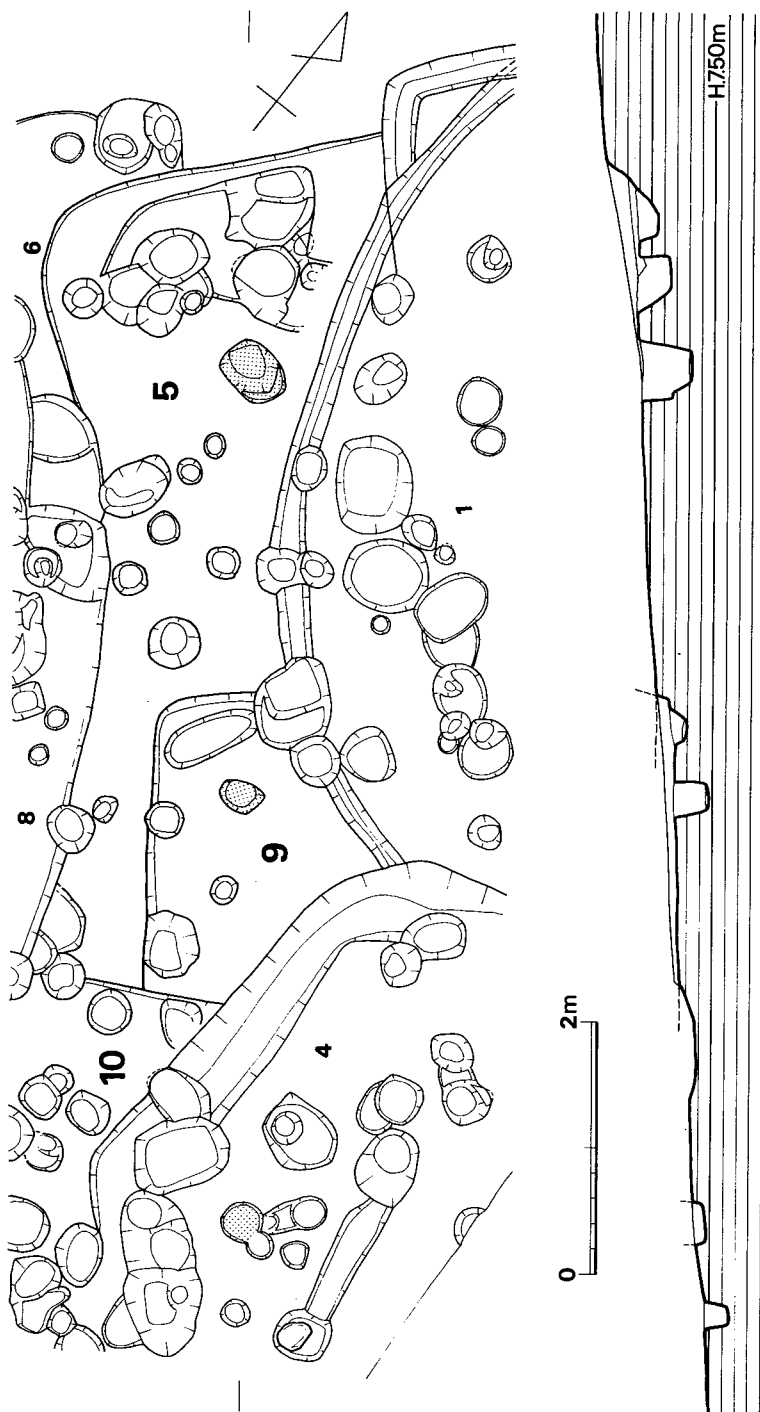
西南隅のみ発掘しているので全容の把握はできないが、長方形住居跡であろう。南側に幅175cm程のベッド状遺構がつくられている。出土遺物はほとんどない。後期に属することは明らかであるが、2号住居跡より古い点を考えると、31号住居跡と同時期ぐらいのものかと思われる。



第 9 図 1 ・ 2 ・ 3 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

5号住居跡 (第10図)

1号住居跡の西側にあり、西北隅が残る。隅丸方形の住居跡と思われる。出土土器は中期前葉に属する。



第 10 図 5・9・10号住居跡(縮尺1/60)

6号住居跡

5号・7号・8号住居跡等と重複しており、全容は把握できなかった。方形住居跡であることは明らかである。出土土器は後期後葉に属する。

9号住居跡(第10図)

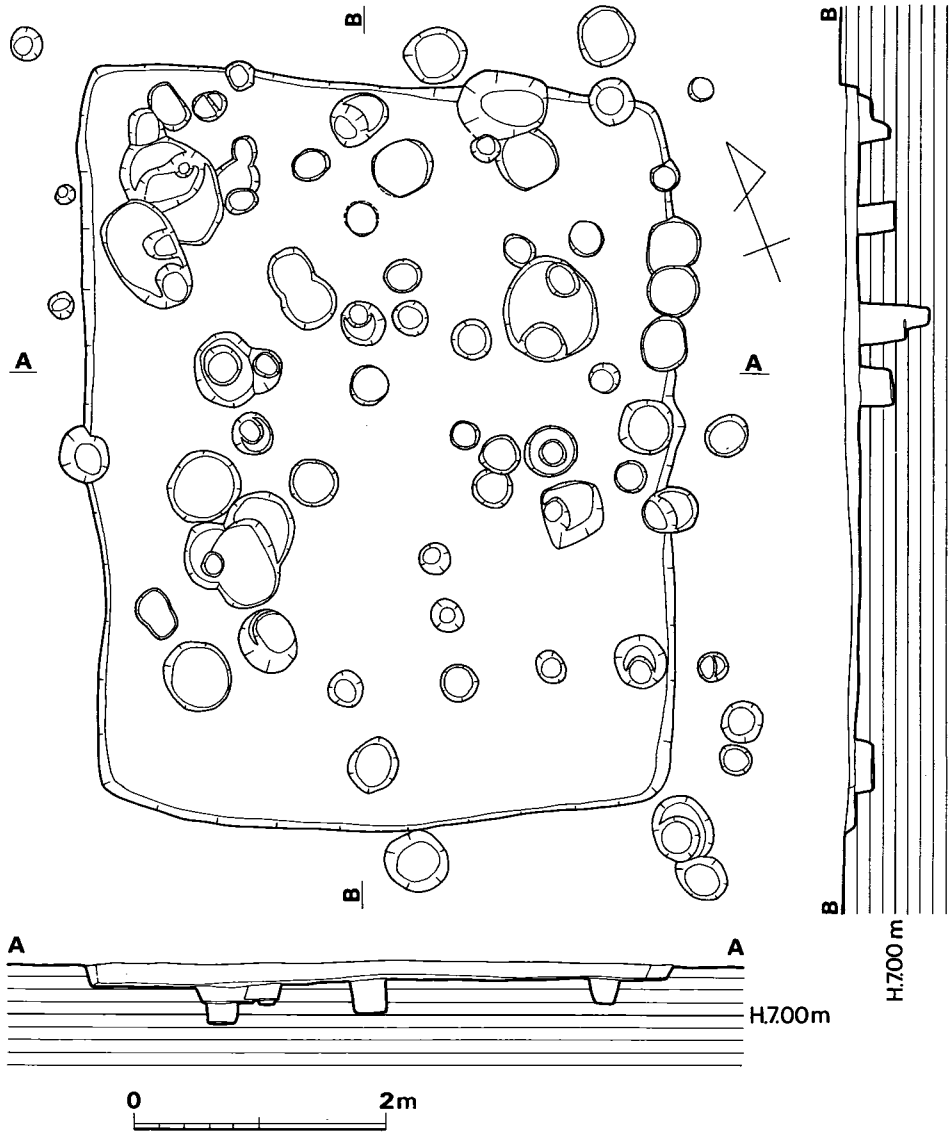
1号・4号・10号住居跡等と重複している。方形住居跡である。4本柱の建物と考えられ、西側に2個の主要柱穴があり、柱間間隔は340cm程である。出土遺物は少ない。後期に属する。

10号住居跡(第10図)

方形住居跡であることは明らかであるが北辺のみしか確認できなかった。出土土器は後期後葉に属する。

31号住居跡（第11図）

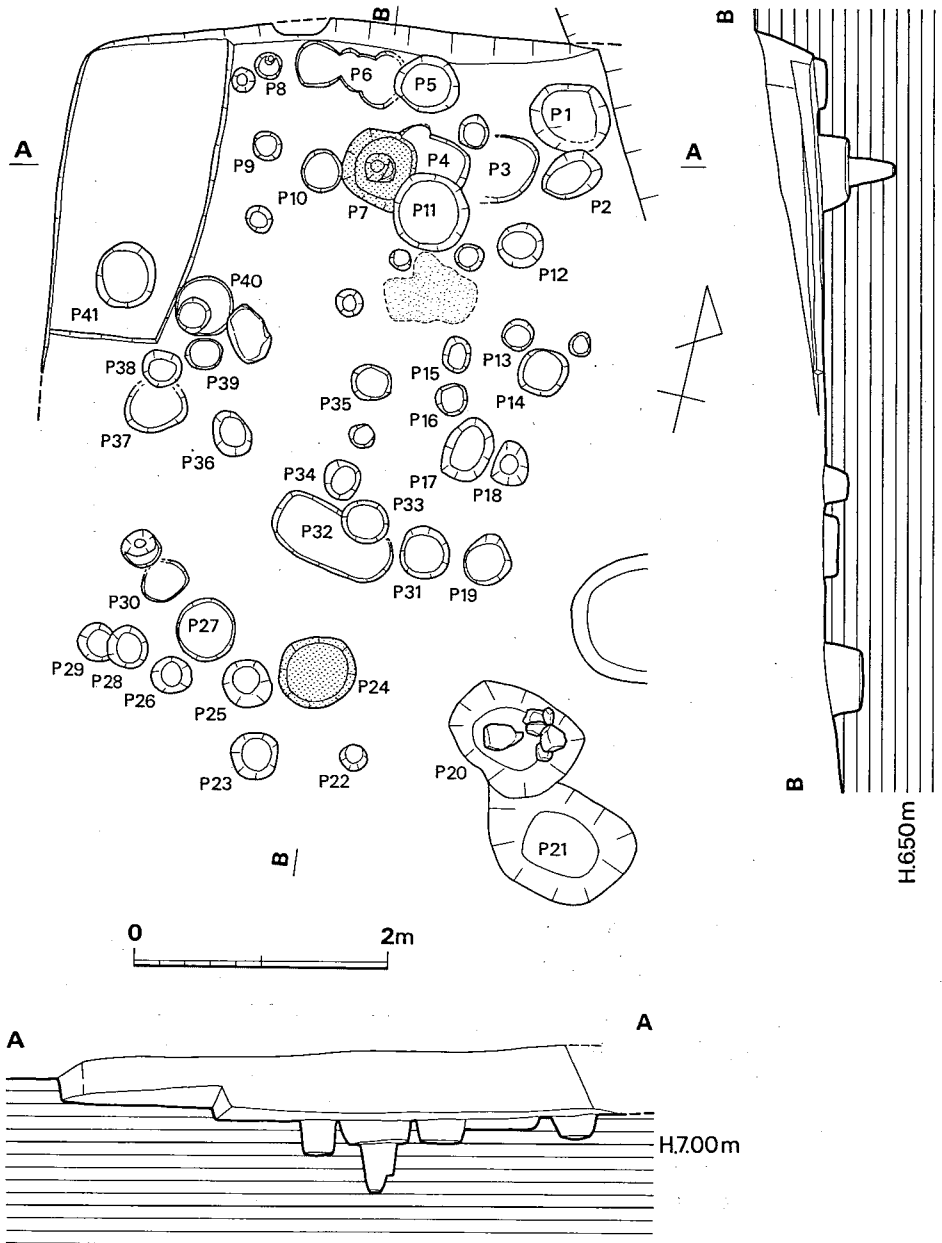
発掘区の東南部に位置し、主軸をほぼ南北にとる長方形の住居跡である。短辺450～465cm、長辺590cmを測る。多くの柱穴を検出したが、主柱穴がいずれかわからない。出土土器は比較的多い。後期中頃のものとする。



第11図 31号住居跡（縮尺1/60）

35号住居跡（第12図）

13号・17号・38号・39号・41号住居跡等の上面につくられており、南半は斜面によって消失している。東側の一部も確認できなかったが、2本柱の建物であることは確実であり、長方形になるものと思われる。住居跡中央の北辺よりに厚さ9cmのレンズ状を呈する焼土があり、炉



第 12 図 35 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

跡と考えられる。その北側のP.11にも焼土・灰がつまっており、炉関連の穴と思われる。西北隅には幅120cm弱、長さ235cm程のベッド状遺構が設けられている。出土の土器等から後期後葉のものとする。又この住居跡の南より、金海式灰陶の破片が出土している。この住居跡に伴うことは明らかであろう。

37号住居跡（第31図）

35号住居跡とかなりの部分で重複している。37号住居跡が先に建てられ、35号住居跡へと建替えられたものとする。出土の土器からすると35号住居跡とほぼ同時期のものである。

43号住居跡

11号・13号・14号・23号住居跡等の上面につくられていた。当初のべた理由によって、全容の把握はできず、東北隅の一部を確認し得たのみであった。出土の土器からすると、後期後葉に属する。

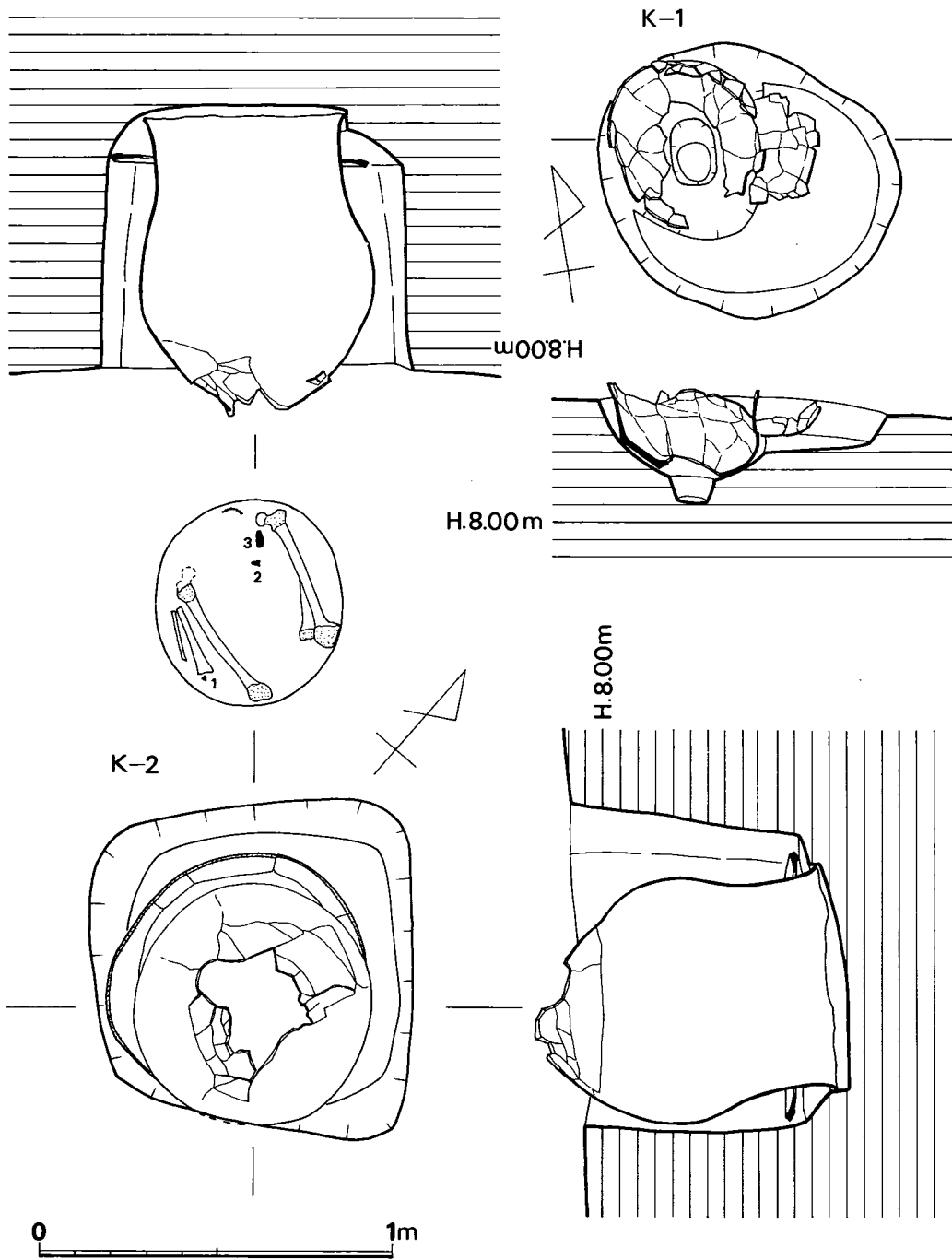
b. 甕棺墓

1号甕棺墓（第13図）

75cm×88cmの東西に長い長円形の墓壙を設け、西側に下甕を入れる穴を掘り、器高50cm程の大形の壺を置き、上甕には肩部で打欠いた壺を利用した覆口式の合せ口甕棺である。後世の削平と、柱穴による破壊を受け、上甕の大半と下甕の1/3程を欠失する。甕棺埋葬の傾斜角度は55°前後である。人骨は残っていないが甕棺の規模・下甕が口縁打欠きでないこと等から、乳幼児用のものとする。橋口いうところのKIa式（註1）併行期、つまり板付IIa式に属する。

2号甕棺墓（第13図）

90cm×95cmの隅丸方形の墓壙を掘り、被葬者を座らせ、甕棺をかぶせたもので、いわゆる倒立甕棺である。底部は後世一部削平されている。又、口縁部が割れて甕本体がやや沈んだような感じになっている。この口縁部は完全に接合できた。他の口縁打欠きの甕棺が割れた面を丁寧調整しているため、接合されないのと比較すると、この甕棺は口縁打欠きではなかったと考える。甕棺内には下肢骨が残るが、その位置からすると東向きに座らされている。被葬者は



第 13 图 1 号 甕 棺 墓 · 2 号 甕 棺 墓 (縮尺 1/20)

大腿骨の大きさから成人男性と考えられる。甕棺の南端から磨製石剣の切先が、西北よりの部分で磨製石鏃1、打製石鏃1が出土した。これらは副葬品ではなく、磨製石鏃の先端がつぶれていることでもわかるように、まず矢を射込み、石剣でとどめをさしたものであることは明らかである。夜臼期にこの地に水稻耕作を営む聚落が形成された後、土地開発が激しく行われ、土地・水をめぐる他聚落との間の争いが頻繁に行われ、人を殺傷に及ぶこともあった(註2)。この2号甕棺の被葬者もこのような争いの犠牲者の一人であった。

甕棺の時期はKIa式である。

3号甕棺墓(第14図)

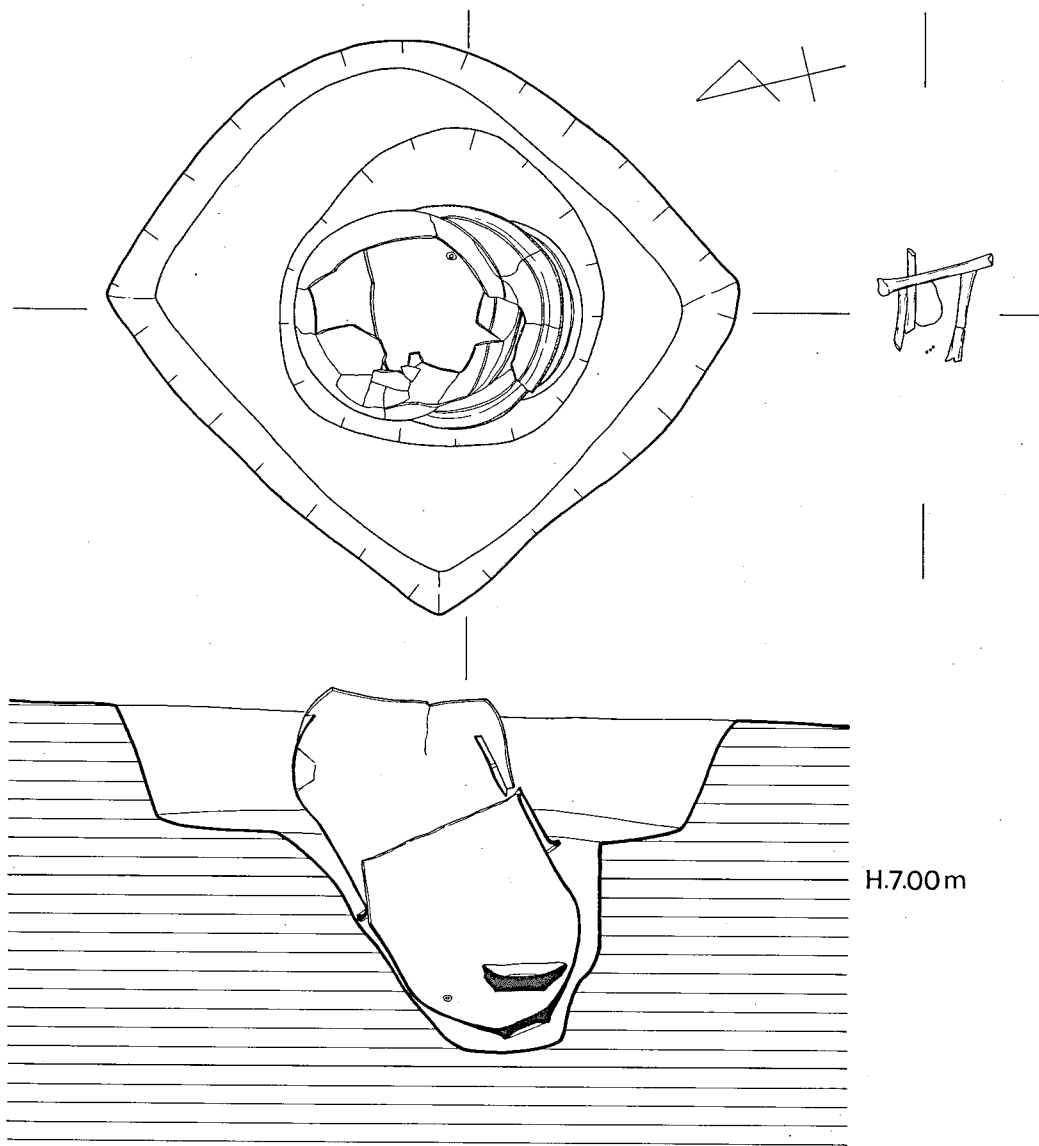
127cm×137cmのほぼ方形の墓壙を掘り、その中央部に又径85cm程の円形の穴を掘り、口縁を打欠いた甕を据え、上甕をかぶせた、覆口式の合せ口甕棺である。後世上部を削平されたものと考えられ、上甕底部が下甕内に落ちこんでいる。下甕には水ぬき孔が穿たれている。埋葬の傾斜角は68°と急であるため、人骨はすべて底部に落ちこんでいる。左右大腿骨、脛骨、上腕骨、頭骨、上顎歯等が認められた。被葬者の性別は不明、推定年齢は成年である。甕棺の時期はKIb式に属する。

4号甕棺墓(第15図)

径105cmのほぼ円形の墓壙を掘り、さらに西側よりに横壙状に掘り下げ、口縁を打欠いた下甕を据え、上甕をかぶせた覆口式の合せ口甕棺である。上部は後世一部削平を受けている。埋葬の傾斜角は72°と急であるため、人骨は下甕の底部に落ちこんでいる。左右大腿骨、歯等が検出された。推定年齢は成人で、性別は不明。甕棺の時期はKIa式に属する。

5号甕棺墓(第16図)

103cm×113cmの隅丸方形の墓壙を掘り、北側にさらに横壙を掘りさげ口縁を打欠いた下甕を据え、胴部上半から上を打欠いた上甕をかぶせた覆口式の合せ口甕棺である。後世に上面をかなり削平されており、上甕の底部が下甕内底にまで落ちこみ、又下甕の打欠いた口縁の一部、小角礫も下甕内に落ちこんでいる。埋葬の傾斜角は64°とかなり急である。人骨は残存しなかった。甕棺の時期はKIa式である。

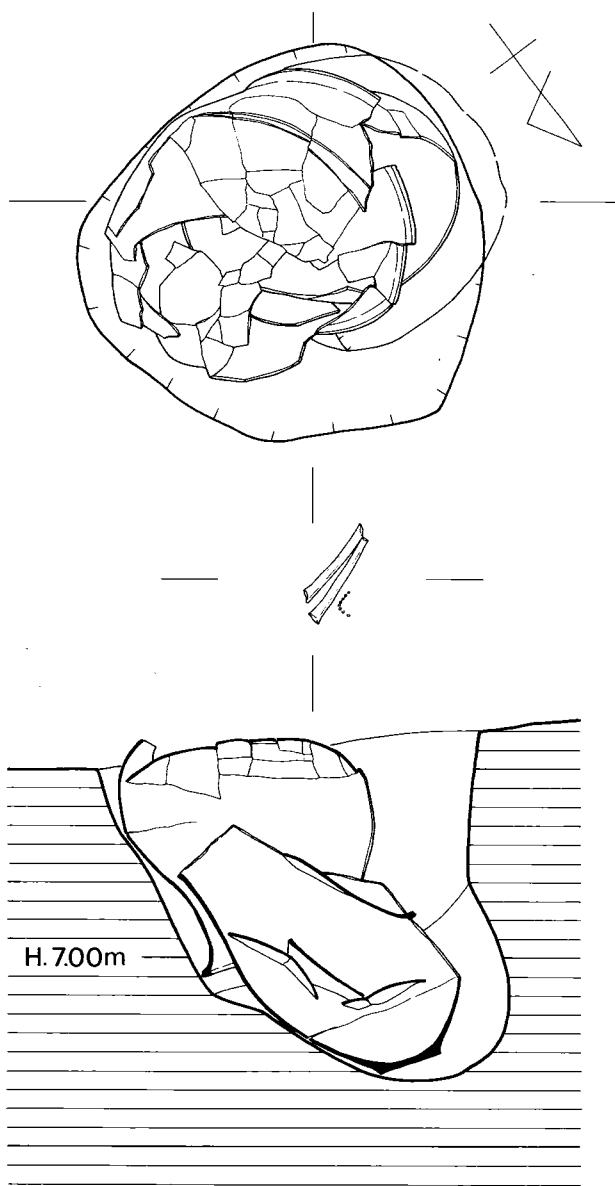


0 1m

第 14 図 3 号 甕 棺 墓 (縮尺 1/20)

6号甕棺墓（第17図）

130cm×176cmの長円形の墓壙を掘り、その北西よりに90cm×100cmの円形の壙を掘り、さらに横壙状に掘り下げ甕棺を据えている。円形壙の東壁には60cm×30cm、厚さ15cm程の砂岩が、この石と甕棺との間には25cm×18cm、厚さ10cm弱の花崗岩角礫が置かれていた。これらの石は墓標石というよりはむしろ支石墓の支石の一部と考えられる。理由については後述する。埋葬の傾斜角は59°とかなり急であり、人骨はすべて底部に落ちこんでいる。左右大腿骨、左右上腕骨、脛骨、頭骨、下顎、骨盤等が認められた。性別は不明、推定年齢は成年である。甕棺の時期はKIa式に属する。



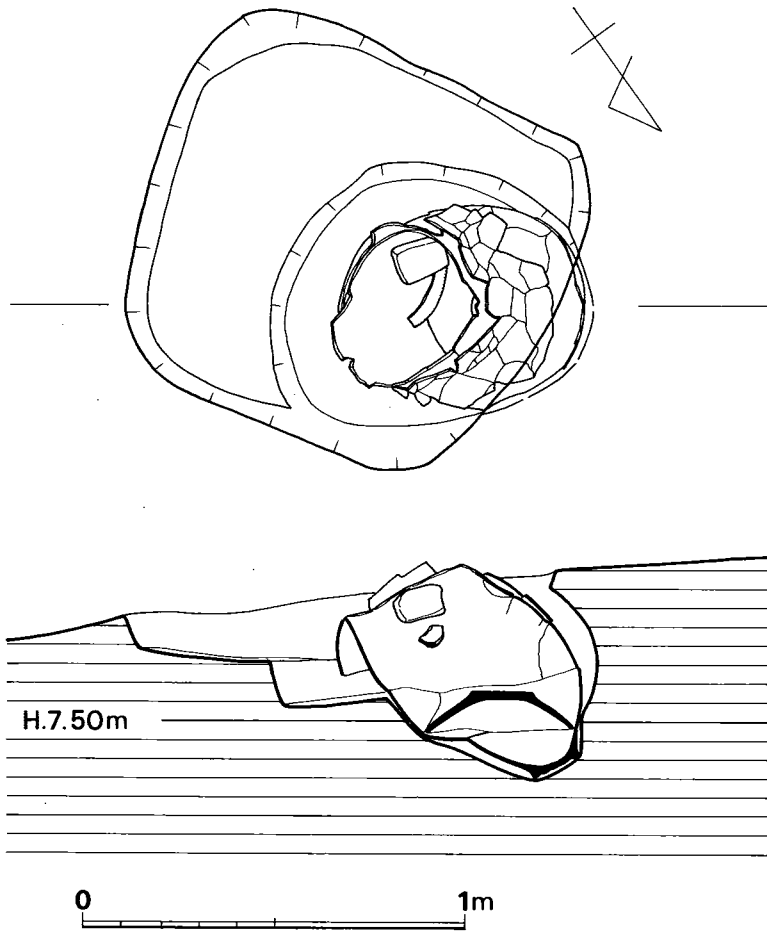
7号甕棺墓（第18図）

150cm×130cmの隅丸長方形の墓壙を掘り、その西北隅に横壙を掘り下げています。口縁打欠きの下甕を据え、上甕をかぶせた覆口式の合せ口甕棺である。打欠いた下甕の口縁は補強するかのごとく被っている。横壙の東壁には30cm×45cm×20cm、45cm×33cm×12cmのやや大きな花崗岩2個が置かれ、さらにその下には10~15

cmの角礫2個が置かれていた。これはさきにも述べたように支石墓の支石と考えられる。甕棺の埋葬傾斜角は34°程でややゆるやかといえる。下甕には水ぬき孔が穿たれている。頭骨の痕跡、



第 15 図 4 号 甕 棺 墓 (縮尺1/20)

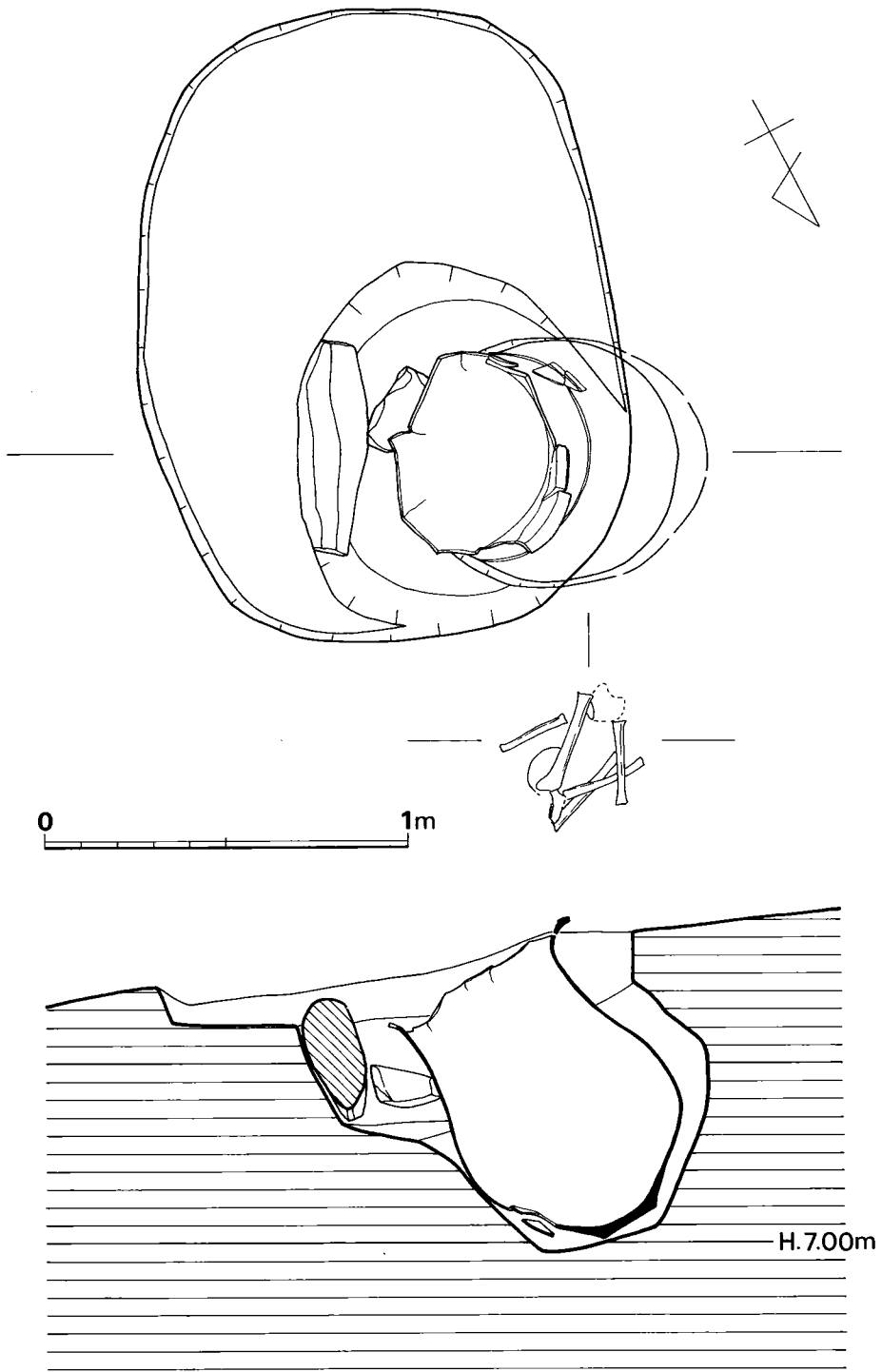


歯，前腕骨，骨盤，大腿骨等が認められた。被葬者の性別は不明，推定年齢は成年である。甕棺の時期はKIa式に属する。

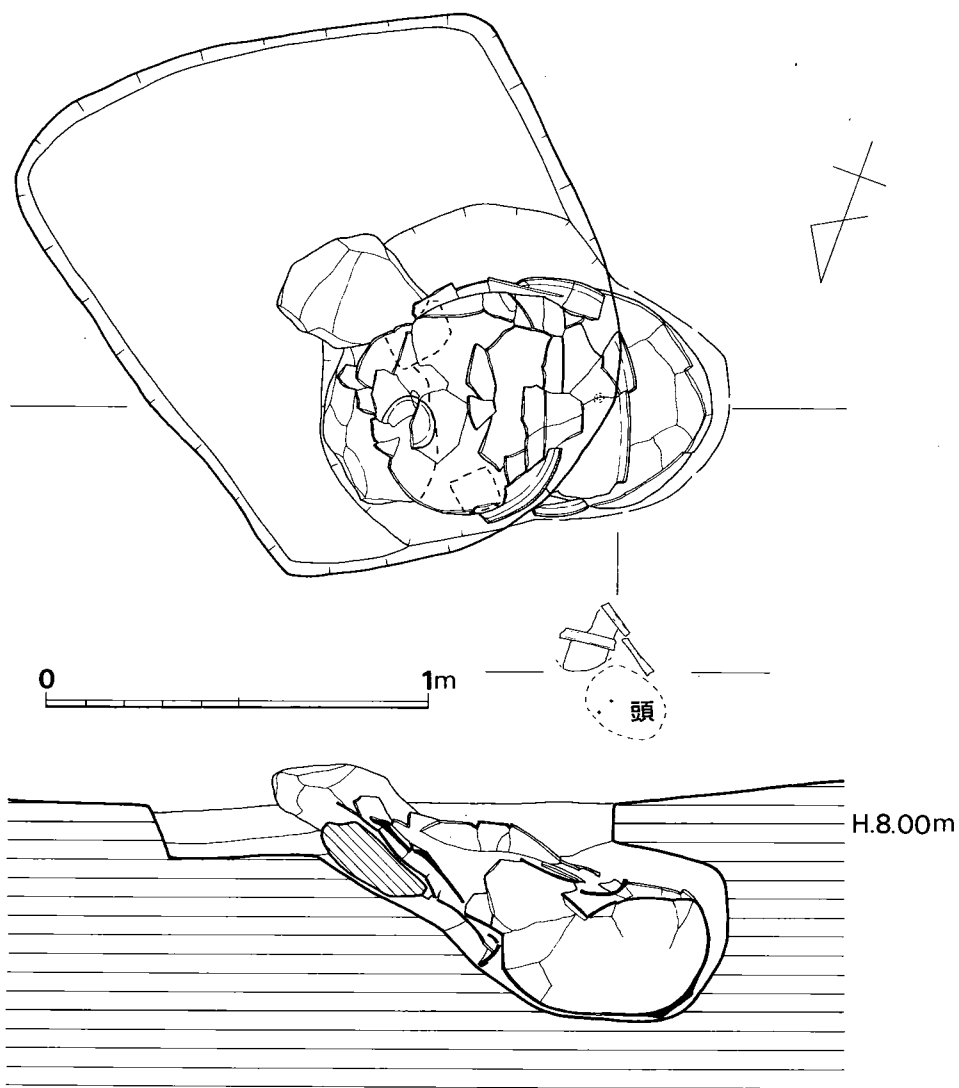
第 16 図 5 号 甕 棺 墓 (縮尺1/20)

8号甕棺墓 (第19図)

9号甕棺墓と一部重複しており，切合い関係は8号甕棺墓が新しい。107cm×118cmの隅丸方形の墓壇をつくり，その中央に48cm×67cmの長円形の穴を浅く掘り下げ，口頸部を打欠いた大形の壺を据え，胴上半より上を打欠いた壺下半と，打欠いた上半部を二つに割り二重にしてさらに覆っている。上甕に利用された壺も口縁を打欠いている。本来は口縁打欠きの状態で使うつもりが割れてしまい，このような使い方がされたのだと思われる。埋葬の傾斜角は75°とかなりきつい。人骨は残存しないが壺の大きさからすると乳幼児用のものと考えられる。壺の時期は板付IIb式で甕棺編年に対応させるならばKIb式併行期である。



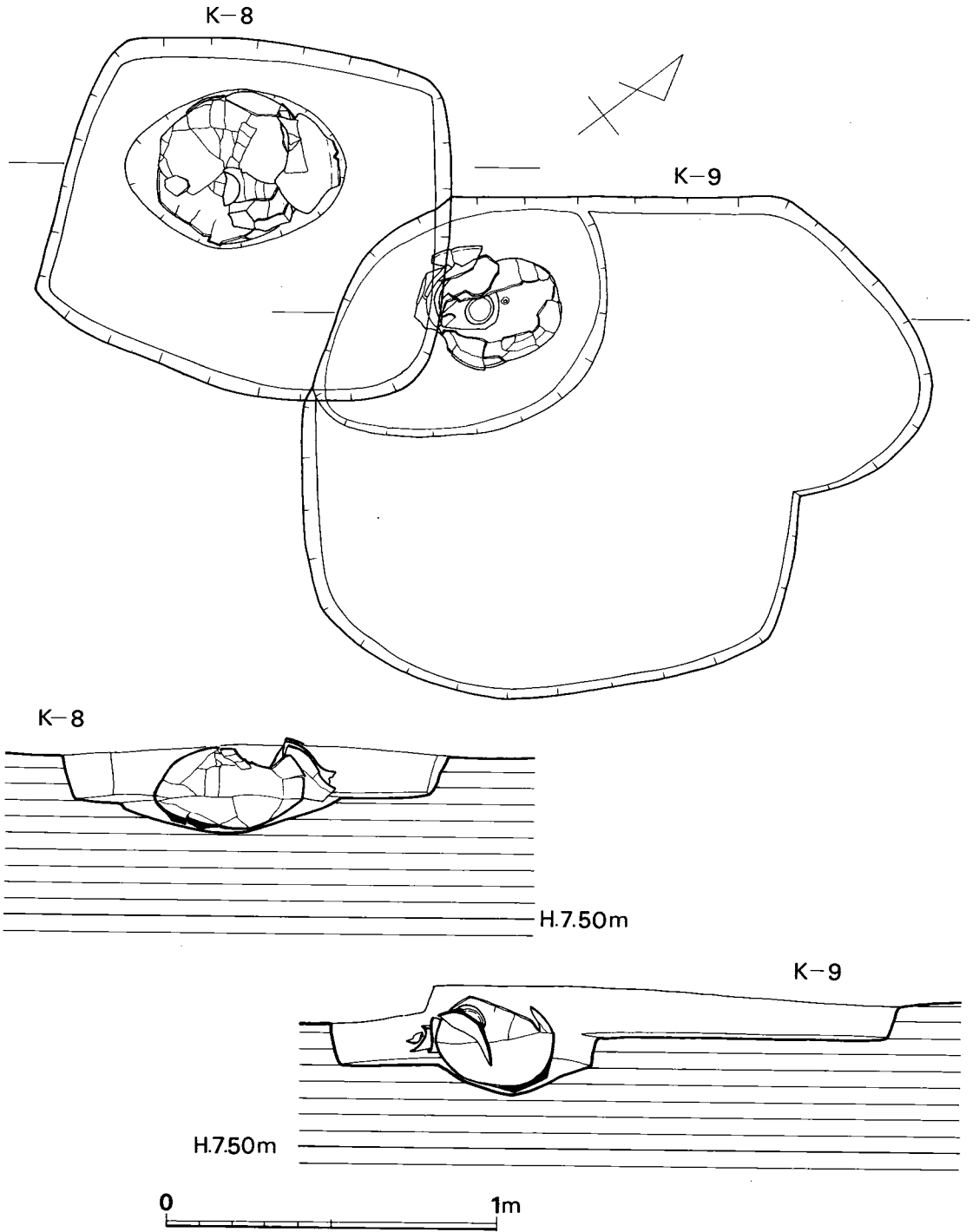
第 17 図 6 号 甕 棺 墓 (縮尺1/20)



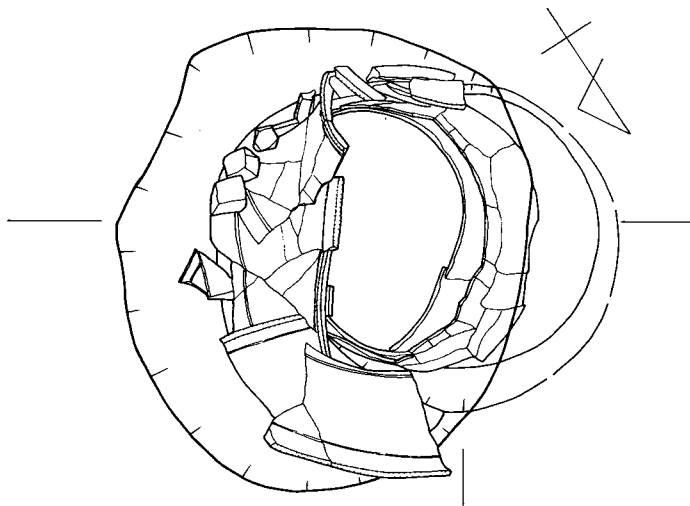
第 18 図 7 号 甕 棺 墓 (縮尺1/20)

9号甕棺墓 (第19図)

一辺150cm程の隅丸方形の墓壙がつくられ、その西端に75cm×85cmの不整長円形の穴を掘り、その中央部に口頸部を打欠いたやや大形の壺を据え、鉢をかぶせた覆口式の合せ口甕棺である。打欠かれた下甕の頸部は上甕の外側に補強するかのごとく利用されている。西端の不整長円形の穴が本来の墓壙であるかも知れない。下甕には水ぬき孔が穿たれている。埋葬の傾斜角は64°

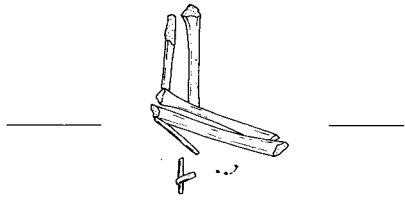


第 19 図 8 号 甕 棺 墓 ・ 9 号 甕 棺 墓 (縮尺 1/20)

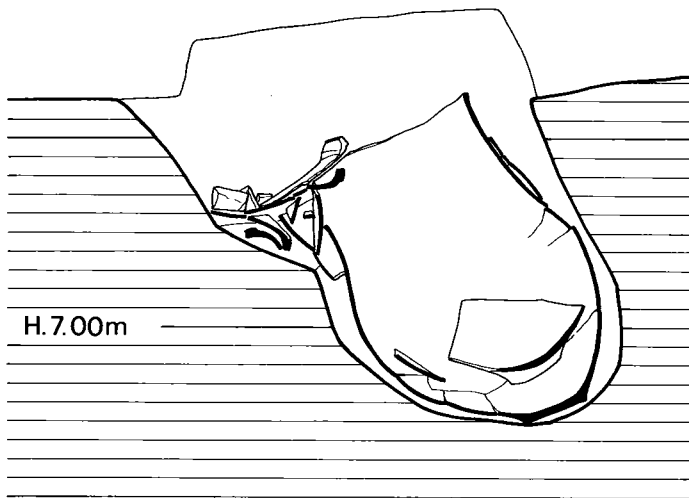


ときつい。人骨は残っていなかった。大きさからいって乳幼児用のものと考えられる。切り合いとしては8号甕棺墓より古いが、甕棺に利用された壺・鉢ともに板付II b式つまりKIb式併行期のもので、土器型式には差は認められない。

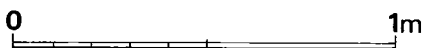
10号甕棺墓（第20図）



123cm×108cmの長円形の墳がそのまま横墳まで掘られている。後世の削平を受けているので、本来の墓墳は消失してしまったものと考えられる。横墳に口縁を打欠いた下甕を据え、肩部より上半を打欠いた上甕をかぶせた覆口式の合せ口甕棺である。打欠かれた下甕の口縁、上甕の上半は西側部分に補強として利用している。これらの補強された甕の上に石英質の角礫2個と砂岩質の角礫1個が置かれていた。上甕の底部は削平を受けた時に落ちたものとみられ下甕内底部まで落ちこんでいる。埋葬の傾斜角は65°できつく人骨もすべて底部に落ちこんでいる。下肢骨、歯等が検出されたが、性別は不明、推定



H.7.00m

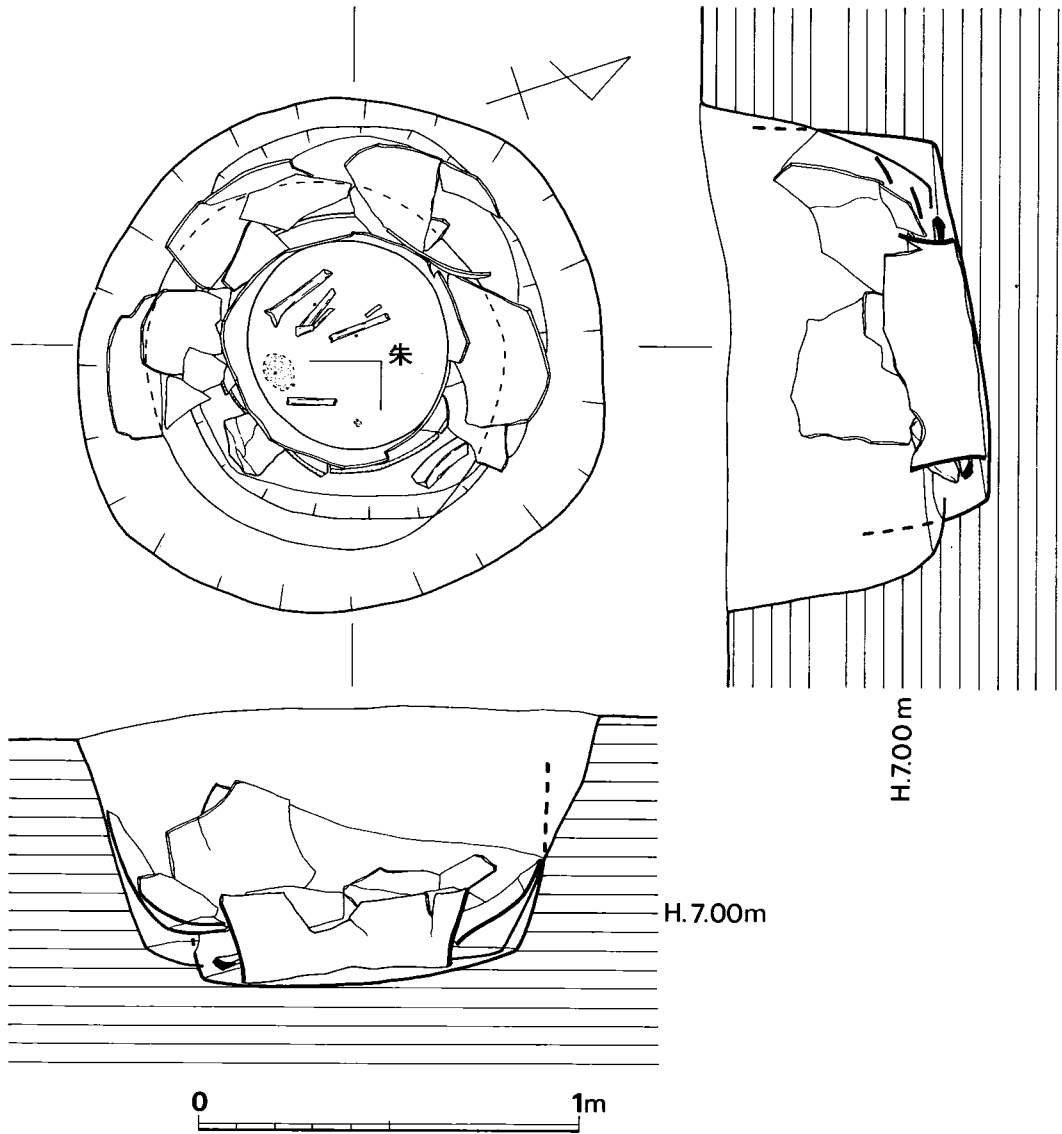


第20図 10号甕棺墓（縮尺1/20）

年齢は成人である。甕棺の時期はK1a式に属する。

11号甕棺墓（第21図）

平安時代のもと考えられる1号井戸がほぼ完全に重複しており、甕棺墓自体は基底部付近しか残っていない。1号井戸は径135～140cmのほぼ円形の素掘りのものである。井戸掘りの際甕棺の大半は破壊され、その甕棺の破片は壁にたてかけて、井戸枠のように利用している。現状で



第 21 図 11 号 甕 棺 墓 (縮尺1/20)

は井戸の深さは60cm程のものであるが、これに伴うと考えられる1, 2号掘立柱建物等との比高は1m以上あり、本来の深さは2m前後と推測され井戸としての機能は充分果せたものと思われる。発掘中にも常時冠水に近い状態であった。

甕棺墓はわずかに残る基底部分での墓壙は92cm×104cmの長円形とも隅丸長方形ともいえる形をしている。上部では隅丸長方形を呈していたものであろう。甕棺は口縁を打欠いた倒立のもので、打欠いた口縁は基底部分の周囲に置いている。大腿骨、脛骨、歯等が残っていた。又赤色顔料の痕跡も認められた。被葬者の顔面にふりかけられていたものと考えられる。分析の結果は水銀朱である。被葬者の性別は不明、推定年齢は成人である。この他に鉄製のほりがね状のものが出土した。甕棺の時期はKIa式に属する。

まとめ

前期の甕棺墓は一般に、埋葬角度が強く、前期末頃より水平に近くなり、中期前半代はほぼ水平に埋置される(註3)。ところが、いくら前期の甕棺墓が傾斜が強いとはいえ、曲り田の甕棺墓は直立に近く、又倒立の甕棺も存在する。

唐津地方は甕棺葬の盛行した西限であるが、この地方の甕棺は前期はもちろんのこと中期、後期になっても直立、倒立の甕棺が多い(註4)。三雲を中心とする糸島郡内(註5)、又福岡、春日付近(註6)ではこのような傾向は認められない。したがって甕棺埋葬の習俗については、糸島郡の西辺に位置するこの地域では唐津地方との交流がより密接であったといえよう。

6号甕棺墓・7号甕棺墓には墓壙内にやや大きめの石が2～3個ずつ置かれ、又5号・10号甕棺墓にも小角礫が認められた。前期・中期の木棺墓あるいは甕棺墓でも、この程度の石が墓壙中央部に置かれ、又は墓壙を囲むように配置されているものがある。これらは遺構確認面よりやや浮きあがった状態のものが多い。つまり当時の地表面、又はやや盛土された上に置かれたものと推測され、墓標石と考えられる。曲り田の甕棺墓は後世に上面を削平されていることは明らかであり、これらの石が当時地表面にあらわれていたとは考えられず、墓標石としての役目を果していない。前期という時期、さらに唐津地方との交流の深さからいって、これらの石は支石墓の支石と考えるのが最も妥当である。

支石墓は縄文晩期に導入され、弥生前期にかけて行われた。その分布は唐津地方、糸島地方を中心として北部九州の西側に多く、福岡、春日付近等東側には比較的少い。又須玖岡本等に代表される大量に副葬品をもつ甕棺の上部に置かれた巨石も、一般には支石墓としてとらえられている。しかしながら中期にはいつてからの支石墓は周辺部をのぞいてはほとんどみられず、巨石、大石を上部構造とする墓はきわめて特殊といわざるを得ない。言葉を変えていえば、これらの墓は副葬品を豊富にもつということである。このような甕棺墓は、甕棺も大きく、つく

りもよく、墓壙もきわめて大きい。これにみあう形での墓標が巨石・大石であると考えられ支石墓の上石とは性格を異にするものである。

直立、倒立の甕棺は傾斜の弱い、又は水平な甕棺に比べて必然的に墓壙が小さくなる。支石墓の上石は縄文晩期、弥生前期のものともに、そうたいして大きいものではない。唐津地方では上部構造としての上石をこのように適当な大きさに保つために、墓壙を小さくする必要が生じ、直立、倒立の甕棺が盛行し、それが支石墓が行われなくなった後にも受けつがれたものと考えられる。

- 註1 橋口達也「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXXI-中巻 1979 所収
- 2 橋口達也「Ⅲ 磨製石剣嵌入人骨について 2 考古学的意義」穂波町教育委員会『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書第1集 1976 所収
橋口達也「弥生時代の戦い」柏書房刊『日本歴史地図』参考資料編 1982 所収
- 3 橋口達也「甕棺埋葬の傾斜角について」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXXI-中巻 1979 所収
- 4 唐津湾周辺遺跡調査委員会「末盧国」六興出版刊 1982
- 5 福岡県教育委員会「三雲遺跡」I 福岡県文化財調査報告書第58集 1980
福岡県教育委員会「三雲遺跡」II 福岡県文化財調査報告書第60集 1981
- 6 大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書第1集 1977
福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」-XXIV-下巻 1978

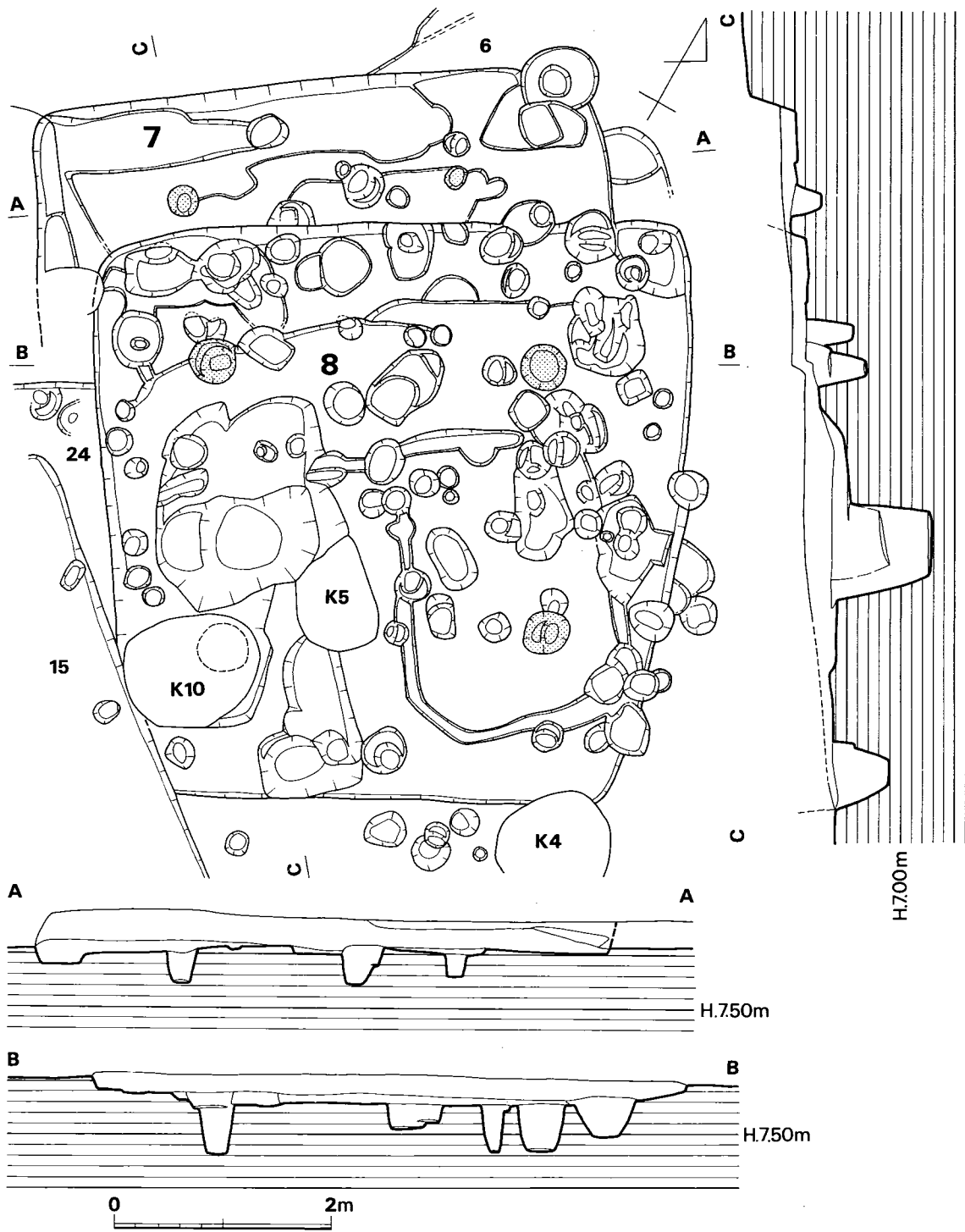
4) 夜臼期の遺構

a. 竪穴住居跡

7号住居跡（第22図）

6号・8号・11号住居跡等と重複している。一辺530～540cm程の隅丸方形の4本柱の建物と考えられるが、北側の一部しか残らず全容は把握できない。北側に残る主要柱穴の柱間間隔は255cmを測る。

8号住居跡（第22図）



第 22 図 7・8 号 住 居 跡 (縮尺 1/60)

6号・7号・10号・15号・23号・24号住居跡，4号・5号・10号甕棺等とはげしく重複しているが，ほぼ全容は把握できた。一辺は540～550cm程の隅丸方形の住居跡で，4本柱の建物である。東西の柱間間隔は300cm，南北の柱間間隔は250cmを測る。この住居跡の中央部のわずかに北よりには焼土・灰等が多く検出され炉跡と思われたが，炉の掘込み自体は確認できなかった。又西壁よりの中央部には100cm×150cm程の隅丸長方形を呈する深さ100cm程の深い大きな穴があり，屋内貯蔵穴と思われる。

11号住居跡（第23図）

7号・12号・14号・23号・43号住居跡，7号甕棺等と重複しており，北側の部分しか残っていない。一辺780cmを測る大形の隅丸方形の住居跡である。4本柱の建物と考えられ，北辺2個の支柱穴の柱間間隔は400cm程である。

12号住居跡（第23図）

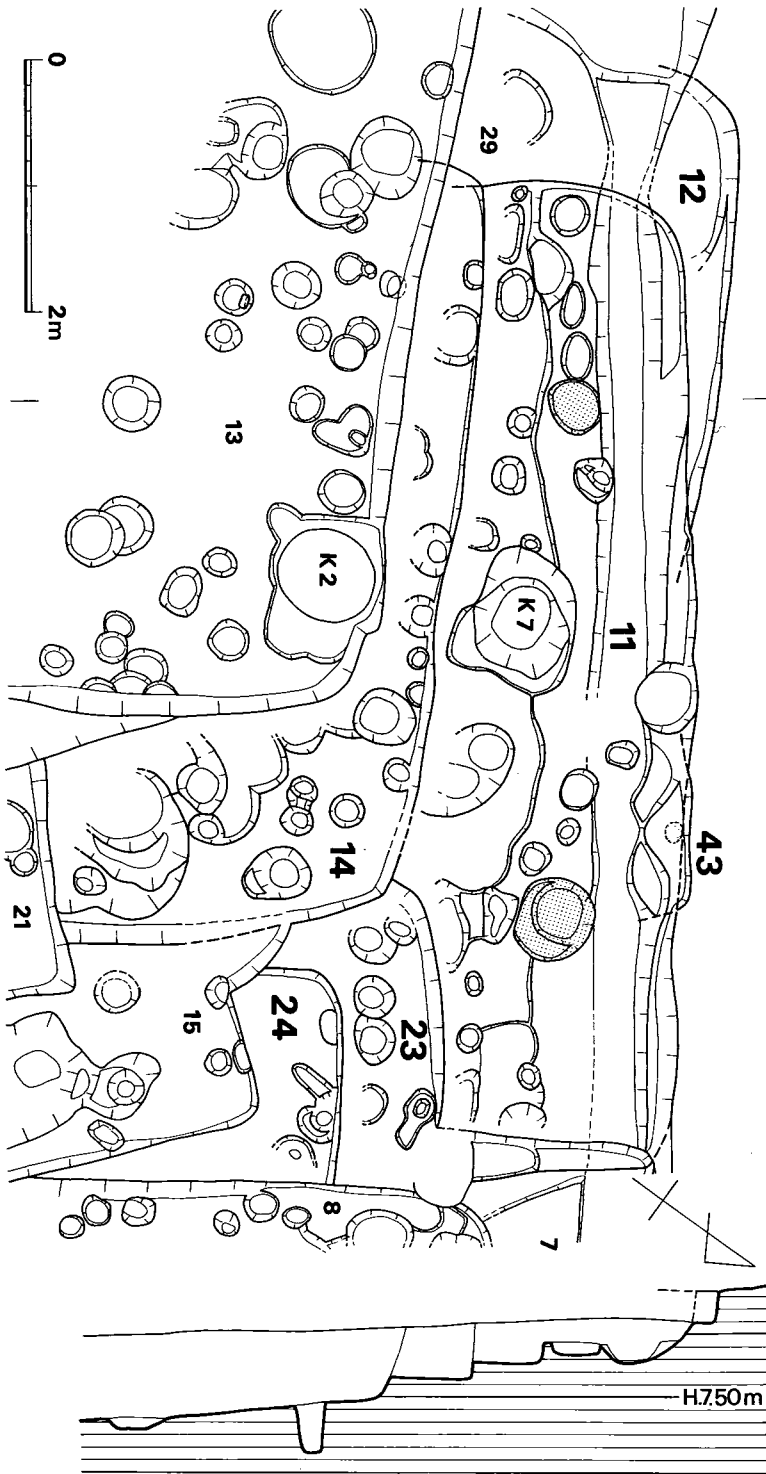
11号・29号住居跡等と重複している。西北隅の一部しか残らず全容の把握はできない。隅丸方形の住居跡で4本柱の建物と推測できる。

13号住居跡（第24図）

14号・16号・17号・20号・22号・28号・29号・38号・35号・37号住居跡，2号甕棺等と激しく重複しているが，北測半分が残る。これによると11号と同じく大形で一辺780cm程を測る隅丸方形の住居跡である。住居跡東側の床面下で縄文前期の土器が出土した。このため住居跡西側の床面を掘り下げて縄文前期の遺構があるか否か確かめたが，地山まで約100cmの深さがあり，床面直下には細片の土器片も認められたが，この部分で縄文土器は検出されなかった。13号の東側，16号の北側だけに集中して発見されているので住居跡等の遺構の存在も考えられたが確認するに至らなかった。

14号住居跡（第23図）

11号・13号・15号・21号・22号・23号・29号住居跡等と重複している。東北隅を中心に北辺，東辺の一部が残る。一辺600cm程の隅丸方形の住居跡で4本柱の建物と推測される。21号・22号住居跡と接する東辺の中央付近に深さ75cm程のやや大きな穴がある。屋内貯蔵穴と思われる。



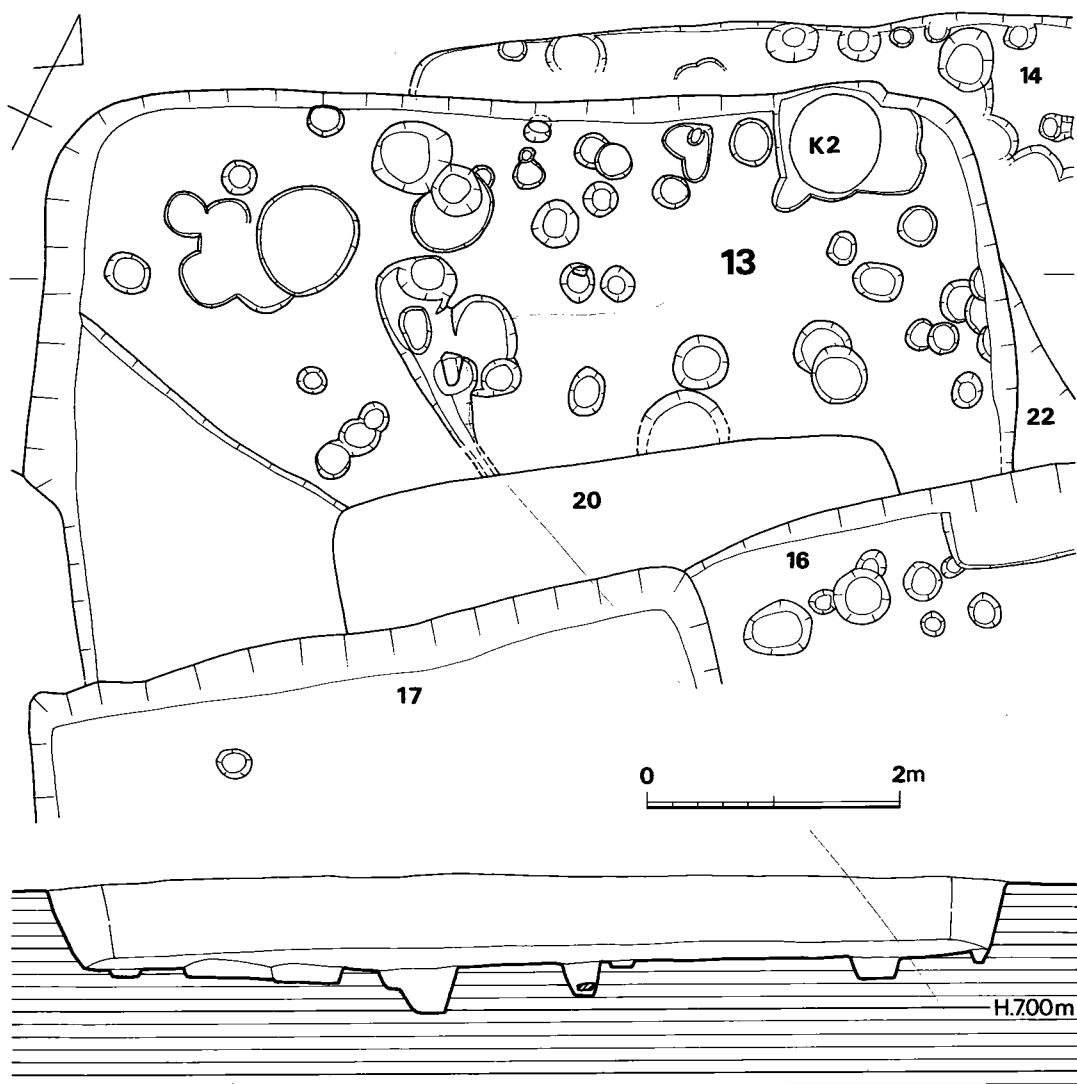
第 23 図 11・12・14・23・24・43号住居跡 (縮尺1/60)

15号住居跡(第25図)

8号・14号・16号・21号・24号住居跡, 6号・10号・11号甕棺等と重複しており, 東北隅を中心として残る。一辺600cm弱の方形住居跡で4本柱の建物と考えられるが, 全容は把握できない。

16号住居跡(第26図)

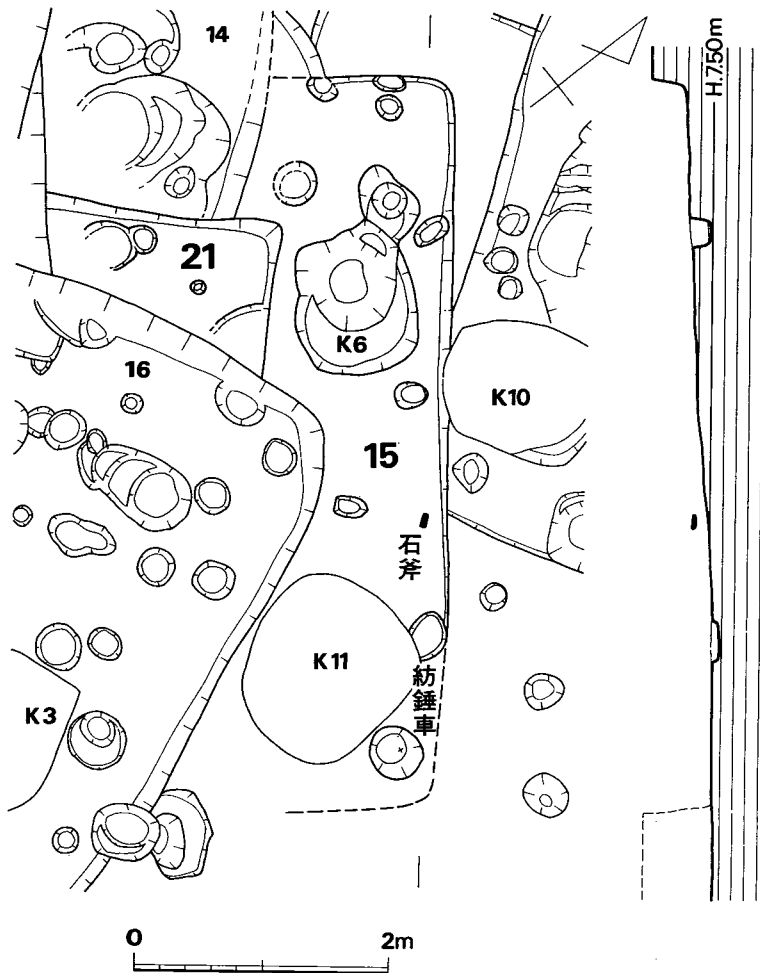
13号・15号・17号・18号・20号・22号住居跡, 3号・6号甕棺等と重複し, 東北・東南隅を含む約2/3程が残る。一辺550~600cm程の隅丸方形の住居跡である。この住居跡の床面近くで小鉄片が出土した。上層には高坏口縁片, 器台片等弥生後期の土器片が混入していたが, 量的にはわずかであり, この鉄片が弥生後期に伴う可能性はきわめてうすい。北側の床面下からは縄文前期の土器が数点出土している。



第 24 図 13 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

17号住居跡 (第27図)

13号・16号・18号・33号・38号・39号・35号住居跡等と重複しているが、南西隅をのぞき大半が残っており、ほぼ全容を把握できる。東西560cm×南北630cmのやや長方形を呈する住居跡



第 25 図 15・21 号住居跡 (縮尺1/60)

である。

18号住居跡(第28図)

16号・17号・19号住居跡, 3号甕棺と重複しているがほぼ全容は把握できた。一辺470~480cmのやや小形の隅丸方形を呈する住居跡で, 4本柱の建物と考えられる。東南の柱穴の位置が若干ずれているが, 東西の柱間間隔は北で235cm, 南で250cm, 南北の柱間間隔は東で, 240cm, 西で230cmを測る。東南隅には幅5~10cm, 深さ5cm程の溝で囲まれた径150cm前後の円形部分があるが, 性格は不明である。

19号住居跡 (第29図)

18号・25号住居跡と重複しており, 東南隅の一角しか残っていない。隅丸方形住居跡であるが全容の把握はできない。

20号・22号住居跡

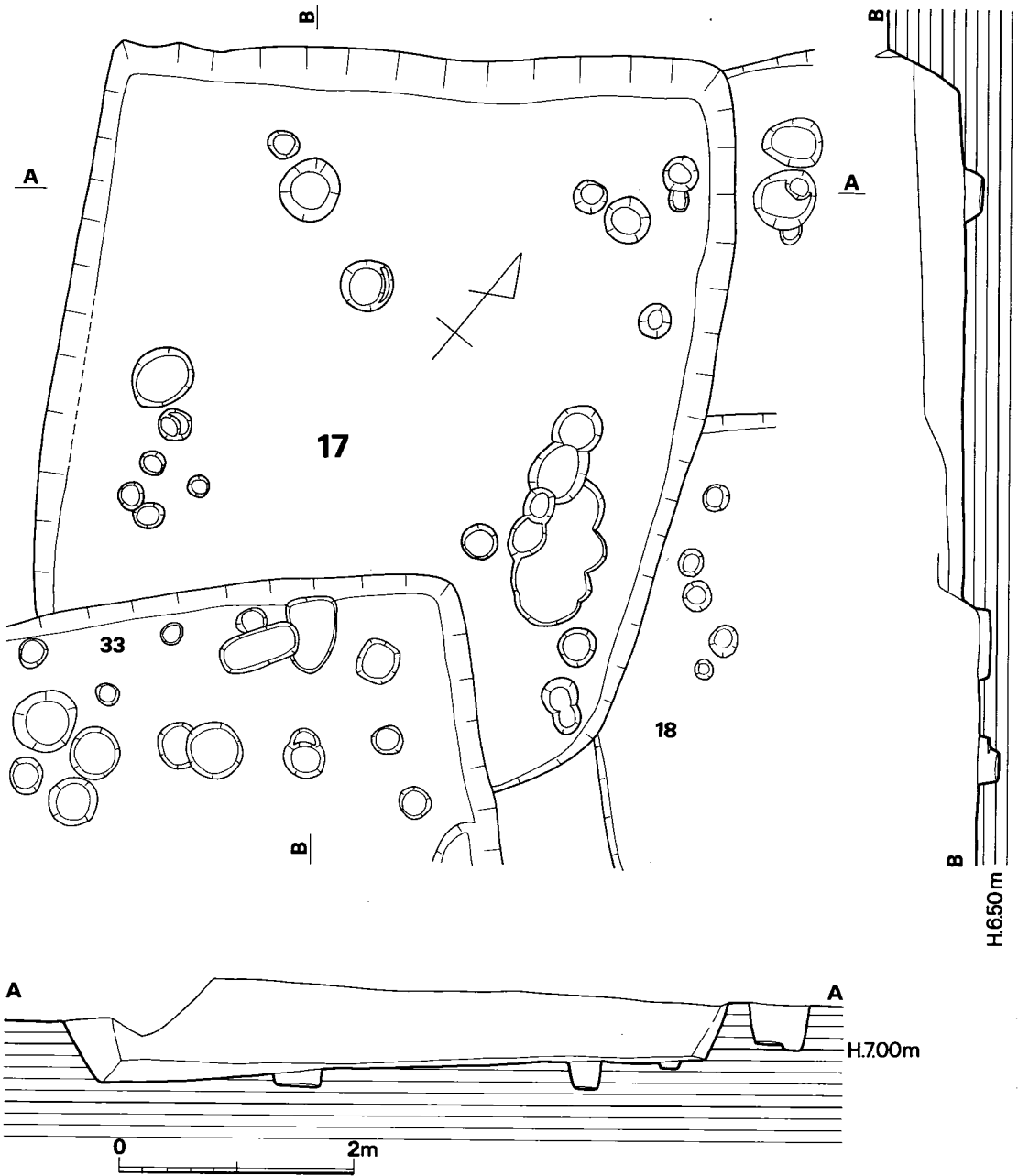
ともに未掘である。20号は北端しか残っていないが, 一辺450cm程の隅丸方形の住居跡であることは確実である。22号は隅角部分は残っていない。



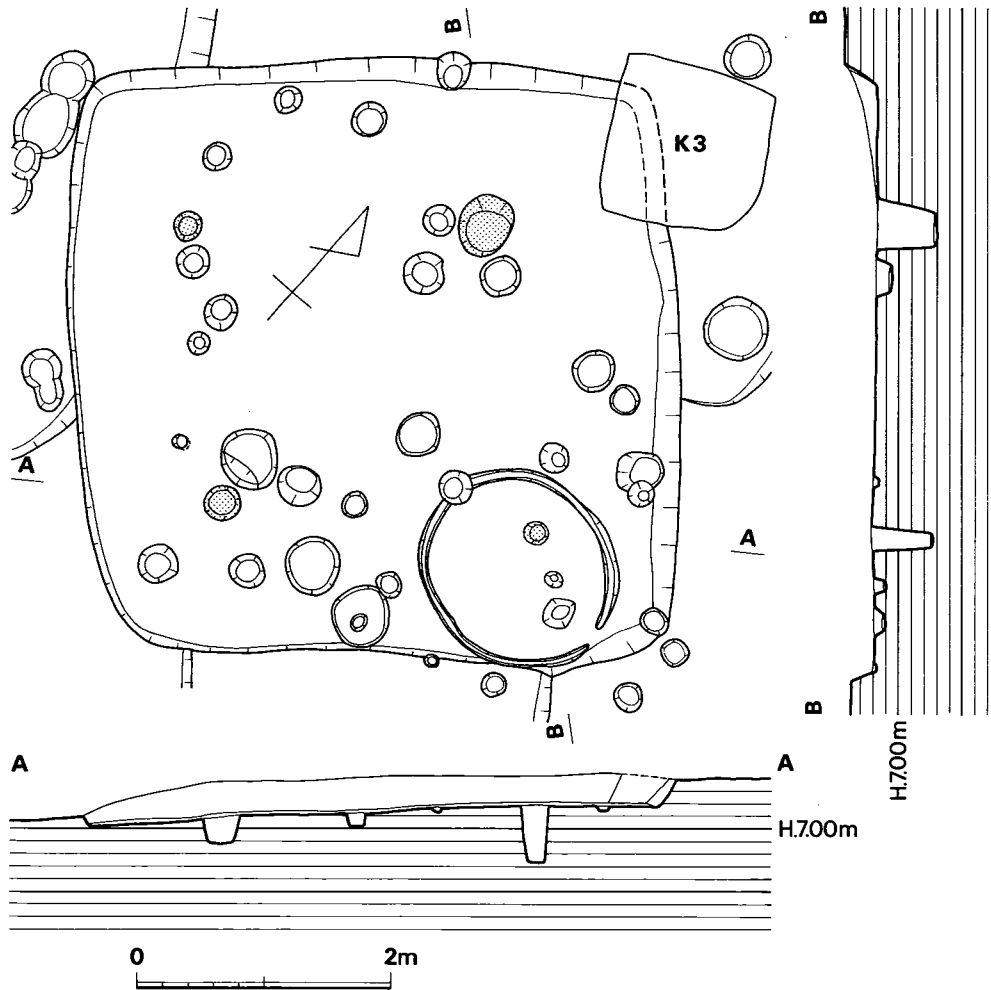
第 26 図 16 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

21号住居跡 (第25図)

14号・15号・16号・22号住居跡, 6号墓棺等と重複しており, 東北隅しか残っていないので, 全容の把握はできない。方形住居跡である。



第 27 図 17 号住居跡 (縮尺1/60)



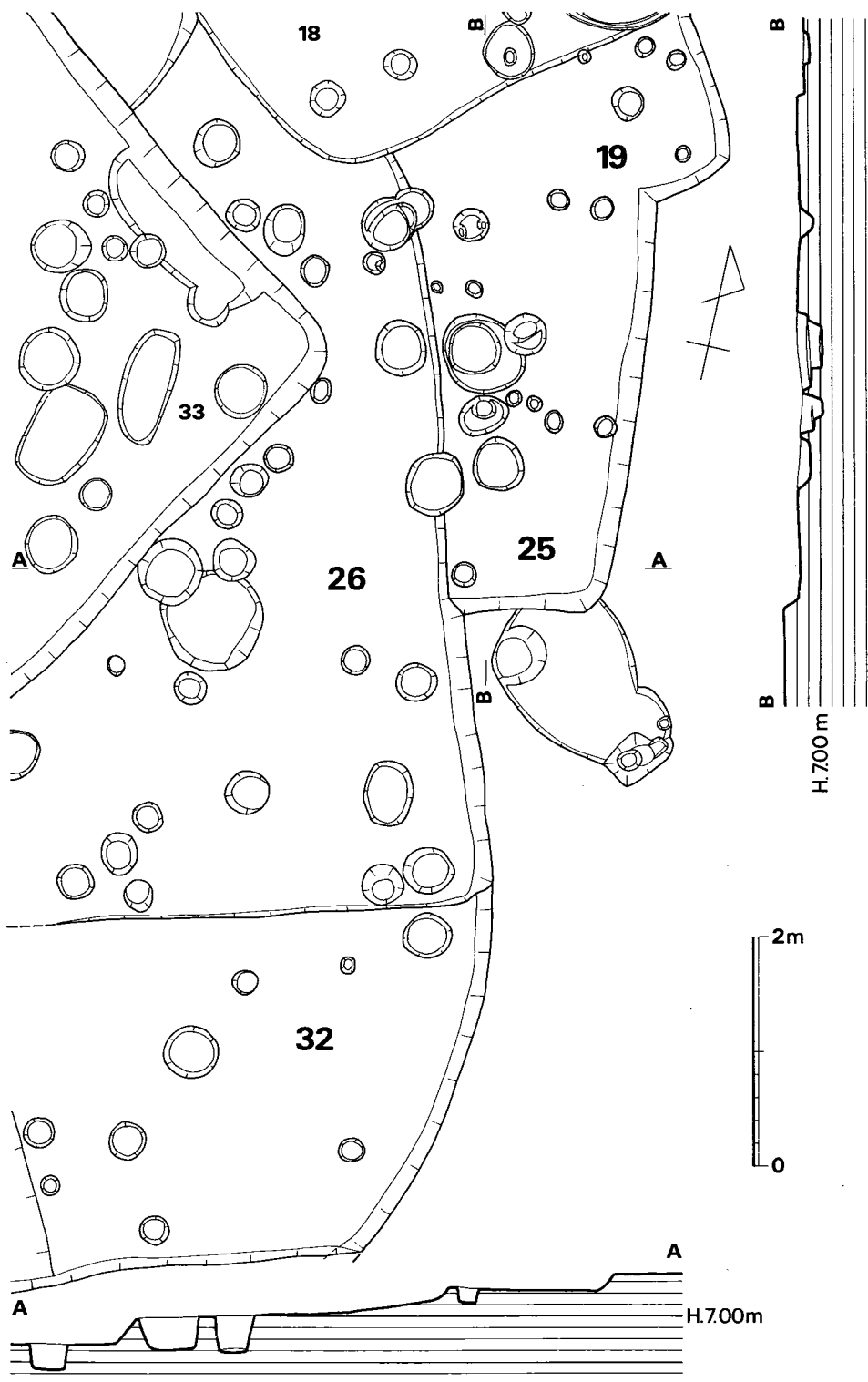
第 28 図 18 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

23号住居跡 (第23図)

7号・8号・11号・14号・24号住居跡と重複している。北西隅しか残っていないので、隅丸の方形住居跡である他は、全容の把握はできない。

24号住居跡 (第23図)

8号・15号・23号住居跡等と重複しており、北西隅のみしか残っていないので、方形住居跡である他は全容の把握はできない。



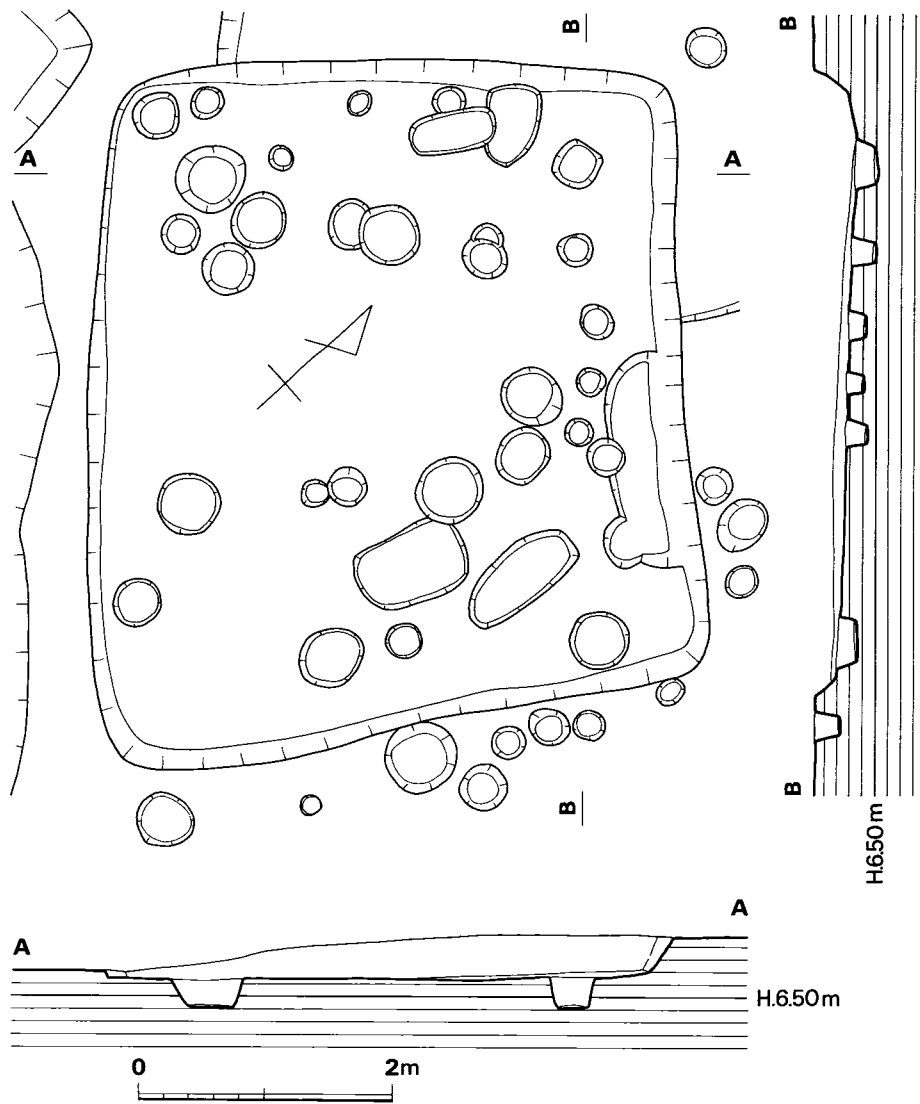
第 29 図 19・25・26・32号住居跡 (縮尺1/60)

25号住居跡（第29図）

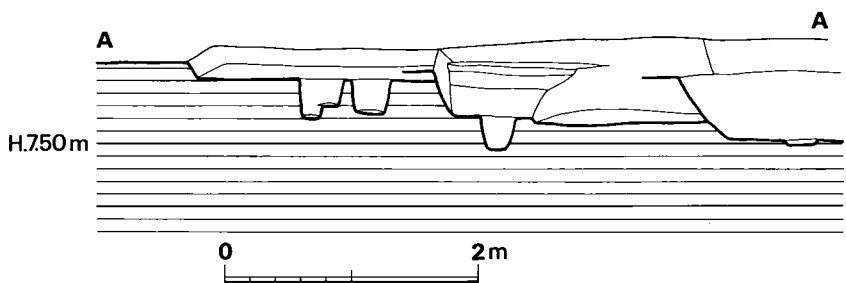
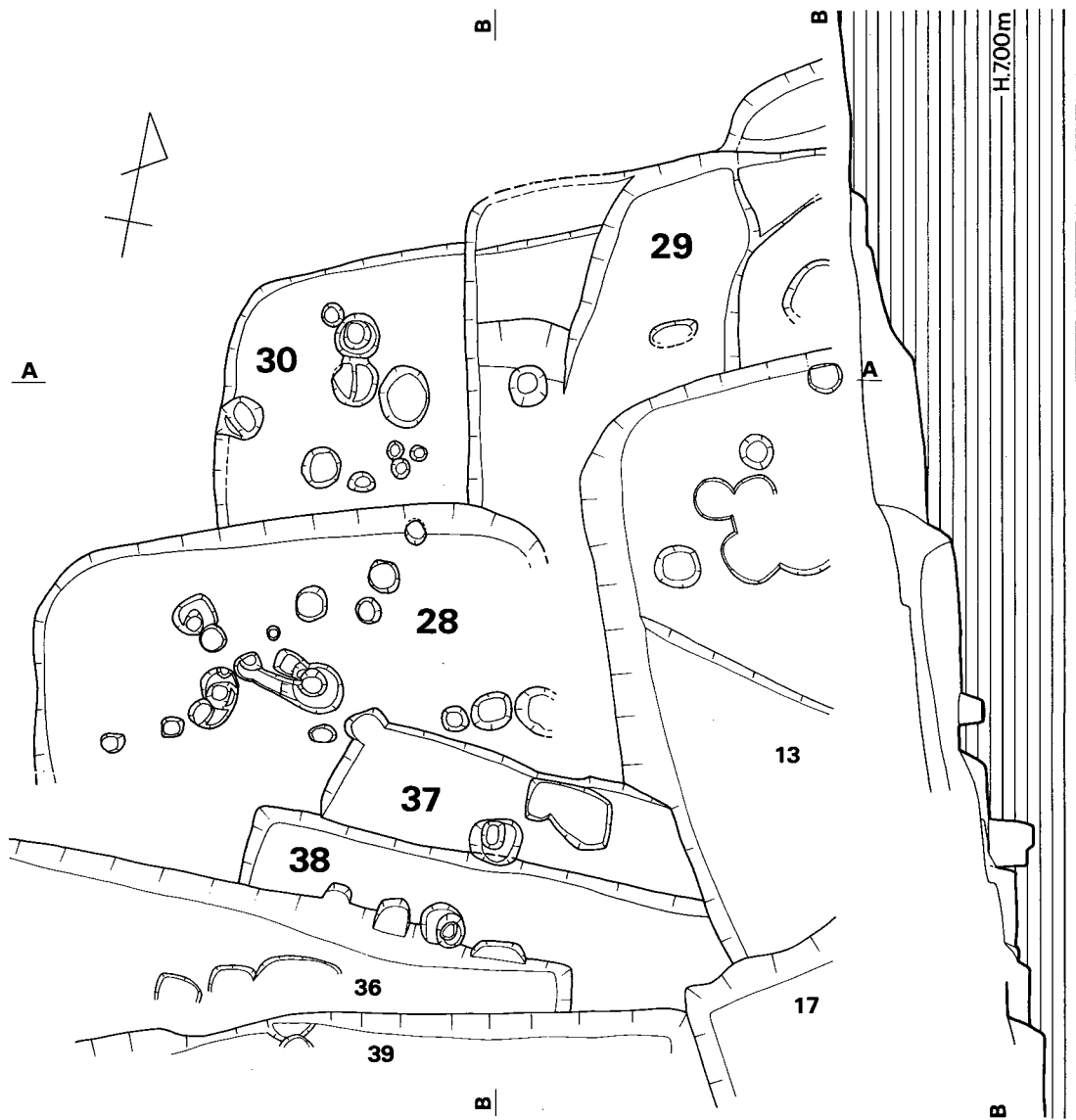
19号・26号住居跡等と重複しており，東南隅を中心として残るのみで，方形住居跡である他は全容の把握はできない。

26号住居跡（第29図）

18号・25号・32号・33号住居跡等と重複する。東南隅と東側を中心に残る。北辺の把握はで



第 30 図 33 号住居跡（縮尺1/60）

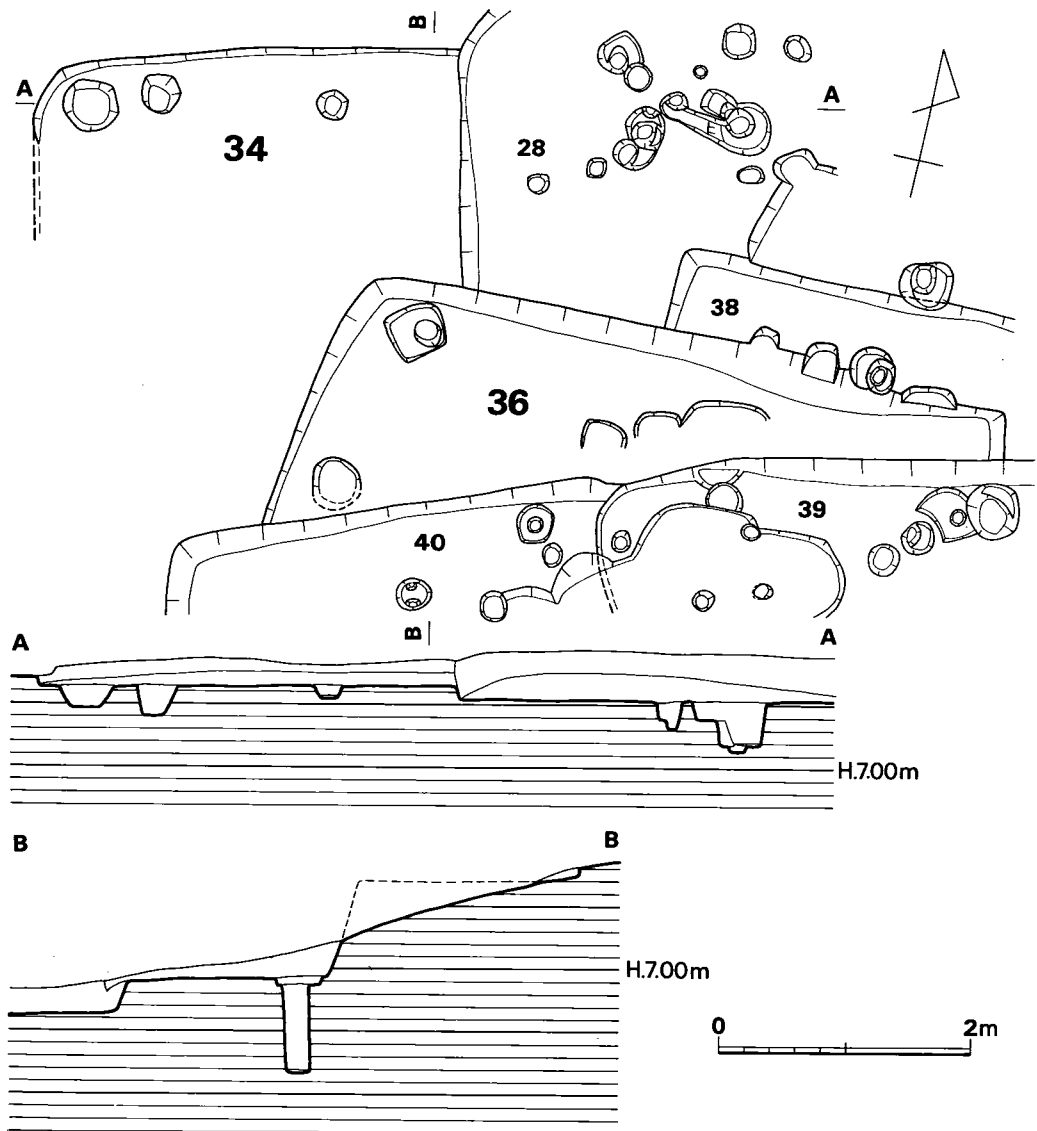


第 31 図 28・29・30・37・38号住居跡 (縮尺1/60)

きないが、曲りかけているので、東辺は700cm弱のやや大形の方角住居跡になりそうである。

28号住居跡（第31図）

29号・30号・34号・36号・38号・35号・37号・27号住居跡等と重複する。一辺420cm程の小形の隅丸方形の住居跡であるが北半しか残らないので全容は不明である。



第 32 図 34 ・ 36 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

29号住居跡（第31図）

11号・12号・13号・28号・30号・27号住居跡等と重複し、北西隅しか残らないので、隅丸方形住居跡である他は、全容の把握はできない。

30号住居跡（第31図）

28号・29号・27号住居跡等と重複し、北西隅しか残らない。隅丸方形住居跡である他は、全容の把握はできない。

32号住居跡（第29図）

発掘区の西南端に位置し、26号住居跡と重複し、西側は斜面となり、奈良～平安時代、弥生時代後期の厚い包含層が形成されている。又西側に小形の支石墓が検出されたが、これとの切合い関係は不明である。東辺がやや曲線を描いているが、これは発掘時にやや掘りすぎたものであり、本来は方形住居跡である。

33号住居跡（第30図）

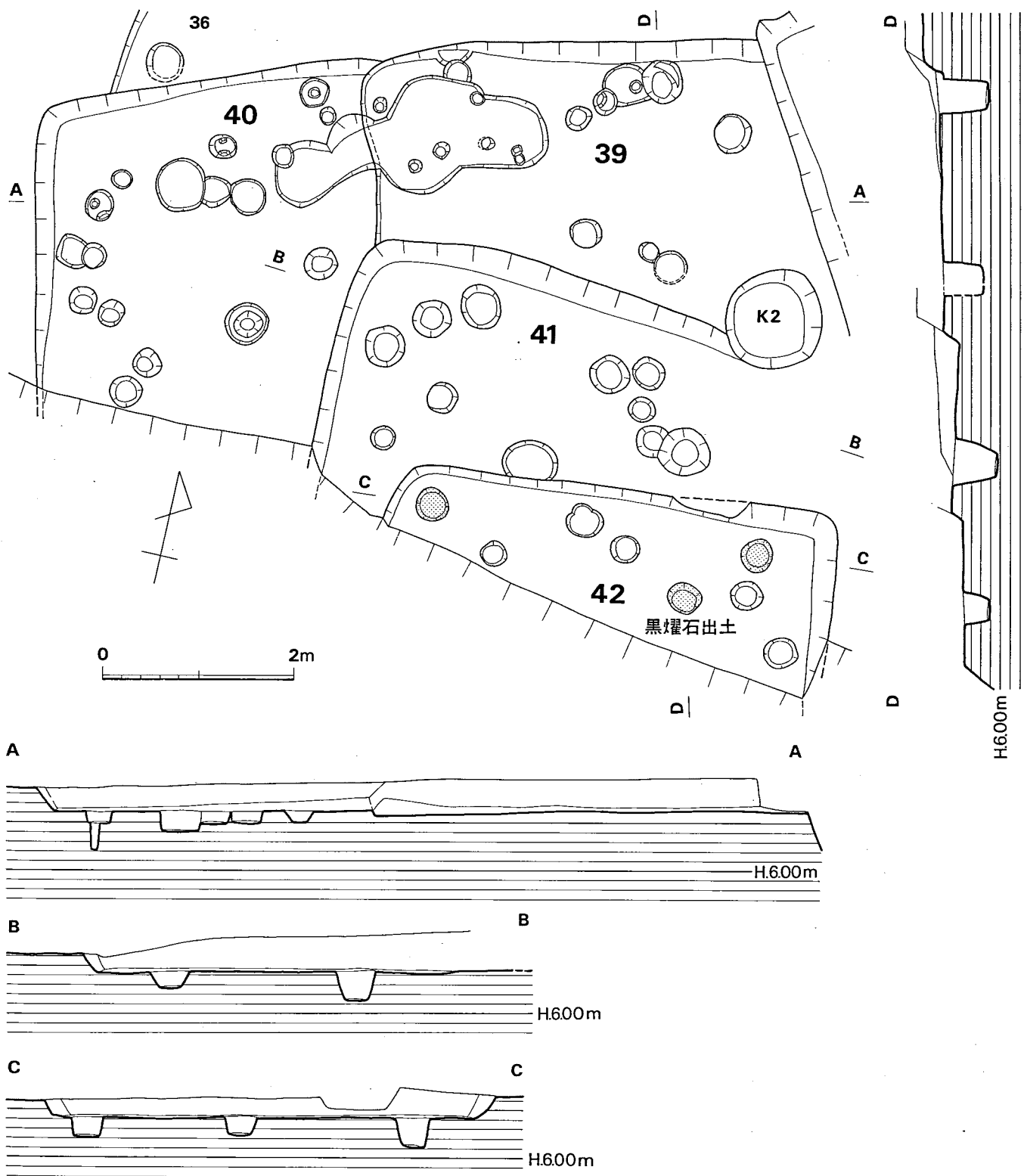
17号・26号住居跡等と重複するが、全容は把握することができる。東西は北辺で450cm弱、南辺で485cm程、南北は東辺で475cm前後、西辺で550cmでやや不整形ではあるが、隅丸方形の住居跡ととらえてよい。

34号住居跡（第32図）

28号・36号・27号住居跡、2号溝等と重複している。西北隅と北辺の一部しか残らず、隅丸方形住居跡である他は全容の把握はできない。

36号住居跡（第32図）

28号・34号・38号・39号・40号・35号住居跡等と重複するが、北辺の二隅が確認できる。全容の把握はできないが一辺550cm弱の隅丸方形住居跡である。



第 33 図 39 · 40 · 41 · 42 号 住 居 跡 (縮尺1/60)

38号住居跡（第31図）

13号・17号・28号・36号・39号・35号・37号住居跡等と重複しており、北西隅の一角しか残っていないので、方形住居跡である他は全容の把握はできない。

39号住居跡（第33図）

17号・36号・38号・40号・41号・35号住居跡、2号井戸等と重複しており、西北隅の一角しか残っていないので、隅丸方形の住居跡である他は全容の把握はできない。

40号住居跡（第33図）

36号・39号・41号・35号住居跡と重複しており、西北隅の一角しか残っていないので、隅丸方形の住居跡である他は、全容の把握はできない。

41号住居跡（第33図）

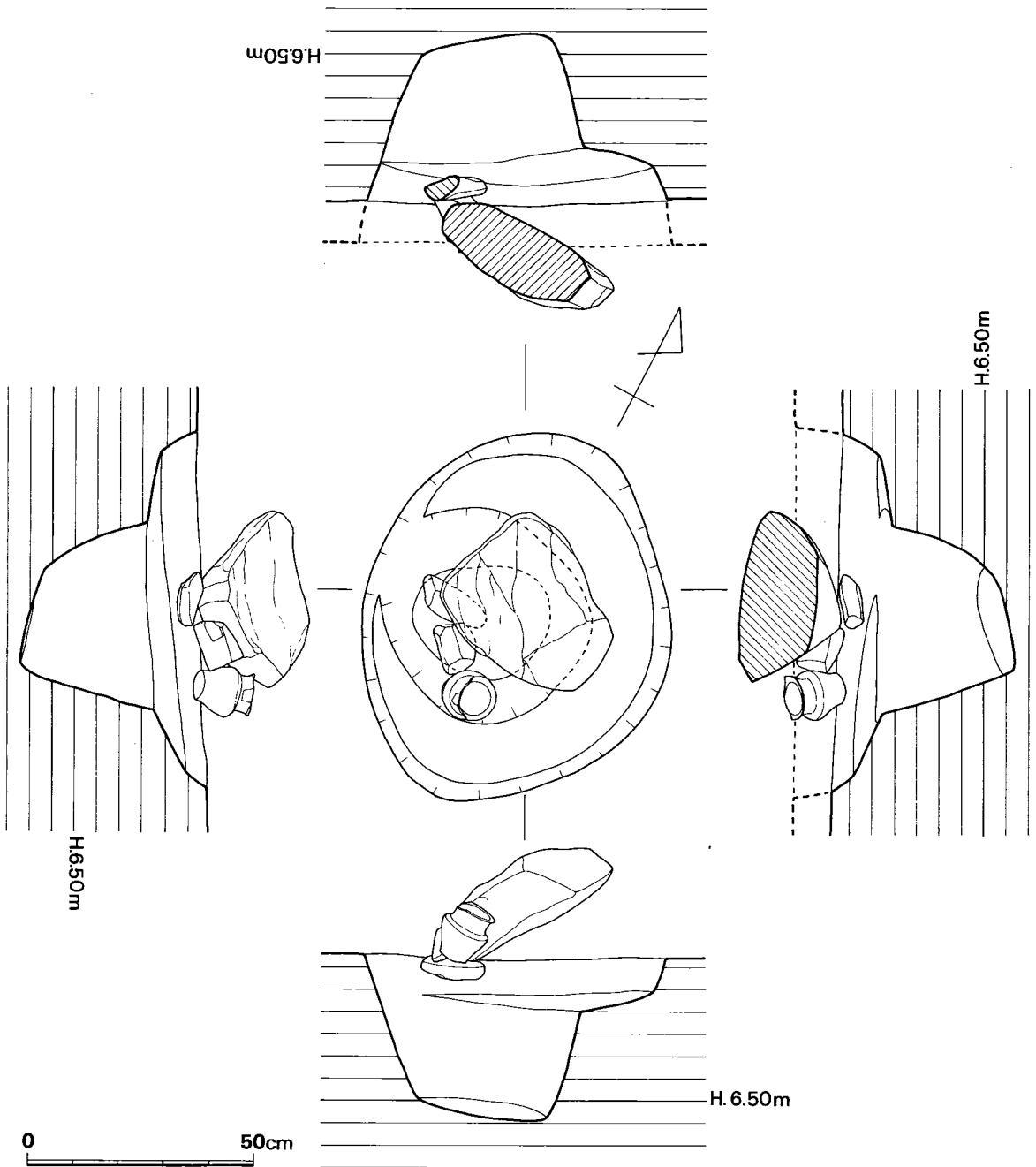
39号・40号・42号・35号住居跡、2号井戸等と重複しており、西北隅の一角しか残っていないので、隅丸方形の住居跡である他は全容の把握はできない。

42号住居跡（第33図）

41号住居跡と北・西側で重複し、南側は斜面となり奈良～平安時代、弥生後期後半頃の厚い包含層が形成され、また41号、42号住居跡の上面には板付I式の包含層も形成されていた。北側の二隅が残り、一辺500cm弱の隅丸方形の住居跡で4本柱の建物と思われる。北辺の支柱穴の柱間間隔は340cmを測る。又図に示した柱穴からは黒燧石片が多量に出土した。

b. 支石墓（第34図）

発掘区の東南隅に近い部分で小形支石墓1基を検出した。83cm×69cmの長円形の墓壙を掘り、その中央に径48cm程の円形の穴を30cm程掘って主体部をつくっている。その上に40cm×32cm、厚さ17cmの花崗岩の上石を4個の支石の上に置いていた。発掘中に東側にあった2個の支石ははずされてしまい原位置がわからなくなった。支石には10cm前後の花崗岩の角礫と、16cm×7



第 34 図 支 石 墓 (縮尺1/15)

cm×8cm程の河原石を用いており、はずされた2個の支石もほぼ同大の花崗岩であった。南側には器高13cm程の夜臼期の小形壺を副葬していた。

主体部内には炭片がみられ、特に下位になるほど多くなり、又焼骨片が出土した。骨はあまりにも少片であって人骨か否かの確定はできないが、火葬骨である可能性はきわめて高い。墓壙内よりも土器片とともに焼骨が1片出土したが、これは猪の足根骨であり、炭片もともなわず、主体部内のものとは明らかに別ものである。

ところで縄文後期中頃までの墓制は山鹿貝塚等の例でも明らかなように土壙墓に伸展葬および屈葬されたものであるが(註1)、後期後半以後になるとこのような墓制は知られていず、甕棺等の小形の墓制が出現し、晩期末までひきつがれている。曲り田遺跡等とほぼ同時期と考えられる長崎県原山遺跡の支石墓もその内部主体は箱式石棺・土壙・甕棺等であるが、いずれも小形のものである。これについては森貞次郎氏等は「埋葬法も縄文文化にみる伝統が強烈で」「支石墓の墓壙は縄文の伝統である極端な屈葬が守られている」としている(註2)。はたしてそうであろうか。私自身の経験からいえば1960年代後半に鹿児島県加世田市上加世田遺跡の発掘に参加させていただき、縄文晩期初頭の甕棺を掘った際、甕棺内より炭と焼骨を発掘したことがある。これは火葬骨であろうと確信をいだき、その後縄文後・晩期の墓制に注意してきた。同じ頃調査の行われた福岡県刈田町浄土院遺跡出土の縄文後期甕棺内よりは明らかに火葬骨がみられ、長崎大学医学部解剖学教室の内藤芳篤教授により、成人女性と同定されている(註3)。その後このような例は報告されていないが、縄文後・晩期の甕棺・小形の墓制は極端な屈葬というよりも火葬墓である可能性がきわめて強い。

これらのことから考えると、西北九州の縄文晩期の支石墓は「縄文文化の伝統的な要素と、導入された支石墓がむすびついて形成された、日本化した独自の支石墓」であったといえよう。

註1 芦屋町教育委員会「山鹿貝塚」芦屋町文化財調査報告書 第2集 1972

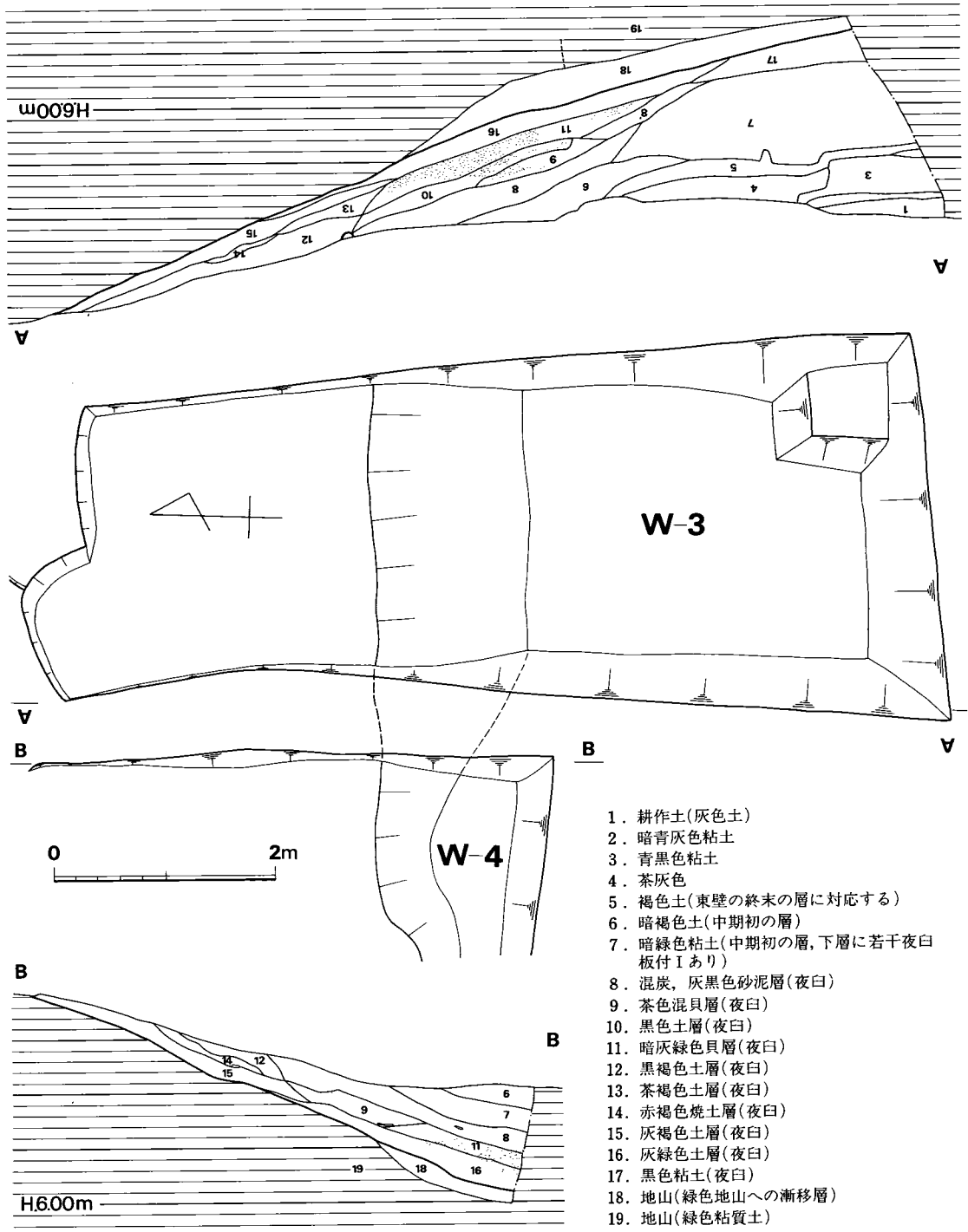
2 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会「島原半島及び唐津市の考古学的調査」
1960

3 浄土院遺跡調査団「浄土院遺跡調査概要」 1972

5) 包含層

a. 曲り田の包含層 (第35図)

大略についてはII-1で既に説明を加えてあるので省略し、ここではW-3区、W-4区の



第 35 図 W-3・W-4 トレンチと土層図 (縮尺1/60)

トレンチについて述べたい。

W-3区は深いところで180cm掘り下げた。1は耕作土であり、2～4層は奈良～平安時代遺物を主体として出土した。

5層は弥生後期後半の土器を主体とする。図示したW-3区西壁では15cm程の薄い層であるが、東にいくにしたがって厚くなり、発掘区西南部斜面の包含層の主体部はこの層に対応するものと考えられる。西南部におけるトレンチでは地山に達するまで200cm近い層を形成していた。

6・7層は中期前葉の土器を出し、7層の最下層では板付I式、夜臼式土器等が若干みられた。

8層から17層にかけては夜臼期の土器を出土する。9・10・11層は混貝層である。16層と17層に関しては17層が上層又は16層の漸移層として扱えられる。

18層・19層は地山である。19層は北側の斜面では茶褐色を呈する粘質土で、南側の傾斜のゆるやかな部分では緑色の粘質土である。18層はこの緑色粘質土への漸移層である。

以上を要するに、1層をのぞき、2～4層を上層、5～7層を中層、8～17層を下層としてとらえるべきである。

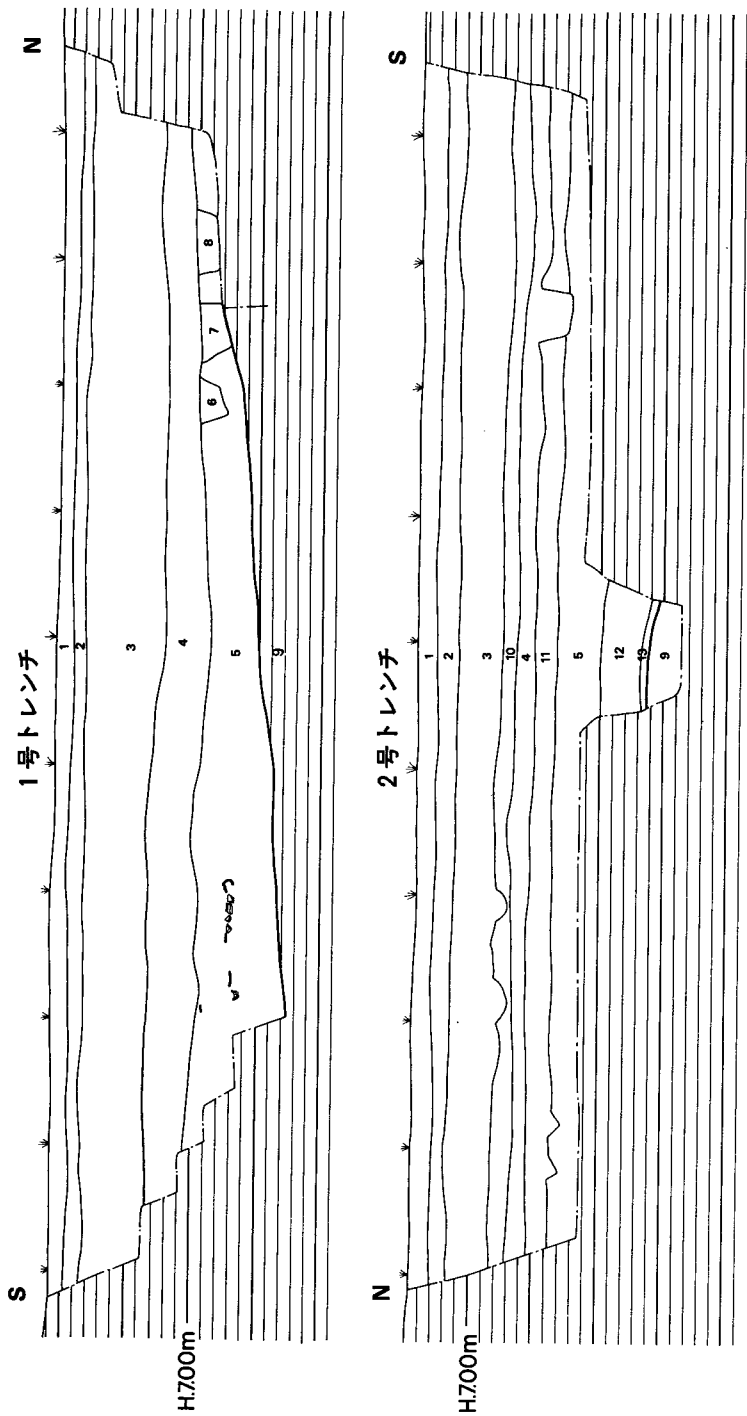
W-4区では1～5層はなく、又6層以下でも10層・13層・17層などはみられない。11層～16層にかけて、若年獣の猪骨一頭分があおむけになった状態で検出された。

b. 堤田包含層（第36図）

1層は耕作土、2層は旧耕作土である。3層は淡灰黄色の客土層でかなり厚い。農道をへだてた曲り田部分ではさらにこの層が厚く、したがって遺構の残りがよかったといえる。4層が平安時代の遺物を出すことからすると、平安～鎌倉時代頃に客土されたものであろう。

5層は弥生後期後半の土器を包含する層であるが、第1トレンチの北端近くでは一部奈良末期の遺物もみられた。

他は無遺物層である。



- 1. 耕作土
- 2. 青灰色粘質土
- 3. 淡黄灰色土(礫土)
- 4. 青灰色粘質土
- 5. 灰黑色包含層(弥生終末)
- 6. 茶褐色土
- 7. 黒褐色土
- 8. 黒褐色土
- 9. 灰緑色粘土(地山)
- 10. 3 + 4の混土层
- 11. 暗茶褐色土
- 12. 暗灰色粘質土
- 13. 暗緑色粘質土

第 36 図 堤田1・2号トレンチ土層図 (縮尺1/60)

3. 遺物

1) 歴史時代の遺物

a. 土器・土製品

イ) 遺構に伴う土器・土製品

4号住居跡出土遺物（第37図）

1は、須恵器杯蓋口縁片である。復元口径14.5cmを測り、短かく折れる口縁をつくる。口縁下端部は丸く、屈折部外端の稜はシャープである。内外面回転ナデ調整を施す。柱穴内出土品で、1/7弱残る小片である。胎土は精選され良好であり、焼成堅緻で、灰黒色を呈する。

2は、土師器杯で、体部がやや内湾気味に丸味を帯びて開くやや古相をみせる器形をなす。口径13.9cm、器高4.0cm、底径6.7cmを測り、1/2弱残存する。周溝内出土品で、底部はヘラ切り離して、体部下端は回転ヘラ削りのままに残す。内面は磨滅するが、体部外面回転ナデを施す。胎土に粗石英粒をかなり含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。

3は、土師器皿で、口径13.3cm、器高2.0cm、底径9.8cmに復元される。周溝内出土品で、1/3のみ残存する。底部は回転ヘラ切り離し、体部内外面は回転ナデを施す。底部内面は指で一方向にナデつける。体部がかなり外傾して、口径も小径化している。胎土は精選されており、焼成良好で、淡褐色を呈する。

4は、内面を黒色に燻した、黒色土器A類の高台付碗である。底部片のみで全形は明らかでない。短く外方に踏ん張る高台を、体～底部の境目に付ける。復元底径8.2cmを測る。内外面の器表は磨滅しており、調整は明らかでない。胎土に若干の細石英粒を含み、焼成は良好で淡褐色をなす。

5は、須恵器甕頸部～胴上端片である。周溝内出土品で、外面上端に僅かな段がつき、以下は横に長めの格子目叩きを施す。内面は細く間隔の空いた青海波あて具痕の上を横ナデ調整する。胎土はかなり精良で、焼成堅緻である。外面は灰かぶりにて灰白色をなし、内面は暗灰色を呈する。

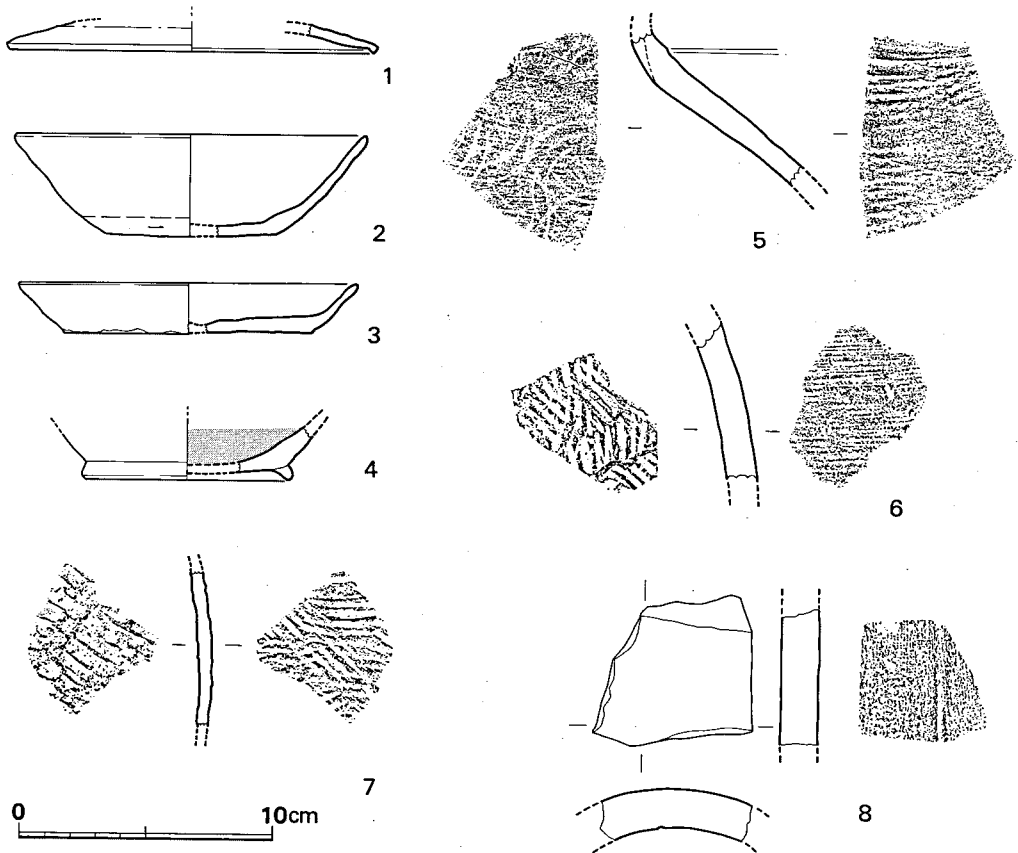
6は、須恵器甕胴部小片で、外面にはカキ目調整がみられ、内面には短線を組み合わせた綾杉状のあて具を横位に連続させている。胎土に細石英粒を多く含み、焼成やや良く、暗茶褐色

を呈する。

7は、須恵器甕胴部小片で、かなり薄手である。周溝内出土品で、外面に横～斜め方向の平行条線状叩きを雑に施し、内面には短かく幅の広い異様な平行条線状あて具痕を残す。胎土はかなり精良で、焼成は堅く焼きしまり、外面灰黑色、内面は暗青灰色をなす。

8は、内面に目の細かい布目を残す丸瓦片である。内面縦位に模骨痕がみられる。外面は素文で、胎土に細石英粒をかなり含み、焼成は不良で、表面淡白褐色を呈し、心の部分は黒色をなす。

以上の4号住居跡出土遺物を点検してみよう。1は口縁下端部がすでに小さく丸味を帯びている。2は、口径大きく、体部も内湾気味に開き、体部下端に削りを残す。大宰府近辺で通有にみられる内外面のへう磨きこそみられないが、明らかに奈良後半～末期の特徴を示している。4の短かく踏ん張る器形も奈良末期前後の特徴を示している。他の5～8の遺物も年代的に矛盾は無い。よって、これらの遺物には、8C末頃の年代が与えられる。



第 37 図 4号住居跡・出土土器・瓦 (縮尺1/3)

27号住居跡出土遺物（第38図）

1は、須恵器杯蓋の撮部分のみである。小さい撮を付け、外面は回転ナデ調整を施し、内面はナデツケている。胎土は精製されて良く、堅く焼きしまり、灰色を呈する。

2は、須恵器杯蓋で、復元口径14.8cmを測る。短かく下垂する口縁下端はやや尖り、若干のシャープさを残している。天井部中心に撮のとれた痕跡が認められ、1と同様の小さな類が付くものであろう。外面撮周辺は回転ナデ、外面平坦面は回転ヘラ削りの上をナデており、口縁近くの外面と内面は回転ナデ調整を行う。内面中央にはその上からのナデツケがみられる。胎土は精良で、焼成堅緻で、暗青灰色を呈する。

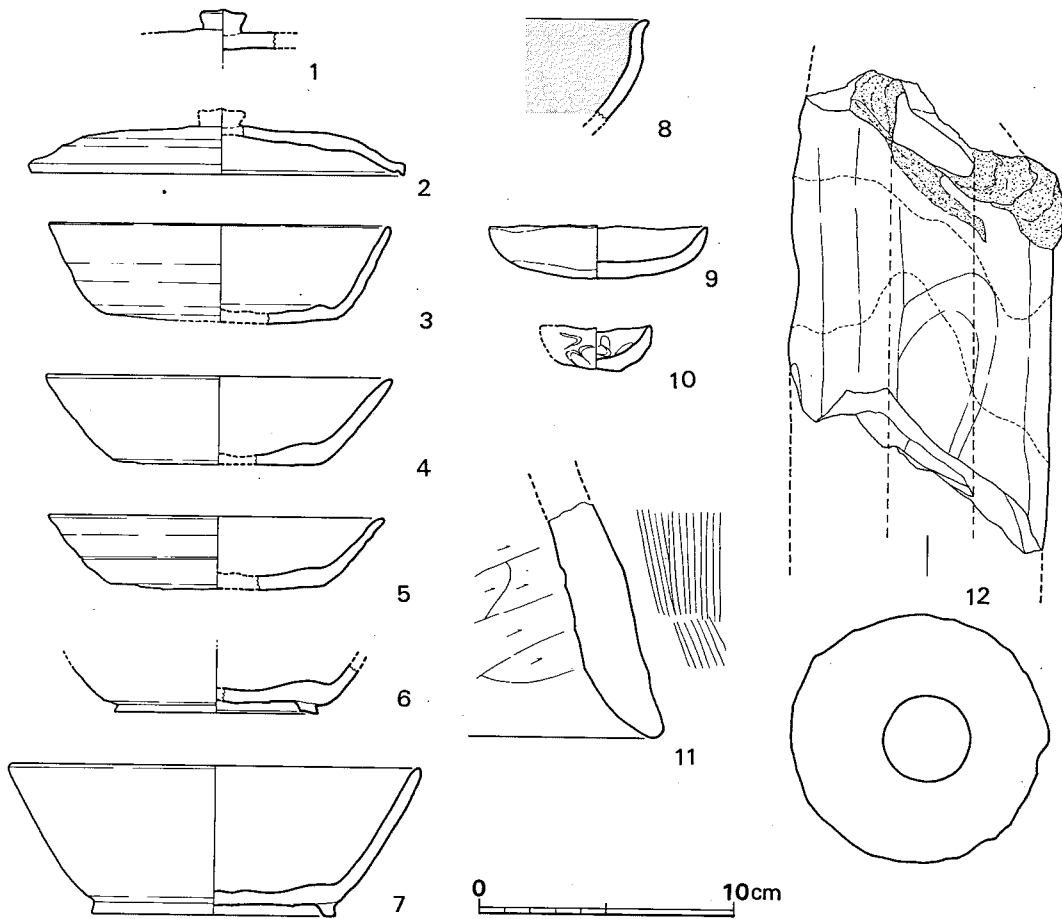
3は、須恵器杯で、復元口径13.5cm、器高3.9cm、底径9.2cmを測る。体部はそれ程外傾せず、全体にやや深い器形を呈する。底部はヘラ切離しの後にナデており、体部内外面は回転ナデ、底部内面にはナデツケがみられる。体部外面にはやや強いナデによる稜がいくらかみられる。胎土に細砂いくらか含み、焼成堅緻で、暗灰色を呈する。

4は、須恵器杯で、3に比べて体部もかなり外傾して長く、全体に器壁が厚い。復元口径13.7cm、器高3.6cm、底径8.2cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデており、体部の内外面は回転ナデ調整を行い、底部内面にはナデツケがみられる。胎土に細砂を僅かに含み、焼成やや軟質で、灰色をなす。

5は、須恵器の浅い杯の類であり、復元口径13.4cm、器高2.8cm、底径8.4cmを測る。いくらか丸味を帯びて開く体部は、口縁端で僅かに外反する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデており、体部内外面は回転ナデ、底部内面にはナデツケがみられる。体部外面には強いナデによる稜線や、砂粒の長い移動により沈線状となる部分もみられる。胎土に粗砂を僅かに含み、焼成堅く、黒灰色をなす。

6は、須恵器高台付椀の底部片で、復元高台径8.0cmを測る。低いが外方へ踏ん張り、外端のみで接地する高台を、体部と底部の境目よりやや内側に付ける。高台下端面は凹状をなす。内面と底部外面の高台を付けるための部分までの外面は回転ナデ調整を施し、内面中央付近はナデツケが行われている。胎土は精良であり、焼成堅緻で、淡灰色を呈する。

7は、器形・調整技法ともに須恵器そのものであるが、以下に述べる如く、焼成が瓦質に近く、やや趣を異にする類である。かなり直線的に開く体部につくり、底部との境目よりごく僅かに内側に、低くわずかに外方へ踏ん張る形の高台を付ける。口径16.3cm、器高5.9cm、高台径9.6cmを測るやや大口径の類となる。体部内外面は回転ナデを行ない、高台部周辺も回転ナデを施す。底部外面は未調整で、渦巻状の粘土はみ出しがみられ、断面の観察からすると、どうも粘土紐を巻いた痕跡かと考えられそうである。底部内面にはナデツケがみられる。焼成はやや軟質で、所謂瓦質に近く、内面は淡灰白色をなし、口縁内面上端から外面すべては黒色を呈し



第 38 図 27号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)

燻した可能性も考えられる。胎土には若干の細砂粒を含む。器形・調整技法ともに須恵器のそれであるが、外面のみを燻した黒色土器の一種であるかとも考えられる。ただ、黒色土器の重要な要件である磨きがみられないことは、もともと須恵器として成形されたものであり、そして焼成法が異っているだけであり、本来の意味での黒色土器の範疇には入らないものであろう。偶々瓦窯等の床面に伏せて焼成されたというようなことが考えられる類である。

8は、内面のみを黒色に燻した黒色土器A類口縁小片である。やや器壁が厚く、内湾気味に開く体部から口縁端近くでは反転して短かく外反する。これらの特徴は他の遺物に比べて年代がかなり下降することを示す。内外面の器表は磨滅しており、調整不明である。胎土は精良で外面は淡茶色をなす。

9は、土師質の小皿状の小型品である。口径8.6cm、器高2.1cmを測り、底面は丸くなる。底外面はナデツケ状をなし、体部内外面はナデ調整であるが、口縁上縁が波打つ点などからも全

体到手捏ね風な感じを受ける。胎土はわりと精良で、焼成良く、淡茶褐色をなす。

10は、明らかに手捏ねのミニチュアである。復元口径4.3cm、器高1.8cmを測る。内外面全体に指の圧痕が顕著である。胎土に粗砂多く含み、焼成良く、赤茶色を呈する。

11は、土師質で部厚く、移動式竈の下端接地部分と考えた。内面は横方向のヘラ削り、外面は粗い縦ハケを施す。下端部内外面は横ナデ調整が施される。下端部は二次火熱を受けて若干赤変している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、茶褐色をなす。

12は、土製鞆羽口である。直径3.4cmの棒に粘土を巻きつけ、直径10.2～9.8cmの円筒形につくっている。先端部は若干欠損するが、熔結部の付着状況から、約45°の角度で斜めに炉壁に挿入したものと考えられる。先端の熔結部周縁は灰黒色変して、更に白褐色変し、基部寄りでは赤茶色を呈する。外面はヘラにより縦に削りとして後にナデたり、押さえたりしている。胎土に粗砂粒を多く含んでいる。

以上の27号住居跡出土遺物に若干検討を加えたい。全体に土器は土師器が少なく、須恵器が多い。1・2は奈良期の特徴を十分に有している。3は体部があまり外傾せず、奈良前～中期の古い様相を残す。4～6は、体部がかなり外傾し、奈良後半代の特徴を示す。7も器形的には奈良末～平安初頭以前の形態である。8は小片であるが、口縁の形態から少なくとも10C中頃以降、11C前半頃までの所産であり、新しい柱穴等に混入していたものかと考えられる。9・10は他の遺物と共伴し得る類のものか、不明である。ただ、10は古墳時代のミニチュアである可能性も考えられる。11・12等も本遺構の時期のものである。以上のことから、出土遺物のうち若干の時期の異なるものを除いて、27号住居跡の時期は8C後半、それも8Cの末に近い後半であろうと考える。

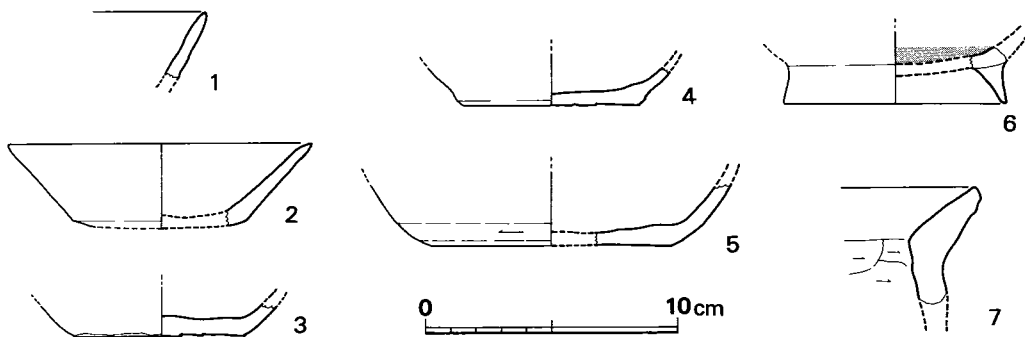
1号掘立柱建物出土遺物（第39図）

1は、須恵器杯口縁小片である。13号柱穴出土品で、体部はかなり外傾する。内外面ともに回転ナデ調整を行い、胎土に粗砂粒わずかに含み、焼成堅緻で、内面は灰色、外面は暗灰色をなす。

2は、土師器杯片で、1/3のみ残存する。復元口径11.8cm、復元器高3.4cm、底径6.7cmを測る。5号柱穴出土品で、体部は直線的に開き、端部は尖る。内外面磨滅して調整は不明である。胎土に石英粒を若干含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

3は、土師器杯底部片であり、12号柱穴出土品である。底径6.6cmを測り、底外面は渦巻状の回転ヘラ切り離し痕が残る。体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部内面にはナデツケがみられる。胎土精良で、焼成良く、淡茶色を呈する。

4は、土師器杯底部片である。3号柱穴出土品であり、底径7.0cmを測る。底部外面にはヘラ



第 39 図 1号掘立柱建物出土土器（縮尺1/3）

切り離し後に板状圧痕が残り，体部外面は横ナデ調整を行う。内面は磨滅して調整不明である。胎土に細砂粒をいくらか含み，焼成良好で，橙茶色をなす。

5は，土師器の大型の杯で，1号柱穴出土品である。底径9.5cmを測り，体部は内湾気味に丸味を帯びて立ち上がる。底部外面は左廻りの回転へら削りのままで，体部外面下端も左廻りのへら削りを施す。体部内外面は横ナデ調整で，底部内面にはナデツケがみられる。胎土に粗石英粒かなり含み，焼成良好で淡茶色を呈する。

6は，内面を黒色に燻した黒色土器Aであり，2号柱穴よりの出土品である。長く，やや外へ張る高台を付ける。復元高台径8.8cmを測り，高台部内外面は横ナデ調整を行う。胎土は精良で，焼成良く，外面淡褐色をなす。

7は，土師器甕口縁片で，2号柱穴よりの出土品である。胴部から屈折して内面に稜をつくり，口縁は外へ開く。胴部内面は横方向へら削り，口縁部内外面は横ナデ調整を行う。胎土に粗砂粒を多く含み，焼成良好で，暗茶褐色をなす。

以上の1号掘立柱建物出土遺物をみても，まず，1は奈良後半から平安初頭の範囲がある。5は丸味を帯びた体部や，体部外面下端のへら削り等の特徴を持つ大型品で，磨き調整こそみえないが，諸点から，より古相を有し奈良期土師器のタイプを示す。2は体部が直線的に開くもので，土師器編年の整備されつつある大宰府近辺にもみられないタイプで，後述する1号溝出土の2と共通する類である。このような小径の底径がわりと小さく，体部が直線的に開くタイプが奈良後半～平安初期に，当地域のみで存在するのかもしれない。3・4もやや丸味を帯びて立ち上がるものようである。いずれもへら磨きはみられない。6は高台が高くなっており，9C後半代まで下がり得る可能性も考えられるが，後の時期まで糸島地域では高台の長さが特徴的な傾向をみせることからやや古くなることも考えられ，現状では一概に断定は控えておこう。以上の如く，当遺構出土遺物は若干下降するものもあるが，8C後半から9C初頭前後のものを中心としたものである。ただ，遺構の項でも述べた如く，柱穴掘方埋土内出土遺物はその遺構の上限年代を示すに過ぎないから，上記年代がその上限となるところである。

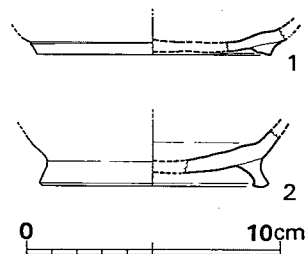
2号掘立柱建物出土遺物（第40図）

1は、須恵器高台付杯底部小片である。復元高台径9.3cmを測り、扁平で外端のみで接地する低い高台を付ける。1/5弱のみ残存する。高台下端面は凹状をなす。内外面ともに横ナデ調整がみられる。胎土は精良で、焼成堅緻で暗灰色をなす。12号柱穴よりの出土品である。

2は、付高台の土師器椀で、高台径9.0cmを測る。やや長めの外へ張る高台を体部との境目に接して付ける。12号柱穴出土品で、内外面磨滅のため調整は不明である。高台内端はやや突出する。

これらの他に図示しなかったが、11号柱穴掘方内より、ガラス製小玉1点が出土した。（図版55-d）スカイブルーを呈し、直径4.1~4.4mm、厚さ2.6mm、孔径1.5mmのやや扁平な臼形をなし、重さ0.1gを量る。古墳時代に通有のものによく似るが、時期は明確に出来ない。

以上の2号掘立柱建物出土遺物は、1の低い扁平な高台や、2の高台の未だ延びきらず、しっかりした点などから、8C末~9C初頭の年代が与えられる。



第40図 2号掘立柱建物出土土器（縮尺1/3）

1号溝出土遺物（第41図）

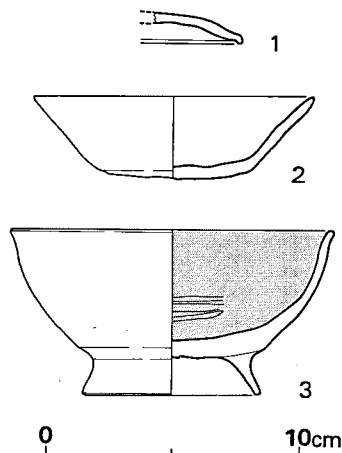
1は、須恵器杯蓋口縁小片である。下方へ屈折した端部は丸味を帯びて小さく、内外面ともに回転ナデを施す。胎土に細砂粒かなり含み、焼成堅緻で暗灰色をなす。

2は、土師器杯で、復元口径11.0cm、器高3.3cm、底径6.0cmと小型品である。底径が小さく、体部は直線的に長く開く。底部はへら切り離し後板状圧痕を残す。内外面やや磨滅するが、横ナデかと思われ、底部内面はナデツケかと考えられる。胎土精良で、焼成良好、淡茶~淡褐色をなす。

3は、口縁頂部から内面を黒く燻した黒色土器Aである。口径12.8cm、器高6.5cm、高台径7.1cmを測る。細く長く、外方へ張った高台を付け、丸味を帯びた体部につくり、丸くおさめた口縁端部は僅かに外反する。内面下半には横へら磨きを行い、他は横ナデ調整を施す。底部外面中心部には板状圧痕が残る。胎土に石英砂粒を若干含み、焼成良好で外面は淡茶色を呈する。

これらの遺物の他に、後の石製品の項で述べる砂岩製粗砥石1点がある。

以上の1号溝出土土器についてみると、1の端部の小さく丸くなった点、1号掘立柱建物出



第41図 1号溝出土土器（縮尺1/3）

土遺物の項で述べたような2のやや特異な法量・形態など問題点が多いが、やはり奈良末～平安初期の様相が考えられる。更に3は、単に汎北九州的視野からみると、丸味を持った体部や長く延びる高台などの傾向からみると、少なくとも9C後半以降の特徴を示すところではある。しかし、高台にしても、体部の形態にしても、同じ糸島地域の波多江遺跡(註1)出土土師器とは明らかに異なり、本例の方が精製・薄手で、体部の丸味も、かえって平安前半のものよりも奈良期杯の特徴を残すものではないかと考えられる。更に、広田遺跡(註2)第3号住居跡・第2号住居跡出土の土師器高台碗は高台が長く、いずれも奈良末～平安初期の遺構である。特に広田遺跡第3号住居跡出土土師碗は本例と酷似した小型品である。従って当地方では、3のような小型碗が、奈良末乃至平安初頭頃に存在することが充分推定されるところである。以上の諸点より当1号溝出土遺物は、年代的に下降させたとしても9C初頭頃に位置付けられるものである。

註1 橋口達也・馬田弘稔「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 6集 波多江遺跡」福岡県教育委員会 1982

2 中間研志「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告 II」福岡県教育委員会 1982

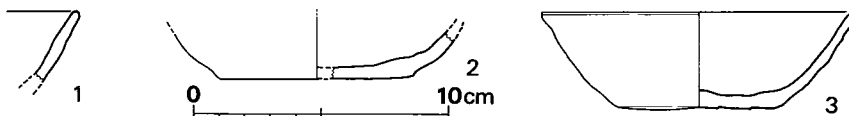
2号溝出土遺物(第42図)

1は、須恵器杯口縁小片である。外傾した体部で口縁端部は丸くおさめる。内外面に回転ナデ調整が施される。胎土精良で、焼成堅緻、灰色を呈する。

2は、土師器杯底部片で、復元底径7.6cmを測る。底部はへら切り離しにより、体部内外面ともに回転ナデ調整を施す。体部は丸味を帯びて開く。胎土に細砂を若干含み、焼成良好で、茶褐色を呈する。

3は、土師器杯で、口径12.4cm、器高3.8cm、底径6.4cmを測る。底部はへら切りにより渦巻状をなし、体部はやや丸味を帯びて開く。体部外面は回転ナデ調整が行われ、内面は磨滅しており調整は不明である。胎土精良で焼成良好、明茶色をなす。

以上の2号溝出土遺物は、2・3の土師器杯の体部が丸味を帯びること、明らかなへら磨きこそみられないが、全体の精製さ等から、奈良末～平安初期の範囲の中でとらえられ、より8C末の年代が妥当であると考えられる。



第42図 2号溝出土土器(縮尺1/3)

各Pit出土器（第43図）

本遺跡では各住居跡等の柱穴の他にもおびただしい数の小Pitが検出された。そのうち遺物を出土したものは130個に及ぶが、うち時期の判るものは、7割方が歴史時代のものである。そのうち実測に供せられ得るものを図示した。

1は、P.92出土の須恵器杯蓋口縁片である。復元口径11.8cmを測り、小さく短かく屈曲する口縁端につくる。口縁外面は凹状となる。内外面とも回転ナデ調整を施す。胎土精良で、焼成堅緻、灰色を呈する。

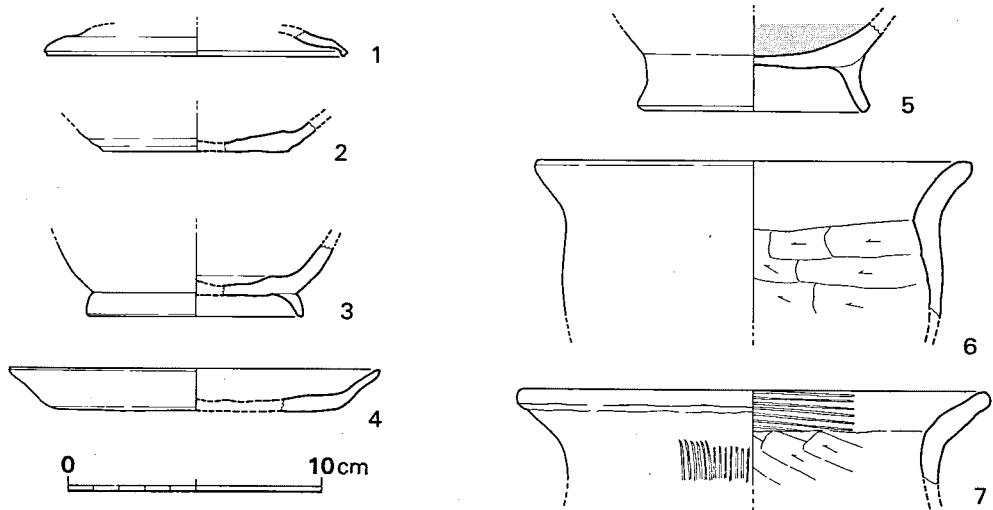
2は、6号住居跡内の柱穴より出土したもので、須恵器杯底部片である。体部内外面とも回転ナデ調整、底部外面は未調整、底部内面はナデツケがみられる。復元底径7.3cmで胎土に細砂粒を少量含む。焼成やや良好で、外底及び内底の一部は茶褐色、他の部分は暗灰色をなす。

3は、土師器高台碗で、P.96出土品である。高台径8.6cmを測り、内湾気味に外方へ張った高台を付け、体部も丸味をもって立ち上がる。内外面磨滅して調整は不明である。胎土に細砂粒・雲母片をかなり含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

4は、土師器皿で、P.108出土品である。復元口径14.6cm、器高1.7cmを測り、体部がかなり外傾するタイプである。内外面磨滅して、調整不明である。胎土は精選されて良好であり、焼成良く、赤茶色を呈する。

5は、内面を黒色に燻した黒色土器Aで、P.97出土品である。高く、外方へ延びる高台を付ける。高台径9.3cmを測り、内外面ともに磨滅著しく、調整不明である。胎土に石英粒かなり含み、焼成良好で、赤茶色を呈する。

6は、土師器小型甕で、P.16出土品である。胴部は僅かに丸く張り、口縁部は外反して肥厚



第43図 各 Pit 出土土器（縮尺1/3）

している。胴部内面は横方向へら削り、口縁内面は横ナデが認められる。外面は磨滅して調整不明である。外面下半には煤が付着する。口径17.3cmの小型品である。

7は、土師器甕口縁片で、5～7号住居跡上面出土品であるが、2と同じく、6号住居跡内柱穴出土と考えられる。復元口径18.8cmを測り、あまり肥厚しない口縁が外反する。胴部内面は、斜め方向のへら削り上げ、外面は粗い縦ハケ調整を行う。口縁内面は、横方向の粗いハケ目を残し、外面はハケの上を横ナデ調整で消す。胎土に砂粒やや多く含み、焼成良好であるが、二次的火熱を受けて、黄褐色の地色がややピンク色に変化している。

以上の各Pit出土土器は、6の奈良期を除いて、他は奈良末～平安初頭の範囲に含まれる。5は若干下降して9C後半以降のものかと考えられる。

ロ) 包含層出土の土器・土製品

須恵器 (第44図)

1は、須恵器杯蓋で、丸くなった口縁下端の内側は浅い沈線状となり、扁平な撮を付ける類である。口径16.0cmを測り、1/2強残存する。撮部周辺は回転ナデ、その外方はへら削り、口縁周縁から内面は回転ナデ調整を施す。内面にはナデツケがみられる。ナデ方向は右廻りである。胎土に粗石英わずかに含み、焼成堅緻で、青灰色をなす。

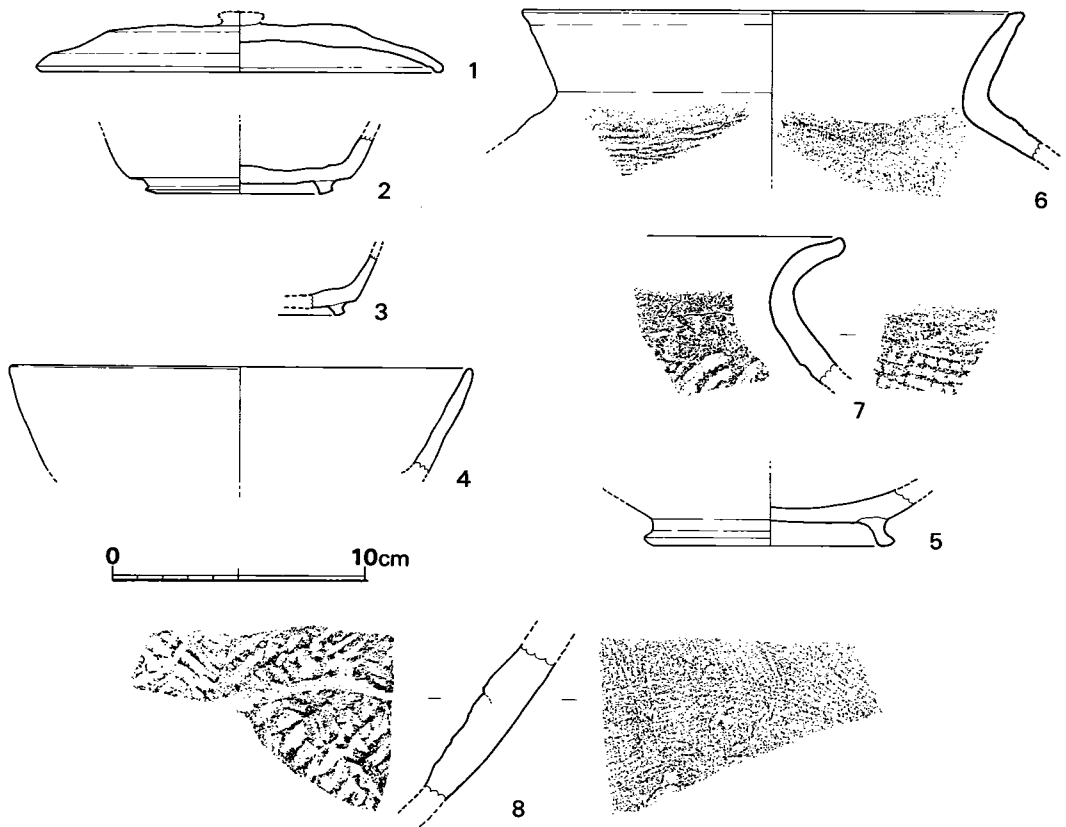
2は、須恵器杯底部片で、低く内端で接地する高台を、体～底部の境目より内側へ入ったところに付ける。高台径7.4cmを測り、体～底部の境はシャープな稜線をなす。体部はあまり外傾せず立ち上がり、内外面とも回転ナデ調整を施し、底部内面はナデツケられる。胎土に細砂若干含み、焼成堅緻で、外面は灰黒色、内面と外底部は、暗灰色をなす。

3は、2とはほぼ同類の須恵器杯底部片である。やや外へ張った低い高台は内下端で接地し、体部と底部の境は角ばった稜をなす。体部内外面は、回転ナデ調整を行い、底部内面にはナデツケがみられる。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成堅く、青灰色をなす。

4は、須恵器大型杯口縁片で、復元口径18.1cmを測る。内外面回転ナデを行い、胎土に細砂粒かなり含み、焼成堅緻で、内面灰色、外面暗灰色をなす。

5は、須恵器壺底部片で、内端で接地し外方へ踏ん張った高台を付ける。高台径9.9cmを測り、内面はナデツケ、外面は回転ナデ調整を行う。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成は堅く、淡青灰色を呈する。

6は、須恵器小型甕、或いは壺で、口縁は直線的に開き、口縁上端面は僅かに内傾した平坦面をなす。口縁から頸部の内外面は、回転ナデが施され、胴部外面は横方向平行条線状叩きを施す。内面はやや大きい青海波あて具痕の上をナデ消す。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成堅



第44図 包含層出土須恵器(縮尺1/3)

緻で、外面灰黒色、内面暗褐色をなす。口径19.8cmを測る。

7は、須恵器甕口縁片であり、胴部から頸部で屈折せずに丸く外反する口縁につくる。口縁端は丸く、内側がややへこむ。頸部内面には僅かに横方向へラ削りが認められ、その後に深く大きい青海波あて具痕がみられる。胴部外面は、正格子目の叩きを施し、口縁内外面は回転ナデ調整を施す。口縁端外面には部分的に暗緑色の自然釉がかかり、外面と口縁内面は灰かぶりで灰色をなす。胎土はわりと精良で、焼成堅く、内面は暗黒色をなす。

8は、須恵器の大甕の底部近くの胴部片である。内面中央に横方向の接合時の溝状シワが走り、器壁が底部方向へ一旦薄くなる。外面は、斜め或いは縦方向の条蓆状叩きの上にカキ目調整を行っている。内面は、粗く短かい平行条線を組み合わせた綾杉状のあて具痕が残る。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成は軟質で、白褐色をなす。

以上の須恵器について見てみると、1は口縁内面が浅い沈線状となっており、既に鳥嘴状口縁からは程遠い形態となっている。9C初頭前後と考えられるが、或いは9C前半あたりまで下降する可能性もある。2・3は4とともに8C後半代を中心とする時期の所産であろう。6

の外面の横方向平行条線状叩き目や、7の正格子目叩きなどは、奈良期以降盛行するものであり、5の底部は奈良後半期の短頸の葉壺の系統の蔵骨器に使用される類のものであろう。8の大甕片の内面あて具痕は、4号住居跡出土の37図-6と共通するものであり、やはり奈良後半～平安初頭ぐらいにおさえて矛盾はないところである。

土師器（第45図）

1は、底外面に墨書をみる土師器杯である。第4図に示す如く、小支石墓の北々西の黒色包含層より出土した。口径15.5cm、器高3.7cm、底径8.3cmを測り、全体に内湾状に丸味を帯びてやや大口径にしては浅い異類の器形をなす。底外面は内から外への左廻りへら削りを行い、体部下端までへら削りを施す。体部外面上半と内面は回転ナデが行われ、内面は横方向の整然としたへら磨きが、暗文状に1条分程ずつ間隔をあけて施される。体部外面下端はへら削りの上に、へらによる放射状の短線が1～2重に刻まれる。更にその上を1～2条のへら磨きが施されている。胎土は精良であるが、雲母片が多く含まれる。焼成良好で、淡茶褐色乃至淡褐色をなす。墨書はやや薄くはなるが、はっきりと読み取れ、行書風に「新家」と書かれている。「家」の上端の点があはつきりしないとする向きもあり、「冢」と読む意見もあったが、再確認検討して点の存在を確認したので付記しておく。

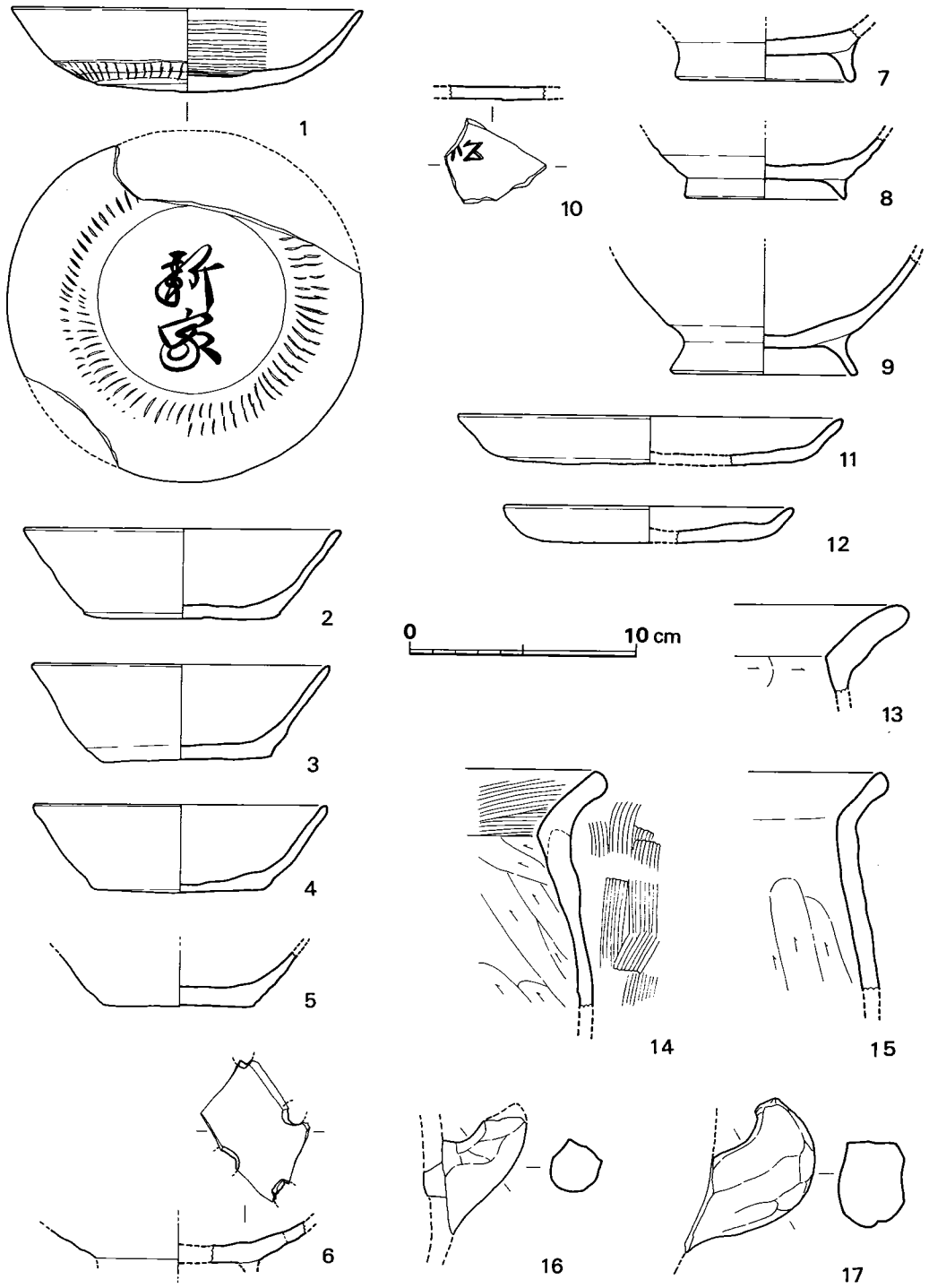
2は、土師器杯で、口径14.0cm、器高4.0cm、底径8.6cmを測り、直線的に開く体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。底部外面はへら切り後ナデしており、体部内外面から底部内面は横ナデが施される。内面ナデツケはみられない。体部は若干凹凸がみられる。胎土は精良で、焼成良好、淡茶色を呈する。

3は、土師器杯で、法量・器形など2・4と同種である。口径13.2cm、器高4.2cm、底径7.4cmを測る。底部外面はへら切離しのままで、板状圧痕はない。体部内外面は全体に磨滅して調整不明である。胎土に粗・細砂粒を若干含み、焼成良好で、茶褐色を呈する。

4は、土師器杯で、口径12.9cm、器高3.9cm、底径7.5cmを測る。体部下半でわずかにふくらみをみせる。底部外面はへら切り離しのままで板状圧痕はみられない。体部内外面は横ナデを行い、底部内面にはナデツケが認められる。胎土に粗石英粒がいくらかみられる。焼成良好で淡茶褐色をなす。

5は、土師器杯底部片で、底径6.5cmを測り、2～4と比べて底径が小さいものである。底部は厚く、外面はへら切り離しのままで、体部外面から内面までは横ナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成良好で、淡赤茶色を呈する。

6は、土師器高台碗に焼成前に何個もの穿孔を施した特異なものである。体部内外面は横ナデ調整を行う。穿孔の扱りは、焼成前にへら状の工具で施し、正円ではなく雑である。或



第 45 圖 包含層出土歷史時代土師器 (縮尺1/3)

いは他種文様の透しの可能性もある。高台を付けており、図上では一応椀状のものとしたが、香炉的なものを考えると、蓋とすべきかもしれない。胎土は極めて精良であり、異質な感じを受け、或いは緑釉がかけられる性格のものであったのかもしれない。焼成は良好で、明橙茶色を呈する。

7は、土師器高台椀の底部片で、底径8.0cmを測る。厚く端部の丸い高台を付ける。全面磨滅して調整不明である。胎土に細砂いくらか含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

8は、土師器高台椀の底部片で、底径7.1cmを測る。断面三角形のやや低い高台を付け、体部は内湾気味に丸味を帯びて開く。高台部周辺から体部内外面には横ナデ調整が施され、底部内面にはナデツケがみられ、底部外面には板状圧痕が残る。胎土精良で、焼成良好、明橙褐色を呈する。

9は、土師器高台椀で、全体に丸味を帯びた杯部に、細く長く、外方へ張る高台を付ける。内外面ともに横ナデ調整を施す。高台径8.3cmを測り、胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で、高台部内面のみ淡灰黒色で他面は明淡茶褐色をなす。

10は、土師器底部片外面に刻書を施した小片である。外面はへら切り離しの上に、板状圧痕がみられる。へらによる深くシャープな刻字があり、字の全体は残らないが、「松」と読めよう。胎土に若干砂粒を含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

11は、土師器皿で、復元口径17.0cm、器高2.1cmを測る。体部はかなり外傾し、口縁端部は丸くおさめる。体部内外面は横ナデ調整で、底部はへら切り後ナデている。胎土は精良で、焼成良好、茶褐色をなす。

12は、土師器小型皿で、復元口径12.8cm、器高1.6cmを測る。浅い扁平な小皿であるが奈良～平安期の皿の形態は示している。器表内外面ともに磨滅しており、胎土に細砂をいくらか含む。焼成良好で、淡茶褐色をなす。

13は、土師器甕口縁片で、肥厚した口縁が外反する。胴内面は横方向へら削り、口縁内外面は横ナデ調整を行なう。胎土に粗砂を多く含み、焼成良好で、外面には煤が付着して、暗褐色をなす。内面は茶褐色を呈する。

14は、土師器甕口縁から胴部片である。やや厚めの口縁は内面に稜をつくり外反する。胴部内面は横から上方への斜めへら削り上げ、外面には粗い縦ハケ調整が施される。口縁内面には、横方向の粗いハケ目がみられ、口縁端内外面は横ナデを行う。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で暗茶褐色を呈する。

15は、土師器甕口縁から胴部片である。肥厚しない口縁は外傾する程度である。胴部下半は、へら削り上げを行い、それ以上から口縁外面までは横ナデ調整を施す。胴部外面は器表の剥落が著しく、調整不明である。胴外面下半には煤が付着する。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で、内面は黄褐色、外面は茶褐色から黒色を呈する。

16は、土師器甕或いは甑の把手部分である。やや小ぶりの類で、へそ状の突起をつくり器壁に挿入するタイプである。表面には強い指ナデ面がみられ、凹凸が著しい。胎土に粗砂多く含み、焼成不良で灰白色乃至黒色をなす。

17は、土師器甕、或いは甑の把手部分で、器壁に貼り付けるタイプである。表面は手捏ね状のまま、胎土に粗砂粒を若干含む。焼成はやや不良で、暗褐色を呈する。

以上の黒色包含層出土の歴史時代土師器について見てみよう。1は、丸味を帯びた大口径の器形や丁寧な器面調整からみて、奈良期中頃～末までの特徴を示し、体部外面下端のへら短線連続刻文は異様であるが、ほぼ8C後半期の年代が与えられよう。2～5は、底外面に板状圧痕が無く、体部が直線的に開き、へら磨きはみられない。5は法量が若干小さくになると思われるが、2・3は、以上の諸点より、奈良末～平安初期の特徴をよく示しており、これらの土師器杯は、8C末～9C前半までの年代が与えられよう。なお、この類の土師器小片は包含層出土歴史時代遺物の中でも量的にも最も多かったことを付記しておく。6は異類で上述したとうりである。10は、底面に板状圧痕があり平安初～前半の範囲でおさえられる。11・12は、9C初頭乃至前半代までのものである。13は古い形態を示し8C中頃以前のもの、14は9C初頭前後までのもの、15は更に年代的に若干下降する可能性をもつ。16は古墳時代の可能性もある。

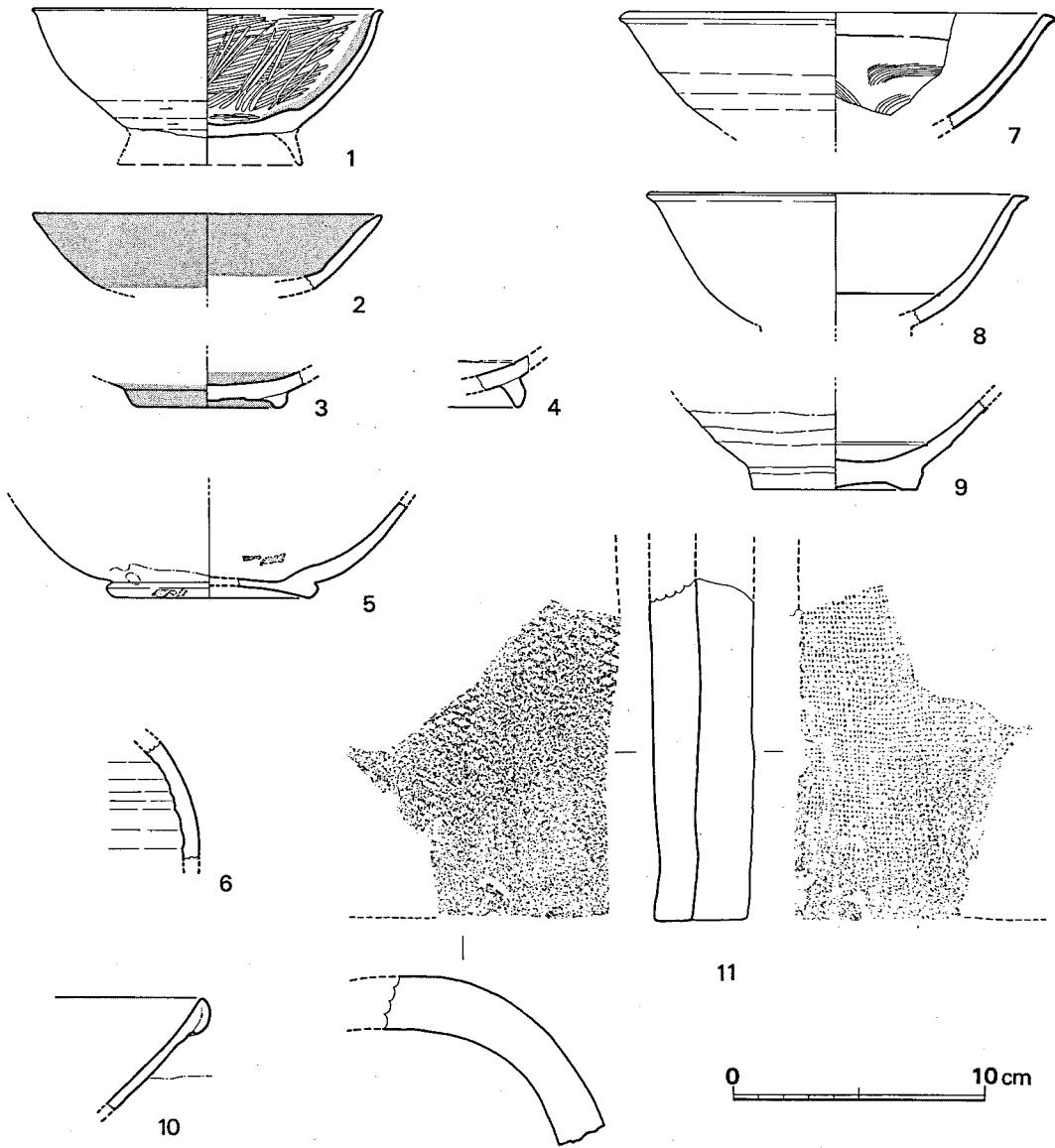
黒色土器・瓦器・緑釉・磁器・瓦（第46図）

1は、黒色土器Aの椀である。薄手のやや丸味をおびた体部の内面に粗い雑な磨きをかける。口縁端部は小さく外反する。口径13.9cmを測り、体部下端にはへら削りがみられる。底部内面の凸状部表面には使用擦れがみられる。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成は良好で、外面は淡茶色をなす。

2は、焼成瓦質の椀で、口径13.9cmを測る。体部下半で屈折して直線的に開く。口縁端外面から内面は黒色をなし、外面灰色で、焼成は瓦質であるが、黒色土器Aとも考えられる。内外面磨減しているので調整は全く判からない。胎土には粗砂粒を殆んど含まずかなり精良である。

3は、瓦器椀底部片で、低く内端で接地する高台を付ける。高台径6.0cmを測り、底部外面に高台接合前の板状圧痕がみられる。高台部周辺は回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成は瓦質で、全面銀黒色をなす。

4は、須恵質の緑釉椀で、高台部分小片である。短かくやや外方へ張った高台を付ける。内面の見込み部分と体部との境に浅い沈線を入れて、体部内面のみ淡緑釉がまだらにかかる。高台部周縁は回転ナデが施される。高台外端にも僅かに部分的に釉がみられる。胎土は精製されており、淡灰色をなす。焼きは須恵質よりも良い。



第 46 図 包含層出土黒色土器・瓦器・緑釉・磁器・瓦 (縮尺1/3)

5は、越州窯系青磁碗で、大宰府分類の碗Ⅱ-2類にあたる。円盤状の上げ底風の底部につくり、体部下端から底外面は露胎となる。内面の釉は光沢を帯びて淡オリーブ色を呈し、外面釉は内面より濃い。露胎部は小豆色に発色する。胎土はやや粗く、灰褐色をなす。内面と底部外端との対応する位置に目土が残るが、全周の数は明らかでない。

6は、越州窯系青磁かと考えられる壺肩部小片である。内面は釉がかからず、ロクロナデに

よる凹凸が著しい。釉は全体に薄く、ややオリブがかかった濁灰緑色を呈する。施釉は上半にやや厚く、下半は光沢を失ない、灰色に近い。胎土はかなり密で灰茶褐色を呈する。

7は、体部内面に櫛描花文を施す白磁碗である。大宰府分類の白磁碗V-4類に相当し、復元口径17.3cmを測り、胎土は密で、灰白色をなす。釉は淡いオリブがかっている。

8は、無文の白磁碗で、見込みに浅い沈線をめぐらせる。大宰府分類の白磁碗V-3a類に属する。胎土は密で、乳白色をなし、釉はやや青灰色をおびている。口径15.1cmを測る。

9は、厚い底部を浅く削り込んだ白磁碗底部片である。見込みに沈線をめぐらせ、大宰府分類の白磁碗IV-1類に相当し、玉縁状の口縁につくるタイプである。外面下半は露胎となる。胎土は気泡が多く乳灰色を呈する。釉は淡くオリブ色がかかる。底径6.1cmを測る。

10は、玉縁口縁の白磁碗片である。外面下半には施釉しない。胎土は密で、乳灰白色をなし、釉は淡くオリブ色がかかる。

11は、丸瓦片で、表にはやや目の細かい斜格子叩きを施す。内面は目の粗い布目圧痕がみられる。側端面は、内面からヘラで切り込みを浅く入れてのち、割って分割している。小口端面はヘラで切る。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成は須恵質に近く、暗灰色を呈する。

ハ) 小 結

以上、本遺跡出土の歴史時代土器類を詳述してきたが、各々の遺物の年代については記した如くである。これらを大まかにつかむと、大略4期に区分できる。即ち

- I期 8C後半代 (27号住居跡・包含層遺物)
- II期 8C末～9C初頭(4号住居跡・1号溝・2号溝)
- III期 9C前葉前後 (1・2号掘立柱建物・包含層遺物)
- IV期 9C後半以降12C代まで (包含層遺物)

である。このうちI～III期は既に各遺構・遺物の項で詳述したとおりであり、IV期は、包含層遺物中にわずかにみられるのみで、遺構は検出していない。また、図示の有無を問わず、全遺物からみた場合、II期とIII期が圧倒的に多い。ことに、III期の土師器杯小片は接合しないため図示し得なかったが、かなりの量にのぼる。これは各期遺構との有機的結びつきを如実に示す所以であろう。住居跡・掘立柱建物に伴わない多数の小Pitも、圧倒的に歴史時代遺物を出土するものが多かった。

越州窯系青磁や緑釉片の出土も、単なる当該期の集落跡と言ってすますには看過出来ないものがある。北部九州域で、近年集落跡等で稀に越州窯系磁器が出土する例も知られるようになったが、それらの集落跡の性格の検討は別にしても、依然としてその殆んどが官衙跡・寺院跡・蔵骨器等、特殊な遺跡に集中することには変わりない。本遺跡でも、本項で述べた他にも

後項で記す如く、農道を挟んで東側の字堤田のトレンチからも出土しており、これは全く同一遺跡と考えて良い部分である。このように、国府或いはそれと直結したような官衙の未確認である地に、当時の貴重品であった磁器を所有し得た階層は如何なる人々であったろうか。2×5間を2棟並べた屋敷の主の入手し得る力の程を如実に示すところであろう。

墨書土器や刻字土器片の出土も問題となろう。奈良期或いは平安初期において字を書き得る性格の階層の存在をも認めねばなるまい。墨書「新家」については、意味は明らかではないが、或いは「本家」が近辺の他所にあって、それに対しての「新家」が本遺跡に存在したものかとも想像される。

瓦片の出土については、既に遺構の項で述べた通りであり、当地域での今後の近隣古代寺院の調査研究が進んで、比較検討出来るようになる日を心待ちする次第である。

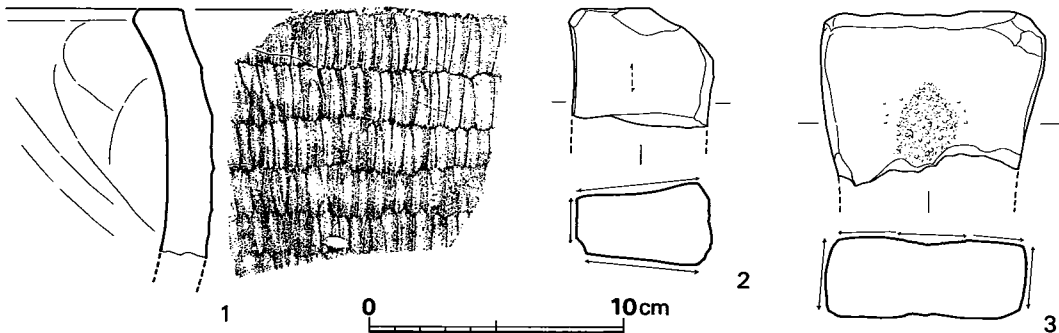
土師器の杯・或いは黒色土器について、細部において大宰府近辺の様相と異なる点を、いくつか指摘した。最近、糸島地域での調査例も少しづつ増えてはいるが、当域における特殊性についてはあまりにも不明瞭な部分が多い。此種遺物の編年を後日期することとして、今回は各遺物の項において指摘した限りに止めたい。

b. 石製品

各遺構出土石製品（第47図）

1は、滑石製石鍋口縁片で、P.88出土品である。胴部は内湾し、口縁上端は平坦面につくる。外面はノミによる整形痕をそのまま残す。内面は加工痕わずかに残るが、全体に磨いて調整する。外面は煤が付着する。

2は、1号溝出土の砥石である。現存長4.5cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmを測る。砂岩製の粗砥である。表・裏面と左側面が使用されている。表面は中央部がへこみ、左側面も中央寄りに擦り減っている。



第47図 各遺構出土石製品（縮尺1/3）

3は、P.121出土の砥石である。表面の中央部が叩打使用により凹状となる。砂岩製の粗砥である。現存長7.0cm、幅8.8cm、厚さ3.2cmを測る。両側面は凸状の磨面となり、砥石として全体にかなり使用した後、叩打具として転用し、折損したものと考えられる。

包含層出土滑石製石鍋（第48図）

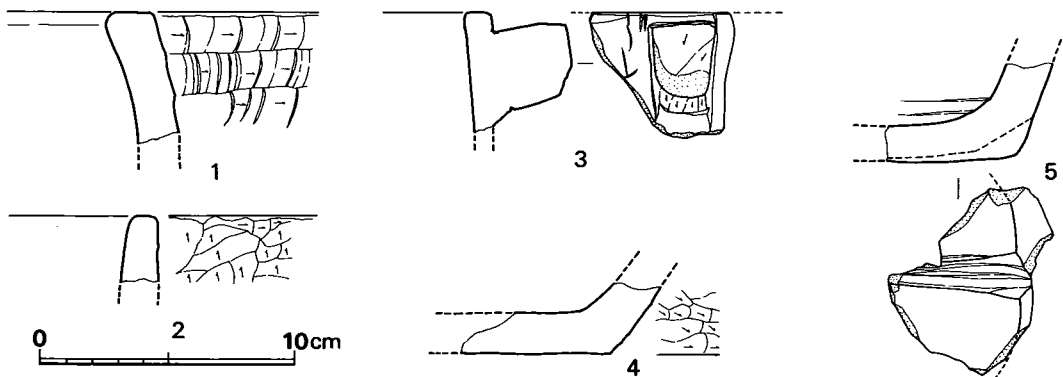
1は、口縁部小片で、第47図-1と同類であり、同様のノミ調整痕を残す。口縁上面は平坦面をなし、口縁から内面は丁寧に研磨する。外面には煤が付着する。

2は、1に比べてやや薄手の口縁片で、外面調整も雑な方向のノミ痕を残す。口縁上面から内面は丁寧に研磨しており、外面には煤が付着する。

3は、短かい角柱状の把手部の付いた口縁片である。器壁は薄手であり、把手部右側面及びその右側の割れている面は二次的に削っており、側面は内側から意図的に切り割った痕跡がみられる。全体に煤が付着しており、二次的に加工しようとした痕跡が各所にみられる。

4は、底部片で、底外面は一方向への削りのままで、胴外面は細かいノミ調整の痕跡がみられる。内面はいくらか丁寧な研磨が施されている。外面は煤がこびりつき、内面も黒色変している。

5は、底部片であるが、底外面の中央にV字状の深い溝を二次的に入れて、切り割ろうとしたものである。加工の容易な滑石製品破片を二次的に加工して小品を作製することはかなり後代まで続くところである。

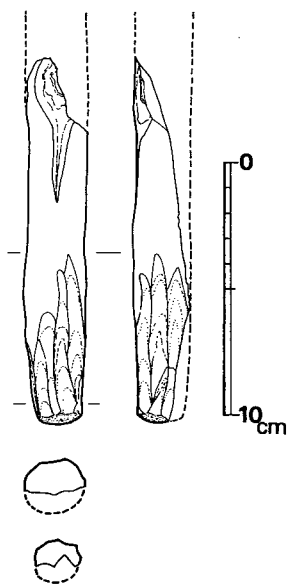


第 48 図 包含層出土滑石製石鍋（縮尺1/3）

c. その他

木製品（第49図）

1号井戸から出土した木製品である。直径2.3cm前後の、天然枝の一端を削ぎ落しただけのものである。端部をかなりこすっている。上方に小枝を削ぎ落した痕跡も認められる。先端の一部分にこげた部分もみられる。図示したものの他に、同一個体片と考えられる同じ程度の長さの破片が3本ある。これらをあわせると、計50cm弱の棒状の製品となる。一説にスリコギとの意見もあるが、明確に出来ない。



第 49 図 1号井戸出土木器
(縮尺1/3)

2) 古墳時代の遺物

a. 土 器

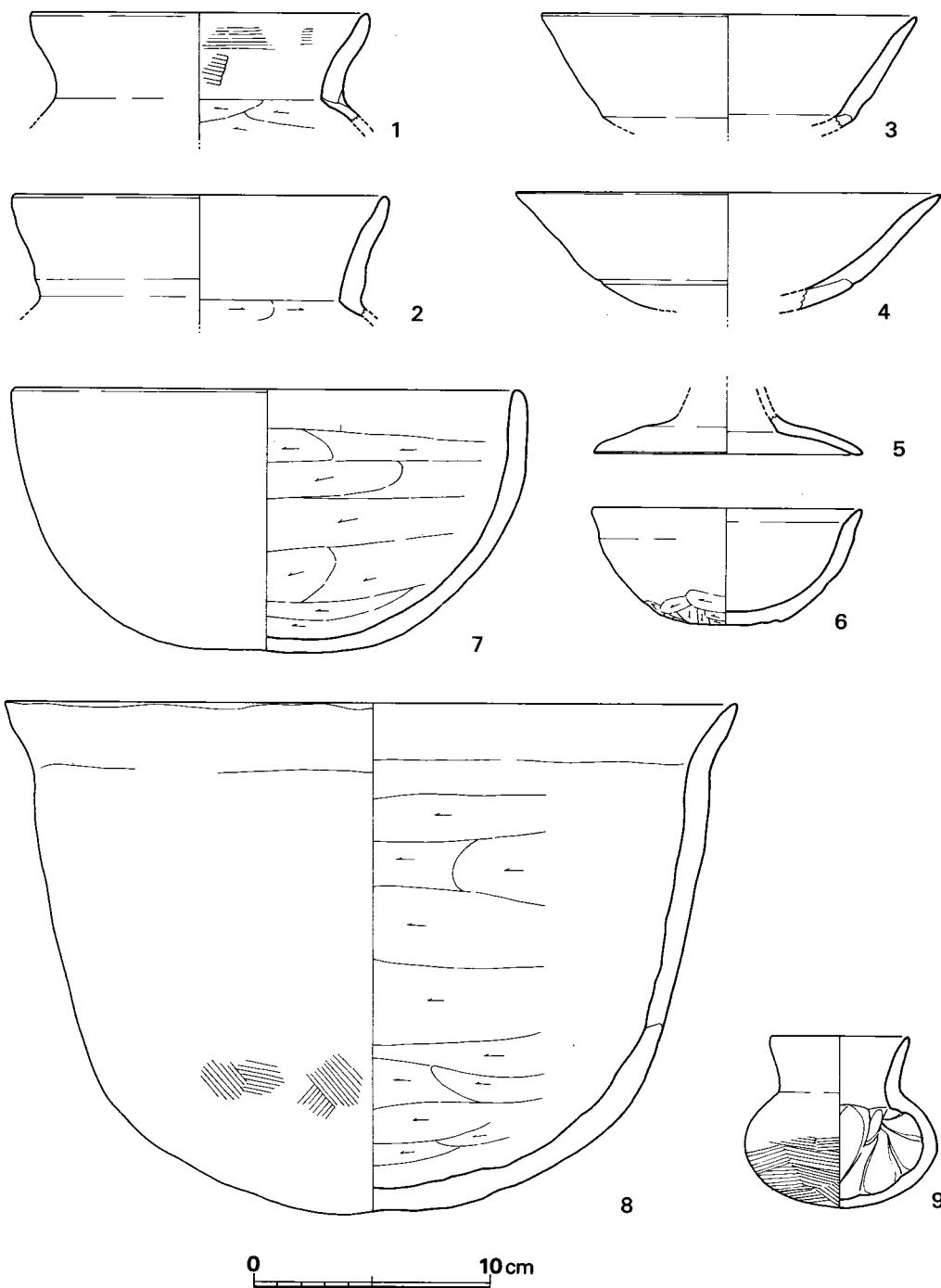
北東隅土師穴出土土器（第50図）

1は、甕口縁部片で、口径14.5cmを測る。頸部内面に稜をつくり、外反する口縁につくるが、それほど外傾しない。口縁上半内面はややへこむ。口縁内面は横方向ハケ目の上をナデ消しており、胴部内面は横方向のへら削り、外面は横ナデ調整が施される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、暗茶褐色を呈する。

2は、それ程外傾しない甕口縁片で、復元口径16.0cmを測る。口縁外面下半部が中ぶくらみしており、口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内外面は横ナデ調整を施し、胴部内面は横方向へのへら削りを行う。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で、外面は暗褐色、内面は茶褐色をなす。

3は、体部下半で屈折する高杯杯部片で、口径15.8cmを測る。器表は磨滅しており、調整法は不明である。体部下半の屈折は、わりと明瞭であり、段をなす。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

4は、3に比べてより大きく開き、体部下半の接合部での段は、沈線となる高杯杯部片であ



第 50 图 北東隅土師穴出土土師器 (縮尺1/3)

る。下半は全体に丸味を帯びて、口縁へのびやかに開き、口縁端部でわずかに更に開く。体部外面下半は横へら磨き調整を施し、他面も磨滅するがへら磨きを施していると考えられる。口径18.0cmを測り、胎土に細砂粒をかなり含み、焼成は良好で、茶褐色をなす。

5は、薄手の高杯脚端部片である。脚端径11.4cmを測り、途中で内面に稜をつくり屈折して更に大きく開いている。胎土は精選されて良好であり、焼成良く、明茶褐色をなす。内外面ともに磨滅して、調整は不明である。全体に薄手の精製品である。

6は、小型の鉢乃至碗であり、口径11.5cm、器高5.0cmを測る。口縁内外面は横ナデを施し、内面に稜をつくり、外面をへこませて小さく外反させている。底部外面は手持ちの各方向へのへら削りが施され、内面は丁寧なナデ調整が行われる。胎土に細砂粒多く含み、焼成良好で、内面暗赤茶色、外面は赤茶色から黒色を呈する。

7は、ボール状の鉢の形態をとる。全体に半球形をなし、内面は横方向へら削り、口縁内外面は横ナデ調整を行う。胴部外面はかなり剥落しており調整は不明である。ほぼ完形で、口径21.9cm、器高11.3cmを測る。外面の口縁直下から胴上半には、全周に煤が付着しており、底外面は二次火熱を受けて赤変している。明らかに煮沸に供されたものである。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で、内面は茶褐色をなす。

8は、甕或いは鉢とも呼べるもので、口縁部がわずかに開き、口径の大きいタイプである。口径31.3cm、器高21.9cmを測る。胴部内面は横方向のへら削りを行い、外面は、下半にハケ目がわずかに残るが、全面ナデている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で内面は茶褐色をなす。外面は二次的の火熱を受けて赤茶～淡褐色変しており、煤も多く付着し、煮沸容器であることが判る。

9は、口縁部がやや外傾する程度の、小型丸底壺である。口径5.8cm、器高7.3cm、胴最大径8.1cmを測る小型品である。胴部はやや扁平で、外面下半には雑な横ハケを施している。内面は指のオサエナデ上げのままである。口縁内外面と胴上半は横ナデ調整を行う。胎土に粗砂いくらか含み、焼成良好で赤茶色から黒色をなす。

以上の北東隅土師穴出土土師器は、1・2の甕口縁は、既に外反度があまり強くなる。強いて酷似するものを探すと、「5C後葉に近い中葉期」とされる夜須町八ヶ坪遺跡第2号住居跡(註1)出土品がある。3は5C前半代の特徴を強く有して、他遺物の年代と差異を感じず。4・5は5C中葉前後、6も底部外面の削りや、口縁端の外反の特徴が出始めていることから、5C中頃に近い後半代までのものと考えられ、9もほぼ矛盾のないところである。よって、以上の土器群は大旨5C後葉に近い中葉期に位置付けられよう。ただ、7・8は、前述の如く煮沸容器と考えられ、該期における例を知らない。また、奈良～平安初期を中心とした歴史時代のものかとも考えたが、器形的にもびったりする例を見出せない。やはり、ここでは5C代の他遺物と伴したということを重視して、一応その時期のものと考えておく。

註1 中間「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告―八ヶ坪遺跡―」 福岡県教育委員会 1982

35号住居跡内柱穴出土土師器（第51図）

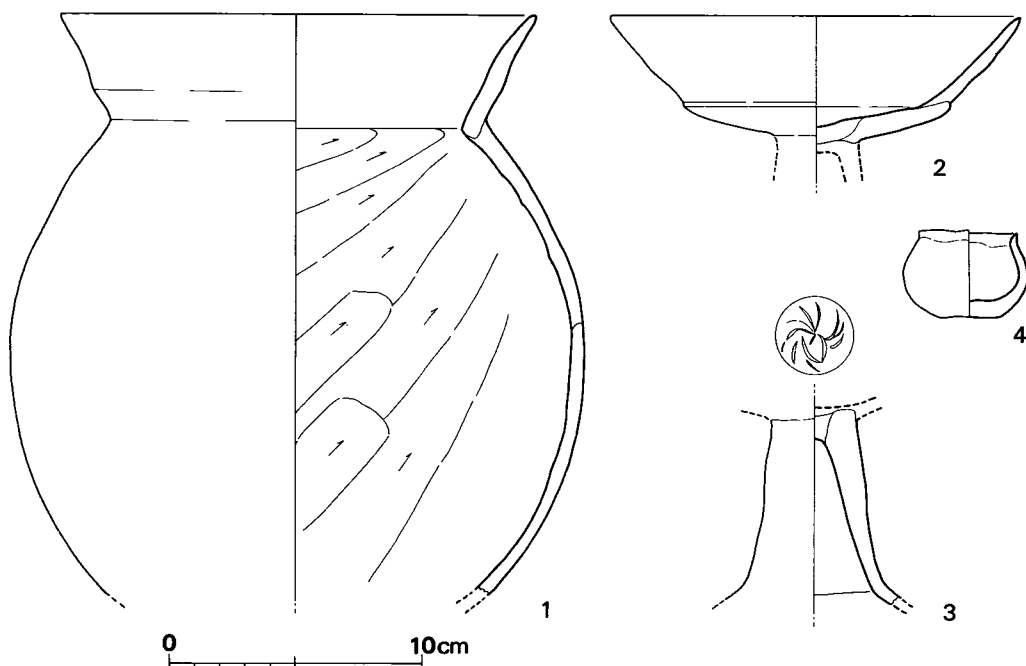
1は、球形に近い胴部に、外反する口縁を付ける土師器甕で、口径18.6cm、胴最大径22.4cmを測る。口縁外面途中で中ふくらみし、胴部内面は斜めのへら削り上げを行う。口縁内外面から胴部外面上端までは横ナデ調整を、以下胴部外面は丁寧なナデを施す。胴部外面上半までは、二次火熱で赤変しており、口縁外面には煤が付着する。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成は良好で、淡茶色をなす。全体に薄手で精製品である。

2は、体部下半で屈折して段をつくる類の高杯杯部である。口径16.2cmで、体部途中で中ふくらみする。脚部との接合面がそのまま残る。内面は磨滅するが、外面は横へら磨きを施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、茶橙色を呈する。

3は、高杯脚部であり、短い脚柱途中で僅かにふくらむ。脚端近くで内面に稜をつくり屈折し更に開く。外面はナデ、内面は横ナデ調整を施し、上端面には接合のための、へらによる沈線がみられる。胎土に細砂粒多く含み、焼成良く、明茶色を呈する。

4は、ミニチュアで、口径3.9cm、器高3.5cm、胴部最大径4.9cmを測る。口縁は小さく外反し、底部はやや平底状となる。全体にナデしており、わりと精製である。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、明茶褐色をなす。

以上の35号住居跡内柱穴出土土師器は、全体として布留期の特徴を諸点に未だ残しており、



第 51 図 35号住居跡内柱穴出土土師器（縮尺1/3）

前項の北東隅土師穴出土品と比べて、甕・高杯ともに確実に古式であり、5 C 初頭前後の年代が与えられる。

包含層出土土師器（第52図）

1は、口縁がわずかに開く甕乃至鉢状の器形で、頸部外面に段をつくる。胴内面は横方向のヘラ削りを施し、外面は磨滅するが下半にハケ目が残る。口径25cm前後程と推定され、外面下半には煤が付着する。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は明茶褐色、外面は二次火熱を受けて上半は赤変する。奈良末～平安初期のものかとも考えたが、北東隅土師穴の例（第50図）もあり、一応5 C 代のものとしておく。

2は、全体に薄手で口縁が外反する鉢乃至椀である。口径13.3cmを測り、口縁内外面は横ナデ、体部内面は横方向のヘラ削り、外面は丁寧なナデが施される。胎土に細砂粒若干含むが、わりと精良である。焼成良好で明茶褐色をなす。

3は、全体に薄手で大きく開く椀である。口径12.0cm、器高4.6cmを測る。全面磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成良く赤茶褐色をなす。

4は、体部が丸味を帯び口縁で僅かに外反する椀である。口径11.1cm、器高4.7cmを測り、底部内面は雑な削りの上をナデており、それ以上と口縁内外面は横ナデ調整を施す。胎土に粗砂いくらか含み、焼成良好で内面茶褐色、外面は淡茶乃至黒褐色をなす。

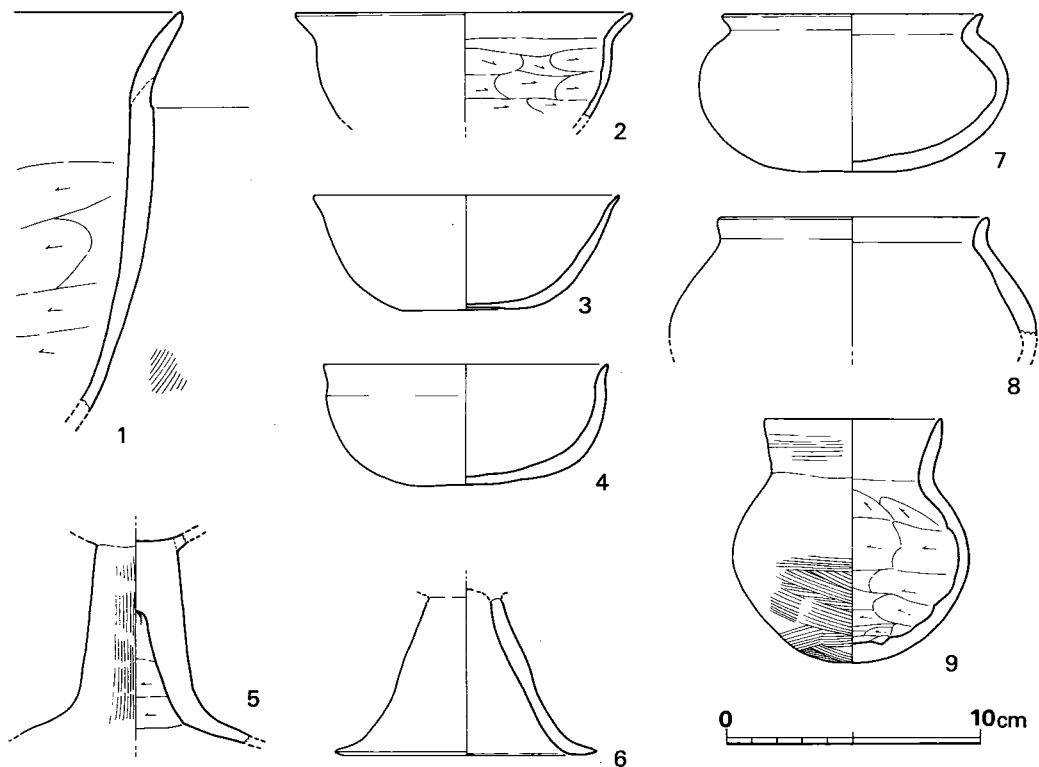
5は、短いが中途まで充実した高杯脚部で、脚柱中途でわずかにエンタシス状を呈する。脚柱内面は横方向のヘラ削りがみられ、外面には縦ハケを施す。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成良好で内外面淡白褐色をなす。年代的に他例よりかなり古く溯るものであろう。

6は、薄手で、脚柱基部から大きく開く類の高杯脚部である。脚端径10.3cmを測り、端部近くで短く更に拡がる。脚柱中途でわずかにふくらみをみせる。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で茶褐色をなす。器表は磨滅して調整は不明である。

7は、短く外反する口縁に扁平な胴部を付ける。口径10.2cm、器高6.2cm、胴最大径12.2cmを測る。器表は磨滅して調整不明である。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で、淡茶色から茶褐色を呈する。

8は、7のやや大ぶりのものであるが、肩に張りがなく、算盤玉的な形状に近くなるかと思われる。口径10.7cm、胴最大径14.5cmを測り、器表磨滅して、調整は明らかでない。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で明茶褐色をなす。

9は、僅かに外傾する直口の小型丸底壺である。口径7.0cm、器高9.7cm、胴最大径9.3cmを測る。小さな不安定な底部をつくり、胴部内面はヘラ削り、口縁内面から外面上端は横ナデ、口縁外面から胴部外面上半までは横ハケの上をナデ消している。胴下半から底部は細かい横ハケ



第 52 図 包含層出土古墳時代土師器 (縮尺1/3)

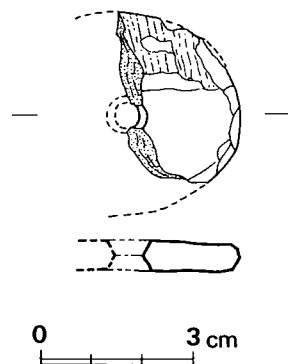
を施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、外面は茶色から黒色（下底面）、内面は淡褐色から暗褐色を呈する。

以上の包含層出土品も含めての各柱穴出土の古墳時代土師器は、5 C 中頃前後を中心とした遺物が圧倒的であり、遺跡周辺、及び後世の整地によって削平された可能性を含めて、住居跡等の遺構が存在したことを暗示している。ただ遺物全体の量からみるとかなり少なく、大集落ではなく 1～2 軒程度の存在が推定される。

b. 石製品

滑石製紡錘車 (第53図)

半分以上を破損したもので、現状では扁平になっているが、本来古墳時代通有の如く断面が台形をなした厚手のものであったろうと考えられる。それが節理方向に従って扁平に割れ



第 53 図 滑石製紡錘車 (縮尺2/3)

た後、二次的に周縁及び表裏面を加工している。そのために正円ではなくやや歪つになる。1号住居跡内小Pitからの出土品であるが、以上のような検討から、土師穴が近くにあることも考慮に入れて、一応古墳時代のものとしてここで取り上げた。

3) 弥生時代の遺物

a. 土器・土製品

イ) 遺構に伴う土器・土製品

1号住居跡出土土器(第54図)

1は、口縁端に刻目を有しない如意形口縁の甕片で、口縁外面を肥厚させる。この肥厚部は図示した程でもない部分もある。内外面ともに磨滅するが、外面には縦ハケ調整が僅かにみられる。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶色をなす。

2は、口縁外反のややきつく長い如意形口縁の甕片である。口縁内外面は横ナデ調整を施し、胴部外面は、縦ハケの上をナデ消している。口唇部には刻目を施さない。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成良好で、内面は赤茶色、外面は暗茶色を呈する。口縁内面上半から外面には煤が付着する。

3は、口縁上端面がわずかに凹状となり、反転度の弱い如意形口縁甕片である。口縁部には刻目はみられない。器表磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、外面赤茶色から暗褐色をなし、内面は淡茶色から淡褐色を呈する。

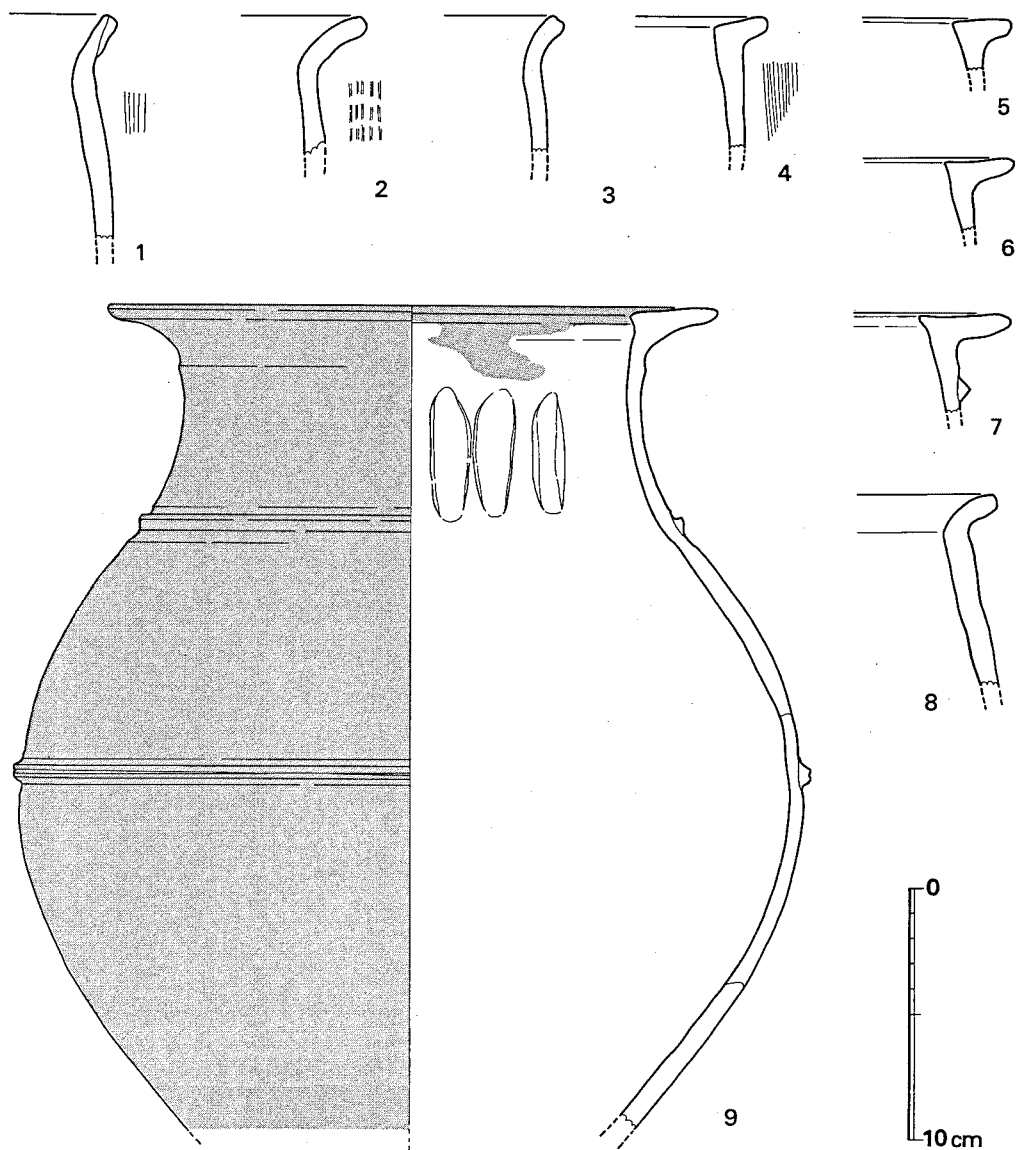
4は、短く屈折して寸詰りの口縁をつくる甕小片である。未だ逆L字状口縁にはなっておらず、口縁上面はいくらか内側へ傾斜する。口縁内外面は横ナデ、胴外面には縦ハケ調整を施す。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で赤茶褐色をなす。

5は、未だ寸詰りの逆L字口縁になりかけタイプの甕小片である。内外面横ナデ調整を行う。胎土に粗砂多く含み、焼成やや良く、暗褐色をなす。

6は、口縁内端がそれ程突出しない逆L字口縁甕片である。口縁上面はややへこみ、僅かに内傾する。器表は磨滅して調整は不明である。胎土に粗石英・細砂粒をかなり含み、焼成良好で、外面は茶色から暗褐色をなし、内面は淡茶褐色を呈する。

7は、口縁内端が突出し、外面口縁直下に断面三角凸帯を付ける逆L字口縁甕片である。内外面横ナデ調整を施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、暗茶褐色をなす。

8は、前期的傾向を強く有する壺口縁片である。未だ上方へしまる頸部につくり、口縁は短



第 54 図 1号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）

く外反する。頸部内面は丁寧なナデ，外面はへら磨き調整かと考えられる。胎土に細砂粒をかなり含み，焼成良好で淡茶褐色をなす。

9は，内端があまり突出しない鋤先口縁の丹塗り壺である。口径24.0cm，胴部最大径32.4cmを測り，頸部は全体からみて短く，上方へ締まり，胴部は球形に近く，下半でややのびて，底部へすぼまる。頸部下端の凸帯は，断面が細い台形状をなすが，三角凸帯状を呈する部分もある。胴中央の凸帯は，典型的な口唇状凸帯ではなく，コの字状凸帯上面に，浅い沈線を入れた

ものである。口縁内端は、図示したものより、ごく僅かにしか突出しない部分もみられる。口縁内外面は横ナデ、胴部内面は丁寧なナデが施される。頸部内面には指頭によるオサエナデ上げ痕がみられる。丹塗りは全体にわずかしが残らないが、内面は口縁下・頸部上端位まで施している。胴部上半の中央凸帯の上位と、頸部下端凸帯の上下部分の対称となる位置に各一個所黒斑部がみられる。胎土はかなり精選されているが、粗砂粒をいくらか含む。焼成良好で、淡茶褐色をなす。口縁上面のやや外端部寄りの位置に細長い靱圧痕がみられる。長さ6.0mm、幅1.8mmのもので麦かと考えられる。

以上の1号住居跡出土遺物は、大きく2時期に分類されよう。1～5と8は、中期初頭に、6・7・9は、中期前葉に比定出来る。細かくみると、1～3の如意形口縁のものと8の壺は明らかに前期の特徴を持続しており、4・5は逆L字口縁への転換の原初形態を示している。7は、6・9と比べて、より中期中葉に近く新しい器形を示す。9は、口縁の形態、頸が短く上方へすぼまること、胴部がやや長丸い点など、中期前葉でも中葉の方ではなく、より初頭に近い特徴を示している。このような各遺物の年代観から、1号住居跡の営まれた時期はより新しい段階のものをもって、中期前葉の範囲の中に年代を求めることが妥当である。

1号住居跡内3号Pit出土土器（第55図）

1号住居跡の南端寄りに、住居跡壁及び周壁溝を切ってPitが検出され、土器がいくらか出土した。種々に検討したが、1・9・5号の各住居跡のいずれにも属する確証が得られず、一応別にしてとりあげる事にした。

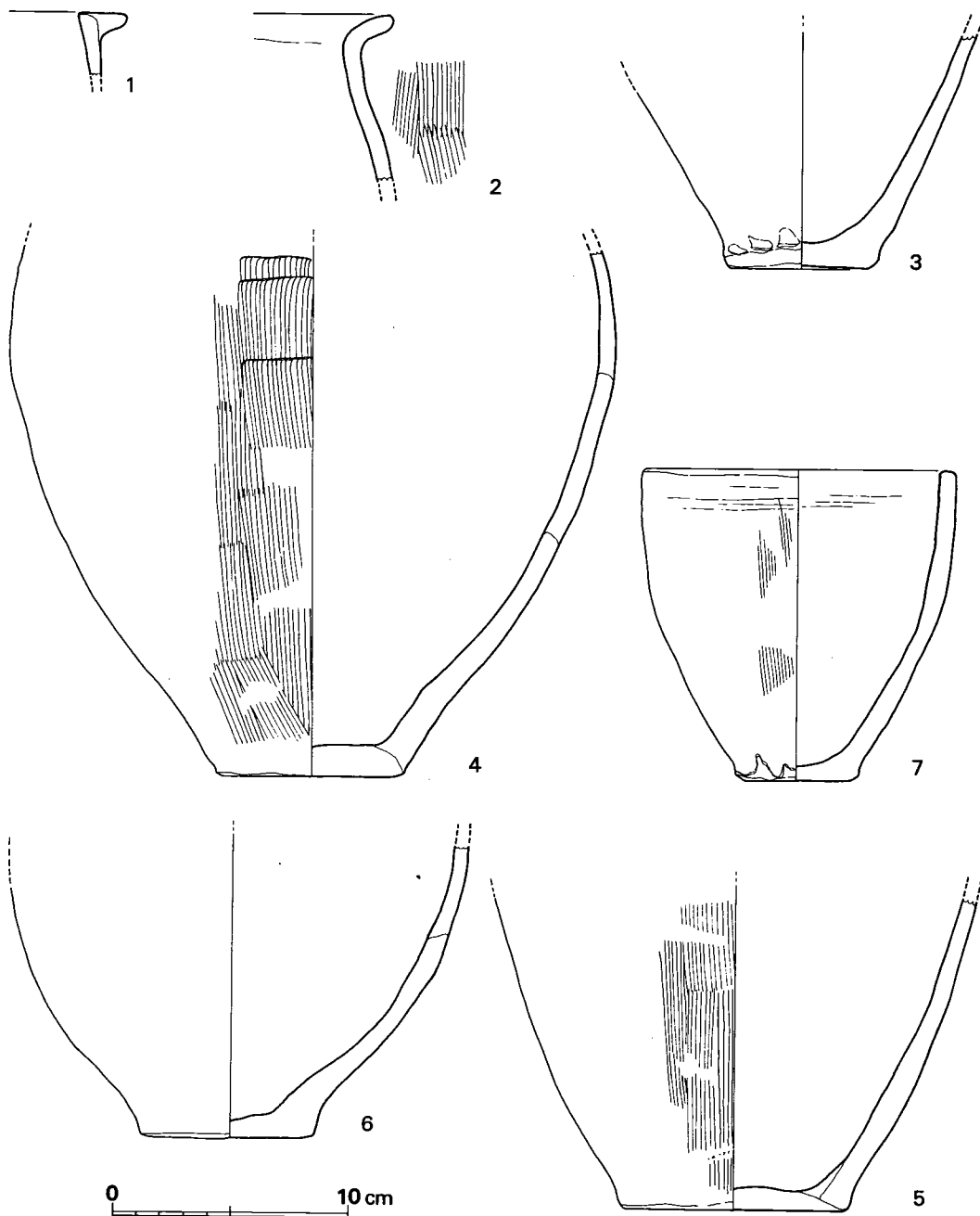
1は、未だ短い逆L字口縁の甕小片である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、橙褐色を呈する。

2は、口縁がかなり強く外反し、胴の張るタイプの甕口縁である。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はわりと丁寧なナデ、胴部外面は縦ハケ調整が施される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で肌色をなす。外面下端には煤が付着する。

3は、甕底部で、極くわずかな上げ底となる。底径6.5cmを測り、胴外面は縦ハケの上をきれいにナデ消している。内面はナデしており、内底面には炭化物が付着して黒褐色変する。外面下端部には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面淡茶褐色、内面は淡褐色から黒褐色を呈する。

4は、胴上半で張り、下半に長くすぼまる甕胴部から底部である。胴部最大径25.5cm、底径7.9cmを測る。胴部外面は縦ハケ調整を行い、下半は部分的にナデ消す。内面はナデしており、胎土に粗砂粒多く含む。焼成良く、内面は肌色、外面は煤付着して、更に下半は二次火熱を受けて赤変部もあり、淡褐色から暗褐色をなす。

5は、平底の薄手の底部につくる甕下半部である。外面はやや粗い縦ハケが施され、内面はナデている。底径9.7cmとやや広く、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は暗褐色から黒褐色をなす。外面は淡い茶褐色を呈する。



第 55 図 1号住居跡内 3号Pit出土弥生土器 (縮尺1/3)

6は、壺下半部で、底面は僅かに凸レンズ状になる。底径7.3cm、胴部最大径19.6cm程となり、器表は剥落しており調整不明である。外面には僅かに化粧土がかけられた部分が残る。外面下半の底部際に1箇所のみ黒斑部がみられる。胎土には粗砂粒を多く含み、焼成良く、淡褐色から茶褐色を呈する。

7は、やや細身の鉢の形態をなし、口径13.4cm、器高13.3cm、底径5.2cmを測る。口縁寄りの内外面は粗い横ナデが施され、横方向の擦痕が残る。胴内面はナデており、外面は縦ハケの上をかなりナデ消している。胎土に粗砂かなり含み、焼成やや良好で、外面は淡茶色から灰黒色、内面は淡茶褐色を呈する。

以上の1号住居跡内3号Pit出土土器の年代について見よう。1の中期初頭に近い前葉の混入品を除いて、他は底～胴部が多く、確定は難しいところであるが、甕は胴上半が張り、底部は薄手で未だ平底のままである。ただ6の壺では底面部が丸味を帯びてきている。2の口縁などと併考して、全体に弥生後期中頃の年代が与えられよう。

2号住居跡出土土器（第56・57図）

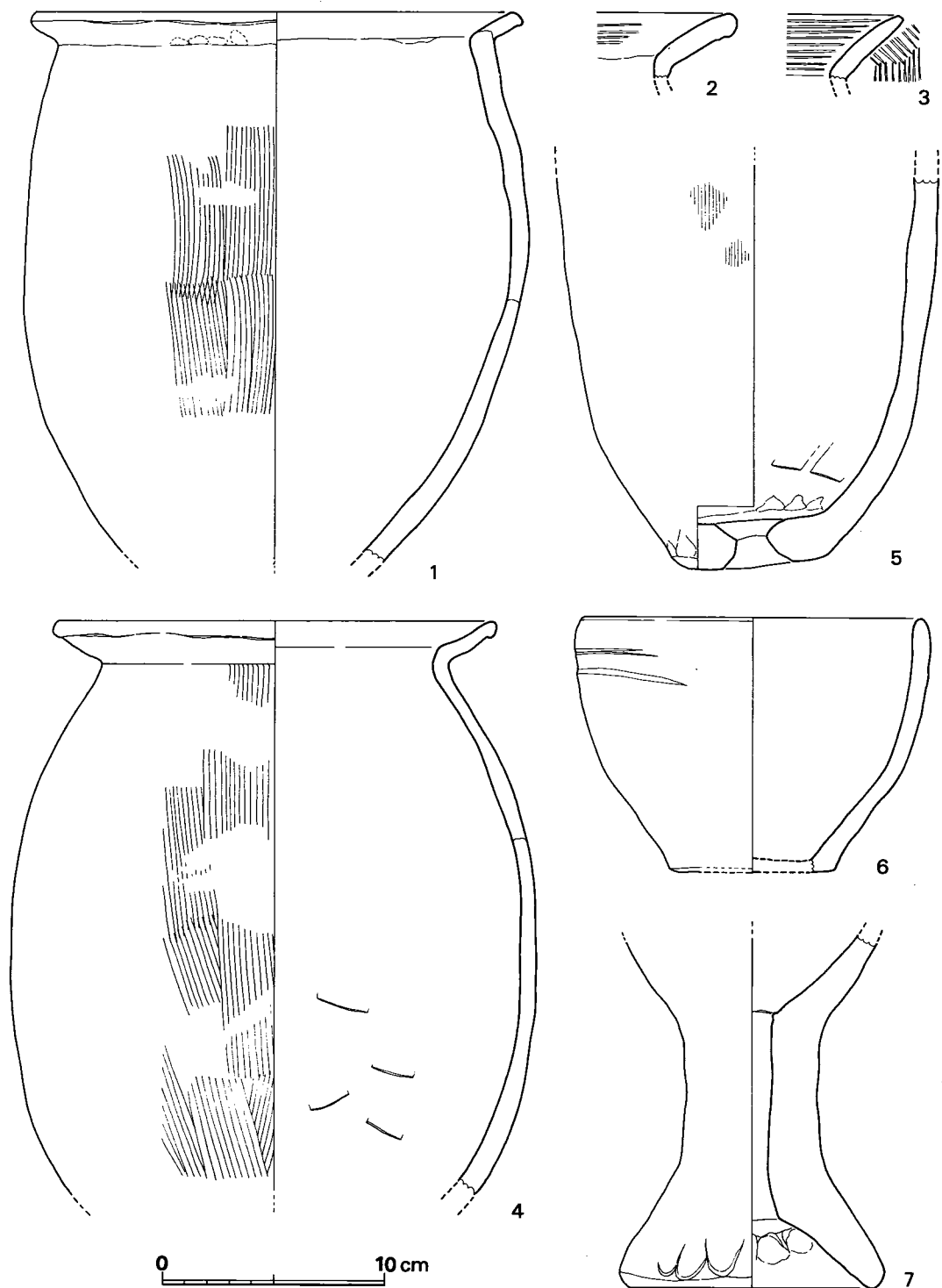
1は、口縁が短く屈折して外反し、胴の張る甕である。口径22.0cm、胴最大径22.5cmを測る。口縁端部は下端にはみ出す部分もある。口縁外面には指オサエがみられる。口縁部内外面は横ナデ、胴部内面上半は粗い横ナデ、下半はナデ調整、外面は粗い縦ハケを行い、上端と下半部はナデ消している。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成良好で、内面淡茶褐色、外面は煤が付着して黒褐色から暗褐色をなす。

2は、強く開くやや長い甕口縁片である。端部は丸く、口縁内面には横ハケが残る。化粧土が僅かに残る。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で淡黄茶色をなす。

3は、屈折して直線的に開く甕口縁片である。口縁内外面は粗いハケが施される。端部はわりとシャープに面がとられ、胎土に粗石英粒をいくらか含む。焼成良好で、外面は煤が付着して黒暗褐色をなし、内面は淡褐色を呈する。

4は、頸部内面が丸く屈折して開いた口縁につくり、胴部は張る。口縁中央が、内面はへこみ、外面は中ぶくらみする。口縁外端部は丸く下方へはみ出す。口縁内外面と頸部内面は横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケを施す。胴部内面は下半にハケ工具端圧痕がみられるが全体にナデている。口径19.9cm、胴最大径23.5cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成良好で、明茶褐色をなす。外面下半に煤が若干付着する。

5は、部厚い器壁のひょうろ長い胴部下半で、底部に焼成後の穿孔がみられる。全体に歪つて異様な感じを受け、底部は凸レンズ状になる。外面は縦ハケがごく僅かに残る。外面下端、底内面には指オサエ痕がみられる。胴内面はハケ工具端圧痕が残るが、全体に粗くナデている。



第 56 図 2号住居跡出土弥生土器（その1）（縮尺1/3）

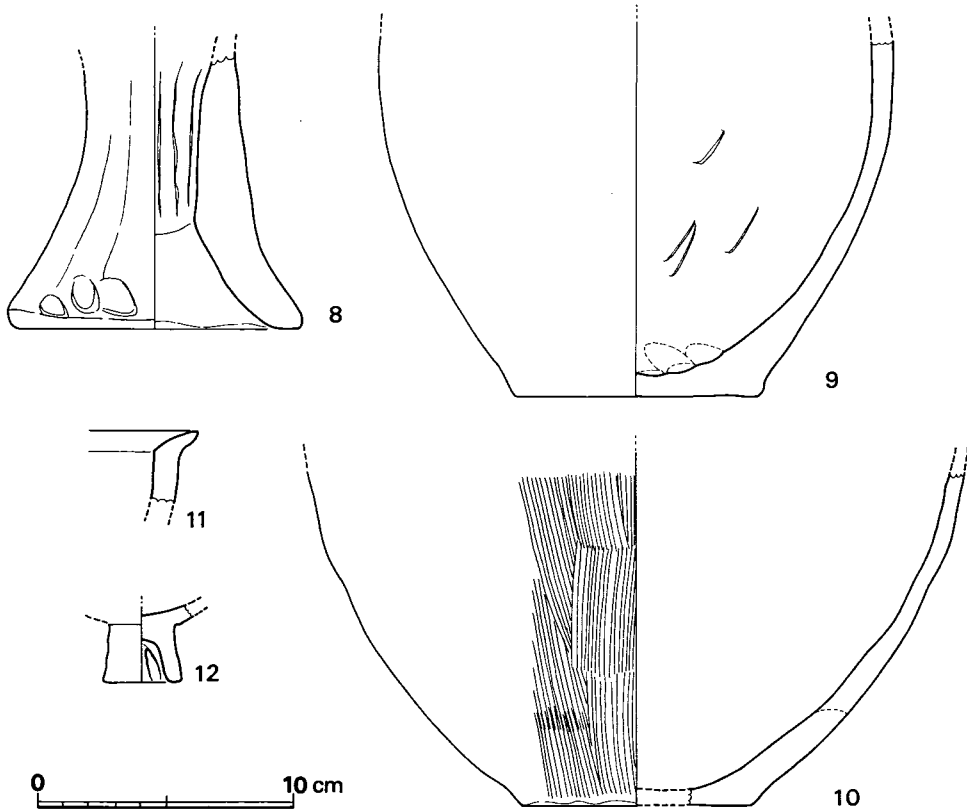
胎土に粗石英粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

6は、口縁端部が丸く、わずかに凸レンズ状となる底部につくる鉢である。口径15.3cm，器高11.5cm，底径7.4cmを測る。内面は磨滅するが，外面はナデており，上半にへらによる擦過状の沈線が部分的にみられる。胎土に粗石英粒を多く含み，焼成良好，淡茶褐色をなす。

7は，中位が筒状となり，上下で開くタイプの器台である。下端部径11.9cmを測り，中心の孔は棒状のものを抜いてつくり出す。全体に磨滅するが，いくらか指圧痕を残す程度である。胎土に粗砂粒多く含み，焼成良好で，明赤橙色をなす。器壁外面の全体に強い二次火熱を受けて赤変している。

8は，上下に開く厚手の類の器台である。下端径11.5cmで，下端の開く部分の内面は横ナデ中位の内面はナデ上げており，シボリ痕が残る。外面には指オサエ痕を残し，全体にやや手捏ね風となる。胎土に粗砂粒を多く含み，焼成良好で茶褐色をなす。

9は，やや広い平底を有する壺下半部で，内面はハケ工具縁端圧痕を残すが横ナデを施しており，外面はナデる。底部内面には指オサエ痕がみられる。底径9.8cm，胴最大径20.3cmを測り，胎土に粗砂粒を多く含む。焼成良好で，内面は黒褐色を，外面は茶褐色を呈する。



第 57 図 2号住居跡出土弥生土器（その2）（縮尺1/3）

10は、平底の壺胴下半部で、底径9.0cmを測る。外面は縦ハケ調整を雑に施し、内面はナデているが、凹凸著しい。胎土に粗石英粒を多く含み、焼成やや不良で、内面は淡灰褐色、外面は暗褐色から黒褐色をなす。

11は、口縁内面に稜をつくり、短く外反して、先端にやや尖る形態をなす。鉢状となるかと思われるが、小片の為に明確ではない。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

12は、ミニチュア様の製品で、やや手捏ね的な感じもみられる。胎土に粗砂粒を僅かに含むが、大旨精良であり、焼成良好で、淡茶褐色をなす。台付の何かのミニチュアかと考えられるが、或いは蓋状製品の撮部分となる可能性もあろう。

以上の2号住居跡出土土器は、3が後半以降的な特徴を示す他は、大旨「く」の字口縁の流れの中で押さえられ、甕胴部もまだ張っており、底部も大部分が未だ平底であることなどから、中頃に近い弥生後期後半代の所産とされよう。

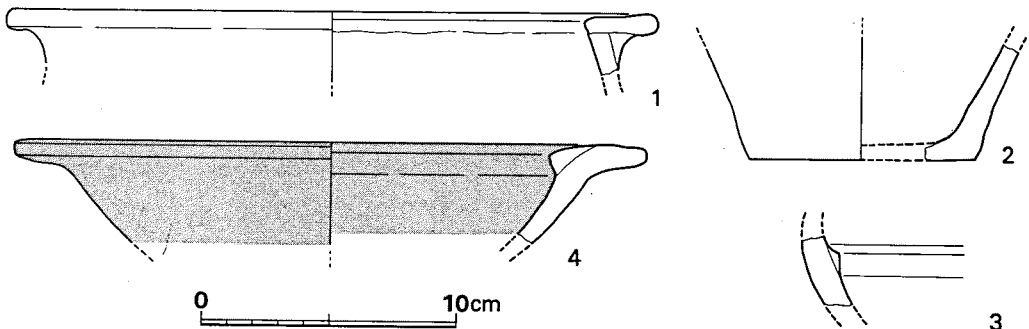
5号住居跡出土土器（第58図）

1は、やや短い逆L字口縁の甕片である。復元口径25.1cmを測り、口縁内端の突出は弱い。器表の風化著しく、調整法の観察は不能である。砂粒を多量に含み、焼成良好である。二次的火熱を受けており、外面黄褐色、内面は淡赤褐色をなす。

2は、平底の薄手の甕底部片である。復元底径9.0cmを測り、器表風化して、調整不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は軟質でやや不良である。内面は黒褐色をなし、外面は二次的火熱を受けて淡黄色を呈する。

3は、壺頸部下端の凸帯部分小片で、低い断面三角凸帯を付ける。胎土に砂粒を極めて多く含み、焼成不良で茶褐色を呈する。

4は、口縁内端の突出がそれ程強くない鋤先口縁の高杯である。口径24.9cmに復元され、内外ともに焼成前の丹塗りが行われる。全面に風化著しく、丹塗りも痕跡程度である。胎土に砂粒やや多く含み、焼成やや良好で、地色は黄褐色をなす。



第 58 図 5号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）

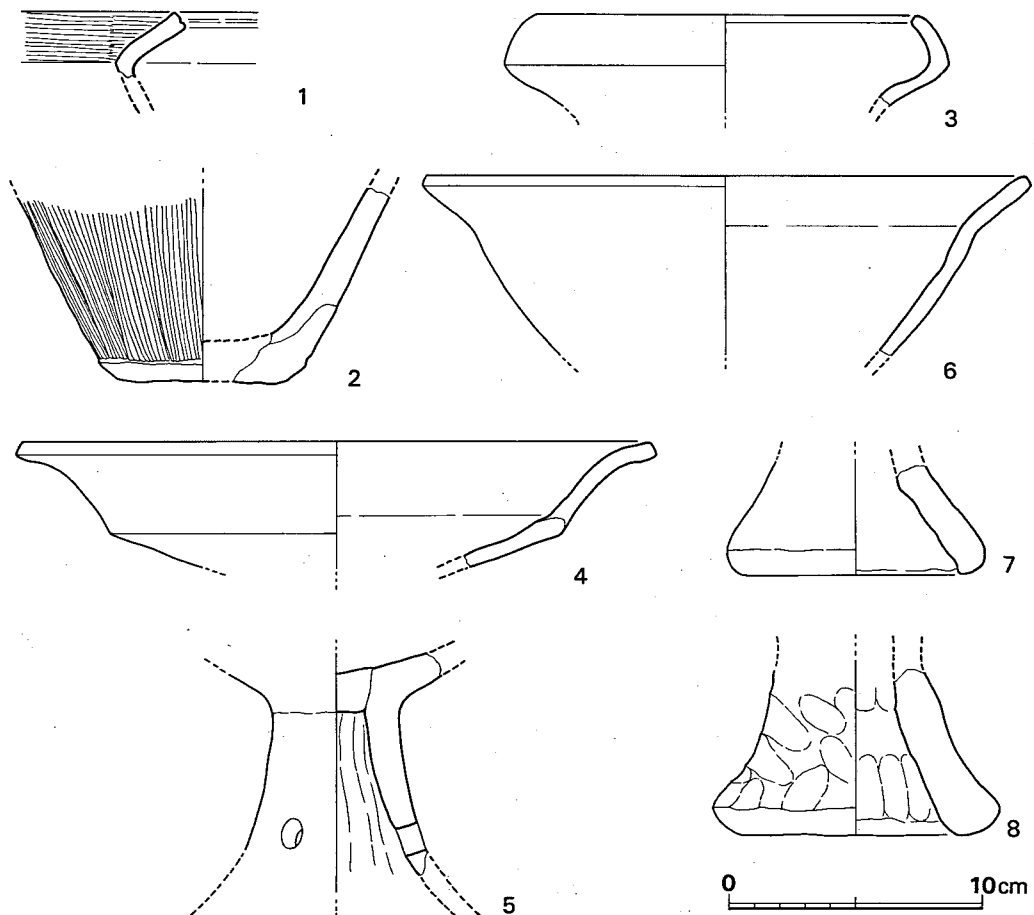
以上の5号住居跡出土土器は、1の口縁が未だ完全に逆L字状口縁の長いものになりきっていない点や、4の高杯の口縁幅がそれ程長く発達していない点などの諸点から、弥生中期前葉の段階で押さえられよう。

6号住居跡出土土器（第59図）

1は、屈折して直線的に開く甕口縁小片で、口縁外端面に凹線が入り、口縁内面は粗い横ハケを施す。外面は横ナデ調整で胎土に砂粒やや多く含み、焼成不良で茶褐色をなす。

2は、やや不安定にだらけた底部につくる甕下半部である。底外面はナデており、胴外面は粗い縦ハケ調整を施す。胎土に砂粒やや多く含み、焼成やや良好で、茶褐色をなす。

3は、壺口縁で、袋状口縁の外面に既に稜をつくるタイプである。復元口径15.2cmを測り、内外ともに風化著しく、調整は不明である。胎土に砂粒やや多く含み、焼成はやや良好で黄褐



第 59 図 6号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）

色を呈する。

4は、復元口径25.2cmを測る高杯杯部片で、中途の屈折部が明瞭であり、そこから開く口縁部も、終末期前後のもの比べてやや短かめである、器表は風化著しく調整は不明である。下半外面の一部に黒斑部がみられる。胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良で、外面赤褐色、内面は暗褐色を呈する。

5は、円孔を脚柱の中位に3個所配置する高杯脚部である。全体に器壁やや厚く、杯部は脚柱上端外面に接合し、中心の脚柱上端を粘土で埋めている。内面にはシボリ痕が明瞭であるが、外面は風化著しくて調整不明である。胎土に大粒の砂を多量に含み、焼成不良である。二次火熱を受けて全体に赤変する。地の色は黄褐色をなす。

6は、復元口径23.6cmを測る鉢である。開いた胴部から更にわずかに開いて口縁部が延びる。内外面ともに風化著しく、調整不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成不良で暗褐色をなす。

7は、器台端部で、やや小型である。内面は凹凸はなはだしく、手捏ね風である。器表の風化が著しく、調整不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は硬く良好で赤褐色を呈する。

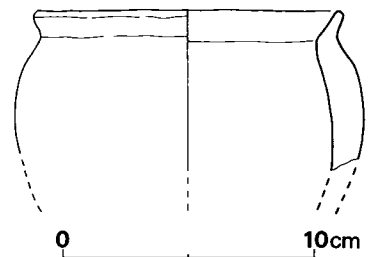
8は、内外ともに指頭圧痕著しい器台端部である。器形はかなり歪つになる。厚手であり、胎土に砂粒多く含み、焼成やや良好で、二次的加熱を受けており、赤褐色を呈する。

以上の6号住居跡出土土器は、高杯の形状、壺口縁の外面に明瞭な稜が入る状況、1の甕口縁の形態などから、弥生後期後半の年代が与えられる。

9号住居跡出土土器（第60図）

口径12.3cm、胴最大径14.0cmを測る小型甕である。部厚い胴部から、頸部で内面に稜をつくり、口縁部は短く、薄く外傾する。口縁上面はやや波打っており、胴部内面はナデ、口縁外面から胴部上端付近までは横ナデ調整を施す。胴部外面と口縁内面から胴部内面上端までは、風化のため調整は不明である。胎土に砂粒をやや少なめに含み、焼成良好で、内面は黒褐色、外面は黄褐色を呈する。

この9号住居跡出土の土器は、弥生後期の範囲に含まれるものであろうが、通有の甕とかなり異なり、鉢としてもいいようなものである。この1点から年代を限定するのは困難さを伴うが、口縁の「く」の字の形態や胴がまだ張っていること、遺構の諸状況などから勘案して、やはり弥生後期後半代に属するかと推定される。



第 60 図 9号住居跡出土土器
(縮尺1/3)

10号住居跡出土土器（第61図）

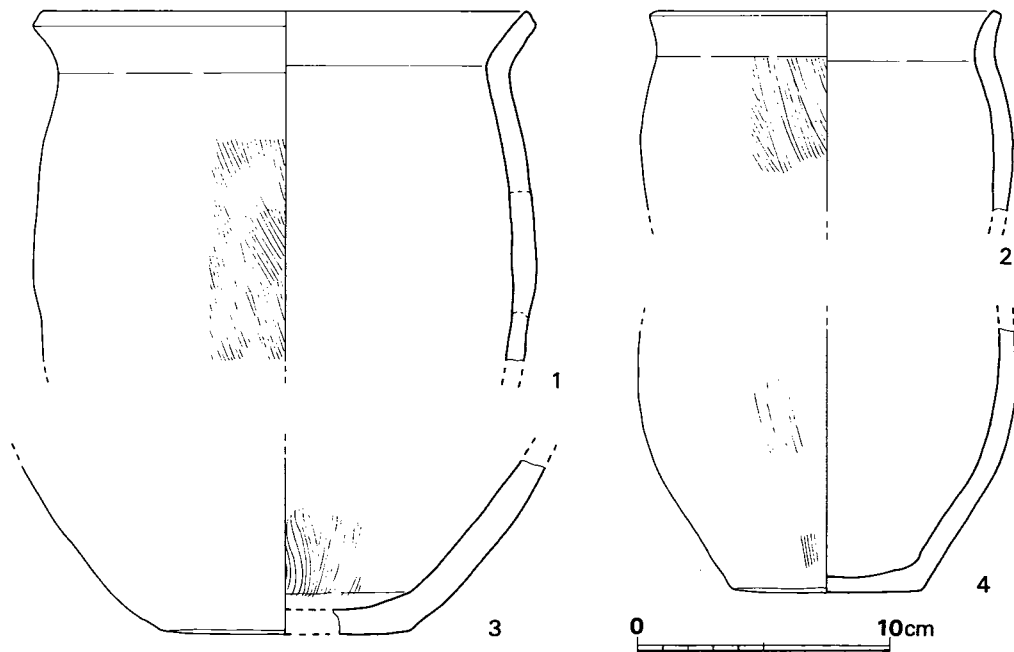
1は、あまり張らない胴部から、内面に稜をつくり屈折し、いくらか開く口縁につくる囊である。口縁端面はやや凹状となり、胴部は凹凸がいくらかみられる。口径19.9cm、胴部最大径19.9cmを測り、胴部外面は縦ハケ調整を行う。内面はナデており、口縁内外面は横ナデ、胴部外面上端はハケ目をナデ消す。胎土に砂粒多く含み、焼成軟質で不良であり、淡赤褐色をなす。

2は、僅かに張る胴部に、いくらか外傾した口縁を付ける小型囊である。口径14.0cm、胴部最大径14.8cmを測り、外面はやや斜めの粗いハケ目調整を施す。他の面は風化のため剥落が著しい。胎土に砂粒をやや少なめに含み、焼成不良で、内面黄褐色、外面は暗黄褐色を呈する。

3は、外面がやや凸レンズ状にふくらむ類で、底径9.9cmを測る。胴部内面には縦ハケ目調整がみられるが、上半はナデ消している。外面は風化のため調整は不明である。胎土に砂粒多く含み、焼成良好で、赤褐色をなす。

4は、外面がやや凸レンズ状にふくらむ小型囊下半部である。底径7.5cm、胴部最大径15.0cmを測る。内外面ともに風化するが、胴外面にはわずかに縦ハケ調整が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成軟質にて不良であり、黄褐色を呈する。

以上の10号住居跡出土の土器は、底部の状況を見ても、凸レンズ状にふくらんできており、胴部もあまり張らず、より古い様相は見出せない。よって弥生後期後半代の所産であると考えられる。



第 61 図 10号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）

31号住居跡出土土器（第62・63図）

1は、内端がやや突出して、あまり長くない逆L字口縁につくる甕口縁片である。内外面磨減するが、外面に僅かに縦ハケ調整がみえる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面淡褐色、外面は茶褐色をなす。

2は、頸部内面に不明瞭な稜をつくる「く」の字口縁につくる甕片である。胴がかなり張り、内外面は磨減して調整は不明である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良く、淡褐色を呈する。

3は、短く外反する口縁部につくる。口縁内外面は横ナデ調整、胴内外面は調整不明である。頸部外面には浅い沈線がみられるが、全周に廻る程しっかりしたものではない。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。

4は、やや長く外反する甕口縁部である。頸部外面で段状をなし、口縁内外面は横ナデ調整を施すが、胴部内外面は磨減して調整不明である。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、内面は白褐色をなす。外面は煤が付着して暗褐色を呈する。

5は、口径16.8cm、胴最大径19.2cmを測る甕上半部で、口縁はやや短めに外反する。外面は磨減して調整不明である。内面はナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面赤茶褐色、外面は煤が付着して暗茶褐色を呈する。

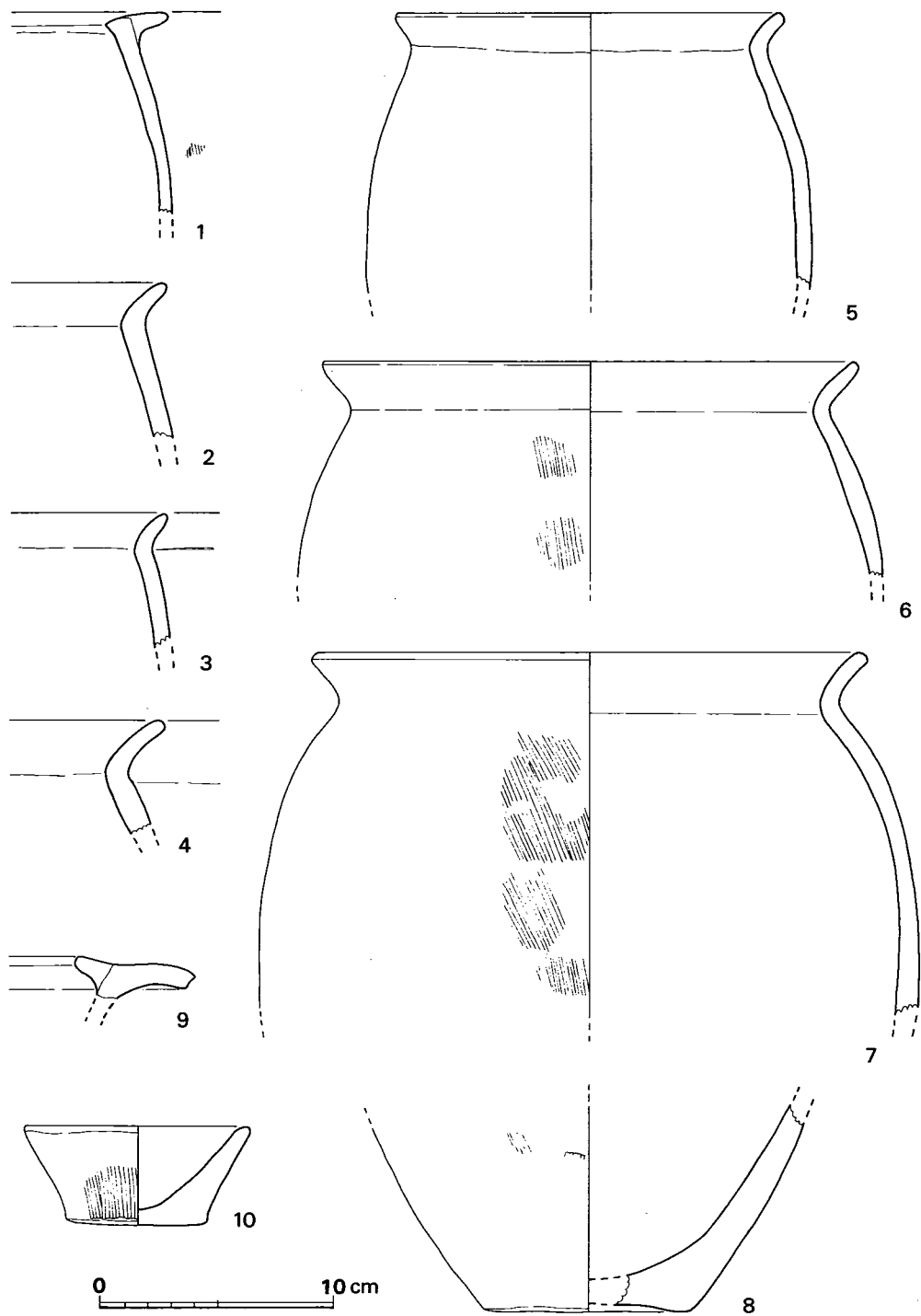
6は、口径23.1cmに復元され、胴部上半でかなり張る「く」の字口縁の甕である。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は器表剥落するが縦ハケ調整が残り、内面はナデを行う。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は不良で、暗褐色乃至黒褐色をなす。

7は口径24.0cm、胴部最大径28.4cmに復元され、かなり張る胴部から頸部で丸味を帯びて反転して開く口縁につくる。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜めから縦方向のハケ調整を施し、内面はナデる。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面淡茶色、外面は煤が付着して、更に二次火熱を受けており、暗褐色乃至赤茶色を呈する。

8は、底部がやや上げ底状になる、厚手の甕下半部である。底径8.9cmを測り、内外面ともに磨減するが、外面に僅かに縦ハケ調整が残る。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は明茶褐色をなす。外面は強い二次火熱を受けて赤変する。

9は、鋤先状口縁の壺であり、内端は長く延びる。口縁外端面は凹状をなし、図示した頸部への割れ面は接合面である。胎土に粗砂粒かなり含み、焼成やや良く、茶褐色をなす。器表に化粧土をかけており、風化著しくて確認し難いが丹塗りの可能性もある。

10は、一応鉢とするが、まさに甕底部そのものである。口径9.7cm、器高4.4cm、底径6.0cmを測り、底部外面はやや凸レンズ状にふくらみをみせる。外面は粗い縦ハケを施し、口縁内外面は横ナデ調整を行う。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面黒褐色、外面は茶褐色を呈する。異類のものであるが、作り・調整ともに甕底部と変わらず、甕製作途中で偶々底部の



第 62 図 31号住居跡出土弥生土器（その1）（縮尺1/3）

みを製品と為した類である。

11は、丹塗り袋状口縁壺で、口径9.4cm、袋状部径10.6cm、胴部最大径18.5cmを測る。全体に器壁が部厚くやぼったい作りで、口縁内外面横ナデ、口縁外面中位は横へら磨き、以下外面はわりと粗い縦へら磨きを施す。内面はナデており、胴部内面上端から頸部内面は指オサエナデ上げがみられる。頸部内面には粘土紐巻き上げ痕が残り、外面から頸部内面まで丹塗りを施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

12は、やや大型の袋状口縁壺上半部で、口径16.5cm、袋部外径20.0cm、頸部径14.7cmを測る。袋状口縁は、外面に未だ稜をつくらないが、内湾度がかなり強くなる。頸部から胴上端までの内面には指オサエ痕が連続してみられる。内外面ともに器表磨滅著しく、調整は不明である。胴部外面に極く僅か、丹塗りの痕跡がみられるが、どの程度塗ったものか明確に出来ない。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡褐色から茶褐色を呈する。

13は、厚手で平底の壺底部である。底径8.3cmを測り、内外面とも風化しているが、外面はハケ調整ではなさそうである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面淡灰褐色、外面赤茶褐色を呈する。

14は、器壁の厚い壺底部である。底径10.0cmを測り、器表全面磨滅するが、外面には僅かに、粗い縦ハケ調整が残る。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は淡褐色から暗褐色をなし、内面は黒色を呈する。

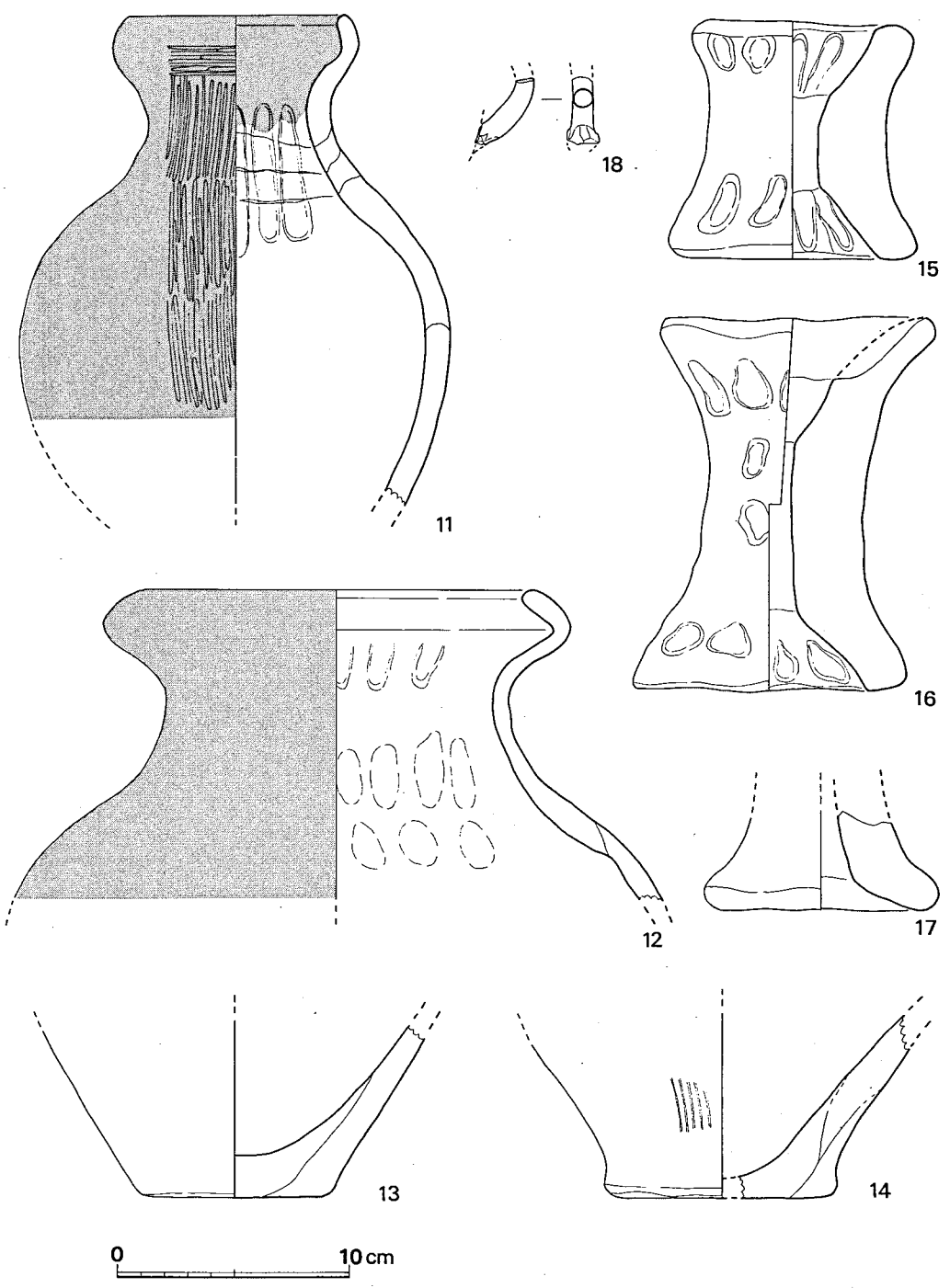
15は、厚手の低いタイプの器台で、上端径9.5cm、器高10.3cm、下端径10.7cmを測る。内外に指頭圧痕を残し、全体に手捏ね風である。胎土に粗砂粒を多く含み、外面は二次火熱を受けてほぼ全面が赤白色に変化している。

16は、上下に開く部厚い類の器台で、上端径11.9cm、器高16.2cm、下端径11.8cmを測る。内外に指頭圧痕が残り、全体に歪つて手捏ね的である。胎土に粗砂粒を多く含み、全体に強い二次火熱を受ける。特に下半は全周が赤変する。

17は、下端径10.1cmのやや小さめの器台片で、器表全面磨滅する。胎土に粗砂粒を多く含み、二次火熱を受けて赤茶色をなす。

18は、脚付壺等に付く把手部分片で、朝鮮製灰陶であると考え。直径8mmの断面円形の粘土紐状につくり、下端部は器壁への接合のために、指でおさえつけて拵げている。胎土は精良で、小黒色粒子をかなり含む。焼成は、外面は堅緻な感じがするが、芯の方は灰黒色の瓦質的で軟質である。外面は内側上半分に灰かぶりがみられ、淡灰色をなす。

以上の31号住居跡出土土器は、1・9の中期前葉のものを除いて他は、「く」の字口縁で胴の張る甕、だらけてきてはいるが未だ袋部外面に稜を作らない袋状口縁壺、15の短い器台、まだ凸レンズ状にふくらんできていない平底の様相等から、弥生後期中頃の時期に位置付けられる。全体に古い様相を残しており、後期中頃でも、より前葉に近いものと考えたい。



第 63 図 31号住居跡出土弥生土器・灰陶（その2）（縮尺1/3）

また、18の灰陶質の把手は特筆すべきものである。他の弥生後期遺物と共伴するものであり、この時期に相当する彼地の把手付製品の具体的に如何なるものであるか、定かにし得る研究現状には無い。今後の金海式灰陶等の編年研究に期するとともに、取り敢えず貴重な一資料として供する次第である。

35号住居跡出土土器（第64・65図）

1は、上半でやや張る胴部に、頸部内面で丸く屈曲して外反する口縁をつける。口径26.3cm、胴最大径25.7cmを測り、口縁内面は粗い横ハケの上をナデ消す。口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ調整、内面は丁寧なナデしている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、明赤茶褐色を呈する。外面下半には部分的に煤が付着する。

2は、口径21.4cm、胴部最大径23.6cmを測り、張る胴から頸でかなり縮まり、頸部内面に不明瞭な稜をつくり、口縁が外反する。口縁内面は横ハケ、内面上端から外面は横ナデ、胴部外面は縦・斜めのハケ調整を行う。胴内面は丁寧なナデ、上端には指オサエナデが残る。胎土に粗砂粒かなり含み、焼成やや不良で、内面は淡灰茶褐色、口縁内面上端から外面は煤が付着して暗褐色から黒色を呈する。

3は、口径26.8cm、胴最大径25.5cmを測り、胴はあまり張らず、口縁外面はやや中ぶくらみする。口縁内外面横ナデ、胴部外面上半は縦ハケの上をナデ消し、下半は粗い縦ハケ調整を施す。胴部内面はナデしており、胎土に粗石英粒を多く含み、焼成はやや良好で、内面淡白褐色、外面は淡褐色から、煤付着して黒色をなす。

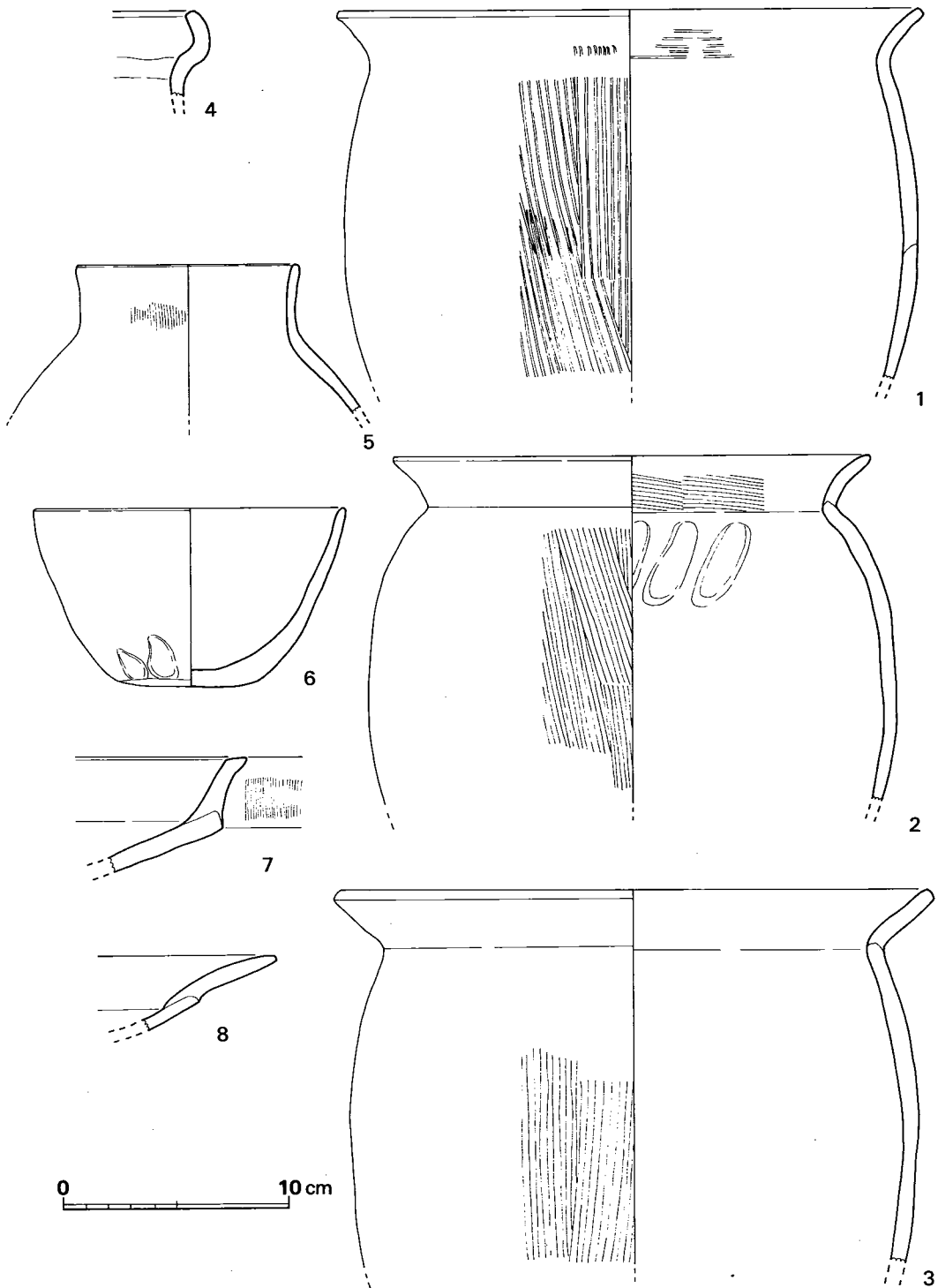
4は、袋状口縁壺小片で、口縁内外面横ナデ調整を施す。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。

5は、口縁が極く僅かに外傾する直口壺で、全体に薄手である。口縁内外面横ナデ、外面には縦ハケが残る。他面は風化して調整不明である。胎土に粗砂粒わずかに含み、焼成良好で淡褐色をなす。口径10.0cmを測る。

6は、口径13.9cm、器高8.0cmを測る小型鉢である。底部はやや丸底状をなし、体部は開く。内外面調整不明で、胴下端底部近くには指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

7は、高杯口縁片で、杯部下半から強く屈折して立つ短い口縁をつける。口縁外端は外方へ突出し、外面には縦ハケ調整が施される。他面は磨滅して調整不明である。胎土に粗砂粒いくらか含み、焼成やや不良で、外面暗褐色、内面は淡褐色を呈する。

8は、高杯口縁片で、7のタイプと異なり、屈折部から更に外方へ強く開く、短かめの口縁を付ける。器表は磨滅して調整不明である。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で、淡褐



第 64 図 35号住居跡出土弥生土器（その1）（縮尺1/3）

色をなす。

9は、胴が強く張り、他の甕と若干趣を異にする甕である。口径20.1cmを測り、口縁内面と胴部内面上半に細かい横～斜めハケ調整を施す。以下内面はナデる。口縁上端から外面は横ナデ、胴外面は細かい縦ハケを行う。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、内面は黒色、外面は灰白色を呈する。

10は、底部が凸レンズ状のふくらみをなす甕下半部である。底径8.1cmを測り、胴部外面は粗い縦ハケの上をナデ消し、内面はナデる。底内面には指圧痕を残す。胎土に粗砂粒多く含み、焼成やや不良で、内面淡褐色から暗褐色をなす。外面は白褐色をなすが、強い二次火熱を受けて、部分的に赤変する。

11は、器壁の厚ぼったい脚部を付ける脚付壺である。脚端径15.5cmを測り、端部外面は部分的に僅かに凹状となる。胴部から脚部外面は縦ハケを施し、脚端部内外面は横ナデ、脚内面下半は斜めハケ、上半には横方向へのへら削り痕がみられる。壺胴部～底部の内面はナデるが、かなり凹凸がみられる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面暗褐色、外面淡茶褐色を呈する。

12は、部厚く、上半で締まるタイプの器台である。上端径12.0cm、器高17.0cm、下端径14.4cmを測り、上端内面は横ハケの上をナデ消す。全体に手捏ね的な感じで、指圧痕がいくらかみられる。内面には指オサエナデ上げがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面全体に二次火熱を受け、赤茶褐色を呈する。

13は、いくらか扁平な胴部に、丸底状のややふくらんだ底部をつくる。胴部最大径18.5cm、底径6.0cmを測り、内外面は極めて剝落が著しく、調整不明である。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

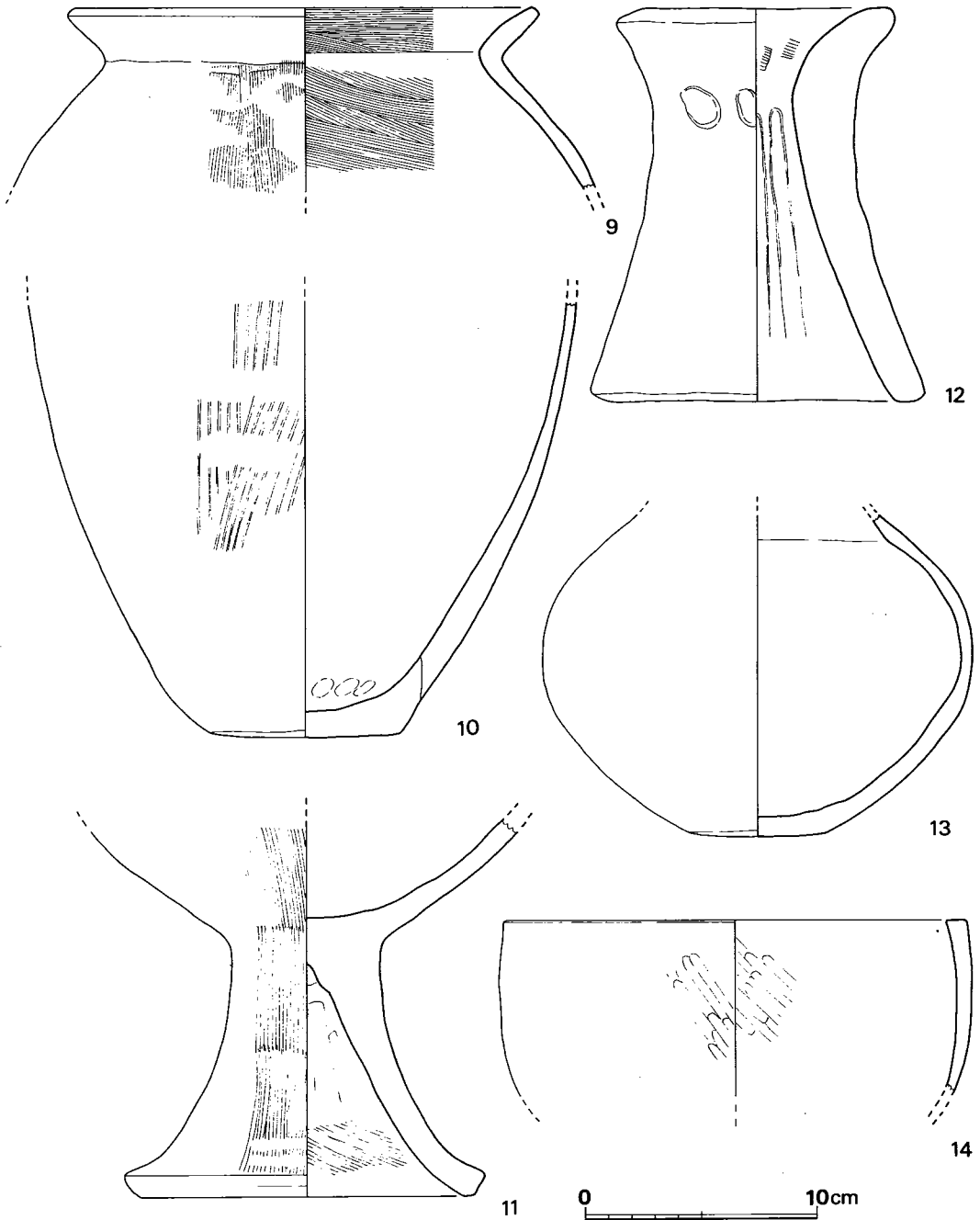
14は、口径20.0cmを測り、やや内湾状の鉢となる。口縁上面は平坦面をなし、口縁内外面横ナデ、胴部内外面には粗い斜めのへら磨きがみられる。胎土に細砂粒いくらか含むが、かなり精良であり、焼成良く淡白褐色をなす。全体に精品であり、脚の付く可能性も考えられる。

以上の35号住居跡出土土器は、4の袋状口縁壺がより古いものである他は、甕口縁の形態、甕・壺の底部の形状、高杯口縁部の状態などの諸点からみて、弥生後期後半代の時期が与えられる。

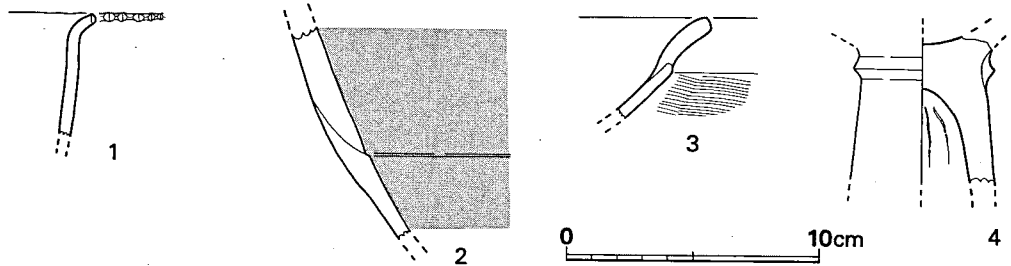
なお、35号住居跡からは、以上述べた土器の他に、後の石器の項に記す如く、直線刃の小豆色をなす輝緑凝灰岩製の石包丁、花崗岩製の粗砥石が各1点出土している。(第86図)

35号住居跡内柱穴出土弥生前期土器 (第66図)

35号住居跡内のP.24とした柱穴内より、弥生前期に属する土器が数点出土したので、他時期



第 65 図 35号住居跡出土弥生土器 (その 2) (縮尺1/3)



第 66 図 35号住居跡内柱穴出土弥生前期土器 (縮尺1/3)

の出土遺物と別に図示することとした。

1は、張らない胴部から、短く外反した口縁外面に刻目を巡らす、典型的な板付I式の甕口縁片である。刻目はへらによる深いもので、内面はナデ、外面は風化して調整は不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内外ともに肌色をなす。

2は、大壺の頸部と胴部の接合部分片である。外面は丹塗りを施しており、接合部外面は段をなす。内面はナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面暗褐色、内面は淡褐色から黒色をなす。

3は、内外面丹塗りの高杯口縁片である。深い下半部から屈折・反転して短く外反する口縁を付ける。口縁内外面横ナデ、外面稜線以下の下半外面はやや細かい横ハケを施す。丹塗りは部分的に残り、酸化鉄を多く含んだ化粧土的にもみえる。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成は良好で、淡白褐色を呈する。

4は、脚柱部上端に断面三角凸帯を付ける高杯脚部片である。凸帯周辺は横ナデであるが、他は内外面ともに風化著しく、調整不明である。脚柱部内面には、シボリ痕がみられる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で茶褐色をなす。

以上の35号住居跡内柱穴出土の弥生前期土器は、1～3までが板付I式で、4は若干降って板付II式となる。このような前期の土器を出土する柱穴の存在は、この住居跡南方の包含層から出土する前期土器群(第79～85図)の出土状況からみても、この付近に板付I式期を中心とする竪穴住居跡の存在を推定させるところである。

37号住居跡出土土器 (第67図)

1は、あまり張らない胴部から、内面にシャープな稜をつくり、直線的に開く口縁部につくる。口縁内面は横ハケ調整、内面頸部下端は横ナデ、以下内面はナデる。口縁外面は横ナデ調整、胴部外面は縦ハケを施す。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、外面淡褐色から黒褐色をなし、内面は暗褐色となる。

2は、胴部から丸く反転して、僅かに開く口縁部をつくる短頸壺である。口縁上端面は凹状

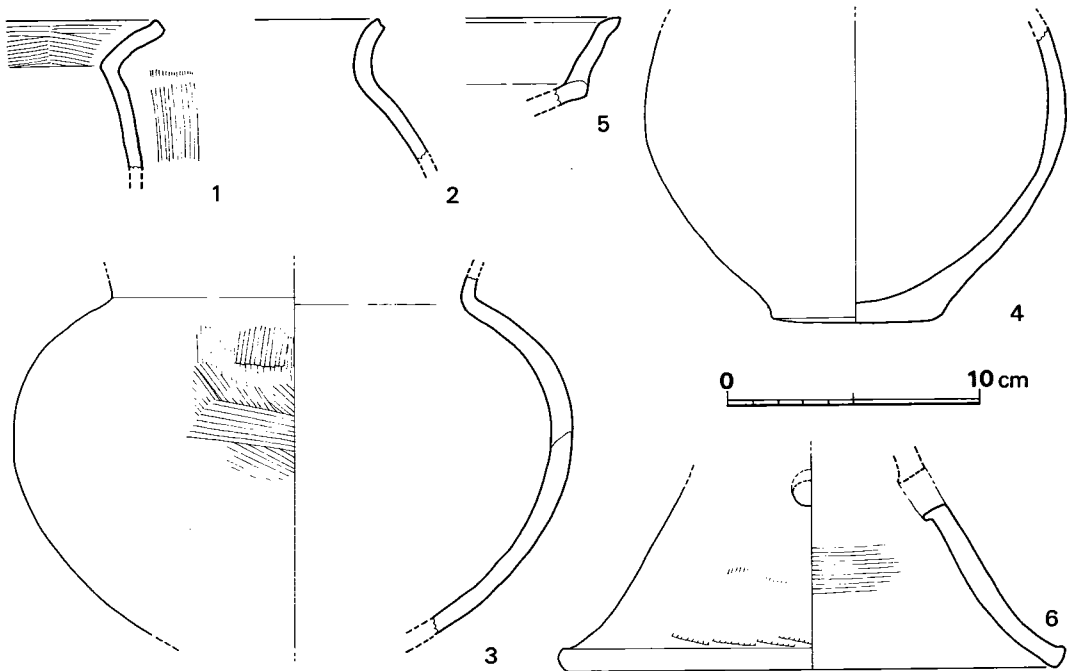
をなし、口縁内外面横ナデ、胴部はナデかと思われる。胎土に細砂粒をかなり含み、外面淡茶褐色、内面は暗褐色を呈する。

3は、胴部が上半で張る短頸壺であり、胴部最大径22.0cm、頸部径14.3cmを測る。口縁部はいくらか外傾する。頸部から胴部上端の外面は横ナデ、胴部外面上半は縦・横の粗いハケを施し、以下外面はナデる。内面の頸部から胴上端は横ナデ、胴部内面中位は粗い横ナデ、以下内面はナデる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、外面白褐色、内面は黒褐色をなす。

4は、底部そのものの作り出しはしっかりするが、外面がいくらか凸レンズ状にふくらむタイプの小型壺である。胴部最大径16.6cm、底径6.9cmを測る。器表全面磨滅著しく、調整不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成やや不良で、淡灰褐色を呈する。

5は、強く屈折して外傾する程度の、短い口縁を付ける類の高杯口縁片である。内外面ともに、横ナデ調整を施し、口縁外面途中でやや中ぶくらみする。胎土に細・粗砂粒をいくらか含み、焼成やや良く、暗茶褐色をなす。

6は、中途に円孔を穿つ、脚付壺（鉢）の脚部である。脚端部上端はやや突出し、円孔は径1.6cmと大きく、孔の数は不明であるがおそらく3～4個であろう。脚端径20.0cmを測り、外面は縦ハケの上をナデ消している。内面は横ハケを施し、内面下半から脚端部上部まで横ナデ調整を行う。胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成良好で、外面淡褐色をなし、内面は暗灰褐色を呈する。

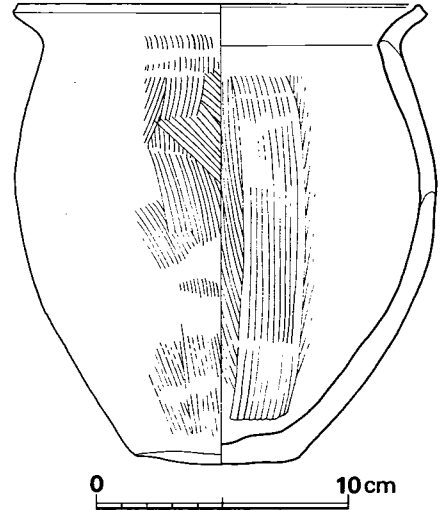


第 67 図 37号住居跡出土弥生土器（縮尺1/3）

以上の37号住居跡出土の土器は、1のあまり張らない胴部につくる口縁片や、5の屈折部以上が立つタイプの高杯などの諸点から、弥生後期後半の年代が与えられる。

43号住居跡出土土器（第68図）

やや張る胴部から、頸部内面に稜をつくり外反して短く開く口縁につくる小型甕である。口径16.3cm、器高18.2cm、胴最大径16.5cm、底径6.5cmを測る。口縁部上端はわずかに突出し、外端面はやや凹状となる。底部は外面が凸レンズ状にふくらむ。口縁外面下半から胴部外面はやや粗い縦ハケを雑に施す。胴部外面下半はハケをナデ消す。胴部内面は縦ハケを施し、口縁内外面は横ナデを行う。底部から胴部外面下端までは、二次火熱を受けて赤変する。胴部外面は煤が付着する。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は良好で、内面茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。



第 68 図 43号住居跡出土弥生土器(縮尺1/3)

この43号住居跡から出土した唯一の完形品は、住居跡の北側壁際に倒立して伏せた状態で検出されたもので、各部位の諸特徴から、弥生後期後半代のものと考えられる。

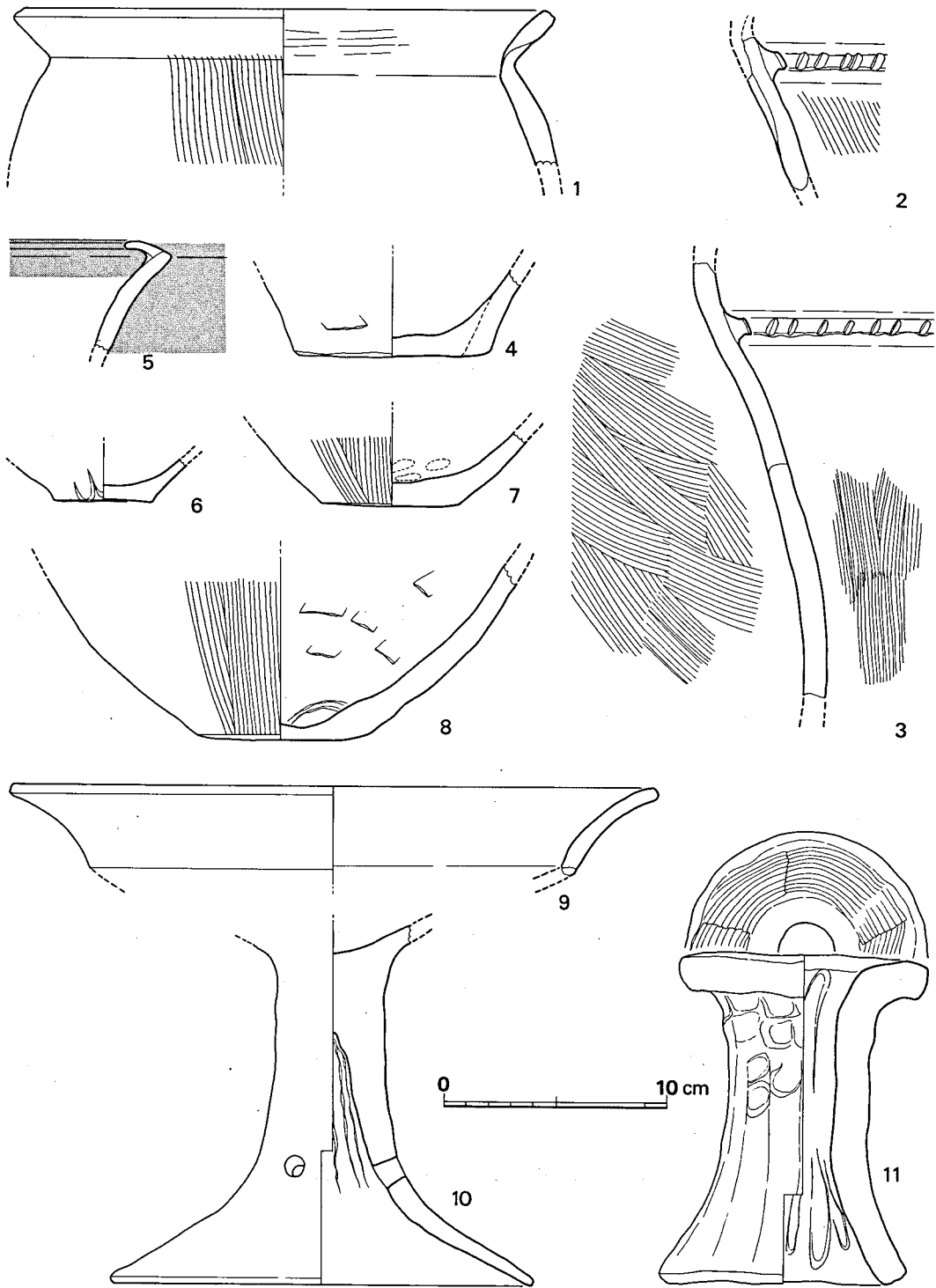
ロ) 包含層出土の土器・土製品

南西トレンチ包含層出土土器（第69図）

本遺跡南半を中心に黒色包含層が拡がり、多量の遺物が出土した。発掘範囲の南端中央付近の32号住居跡西方で段落ち線が確認され、その西側は遺構は小支石墓を除いて、殆んど皆無であり、包含層が厚く堆積していた。そこで基底部を確認するために、南辺沿いに重機により深くトレンチを入れた。その際に出土した土器のみを他の包含層出土土器と別に図示することとした。そのトレンチの最下位まで以下に図示した弥生後期後半の土器が出土した。

1は、やや強く張る胴部から頸部内面にやや不明瞭な稜をつくり、外反する口縁をつける。口縁端面は僅かにへこむ。口縁内面は粗い横ハケを施すが、口縁内外面の横ナデにより、ハケは殆んど消える。胴部外面は粗い縦ハケ調整を行い、内面はナデる。口径24.2cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶色を呈する。

2は、胴部上端にコの字状凸帯をつけるもので、かなり大型品となる。凸帯上には、斜めの



第 69 図 南西トレンチ包含層出土弥生土器 (縮尺1/3)

ヘラによって切りはねる刻目を巡らす。口縁部周辺は横ナデ、胴部外面は斜めの粗いハケ調整が行われる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、外面淡赤色、内面は暗灰褐色を呈する。

3は、頸部外面にコの字状凸帯を付けるもので、かなりの大型品となる。凸帯上面には、斜めの刻目をめぐらせる。凸帯部周辺は横ナデ調整、以下胴部外面はわりと細かい縦ハケを行い、上半ではナデ消している。胴部内面は斜め・横方向にハケを雑に施す。頸部内面はハケをナデ消している。胎土に粗砂粒を多く含み、内面黄灰褐色、外面は赤茶色を呈し、一部が黒斑状をなす。

4は、底径8.7cmを測る平底の甕底部である。内外面ともに磨滅して調整不明であるが、外面下端近くにハケ工具端部圧痕が観察される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面淡赤褐色、内面は炭化物が付着して暗褐色をなす。

5は、袋状口縁外面が鋭角に稜をなしてきているタイプの丹塗り壺である。口縁内外面は横ナデ調整が施され、他面は不明である。胎土は粗砂粒を僅かに含むのみで大旨精良であり、焼成良好で、内面淡褐色を呈する。

6は、わずかな上げ底状となる小壺底部片である。底径4.4cmを測り、外面には、わりと手捏ね風のオサエナデが施される。内面はナデており、胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、外面赤茶褐色、内面は淡褐色をなす。

7は、底部外面がわずかに凸レンズ状にふくらむ類の壺底部片である。胴外面は粗い縦ハケを施し、内面には指オサエがみられる。底径6.3cmを測る。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で、外面赤茶色、内面は黒褐色をなす。

8は、底部外面が凸レンズ状にふくらむ、壺下半部である。底径7.7cmを測り、胴外面は粗い縦ハケを施し、内面はナデるが、ハケ工具縁端部の圧痕が残る。底部内面には指オサエナデ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、内面は淡白褐色から茶褐色、外面は淡白褐色から黒褐色をなす。

9は、復元口径29.0cmを測る高杯口縁片である。中途の屈折部から反転して、やや短めに開く。内外面磨滅して、調整は不明である。焼成やや良好で、淡褐色をなす。

10は、裾部が拡がる高杯脚部である。脚端部径19.0cmを測り、中途に円孔3個を穿つ。脚端部内外面は横ナデ、脚柱外面は縦方向擦過痕の上をナデている。内面にはシボリ痕が明瞭である。胎土に粗砂いくらか含み、焼成良好で、淡茶色をなす。

11は、厚手で全体に手捏ね風の器台である。内外面には指頭圧痕・指ナデ上げ等が残るが、上面はやや粗いハケ目を施す。外面にはやや面取り風の、擦過による稜線がみられる。粗砂多く含み、焼成良く、淡褐色から淡茶色をなす。下端の一部に強い二次火熱を受ける。

以上の南西トレンチ包含層出土の土器は、各々ほとんど時期差が無いと考えてよく、弥生後期後半代の所産と考えられる。

黒色包含層出土土器（第70～85図）

弥生時代後期の土器（第70～77図）

1は、器壁の厚い、上半に張る胴部に、強く開く口縁を付ける甕である。口径24.1cm、胴最大径23.5cmを測る。胴部外面には粗い縦ハケを施し、その上位に、明瞭ではないがへラ先による沈線状の一本線が廻る。口頸部内外面横ナデ調整、胴部内面は丁寧にナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、茶褐色をなす。

2は、口径24.1cm、胴部最大径22.8cmを測り、器壁はやや厚く、胴はあまり張らない甕である。口縁外端面はやや凹状となる。胴部内面には、粘土の継ぎ目がみられる。器表全面磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内外面は肌色をなす。

3は、口径21.0cmを測り、胴は強く張る。頸部内面に稜をなし、口縁外面は中ぶくらみする。口縁外端面は沈線の入る部分もある。胴外面にはやや粗い縦ハケ調整を施し、内面は横・斜め方向のハケの上をナデ消す。口縁内外面は横ナデを行い、胎土に粗砂粒多く含み、内面暗赤茶褐色、外面は煤が付着して暗黒褐色をなす。

4は、あまり張らない胴部から頸部で丸く屈曲して外反する口縁につくる甕である。口径19.3cm、胴部最大径19.9cmを測り、口縁外端面には細い沈線を巡らす。口頸部内面は横ハケの上をナデ消す。胴部外面には粗い縦ハケ、内面は丁寧にナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面茶色、外面は二次火熱を受けて赤変し、煤が付着する。

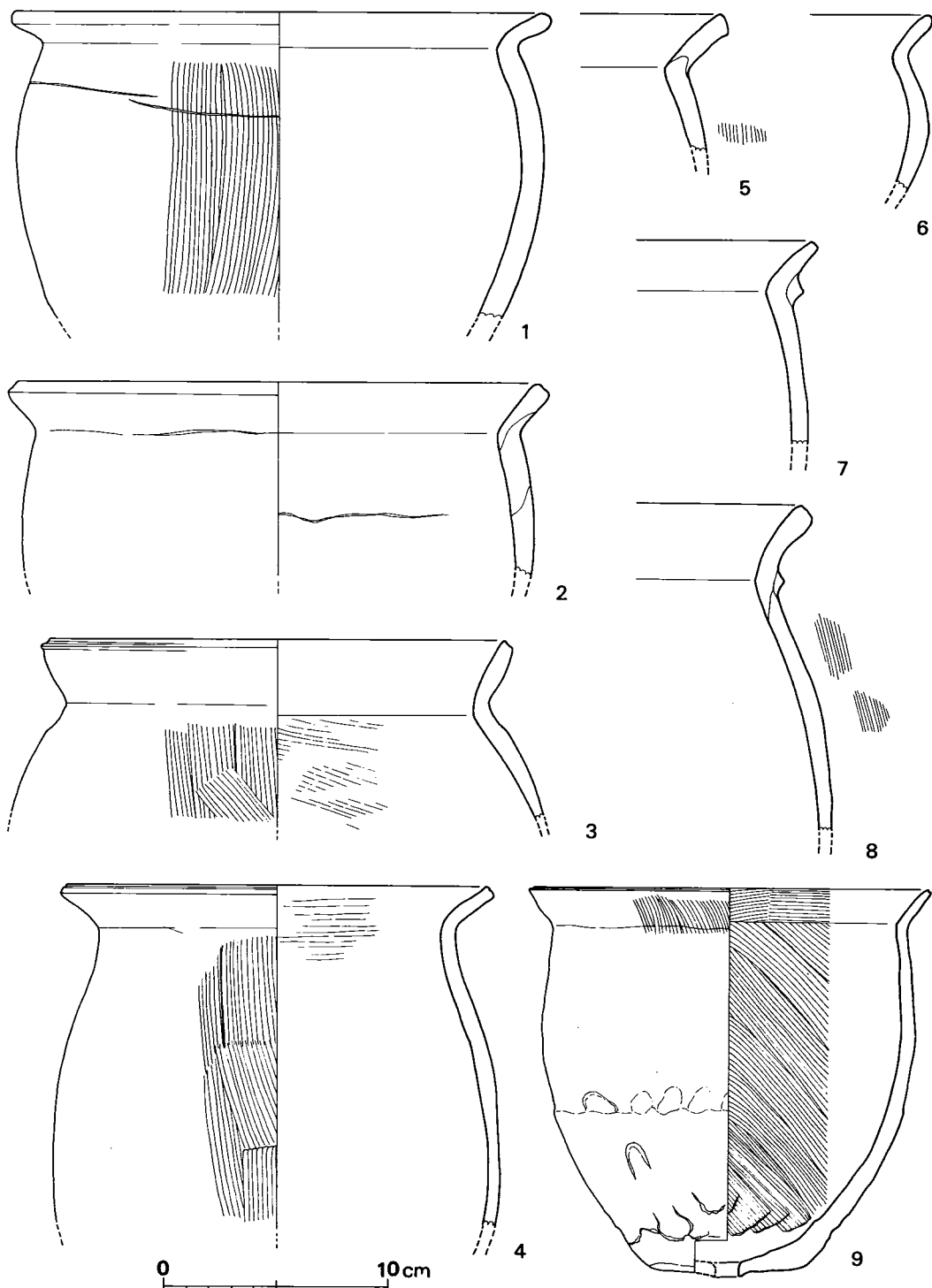
5は、「く」の字に屈折して、口縁外下端がやや突出した甕口縁片である。胴部外面は縦ハケ、内面はナデる。かなり大口径となるタイプで、胎土に粗砂粒を多く含み、内面赤茶色、外面には煤が付着して、暗茶色を呈する。

6は、やや張る胴部から、内面に稜を作らずに屈曲反転して開く口縁をつくる。甕というよりも鉢的な器形となる類で、口頸部内外面は横ナデを施し、胴部内面は丁寧にナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、外面は二次火熱を受けて赤変し、煤が付着する。

7は、張らない胴部に短く外傾する口縁部を付け、頸部外面に断面三角凸帯を付ける甕口縁片である。外面は器表磨滅し、調整は不明である。内面はナデている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

8は、7とほぼ同タイプで、口縁部が長めで、先端にやや肥厚する甕口縁片である。胴部外面には細かい縦ハケを施すが、殆んどが磨滅してしまっている。口頸部内外面は横ナデ、胴部内面はナデている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面は淡茶褐色、外面は暗茶色から白褐色をなす。

9は、底部中央に焼成前の穿孔を行った小型甕である。或いは甌そのものと呼んでもよかる



第 70 図 黒色包含層出土土器 (その 1) (縮尺1/3)

う。口径18.0cm、器高17.3cm、胴部最大径16.7cm、底径7.1cmを測る。口縁外端部には細い沈線を入れて、やや凸レンズ状にふくらむ底部の中央に径1.0cmの孔を穿つ。口縁内面は横ハケ、口縁外面は斜めハケ、胴部内面は斜め方向の細かいハケ調整を施す。胴部外面は未調整で、手捏ね的なままで、指頭圧痕等が多くみられ、凹凸が著しい。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成はやや良好で、外面茶褐色、内面は黒褐色をなす。

10は、口径14.7cm、胴最大径18.6cmを測り、やや下ぶくらみ的な胴部に、あまり開かない口縁部を付ける甕である。口縁内面には横ハケ、胴部内外面にはやや粗い縦ハケ調整を施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。口縁外端面は、わずかに凹状となる部分もある。口縁外端部はわずかに外方へ突出する。

11は、口径22.5cmを測り、頸部内面に稜をつくり、開く口縁につくる。口縁内面は横ハケ、外面は斜め方向のハケを施し、胴部外面は磨滅著しいが、縦・斜め方向のハケがわずかに残る。胴部内面は横から斜め方向への粗いハケ調整を行う。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は茶褐色、外面には煤が付着し、暗褐色から淡白褐色をなす。

12は、器壁が薄く、長めに開く口縁につくる甕片である。口縁内外面は横ナデ、胴部外面はやや斜めの縦方向の細かいハケ調整を施す。胴部内面も斜めのハケがみられる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は茶褐色をなす。外面には煤が付着する。

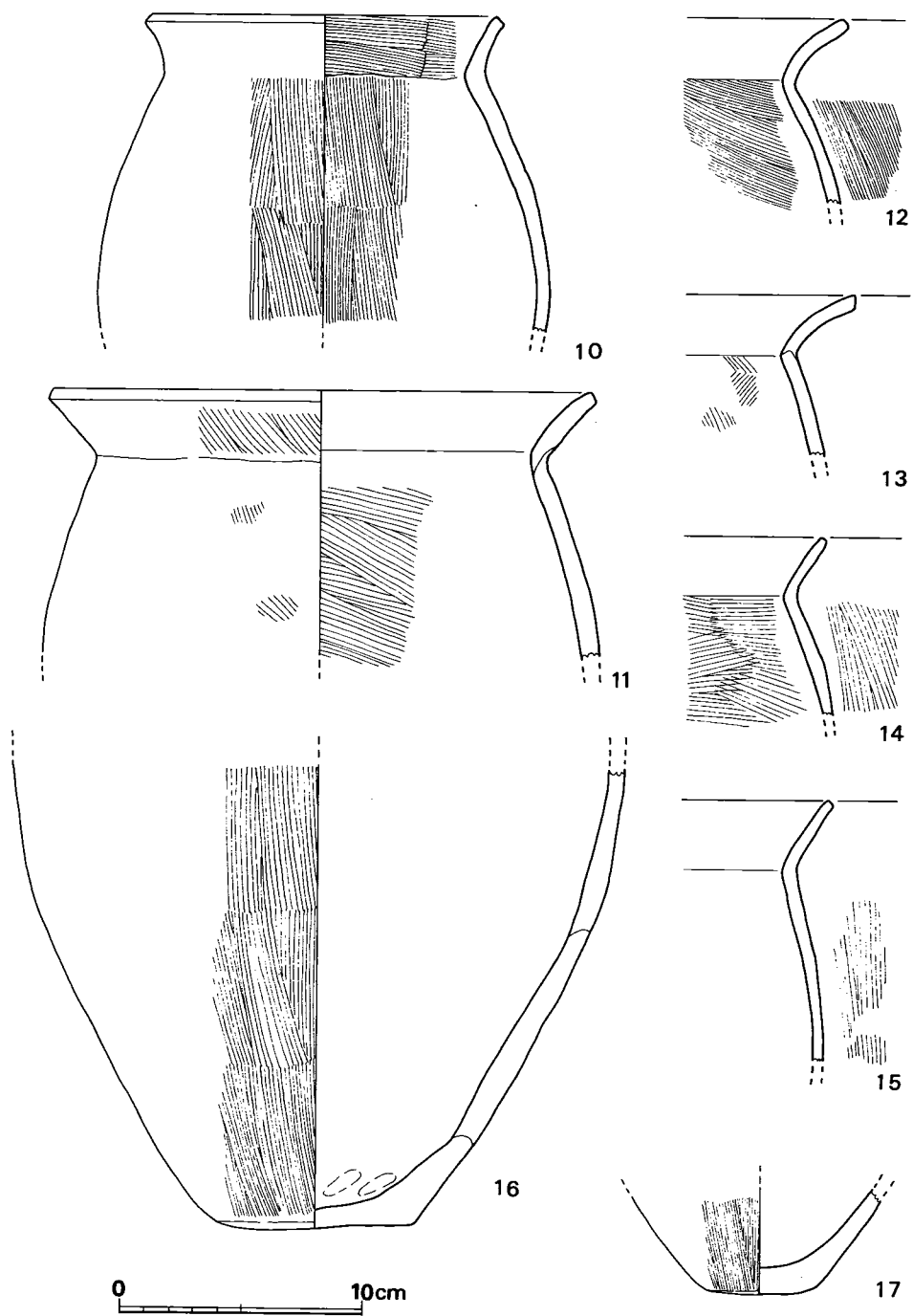
13は、薄手で精製の長めに開く口縁につくる甕片である。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はハケの上を横ナデ、胴部外面は風化著しく、調整不明である。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成やや良好で、淡灰褐色をなす。

14は、薄手の、あまり強く開かない口縁につくる甕片である。口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケを行い、胴部内面は粗い横方向へのハケ目調整を施している。胎土に細砂粒・雲母片を多く含み、焼成やや良好で、暗灰褐色をなす。

15は、張らない胴部から、頸部内面に稜線をつくり、あまり開かない口縁につくる甕片である。全体に薄手である。口縁外端はわずかに突出する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ調整を施し、内面はナデている。胎土に粗砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良で、暗褐色を呈する。

16は、底部外面がやや凸レンズ状にふくらむ類の甕下半部である。底径8.1cmを測り、胴部外面は雑な縦ハケ調整を施し、内面はナデる。底部内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は淡白褐色をなす。外面は二次火熱を受けて赤変し、煤も付着する。

17は、底部外面が凸レンズ状にふくらむ類の甕底部である。かなり小型品で、底径4.5cmを測り、胴部外面には細かい縦ハケ調整を施す。内面はナデる。胎土に粗石英粒・雲母片・長石粒を多く含み、焼成良好で、外面は茶色から灰黒色、内面は暗黄褐色をなす。



第 71 図 黑色包含層出土土器 (その 2) (縮尺1/3)

18は、袋状口縁壺片で、かなり屈曲はするが、外面に稜はつくらない。内外面横ナデ調整を施し、胎土に粗砂粒をかなり含む。焼成やや不良で、外面黒褐色、内面は灰褐色を呈する。

19は、外面丹塗りの袋状口縁壺で、袋部は強く屈曲し、外面に明瞭な稜をつくる類となる。丹塗りは僅かにしか残らないが、外面と袋部内面上端付近まで施している。胎土に粗砂粒をいくらか含む、焼成やや不良で、淡灰褐色を呈する。

20は、外面丹塗りの袋状口縁壺の頸～胴部である。全体に器壁が部厚く、作りもやや粗い。頸部下端外面に、断面三角凸帯を2条付ける。頸部径8.5cm、胴部最大径は24.3cmを測る。胴部外面上半には縦ハケがみられ、下半はナデかと思われる。凸帯部周辺は横ナデ、頸部内面下端には頸部接合による段状痕跡がみられ、胴内面上半には指オサエ痕が残る。丹塗りは、胴部上半に部分的に残るが、本来外面全体に施したものであろう。胎土に粗砂粒をかなり含む、焼成やや良好で、外面淡茶色、内面は黒褐色をなす。

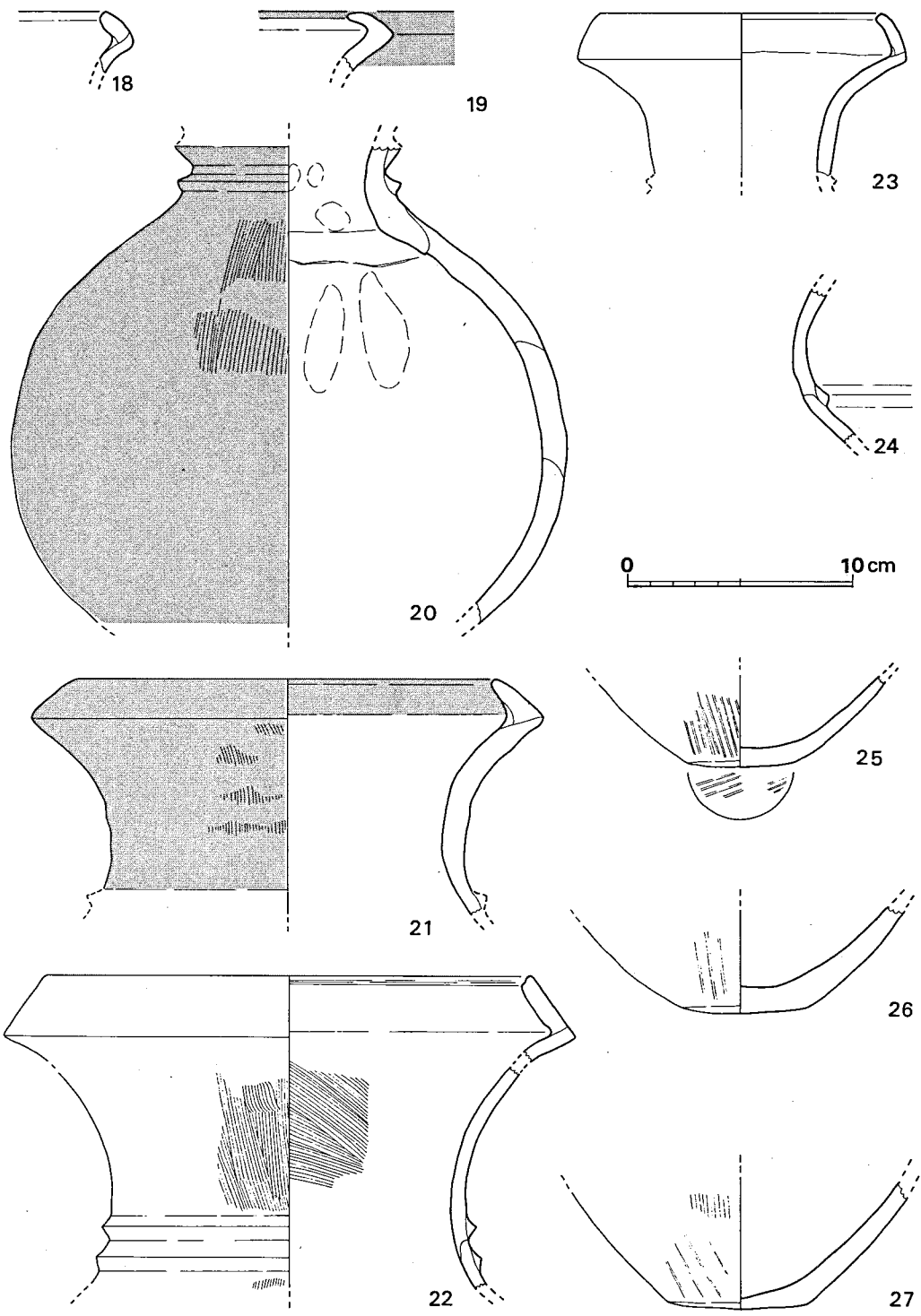
21は、外面丹塗りの、袋状口縁から変化した複合口縁壺である。口径18.3cm、頸部径15.5cmに復元される。頸部中途まで締まり、上方へ更に開き、短かく厚ぼったい口縁をつける。袋部外面にはやや不明瞭な稜をつくる。頸部外面下端には凸帯のはげた痕跡が認められ、断面三角凸帯が貼付されるものであろう。頸部外面は粗い縦ハケをナデ消しており、内面はナデる。丹塗りは外面各所と口縁内面までに僅かずつ残る。胎土に粗砂粒を多く含む、焼成良好で、淡褐色をなす。

22は、複合口縁壺で、外面に鋭い稜をつくり内傾する口縁につくる。頸部下半から上方に開いている。口縁端面には沈線が巡らされる。頸部下端に2条の断面三角凸帯を貼付する。口縁部と頸部とは直接接合しないが、明らかに同一個体であり、図上復元したものである。口径21.3cmを測る。胎土に粗砂粒多く含む、焼成良好で茶褐色をなす。口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はやや細かい縦ハケ、内面は斜めから横方向へのハケ調整を施す。

23は、小型の複合口縁壺で、口径12.5cm、頸部径7.7cmを測る。口縁はやや丸味を帯びて内傾する。頸は下端から上方へ開いてゆく。頸部下端には、断面三角凸帯が付くものであろう。内外面ともに器表磨滅して、調整は不明である。胎土に粗砂粒を僅かに含む、焼成良好で、淡茶色から灰黒色を呈する。

24は、21のような複合口縁壺となるかと考えられる頸部片である。胴部と頸部の接合部外面に断面三角凸帯を付ける。頸部中途から下半まで締まり、更に上方へと開くタイプである。全体に薄手で、内外面は磨滅して、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含む、焼成良好で茶褐色をなす。

25は、丸底に近い小さい底部につくる壺底部片である。底径4.5cmを測り、全体に薄手である。胴部外面は粗い縦ハケを施し、内面は丁寧にナデる。底外面には粗いハケ目がみられる。胎土に粗砂粒を多く含む、焼成やや良好で、内面灰黒色、外面は暗茶褐色をなす。



第 72 図 黒色包含層出土土器 (その 3) (縮尺1/3)

26は、丸底に近い小さい底部をつくる壺下半部である。底径5.3cmを測り、外面には縦方向の擦過痕がみられる。内面はナデ上げている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面黒色、外面は暗褐色をなす。

27は、小さい凸レンズ状底部をなす壺下半部で、底径6.0cmを測る。胴部外面上位には縦ハケを施し、下端近くはへらによるナデ上げ状の擦痕がみられる。内面は丁寧にナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面茶褐色、外面は淡白褐色をなす。

28は、複合口縁壺で、口径16.9cm、頸部径11.7cmを測る。頸部と胴部の接合部外面に断面三角凸帯を付け、頸部下半から上方へ開く。口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はわりと粗い縦ハケ、凸帯周辺は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を施す。内面はナデかと思われ、胴・頸部の接合痕が内面にみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

29は、内傾度の強い口縁につくる複合口縁壺である。口径27.0cm、頸部径19.0cm、胴部最大径29.2cmを測る大型品である。頸部は直線的にあまり開かずに延びる。頸部下端には高い断面三角凸帯を2条付け、更に胴部のやや下半に下がった位置に大きい口唇状凸帯1条を付ける。胴部と口・頸部は明らかに同一個体であるが直接に接合しないために、図上復元を試みたものである。口縁内外面は横ナデ、頸部内・外面はともにやや細かい縦ハケ調整を施す。上・下の各凸帯周辺は横ナデ、胴部外面は縦ハケ、底部近くの胴部外面はナデる。胴部内面は斜め方向へのハケを雑に行う。焼成はやや不良で、灰褐色を呈する。

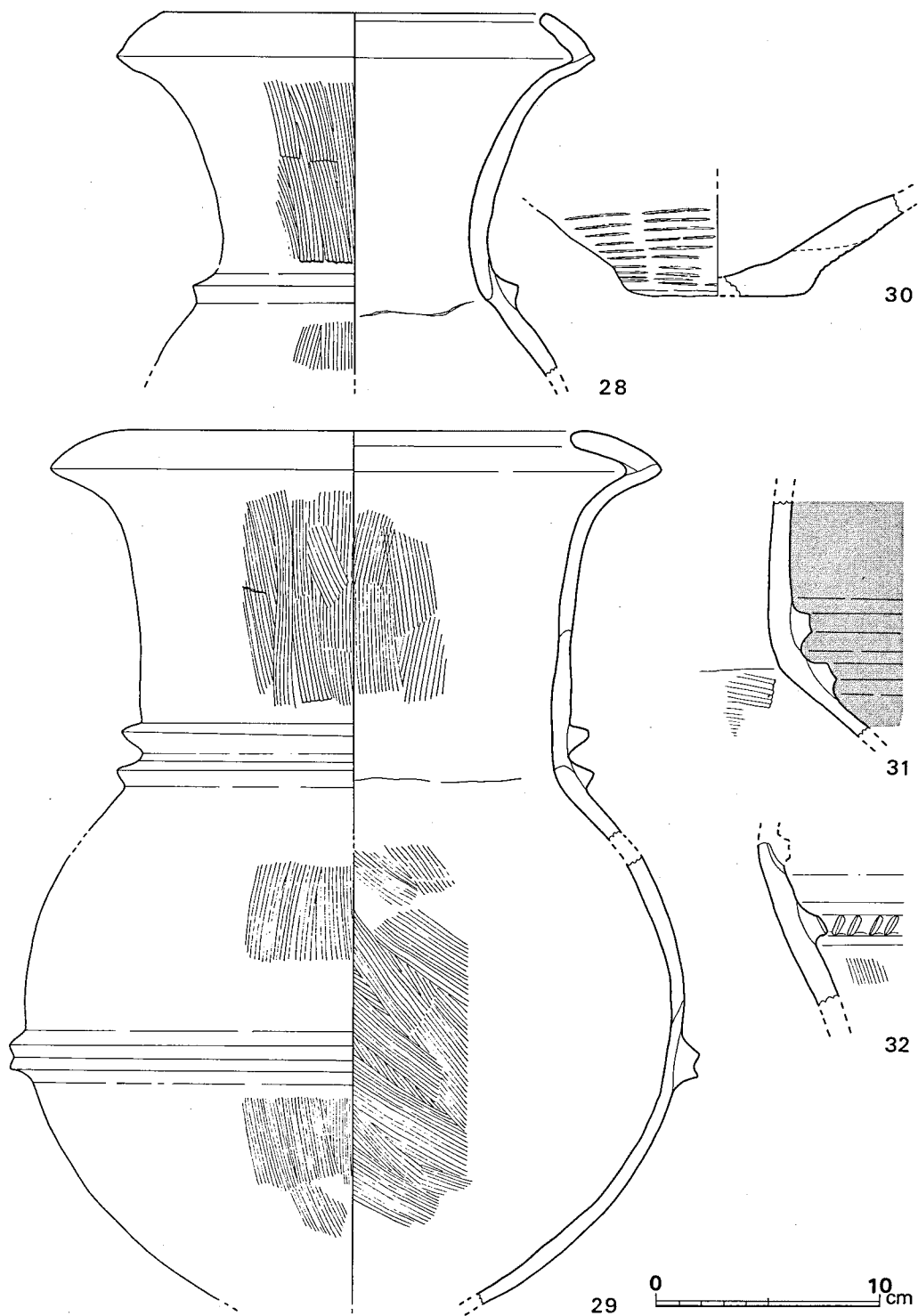
30は、小さく不安定な、凸レンズ状にふくらむ壺底部である。かなり大型品のものであり、外面には、粗い横方向の叩き目がみられる。内面は磨滅して調整不明である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成やや良好で、外面は茶褐色、内面は暗褐色をなす。底径8.2cmを測る。

31は、外面丹塗りの壺頸部片である。かなり大型品となりそうで、頸部は下端内面に稜をつくり、直線的に立ち上がる。外面には断面コの字状凸帯を2条巡らせる。頸部内面はナデ、胴部内面は横ハケの上をナデ消す。外面の丹塗りはわずかしか残らない。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面茶褐色、外面は白褐色を呈する。

32は、頸部外面とやや下方に、2条の断面コの字状凸帯を付けるやや大型甕片である。かなり磨滅しているが、胴部外面には縦ハケが残る。凸帯上面には斜めのへらによる刻目が巡らされる。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成やや良好で、外面淡褐色、内面は黒褐色をなす。

33は、複合口縁壺下半部であり、底部は凸レンズ状にふくらむというよりも丸底状に近く、小さく不安定である。胴部はやや扁平気味の球形状である。胴部中位に大きい断面三角凸帯を付ける。胴部外面はやや粗い斜め・縦ハケ調整を施す。内面はナデており、底部内面には指オサエ痕がみられる。底径7.8cm、胴部最大径は凸帯外端部で27.0cmを測る。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良である。内面は灰色から黒色をなし、外面は淡茶褐色を呈する。

34は、凸レンズ状にふくらむ底部となる壺胴部である。胴～底部の境目は33よりもはっきり



第 73 図 黑色包含層出土土器（その 4）（縮尺 1/3）

と稜線がみられる。底径8.5cm、胴部最大径27.3cmを測り、胴部外面にはやや粗い縦ハケ調整が施される。内面はナデており、胎土に粗砂粒をかなり含む。焼成やや良好で、外面は赤褐色、内面は黒褐色をなす。

35は、頸部内面中途に蓋受け状の突起を付ける大型壺片である。頸部径26.0cmに復元される。内面の突起は、大きい断面三角凸帯の上端を押さえてわずかに凹状としたもので、器壁も丁度この位置で上下が接合されている。外面は粗い縦ハケ、内面は粗い雑な横ハケを施し、内面突起部周辺は横ナデ調整を行う。胎土に粗砂粒を多く含む、焼成良好で、外面茶褐色、内面は淡茶褐色をなす。

36は、中途の屈折部から短く開く口縁につくる高杯杯部片である。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒をかなり含む、焼成良好で、内面淡黄褐色、外面は暗黄褐色を呈する。

37は、脚部上端から下方へ拡がってゆくタイプの高杯脚部で、中位に円孔を穿つものである。外面は縦ハケ、内面下半には粗い斜めのハケ調整を施す。内面上方にはシボリ痕がみられる。孔は2個現存するが、全周で4～5個配するものと考えられる。胎土には粗砂粒をわずかに含むのみで、かなり精良である。焼成良好で、淡茶褐色をなす。

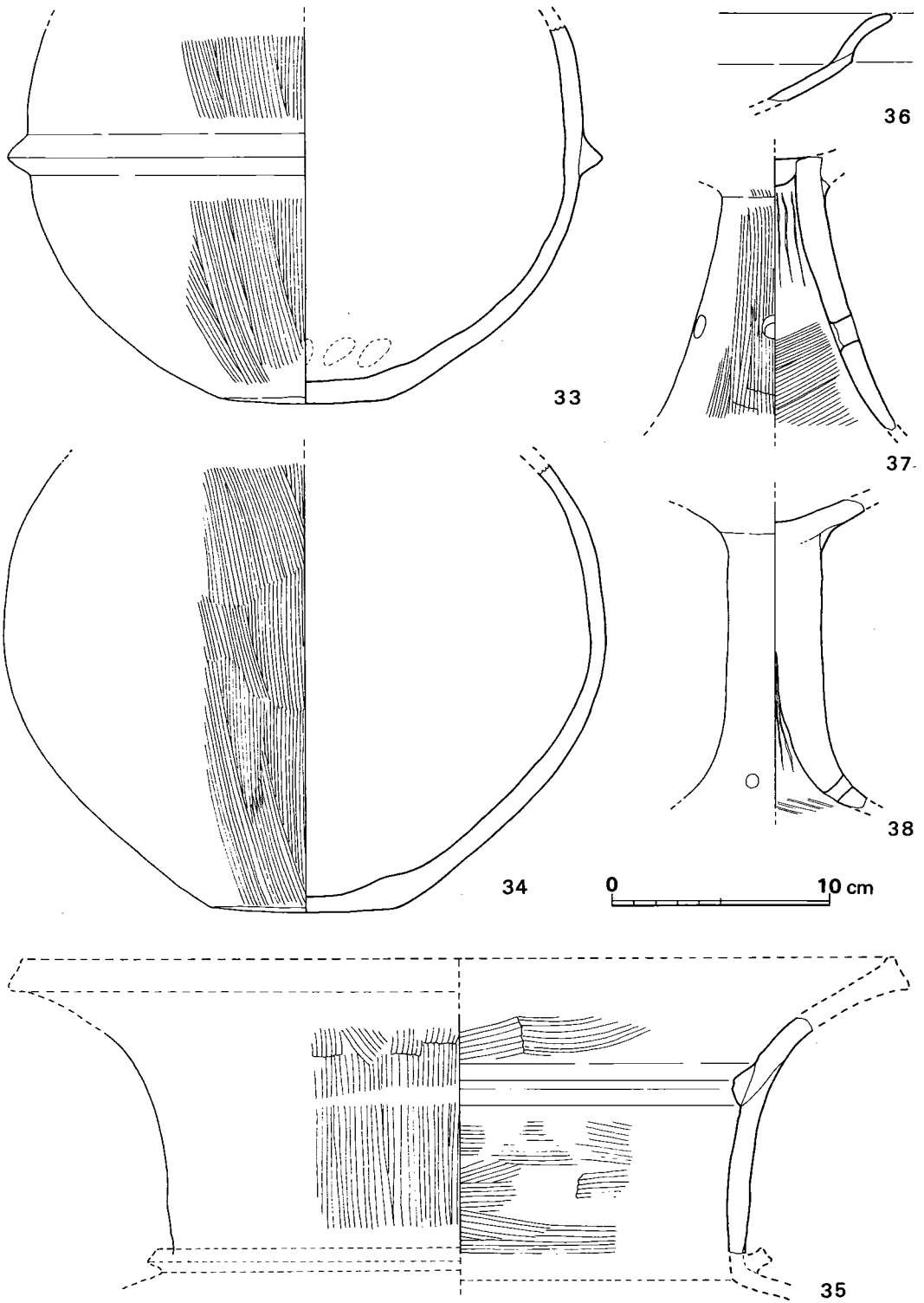
38は、長い脚柱がかなり充実するものである。脚柱径4.4cmを測り、裾への屈曲部に円孔を穿つ。孔の数は3個と推定される。脚柱部外面は縦へラ磨き、内面にはシボリ痕がみられ、裾部には粗いハケが施される。胎土に粗砂粒をかなり含む、焼成良好で、淡茶褐色をなす。

39は、長い脚柱がかなり充実するものである。脚柱径3.6cmを測り、下半から大きく裾拡がりになる。裾部への屈曲部に3個の円孔を穿つ。外面は縦へラ磨きを施し、内面には大きなシボリ痕がみられる。裾部内面には粗いハケが施される。胎土に粗砂粒を若干含む、焼成良好で、外面赤茶褐色、内面は茶褐色を呈する。

40は、短かめの脚部で、中途まで充実するものである。裾への屈曲部に円孔を穿つ。おそらく3個と考えられる。外面は磨滅するが、縦へラ磨きとか考えられる。内面にはシボリ痕がみられ、その上から縦方向の指ナデが施される。胎土に粗砂粒をかなり含む、焼成良好で、淡褐色を呈する。

41は、脚柱内部が充実しないタイプで、裾部は強く拡がる。脚柱外面上半は縦ナデ、以下裾部まで横ナデ、内面は横ナデ調整を施す。孔は認められない。胎土は精良で、焼成極めて良好である。外面は淡白褐色、内面は灰褐色を呈する。

42は、脚柱径5.3cmを測る大型のものである。充実しない脚柱内面上端の中央に深く細い小孔を有する。杯部の接合面が明瞭であり、脚部外面は磨滅するが縦へラ磨きかと思われる。内面にはシボリによる縦方向のシワがみられる。胎土には粗砂粒を僅かに含むのみで、焼成良好で茶褐色をなす。上述の小孔は、本例の他に以下43～45までにもみられ、いずれも細く、中心に



第 74 図 黑色包含層出土土器（その 5）（縮尺 1/3）

みられるものである。これは杯部の特に口縁部を接合して成形する際の、中心の印として竹串等突き刺していた痕跡かとも考えられる。そして仕上げの時に上から粘土を填めてふさいだために、下方だけが残ったものかと想像される。

43は、脚柱上端外側に杯部を接合し、中心部は上からその部分だけ粘土を充填したものである。やはり内面の中心に小孔がみられる。脚柱径4.7cmを測り、外面は縦へラ磨き、内面にはシボリによる縦ジワがみられる。胎土には粗砂粒がわずかにみられるのみで、焼成やや良好で、淡茶褐色をなす。

44は、脚柱径4.3cmを測り、やはり内面の中心に小孔がみられる。外面は縦へラ磨き調整を施す。内面にはシボリによる縦ジワがみられる。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、茶褐色を呈する。

45は、脚柱径4.0cmを測る小ぶりのタイプの高杯で、やはり内面の中心に小孔を有する。内外面ともに風化が著しく、調整は不明である。内面上端には棒で突いたような痕跡がみられ、シボリによる縦ジワも観察される。胎土には粗砂粒をわずかに含むのみで、焼成は良く、淡茶色を呈する。

46は、脚柱部の方を杯部底面に接合するタイプである。全面磨滅して調整は不明である。内面にはシボリによる縦ジワがみられる。胎土精良で、焼成良く、淡灰褐色を呈する。胎土、成形などから他例と比べて異質であり、土師器となる可能性も強い。

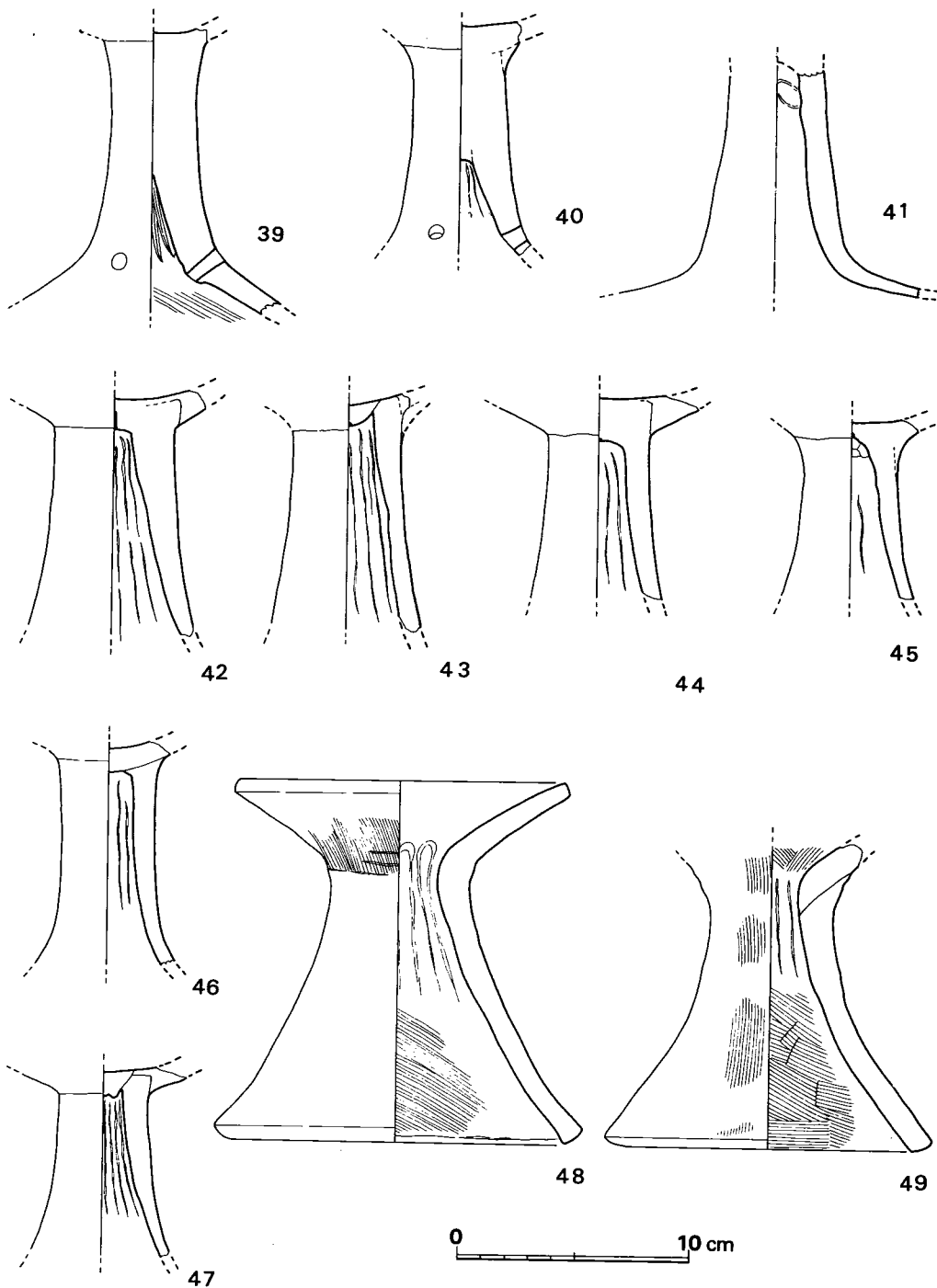
47は、脚柱径3.8cmを測るやや小型品で、土師器の可能性も考えられる。器表は風化して、調整不明である。内面にはシボリによる縦ジワが顕著である。胎土には粗砂粒をわずかに含むのみであり、かなり精製されている。焼成良好で、淡灰茶褐色を呈する。

48は、上半で強く締まり、上端部が大きく開くタイプで、器壁の厚いものではない。上端径14.3cm、器高15.6cm、下端径15.8cmを測る。上半部外面はわりと細かいハケ目、以下外面はナデる。内面下半は斜め方向のハケ調整を施す。締まった部分の内面はオサエナデがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、外面はほぼ全面に二次火熱を受け、赤茶色を呈する。

49は、48と同類の、上半で締まる類の器台である。下端径14.2cmを測り、外面には縦ハケを施す。内面上端と、下半には粗い雑な斜めハケ調整を行う。締まる部分の内面には、シボリによる縦ジワがみられる。胎土には粗砂粒多く含み、外面はいくらか二次火熱を受けて、淡褐色から赤茶色を呈する。

50は、厚手で、中位が柱状に近く、上半部でやや締まるタイプの器台である。口径13.7cm、器高17.4cm、下端径14.3cmを測る。上端部内外面は横ナデを行い、以下外面には縦ハケを施す。内面にはシボリによる縦ジワがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、外面には二次火熱を受けて、淡白褐色から赤茶色を呈する。

51は、厚手の、全体に凹凸がみられる器台である。上端部径10.5cmを測り、外面には指オサ



第 75 図 黒色包含層出土土器（その 6）（縮尺 1/3）

エ痕、内面には指オサエナデ上げ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶褐色を呈する。外面は二次火熱を受けている。

52は、厚手の、全体に凹凸がいくらかみられる器台である。下端部径は11.3cmを測る。外面下端付近には指オサエ痕がみられる。内面にはシボリによる縦ジワも残す。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で茶褐色をなす。外面に二次火熱を受ける。

53は、厚手で、外面に凹凸のみられる器台である。下端径11.5cmを測り、外面には粗い縦ハケがみられる。内面下端部は粗い横ナデ調整を施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、茶褐色をなす。外面には二次火熱を受けている。

54は、直口壺或いは鉢に付く脚部である。脚端径12.1cmを測り、外面には縦ハケを施す。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、灰～淡白褐色をなす。

55は、小型壺或いは鉢に付く脚部である。脚端径12.0cmを測り、低い脚部である。外面は細かいハケの上をナデ消しており、内面は途中でやや不明瞭な屈曲部の稜をつくり、以下にはハケ調整を施す。端部内外面は横ナデ、内面の稜の上方も横ナデがみられる。脚柱内面上方は指オサエ痕が残り、胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で、外面淡灰茶褐色、内面は暗灰褐色をなす。

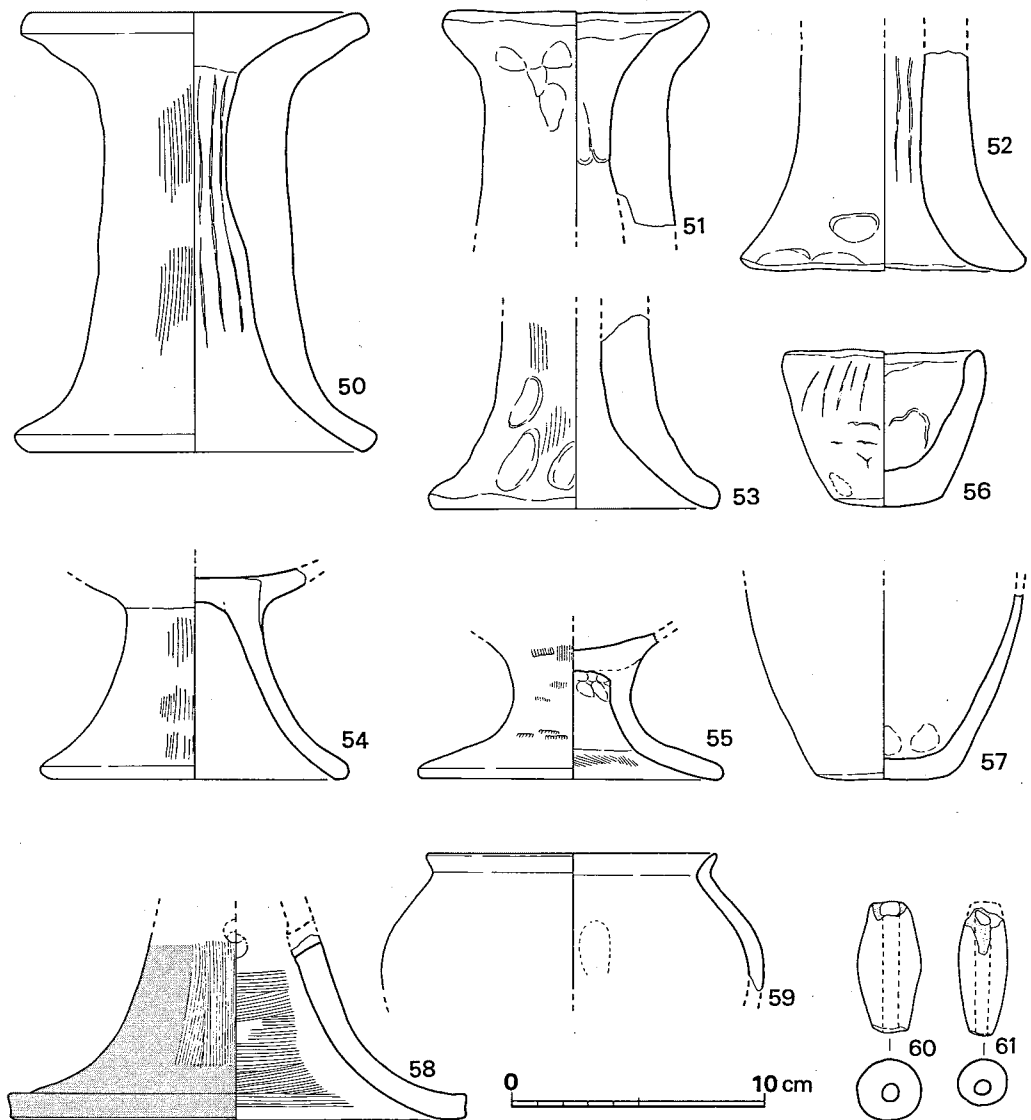
56は、全体にわりと丁寧な手捏ね状製品で、口径8.0cm、器高6.2cm、底径4.3cmを測る。器壁は厚く、外面には僅かな指頭圧痕、上半にはへらによる擦痕がみられる。胎土には粗砂粒をわずかに含むのみで、わりと精良である。焼成良好で、淡茶色から灰褐色を呈する。

57は、全体にわりと薄手のコップ状ミニチュア製品である。底径5.3cmを測り、胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、淡灰茶褐色を呈する。内外面ともに磨滅著しく、調整は不明である。底部内面に若干の指オサエ痕がみられる。

58は、外面丹塗りの脚部で、鉢或いは壺に付く類であろう。中位に円孔を穿つ。孔は2個所残るが、計4個所と考えられる。外面はやや細かい縦ハケ、内面は横ハケ調整を施す。脚端部外面は凹状をなし、裾部径18.0cmを測る。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面は淡褐色を呈する。

59は、口径11.4cm、胴最大径15.0cmを測る短頸壺である。口縁は短く外傾し、胴部は中程で強く張る。口縁内外面は横ナデかと思われ、胴部外面は磨滅しているが、上端部近くには縦へら磨きが僅かに認められる。内面はナデかと思われ、指オサエ痕も残る。胎土には粗石英粒を極くわずかに含むのみで、精良である。焼成やや良好で、外面は淡茶色から黒色、内面は淡茶色から灰褐色をなす。一応この項に掲載したが、5C代土師器の可能性を考える。また、器形・胎土より弥生前期～夜白期の可能性が強いという意見がある。孰れにせよ注意すべき一品である。

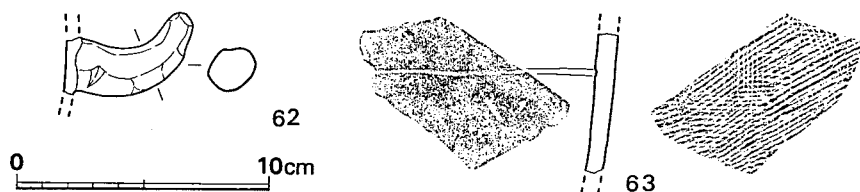
60は、紡錘形のタイプの土錘で、長さ5.3cm、径2.5cmの断面円形をなす。上端部を僅かに欠損するが、現存重量25.6gである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。



第 76 図 黒色包含層出土土器（その 7）（縮尺 1/3）

61は、やや細身の紡錘形のタイプの土錘で、長さ5.1cm、径1.9cmの断面円形をなす。先端部を欠損し、現存重量12.7gを量る。胎土に細砂粒多く含み、焼成やや不良で、淡灰白色を呈する。

62は、全体に手捏ね状の、細身で長い把手部分である。やや薄手の器壁の裏に付けられる類で、軟質紅陶系の朝鮮半島に系譜を発するものであろう。胎土に粗砂粒を僅かに、細砂粒はかなり含む。細雲母片が極めて多くみられる。焼成は良好で、茶褐色から一部黒褐色（下端部）をなす。



第 77 図 黒色包含層出土土器 (その 8) (縮尺1/3)

63は、金海式灰陶片で、底部近くの破片かと考えられる。35号住居跡南包含層出土品で、弥生後期後半代とした35号住居跡に伴う可能性が高い。外面は平行線叩きを交叉させており、幅16mm、長さ40mm前後の9条を1単位とする細かい叩き目である。内面は丁寧なナデ仕上げを施し、横位に浅い沈線がみられる。胎土には精選された粘土を使用し、焼成は硬質にて良好であり、灰色を呈する。

以上の弥生時代後期に属する包含層出土土器について若干の検討を加える。

甕については、1や6のように後期中頃まで上げられそうなものを除いて、他の殆んどは後期後半代の所産である。また内面にハケを施し、薄手の口縁につくる10~15は胴部もやや張りが少なくなり、終末期の様相をみせる。甕のうちでも、9は注目すべきもので、焼成前に底部中央に穿孔するという、当初からの甕使用が意図されていたことを示す類である。やや下降して土師器に多孔系の甕が出現するが、その先駆的位置付けが可能である一品である。

壺は、袋状口縁壺とそれから発展変化した複合口縁の壺が量的に大多数を占める。18~21は外面丹塗りのものが多いが、厚手で、口縁部は既に往時の袋状口縁の形態を残さない。後期中頃とした31号住居跡の袋状口縁壺も厚手で不細工であったが、口縁部の形状を比較すると、18~21のものは更に後出する形態を示し、これらは後期後半でも中頃に近い時期と考えることが出来る。複合口縁壺は大・中・小と各器種がみられるが、口縁が内湾気味に強く内傾する28・29と、やや薄手で直線的に内傾する22の類とに分類される。前者は端部が丸く、各凸帯が異様に大きく、後者は普通の小さめの凸帯で口縁外端に沈線を入れており、後者がやや後出的な様相をみせる。孰れも弥生後期後半の範囲に含まれるものであろう。35の大型壺は、蓋受け部状の突起を内面に付けるもので、福岡市博多駅地下出土品(註1)、原の辻遺跡出土品等に類似品を見ることが出来る。時期的にも他出土品と同様に弥生後期後半乃至終末期に位置付けられるものであろう。

高杯は、杯部の例が36の1点のみで他は全部脚部のみで、全容を知り得ないところではあるが、46の土師器を除いて、他はすべて弥生後期後半乃至終末期に含まれ得るところであろう。36は口縁部が短く、後期後半代である。37は孔の位置が高く、他例と異なる器形をなすが、後期

中頃近くまで上がるものであろう。38～40の脚柱が充実するタイプは、弥生終末期前後に通有にみられるものではなく、やや古相を示すものかと考えられ、やはり後期後半代のものであろう。42～45・47のうち大型の長い脚部となるものは、弥生後期終末期の所産となろう。

器台は、上半で締まり、やや薄手でハケ目を施すタイプの48・49が古相を示し、後期中頃まで溯る可能性も有し、その他の厚手でやや精製のもの、厚手で手捏ね的なものなどは、やはり後期後半代を中心とするものであろう。

脚付鉢乃至壺の脚部のうち、58は丹塗りでわりと精製であり、後期中頃まで上げられるものであろう。

59の短頸小壺は、既述の如く、夜臼期～弥生前期に属する可能性も考えられるところであり、今後の検討に期する処である。

62の朝鮮半島系の把手片は、各文献を調べたが、まさにぴったしという酷似品は見当らなかったが、奈良期のものにしては異類の形態であり、更に胎土への雲母細片の多量混入が異様な感じを与え、やはり、渡来的様相が強いと判断したい一品である。

63の灰陶も、器形としていまひとつはっきりしない点もあるが、明らかに手法・胎土・焼成が日本製須恵器と異なる。更に、包含層出土品ではあるが、既述の如く、弥生後期後半である35号住居跡のものである可能性が強いものである。近年の前原町三雲遺跡調査成果にもこの手の陶質土器出土が伝えられており、今後資料が増えるに従ってそれらとの年代的・形態的比較検討、更に半島との比較検討が必要になってくるであろう。

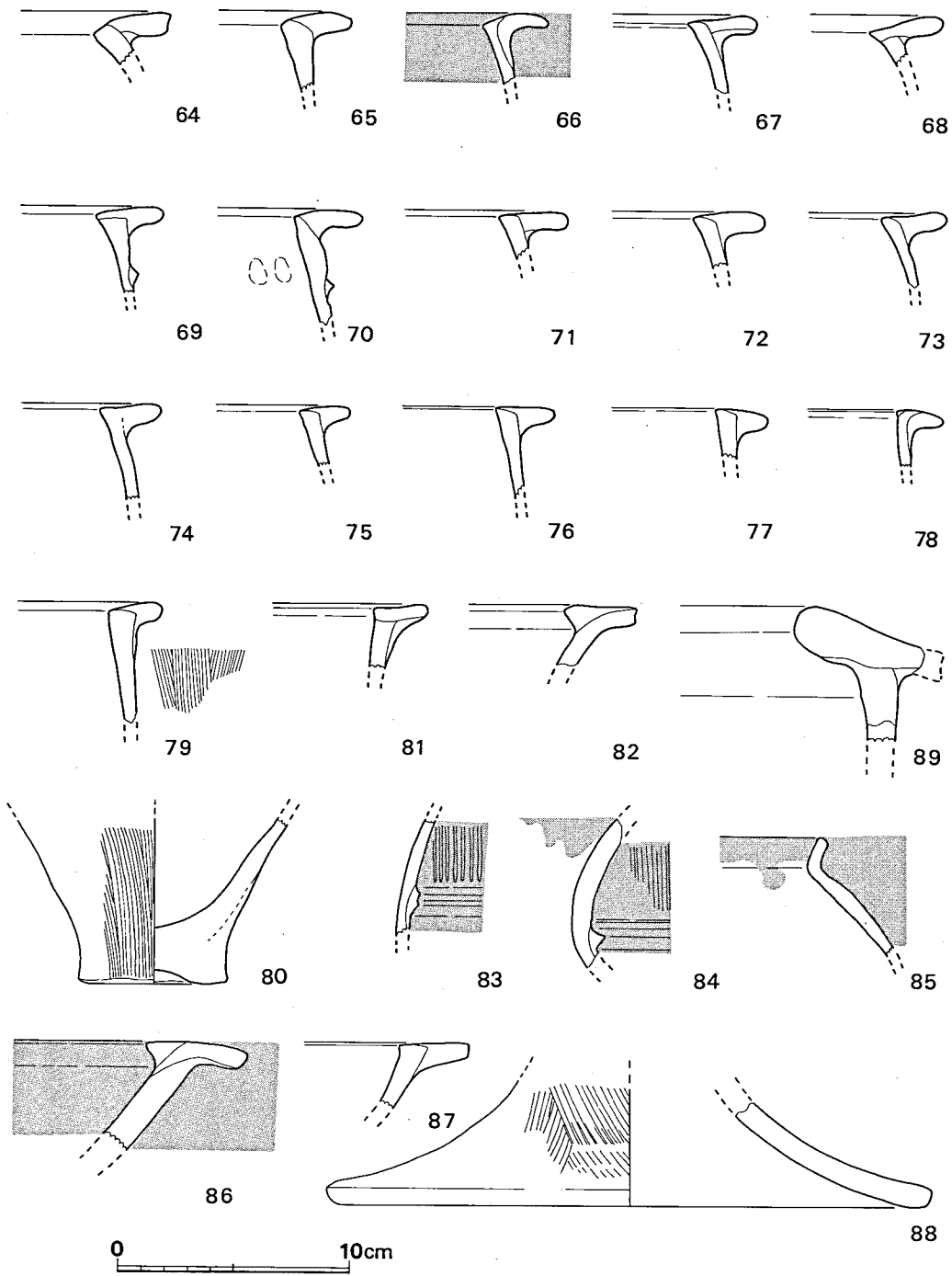
註1) 橋口達也「宮の前遺跡——福岡市拾六町宮の前F地点の調査——」 1971 宮の前遺跡調査団 中の〔追補〕に福岡市犬飼(現博多駅)出土の土器として掲載されている。

弥生時代中期の土器 (第78図)

64は、張る胴部から口縁内端が突出し、やや鋭角に屈曲し、内側へ傾斜する口縁部につくる甕口縁片である。口縁外端面はわずかに凹状となり、内外面ともに、横ナデ調整を行う。胎土には、わずかに粗砂粒を含むのみで、かなり精選された粘土を使用している。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

65は、あまり張らない胴部から、口縁内端部は殆んど突出せず、やや厚手の端部の丸い口縁部を付ける。口縁部上面は丸味をおびて、中途から内側へ傾斜する。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成は良好で、赤茶色をなす。

66は、丹塗りの甕片で、口縁内端部はあまり突出せず、やや薄手の、上面が丸味をおびて、中途から内側へ傾斜する口縁につくる。内外面ともに横ナデ調整を施し、胎土には粗砂粒をいくらか含むが、やや精良である。焼成はやや良好で、地色は暗褐色を呈する。丹塗りは外面は



第 78 図 黑色包含層出土土器 (その 9) (縮尺1/3)

消えているが、内面まで施している。

67は、口縁内端が鋭く短く突出する甕口縁片である。口縁上面は途中でへこみ、内側へ傾斜している。口縁内外面ともに磨滅するが、横ナデかと思われる。口縁外下端面と胴部外面には煤が付着する。胎土には粗砂粒を僅かに、細砂粒をいくらか含むが、かなり精良であり、焼成やや良好である。内面淡茶褐色、外面は淡褐色から暗褐色をなす。

68は、口縁内端部が鋭角に尖り、口縁上面は内寄りへこみ、内側へ傾斜する。口縁内外面ともに横ナデ調整を施し、胎土に粗砂粒をかなり含む。焼成やや良好で、暗茶褐色を呈する。

69は、口縁内端部がやや鋭角となり、わずかに上面が内側へ傾斜する甕口縁片である。口縁下外面に断面三角凸帯を付ける。内外面ともに磨滅して調整不明である。口縁上面の外側寄りには煤がこびりつく。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

70は、口縁内端部が突出せず、口縁上面は丸味をおびて、中途から内側へ傾斜する甕口縁片である。口縁下方外面にいくらか小さめの断面三角凸帯を付ける。口縁内面上端部から、外面凸帯部下までは横ナデ調整を施す。胴部内面は丁寧にナデており、指頭圧痕がみられる。胎土には、細砂粒をかなり含むが、大旨精良であり、焼成良好で茶褐色をなす。

71は、上面が直線的に延びて、わずかに内側へ傾斜する甕口縁片である。口縁外端部は丸くつくる。口縁内外面ともに磨滅著しく、調整不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、淡茶褐色を呈する。

72は、あまり突出しない口縁内端部につくる甕口縁片である。口縁上面の内側寄りでわずかにへこみ、外端部は丸くつくる。器表内外面ともに磨滅著しく、調整は不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、淡赤茶色をなす。

73は、口縁内端部がやや鋭角に張り出し、上面は全体にへこみ、内側へわずかに傾斜する。器壁は薄く、内外面ともに磨滅著しく、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。

74は、口縁内端部がやや鋭角に張り出し、上面は内側寄りにへこみ、内側へわずかに傾斜する。内外面ともに磨滅しており、調整は判らない。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

75は、口縁内端部は突出せず、上面幅の狭い小ぶりの口縁につくる甕片である。上面はわずかに内側へ傾斜する。外面から口縁内端直下までは横ナデ調整を施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成は良好で、淡褐色を呈する。

76は、口縁内端は突出せず短かい逆L字状口縁をなす。口縁上面はほぼ水平で、内外面ともに横ナデ調整がみられる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶色を呈する。

77は、短く厚い口縁につくる類で、口縁上面は外側へ傾斜する。内端部はわずかに突出する。内外面ともに磨滅し、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面黒色、外面は赤色から灰黒

色を呈する。

78は、短く、上面が外側へ傾斜する口縁をなす。内端は小さく突出する。内外面ともに横ナデ調整を施す。径20cm前後の小型の広底甕となるかと推定される。胎土には粗・細砂粒をいくらか含み、焼成不良で灰色をなす。

79は、短く厚手の口縁を付ける。口縁上面はいくらか内側へ傾斜し、内端部は張り出さない。口縁内外面は横ナデ調整、胴部外面には縦ハケ調整を施す。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、外面黒褐色、内面は淡褐色を呈する。

80は、いくらか充実した甕底部である。底部外面は中央が丸くへこむ。胴部外面はやや目の細かい縦ハケを整然と施す。内面はナデている。底部径6.5cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面黒褐色、外面は赤茶色をなす。

81は、短い口縁につくる壺片である。1号井戸埋土中に混入していたものである。口縁上面はへこみ、内側へ傾斜する。内端は極くわずかに突出しかけている。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、淡茶褐色をなす。

82は、未だ口縁が短めの、鋤先口縁壺片である。口縁上面はへこみ、外端面も凹状となる。内外面ともに磨滅しており、調整不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は不良で、暗茶灰黒色を呈する。

83は、外面丹塗りの壺の頸部中途に口唇状凸帯を付ける類である。凸帯以上には、縦方向のへう暗文がみられる。内面は丁寧なナデる。器壁は薄く、胎土も精良で、全体に精製品である。焼成良好で、内面は淡茶褐色を呈する。

84は、外面丹塗りの壺の頸部下端に断面三角凸帯を巡らせる類である。頸部外面にはやや粗い縦ハケがみられる。丹塗りは現存頸部上端部まで垂れたような状態で施されている。胎土精良の精製品であり、焼成やや良く淡灰褐色を呈する。

85は、外面丹塗りの短頸壺片である。口縁は短く外傾し、全体に薄手である。丹塗りは、口縁内面から部分的に胴内面上端にまで、垂れたような状態でみられる。胎土には細砂粒をわずかに含むが、かなり精良であり、焼成やや不良で内面は灰褐色をなす。

86は、内外面丹塗りの鋤先状口縁の高杯である。口縁外端はやや垂れ下がり、杯部器壁はかなり部厚い。丹塗りは器表磨滅のためごく部分的にしか残らないが、内外面に施したと考えられる。胎土に粗砂粒をわずかに含むがかなり精良で、内面白褐色、外面は暗褐色をなす。

87は、口縁内端が突出せず、上面は水平をなす高杯片である。杯部がやや深い器形をなす。内外面ともに横ナデ調整を施している。胎土に粗砂粒を僅かに含むが大旨精良であり、焼成やや良好で、暗茶褐色をなす。

88は、大きく八の字形に開く蓋形土器で、口径26.0cmを測る。端部はやや丸味をもち、全体に厚手である。外面にはやや粗い縦ハケを施し、端部内外面は横ナデ、内面は丁寧なナデを行

う。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色をなす。

89は、甕棺口縁片である。外端部を欠損するが、口縁上面は外側へ傾斜し、内端部は長く厚く、丸味を帯びる。器表は著しく風化して調整不明である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、外面淡赤褐色、内面は淡灰褐色をなす。

以上の弥生中期土器は、包含層出土遺物全体の量からすると前期土器よりも少ない。しかし、中期前葉の土器を中心としながらも、初頭に近いものから、後葉に至るまで細々と連続するようである。64は中期末の内傾する口縁から強く屈曲して胴が張る特徴をよく示しており、65・66はやや古く中期後半代であろう。口縁が長く、内端が強く張り出す67・68などは中期中葉のものであろう。他の78までは、口縁もそれほど延びきらず、中期前葉の範囲でおさえられよう。79・80・81は、口縁部も短く、中期初頭に近い様相をみせる。83は中期後半か。87は中期前葉とされよう。89は中期前葉の甕棺片であり、遺跡周辺部の何処かにこの時期の墓地が存在するものと推定される。

弥生時代前期の土器（第79～85図）

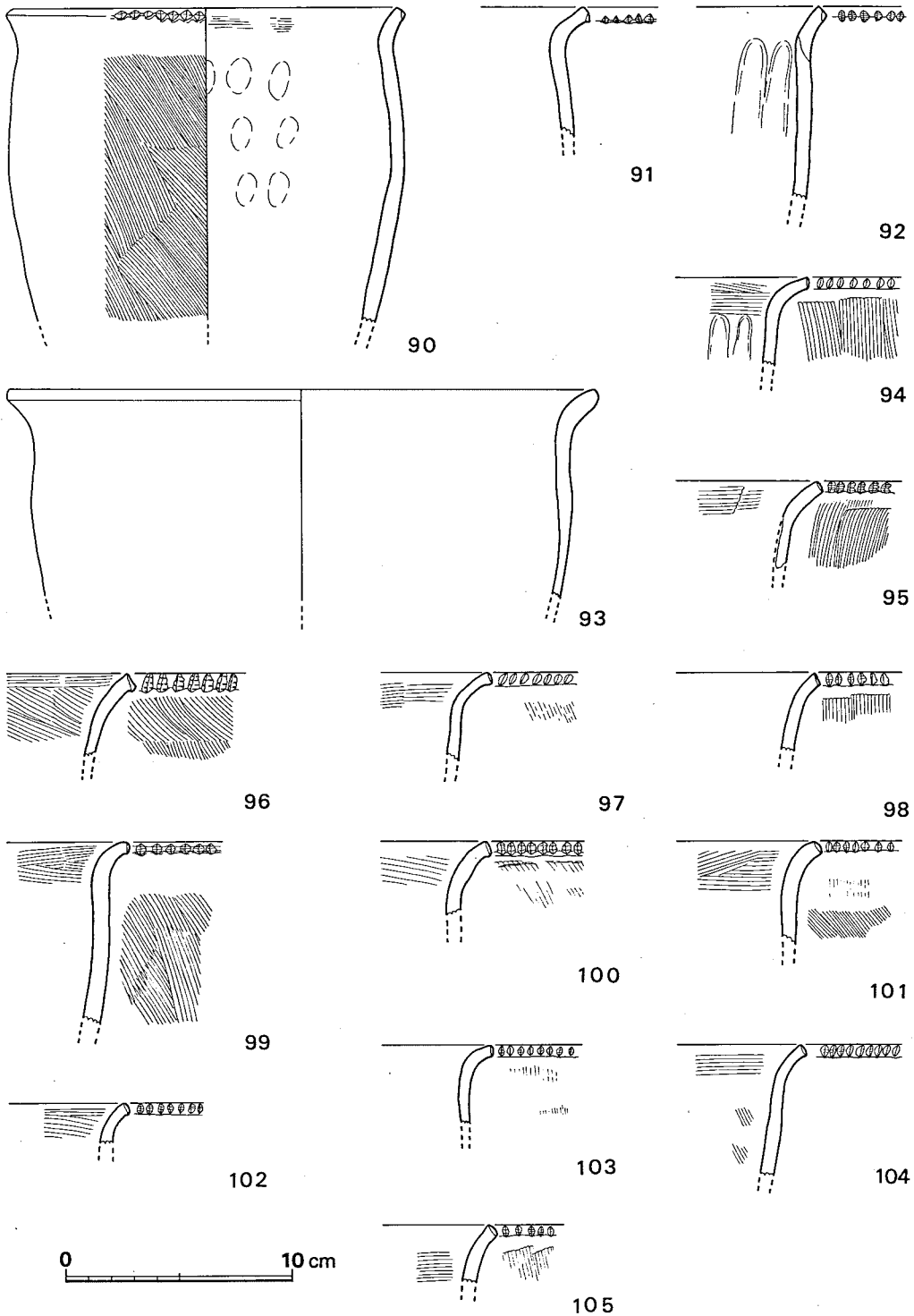
90は、あまり外反しない如意形口縁につくり、口縁外下端に刻目を密に巡らす。口径17.5cm、胴部最大径17.4cmを測る小型甕である。胴部はあまり張らず、口縁内面には横ハケを施し、その上から口縁内外面を横ナデしてハケを消す。胴部外面には細かい斜めハケを施す。胴部内面には指オサエ痕が横に連続し、丁寧なナデを行う。刻目はおそらくハケ工具でしたものと思われるが、中の条線は、はっきりしない。胎土に粗砂粒かなり含み、焼成良好で、口縁内面は茶褐色、以下胴内面上端は淡黄褐色、胴最大径付近から以下の内面は炭化物が付着して暗黒色をなす。外面上半は煤が付着して暗褐色をなし、外面下半は茶褐色を呈する。

91は、いくらか張る胴部からやや強めに屈曲反転する口縁部外下端に刻目を巡らすものである。口縁内外面は横ナデ、胴部内外面はナデている。刻目はハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面淡褐色、内面は淡白褐色を呈する。

92は、張らない胴部から、僅かに外に開く口縁外下端に刻目を巡らす甕片である。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は部分的に磨き状にみえる丁寧なナデを施し、内面には指ナデ上げ痕がみられる。胎土に粗石英・雲母片多く含み、焼成良好で、外面暗褐色、内面は淡褐色をなす。

93は、張らない胴部から如意形に開く口縁につくる。器表に酸化鉄がこびりつき、内外面ともに風化が著しいために口縁端の刻目の有無すら判からない。復元口径26.0cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で淡褐色をなす。

94は、張らない胴部から外反して長めに開く甕口縁片で、口縁端部面にやや右斜めの刻目を巡らす類である。外面には細かい縦ハケ、口縁内面には横ハケ調整を施す。胴部内面には指オ



第 79 図 黑色包含層出土土器 (その10) (縮尺1/3)

サエナデがみられる。刻目部分は磨滅しており、詳細は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は淡茶褐色、外面は煤が付着して暗褐色を呈する。

95は、張らない胴部から外傾して開き、外端面に刻目を巡らす甕口縁小片である。口縁内面には横ハケ、外面にはやや細かい縦ハケを施す。刻目は明らかな粗いハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、暗褐色を呈する。

96は、張らない胴部からゆるく外傾状に開く甕口縁片である。口縁外端面はやや広く、粗いハケ工具端による大きい刻目を施し、下端は刻目押圧によって僅かに下垂する。口縁内面上端は横ハケ、以下の口縁内面は斜めハケ、外面は斜めハケ調整を施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面暗茶褐色、外面は灰黒色を呈する。

97は、体部からゆるやかにやや長く屈曲・外反する甕口縁片である。端面に右斜めの刻目を巡らす。如何なる工具で施したものか明瞭でない。口縁内面には粗い横ハケ、口縁内外面横ナデ、外面上半は斜めハケの上をナデ消す。胴部内外面はナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、外面には煤付着して黒色、内面は淡茶色をなす。

98は、わずかに外傾する程度の甕口縁片である。端面には目の粗いハケ工具による刻目を巡らせる。内面はナデ、外面には細かい縦ハケを施すが、下半は消える。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、淡黄白褐色を呈する。

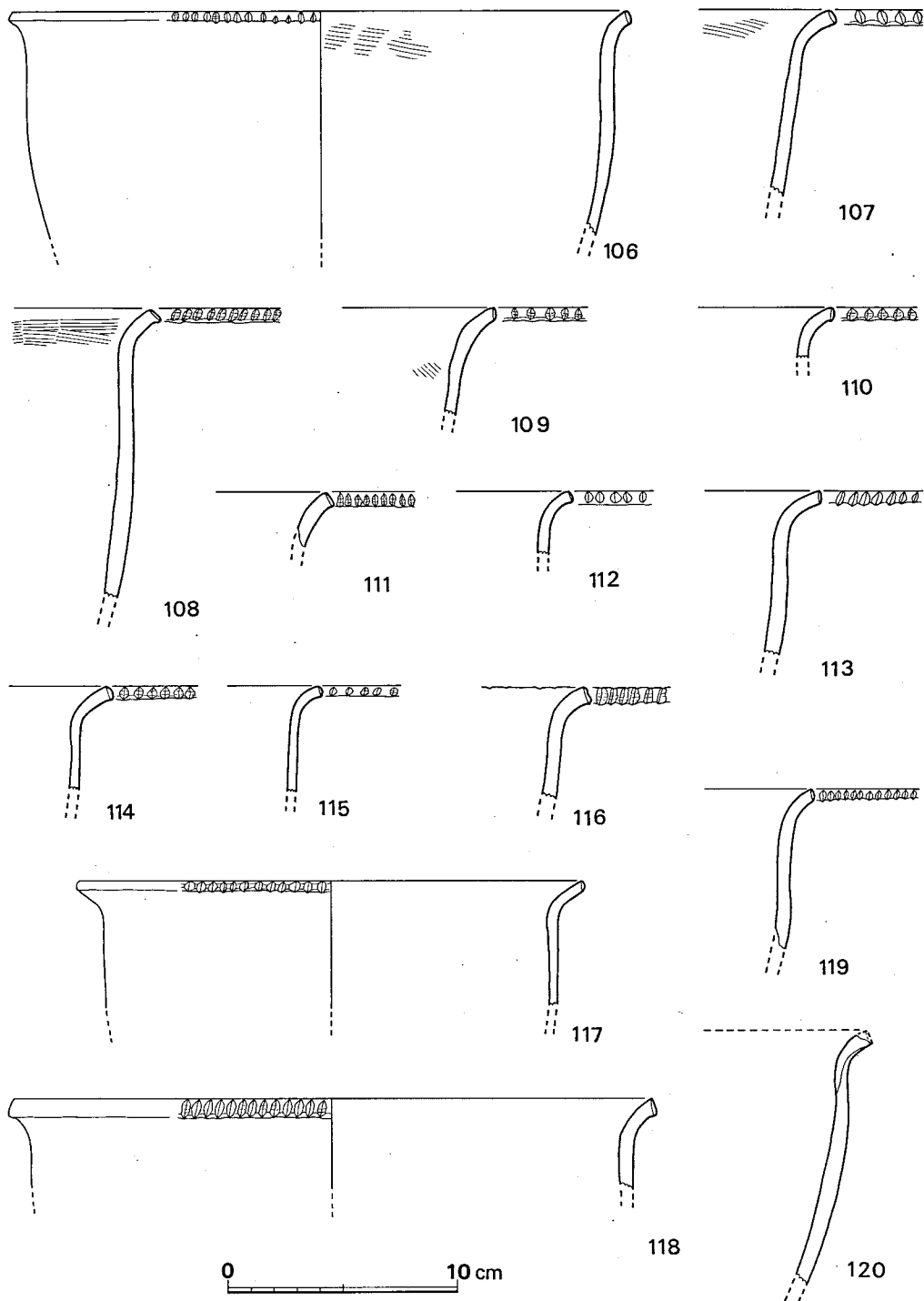
99は、やや厚手の胴部から丸く短く外反する口縁端面に刻目を巡らす甕小片である。口縁端部は丸くおさめており、刻目は明らかなハケ工具端によるものである。口縁内面は粗い横ハケを施し、胴部外面は斜めハケを施す。胴部内面と口縁外面はナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面には煤が付着して暗赤黒色をなし、内面は淡茶色を呈する。

100は、胴部からゆるやかに開き、やや広い端面をつくる甕口縁片である。口縁内面には粗い横ハケ、外面は粗い斜めハケの上に雑な横ヘラ磨きが施されている。口縁端面には目の粗いハケ工具端による刻目がやや密に巡らされる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面灰黄褐色、外面は暗褐色をなす。

101は、胴部からやや厚くゆるやかにわずかに外反する口縁端面に刻目を巡らす甕片である。口縁内面横ハケ、以下内面はナデる。口縁外面は縦ハケの上をナデ消す。胴部外面は細かい斜めハケ調整を施す。刻目は不明瞭ながら、ハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、外面は煤が付着して暗褐色をなす。内面は灰褐色である。

102は、短く外反する口縁外端面に刻目を巡らせる甕小片である。口縁内面に粗い横ハケを施し、外面は横ナデがみられる。刻目はハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面黄茶褐色、外面は淡褐色をなす。

103は、胴部から丸く短く外反する口縁端面に刻目を施す甕口縁部小片である。口縁部内面は横ナデ、胴部内面はナデる。外面は縦ハケの上をナデ消している。刻目はハケ工具端によるも



第 80 図 黒色包含層出土土器 (その11) (縮尺1/3)

のである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は茶褐色、外面には煤が付着して暗褐色を呈する。

104は、胴部からわずかに外傾気味に開く口縁部外端面に刻目を巡らせる甕口縁片である。口縁内面には横ハケを施し、胴部外面は丁寧なナデ、内面は斜めハケの上をナデ消す。口縁内外面は横ナデを行う。刻目は不明瞭であるが、ハケ工具端によるもので密に施している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面茶褐色、内面は白茶褐色を呈する。

105は、胴部からわずかに外傾気味に開く口縁端面に刻目を巡らせる甕片である。口縁内面には横ハケ調整、外面には縦ハケ、口縁端内外面は横ナデを行う。刻目は深く、ハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好、内面は淡褐色、外面は暗褐色を呈する。

106は、口径26.5cmを測り、ゆるやかに外反する口縁につくる甕である。頸部内面には粗い横ハケを施し、口縁内外面横ナデ、胴部内面は丁寧なナデ、外面も丁寧にナデている。刻目はハケ工具端によるが中の条線は明瞭ではない。胎土に粗石英・雲母・長石をかなり含み、内面は暗褐色、外面は煤のせいか黒味をおびる。

107は、直線的で張らない胴部から、屈折するようにいくらか開く口縁につくる。口縁外端面には刻目を施すが、磨滅して詳細は不明である。口縁内面は粗い横ハケ、口縁外面は横ナデ、胴部内外面はいずれも丁寧なナデが行われる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、外面は黒色、内面は淡褐色を呈する。

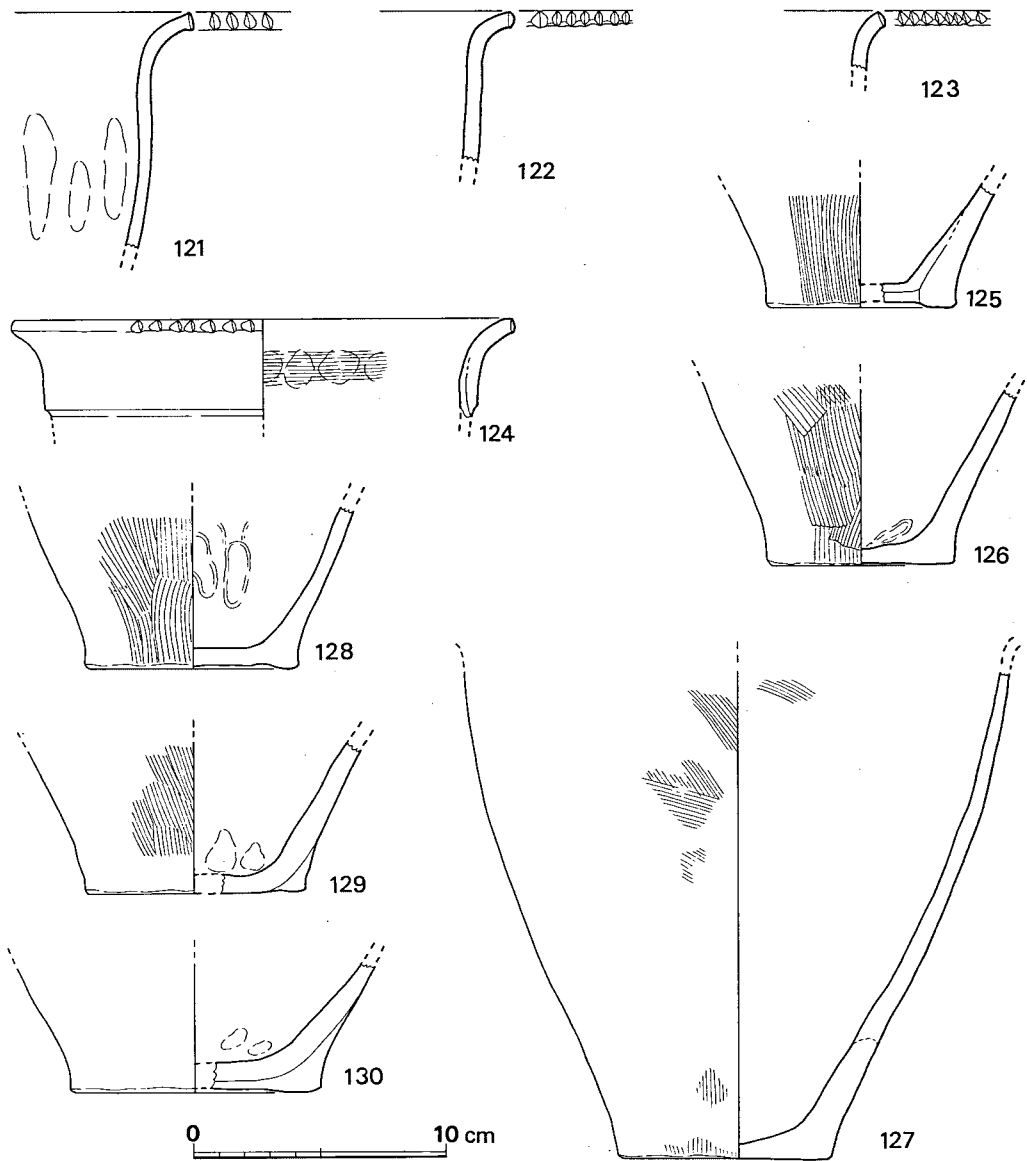
108は、張らない胴部から、短く外反する口縁端面に刻目を巡らす甕片である。口縁内面には粗い横ハケ、口縁内外面は横ナデ、胴部外面は磨きの的な感じもする丁寧なナデを施す。胴部内面は磨滅して調整不明である。刻目はやや右斜めの、ハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面淡灰褐色、外面は暗褐色から黒褐色を呈する。

109は、胴部からゆるやかに開く程度の甕口縁片である。口縁外端面に刻目を巡らせる。内面はナデるが、わずかに斜めハケが残る。外面は磨滅して調整不明である。刻目はやや不明瞭であるが、目の粗いハケ工具端によるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で暗褐色から茶褐色をなす。

110は、口縁が丸く反転して開く甕口縁である。外端面にはハケ工具端による刻目を巡らす。内外面ともに磨滅しており調整不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面淡褐色、外面は暗褐色をなす。

111は、外傾状にわずかに反転して開く甕口縁片である。口縁外端面には、目の粗いハケ工具端による刻目が巡らされる。口縁外面横ナデ、内面はナデている。胎土に粗砂粒をいくらか含むが、わりと精良である。焼成良好で、内面淡白褐色、外面には煤が付着して暗褐色を呈する。

112は、薄手で丸く外反して開く甕口縁片である。口縁外端面には刻目を巡らす、磨滅して詳細は不明である。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、



第 81 図 黒色包含層出土土器（その12）（縮尺1/3）

焼成やや不良である。外面暗灰色、内面は淡茶色から淡褐色を呈する。

113は、胴部からやや長く丸味を帯びて開く甕口縁片で、外端面にはわずかに右斜めの刻目を巡らす。内面は磨滅するが、外面胴部は丁寧なナデが施されており、破片の下位にはわずかに3条の横へラ磨きが認められる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は淡白褐色、外面は灰黒色から淡褐色を呈する。

114は、口縁がやや長く外反する甕片である。口縁外端面にはハケ工具による刻目が施される。口縁内外面横ナデ、胴部内面はナデており、外面は縦へら磨きかとも思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、内面は茶色、外面は暗褐色から茶色を呈する。

115は、張らない胴部から丸くわずかに外反する口縁につくる甕片である。口縁外端面には不明瞭であるがハケ工具端による刻目を施す。内面は磨滅して調整不明である。口縁部外面は横ナデ、以下胴部外面は丁寧にナデている。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面は白褐色をなす。口縁内上端から外面には煤が付着して、暗褐色をなす。

116は、胴部から丸くわずかに外反する口縁につくる甕片である。広くなる口縁外端面には、ハケ工具端による大きい刻目が巡らされる。口縁内外面は横ナデ、胴部は内外面ともに丁寧にナデている。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で内面は淡黄褐色、外面は黒色をなす。

117は、口径22.0cmを測り、器壁が薄く、張らない胴部から屈曲して外反する口縁につくる甕片である。口縁外端面にはハケ工具端によると考えられる刻目が巡らされる。口縁内外面は横ナデ、胴部内面は磨滅して調整不明である。胴部外面は丁寧にナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面暗褐色、内面は淡白褐色を呈する。

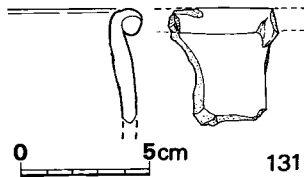
118は、いくらか外傾する程度の口縁につくる甕片である。復元口径28.0cmを測り、口縁端外面にはハケ工具端による大きな刻目が巡らされている。口縁内外面は横ナデを施し、胴部は内外面ともにナデている。胎土には粗砂粒を多く含み、焼成やや不良であり、外面は黒色、内面は暗褐色から淡褐色を呈する。

119は、ゆるやかに開く口縁部につくる甕片である。口縁端外面には刻目を密に巡らせている。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗・細砂粒を多く含み、内面淡褐色、外面は暗褐色を呈する。

120は、口縁部がゆるやかに外反する甕片で、先端部が欠損しているため、刻目の状態は不明である。口縁外面は横ナデ、口縁～胴部の内面はナデており、胴部外面も丁寧にナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、暗褐色乃至黒褐色を呈する。調整・器形より他と同類の板付Ⅰ式と考えられる。

121は、胴部から丸味を帯びてやや長めに外反して開く口縁部につくる甕片である。口縁外端面には左斜めの刻目を巡らすすが、これはハケ工具端によると考えられるが詳細は不明である。口縁から胴部内面はナデており、外面も丁寧にナデており、上半部には僅か2～3条の縦へら磨きの部分もある。胎土に粗砂粒を多量に含み、焼成良好で、口縁内外面赤茶色、内面下半は黒色から暗茶色、外面下半は暗褐色を呈する。

122は、胴部からやや強めに屈曲して開く甕片である。口縁外端面には刻目を施すが詳細は不明である。口縁から胴部内面は丁寧にナデており、外面は磨滅著しく、調整は不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面淡茶褐色、外面は淡褐色をなす。



第 82 図 黑色包含層出土
土器(縮尺1/3)

123は、わずかに外反する口縁につくる甕片である。口縁外端面には、明らかに鋭利なへら状工具で切りはねる刻目を密に巡らせている。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内外面ともに灰黒色を呈する。

124は、復元口径20.0cmを測り、頸部から口縁外面は肥厚させて、明瞭な段をつくるタイプの甕口縁片である。口縁外端面には、明らかにへら状工具で切りはねた刻目を巡らせている。口縁内外面は横ナデ調整を施す。頸部内面の指オサエ痕内の凹部に施された粗い横ハケ調整のみがナデ残される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面淡褐色をなす。外面には煤が付着して暗茶褐色を呈する。

125は、底部外面の周縁部のみが接地して、中央部分が上げ底となるタイプの甕底部である。外面には整然としたやや細かい縦ハケが施され、内面はナデている。底径7.5cmを測り、胎土に粗砂粒をいくらか含むが、わりと精良である。焼成は良好で、外面淡赤茶色をなし、内面は暗褐色を呈する。

126は、底外面が極くわずかに上げ底状となる甕底部である。胴部外面はやや粗い雑な縦ハケが施され、内面はナデている。底内面には指オサエ痕がみられる。胴部外面下半には煤が付着しており、上半は二次火熱を受けて赤変している。底径7.5cmを測る。

127は、平底で張らない胴部につくる甕である。口頸部を欠くが、内面上端部にみられるハケの位置からみて、あとわずか上方で口縁部に達するものと考えられる。底径8.4cmを測り、胴部外面上半は斜めハケ、下半はハケをナデ消している。胴部内面はナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は茶褐色を呈する。外面は二次火熱を受けて赤茶色をなす。

128は、底部外面の外縁のみで接地し、その内側は全体に僅かな上げ底状となり、更に接地部分の内側で輪状にへこむ類の甕底部である。全体に薄手で、胴部外面にはやや粗い縦ハケを施す。内面はナデており、指オサエ痕が残る。底径8.5cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面淡茶褐色、内面は暗茶褐色を呈する。

129は、底部外面のやや内側が輪状にへこむタイプの甕底部である。胴部外面はやや細かい縦ハケを雑に施し、外面下端の底部際は横ナデを行っている。内面は縦横のナデを施す。底内面には指オサエ痕がみられる。底径8.7cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成良好で、内面は黒色、外面は淡茶褐色を呈する。

130は、底径10.0cmを測り、僅かな上げ底となる甕底部である。内外面とも磨滅するが、外面は少なくともハケ調整ではなさそうである。底内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良である。内面は暗褐色、外面は淡褐色乃至茶褐色を呈する。

131は、朝鮮半島系の無文土器甕口縁片である。いくらか張る胴部をなし、径8mmの断面円形

の粘土紐を口縁外端に付けて巻き込むようにして、全体に丸縁の口縁部をつくっている。破片右端で粘土紐端が垂れ下がる。これは右側から延びてきた粘土紐の端が垂れ下がったもので、ここで端と端を接合している。器表は磨滅しており、特に外面は剥落している。胎土に粗大石英粒を僅かに、細石英・長石を多量に含む。焼成やや不良で、外面は二次火熱を受けて淡赤褐色をなし、口縁上面から内面は黒褐色を呈する。

132は、明らかに中期初頭に下る壺口縁部である。頸部は、丸く外反し、口縁部は長く伸びず、短いままに止まる。口縁上面は外側へ傾斜し、僅かにへこむ。口縁内外面は横ナデ、頸部外面は縦へラ磨き調整が施され、内面はナデている。口径16.7cm、頸部径12.3cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。外面は淡茶褐色、内面は、淡茶色から灰黒色をなす。

133は、口縁内端が突出して外端面に刻目を巡らす壺口縁である。これも明らかに中期初頭まで下げ得る類である。復元口径12.8cm、外端部径17.8cmを測り、上面は外傾する。内外面横ナデ調整を施す。胎土に粗砂粒をかなり含む。焼成良好で、黒褐色から暗褐色を呈する。

134は、頸部上端で締まり外反する口縁を付ける壺である。口径18.4cm、頸部径15.0cmを測り、口縁下の締まった部分の外面に僅かな段をつくる。頸部外面には縦方向のへラ磨きが施され、他面は磨滅して調整不明である。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内面は白褐色、外面は淡茶褐色を呈する。

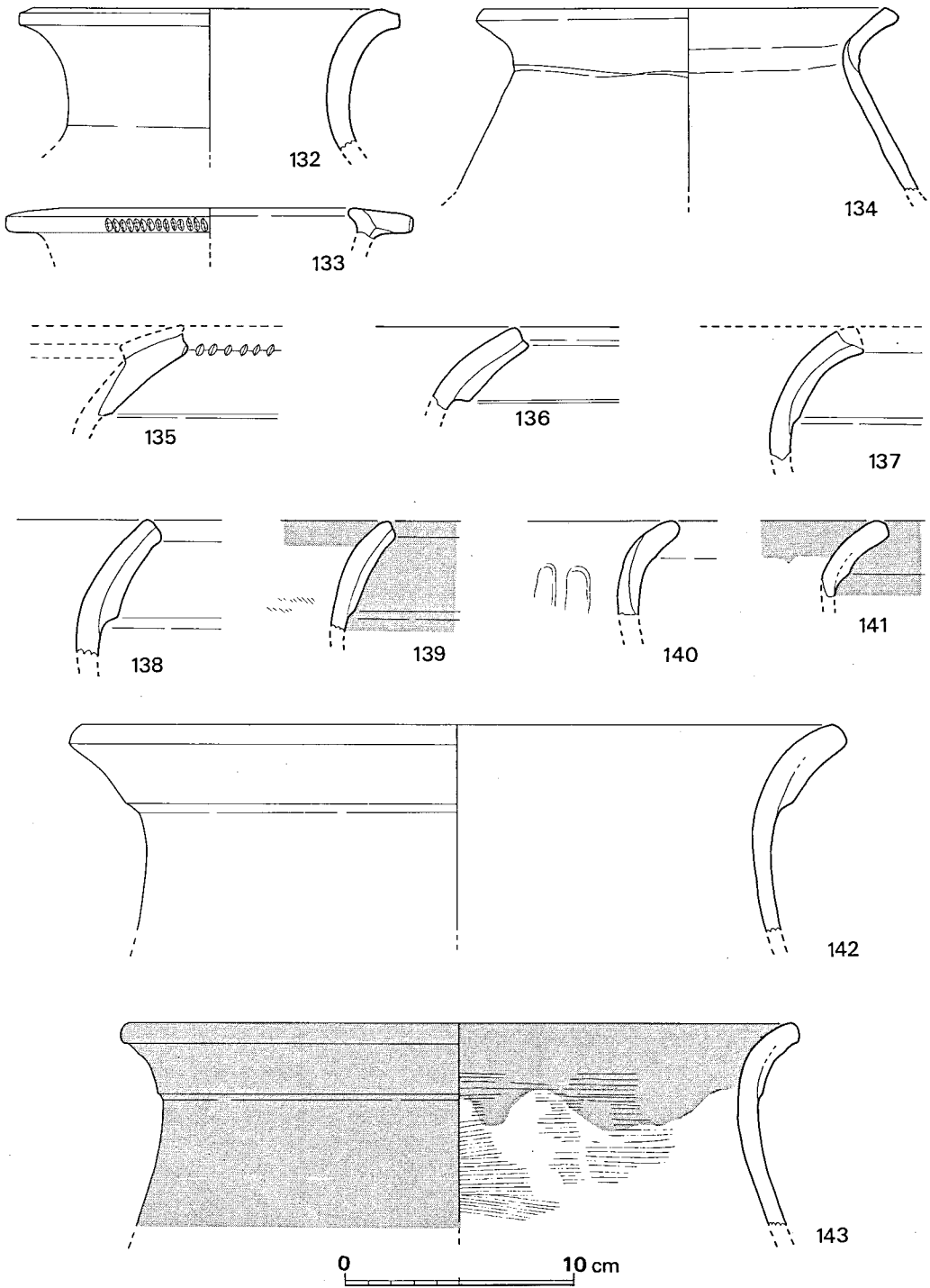
135は、大型の壺口縁片であるが、上面と内面でそれぞれ接合面から剥げており、詳細は明確でない。頸部上端に、外面に段をつくる口縁を接合し、更に上面に粘土を貼り付けて肥厚させ、その外端の（おそらく上）下端に刻目を巡らせたものである。外面は横へラ磨きかと思われるものである。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は淡褐色をなす。

136は、口縁外面に粘土を貼り付けて肥厚させた壺口縁片である。かなり強く開く口縁で、外端面は凹状となる。内外面ともに横へラ磨きを施し、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成良好で、淡白褐色をなす。

137は、136同様に口縁外面を肥厚させる類の壺口縁片である。口縁端部を欠損するが開きが136に比べて弱くなる。内外面ともに横へラ磨きを施す。胎土に粗砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面灰黒色、外面は淡褐色を呈する。

138は、口縁外面を肥厚させて段をつくる壺口縁片で、外方へはあまり強く開かない。内面は磨滅するが、外面は横へラ磨きかと思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外面淡赤茶色、内面は淡黄褐色から灰黒色を呈する。内面に極く僅かに丹の付着した痕跡が認められ、外面丹塗りの可能性もある。

139は、外面丹塗りで、口縁外面を肥厚させ段をつくる類の壺口縁である。外傾気味にわずかに開く程度であり、外面は横方向のへラ磨きを施す。内面頸部寄りでは、横ハケの上に雑な横へラ磨きを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、外面は淡赤色から茶褐色、内面



第 83 図 黑色包含層出土土器 (その14) (縮尺1/3)

は黒褐色をなす。丹塗りは部分的にしか残らないが、口縁内面上端から外面に施したものである。

140は、外面を肥厚させずに、丸味をおびてゆるやかに外反させている壺口縁部である。外面にはわずかに突出する稜線状の部位がみられる。口縁上端内外面は横ナデ、内面には指オサエ痕がみられ、外面下半はへら磨きかと思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、外面は黒褐色、内面は暗褐色を呈する。

141は、外面丹塗りの、口縁外面を肥厚させて段をつくる壺である。外面は横へら磨き調整が施される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は淡灰褐色を呈する。丹塗りは、口縁内面まで施される。136～140に比べるとやや小ぶりの中型壺となろう。

142は、復元口径34cmを測り、口縁外面を肥厚させ段をつくり、頸部上端で締まる壺である。内外面ともに器表は磨滅著しく、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は黒色、外面は灰赤紫色を呈する。焼成・胎土・色調からみて、153の底部と同一個体と考えられる。

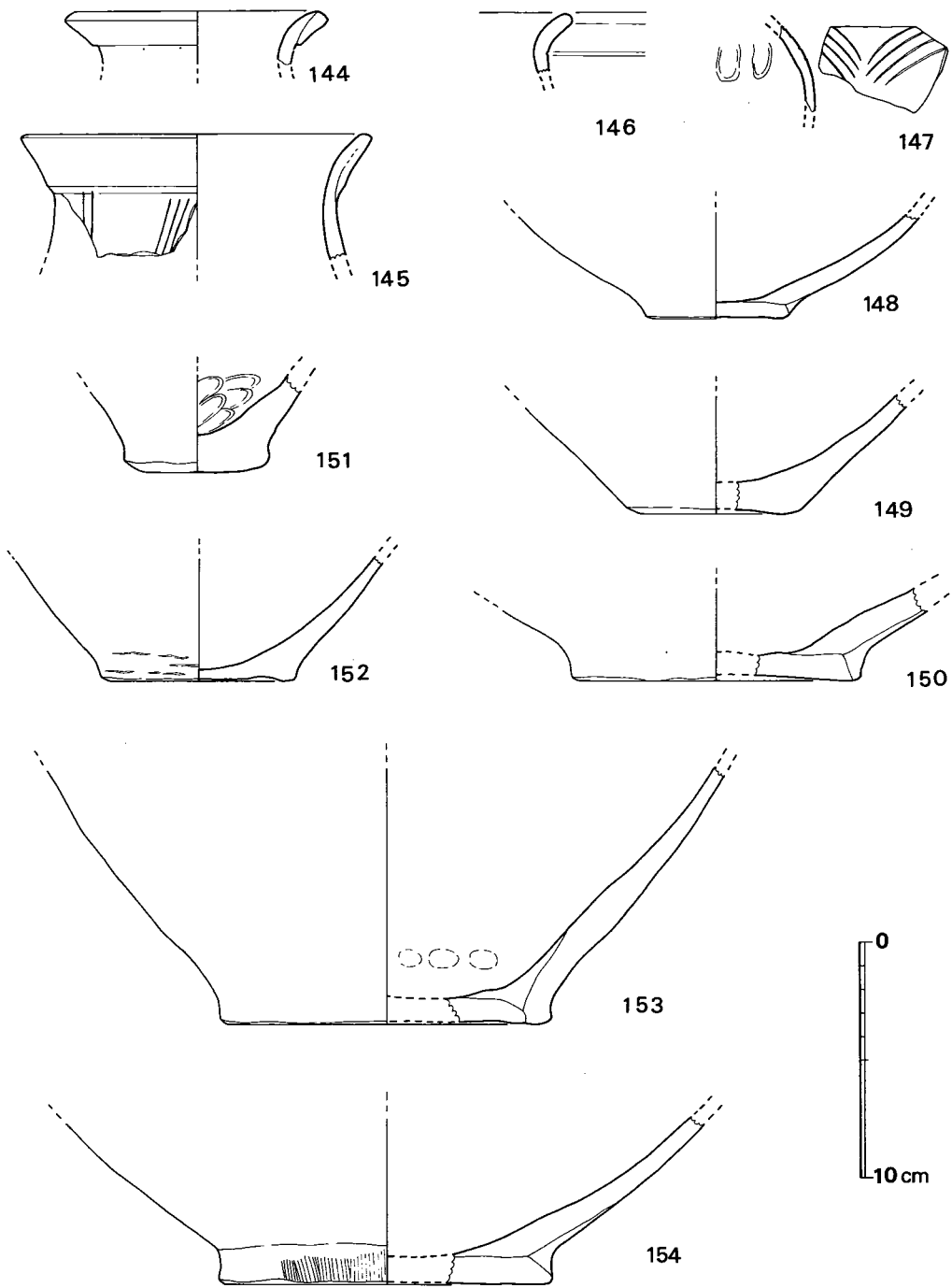
143は、外面丹塗りで、口縁外面を肥厚させ、段をつくる壺である。復元口径29.6cmを測り、頸部上端で締まり、口縁はゆるやかにわずかに外反する。外面は横へら磨き、口縁内面は横ナデ、以下頸部内面はやや粗い横ハケ調整を施す。丹塗りは口縁内面にまで及ぶ。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色を呈する。

144は、小型の壺口縁で、開く口縁の外面に厚く粘土を貼り付けて肥厚させている。復元口径11.0cmを測り、頸部外面上端には、極くわずかに赤色顔料の痕跡が2箇所認められ、頸部彩文が施されたものとする。口縁部外面は横へら磨き、頸部外面は縦ハケの上を縦へら磨きする。この縦ハケは全く消されるが、肥厚部との接合面に明瞭に残る。内面は横へら磨き調整が行われている。胎土は粗砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、内外面ともに黒褐色を呈する。全体にまさに黒色磨研風な感じを受ける。

145は、復元口径14.7cmを測るやや小型の壺口縁片である。上端で締まる頸部から、ゆるやかにわずかに開く口縁部につくる。口縁外面は肥厚させて段をつくる。口縁内面と外面は横へら磨き、頸部内面は斜め方向のナデを施す。頸部外面には、左側に縦方向に2本、右側に斜め方向に3本の細い沈線による文様がみられる。これは縦2本線で全周を幾つかに分割し、その間に複線山形文を配するタイプであろうと考えられる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成不良で、外面赤茶色、内面は黒色から灰色をなす。

146は、小壺口縁部小片で、ゆるやかに丸く外反する口縁部の外面に、段をつくるかわりに沈線1条を巡らせるものである。口縁端部は丸く、外面は磨滅して調整不明であるが、内面は横方向のへら磨きを施す。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、灰褐色をなす。

147は、胴部上半にへら沈線による文様をめぐらす小壺である。沈線文様は直線ではなく僅か



第 84 図 黑色包含層出土土器 (その15) (縮尺1/3)

に弧状をなしてはいるが、基本的には4本を単位とした複線山形文であろうと思われる。表裏ともに器表磨滅して調整不明である。内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒いくらか含み、焼成良好で、外面は明茶色、内面は白褐色を呈する。

148は極くわずかな上げ底状となる壺底部である。底径6.0cmを測り、胴部外面は横へラ磨き調整を行い、内面はナデている。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面灰褐色、外面は淡茶色をなす。

149は、底径7.2cmを測る壺底部片で、厚手でやや上げ底状となる。胴部外面は磨滅するが、縦へラ磨きらしい痕跡を残す。内面はナデており、胎土に粗砂粒を僅かに含むが、かなり精良である。焼成は良好で、外面は茶褐色、内面は淡褐色をなす。

150は、大型壺の底部片で、全体に上げ底状となる。底径12.2cmを測り、胴部外面横へラ磨き、内面は雑な横方向のナデを施す。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面茶色、外面は淡茶色を呈する。

151は、厚手のやや小ぶりの壺底部である。底径6.2cmを測り、外面は磨滅するが縦へラ磨きかと思われる。内面には強い指オサエナデがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡茶褐色を呈する。

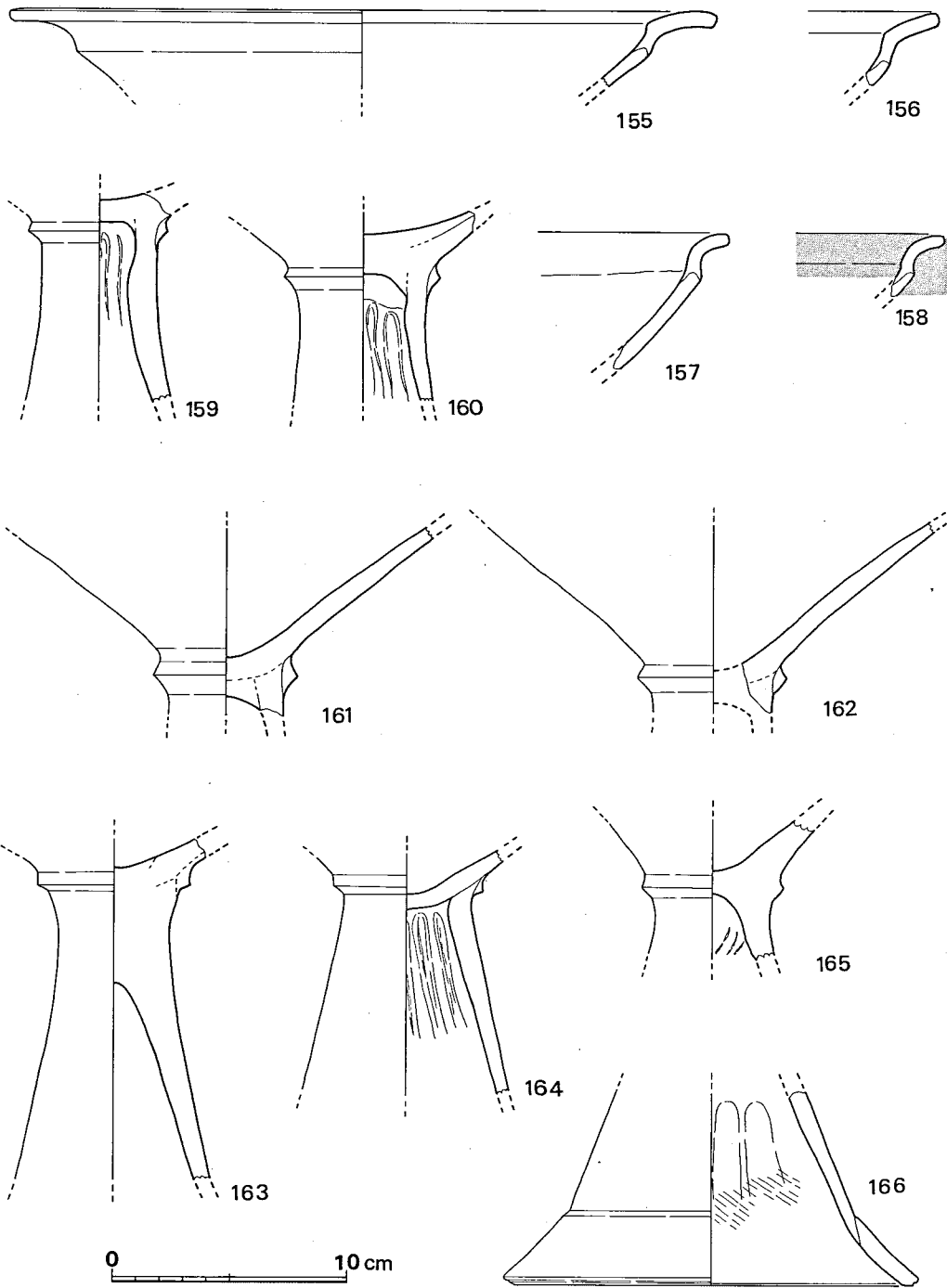
152は、底部外縁部で接地し、その内側が浅く輪状にへこむ僅かな上げ底状の壺底部である。外面は雑な横方向へラ磨き、胴部内面も横へラ磨きが施される。底径8.0cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。

153は、大型壺底部で底径13.9cmを測る。わずかな上げ底状となり、全体に磨滅著しいが、外面上端付近には縦へラ磨きがわずかに残る。胎土に粗砂粒多く含み、焼成やや不良で、内面は紫黒色、外面は赤紫色を呈する。焼成・胎土・色調から、142と同一個体と考えられる。

154は、底径14.0cmを測る、大型壺の底部である。胴底部の境がはっきりして、円盤貼り付けが明瞭である。わずかな上げ底状となる。胴部外面には雑な縦・斜め方向のへラ磨き調整が施される。外面下端の底部側面には、やや細かい縦ハケが残る。内面は磨滅して、調整不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。外面は赤茶色から淡褐色をなし、内面は灰色から暗灰色を呈する。

155は、復元口径30.0cmを測る高杯口縁片である。杯部中途の接合部から、外面は反転して延び、内面は稜をつくってから長く開く。口縁内外面は横ナデ、杯部外面は横へラ磨きかと思われる。胎土に細砂粒多く含み、粗砂粒も若干みられ、決して精製されたものではない。焼成良好で、内面は肌色をなし、外面は淡黄茶色を呈する

156は、杯部中途の接合部から更に内湾して、内面に稜をつくり、屈折・反転して開く高杯口縁部片である。155と類似するが、こちらの方が口縁部が直線的に延びており、更に、口縁内上面の内傾度がより強い。内外面ともに磨滅著しく、調整は観察不能である。胎土に細砂粒を多



第 85 図 黒色包含層出土土器 (その16) (縮尺1/3)

く含み、焼成良好で、淡白褐色をなす。

157は、深い杯部上位の接合部で強く屈曲して、短く外湾気味に開く口縁につくる類の高杯である。口縁内外面は横ナデ調整、接合部以下の杯部外面は雑な横へら磨きを施す。内面はへら磨きかと思われるが、明瞭ではない。胎土に粗石英粒をいくらか、細砂粒を多く含み、焼成やや良好である。内面は暗褐色、外面は暗黄褐色を呈する。

158は、深い杯部上位の接合部で屈曲して、短く外湾気味に開く口縁につくる類の高杯である。つまり157とはほぼ同器形をなす。丹塗り痕が部分的にみられ、内外面に塗ったものと考えられる。口縁内面上端から外面接合部までは横ナデ調整を施し、内面は横へら磨きかと思われる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。内面は暗褐色、外面は暗黄褐色をなす。

159は、脚柱外面上端の杯部との境目に、断面三角凸帯を付ける高杯脚部である。杯部底面に中空の脚柱を接合する類であろう。脚柱径4.9cmを測り、器表はすべて磨滅して調整不明である。脚柱内面上半にはシボりによるシワがみられる。胎土に粗砂粒多く含み、外面は淡褐色、脚部内面は茶色を呈する。

160は、脚柱外面上端の杯部との境目に、断面三角凸帯を付ける高杯脚部である。杯部底面に中空の脚柱を接合したあとに、杯内底面と脚柱上端の両上下方向から粘土を補填して成形している。脚柱径5.4cmを測り、器表は全面磨滅しており、調整は不明である。脚柱内面には指オサエナデ痕がみられる。胎土に粗石英粒を多く含み、内面は淡褐色から暗褐色をなす。外面は二次火熱を受けて赤褐色をなす。

161は、脚部との接合部から直線的に開く高杯である。接合部外面には断面三角形凸帯を付ける。脚柱部内面上端に粘土を充填して補強している。凸帯部周辺は横ナデ調整、杯部外面は横へら磨き、内面も横方向へら磨きを施す。胎土に粗・細砂粒を多く含む。外面は赤茶褐色、内面は暗茶褐色を呈する。

162は、脚部との接合部から直線的に開く高杯で、161とはほぼ同類である。接合部外面には断面三角形凸帯を付ける。凸帯部周辺は横ナデ調整、杯部外面は磨滅しているが、横へら磨きかと考えられる。杯部内面は雑な横方向へら磨きが施される。胎土に粗・細砂粒を多く含む。外面は淡赤褐色をなし、内面は暗褐色乃至黒褐色を呈する。

163は、脚柱が長く、上半が充実した高杯脚部である。最小脚部径4.7cmを測り、杯部底面への接合部外面には断面三角形凸帯を付ける。全体に磨滅著しいが、脚部外面は縦へら磨きが施されている。脚柱内面はナデかと思われる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、白褐色から黒色をなす。

164は、杯部底面に中空の脚柱を接合したままで、上下からの粘土の補強がみられない高杯脚部である。脚上端部径5.4cmと大きく、脚は上端部から下方へ直線的に開いている。三角凸帯部周辺は横ナデ、杯部外面は横へら磨きかと考えられる。他面はすべて磨滅して調整不明である。

脚内面上半には指オサエナデのあとにシボリによるシワができています。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、茶色から白褐色を呈する。

165は、深い杯部に中空の脚柱を接合し、おそらく、上下から若干の粘土を補填しているものである。接合部外面には、断面三角凸帯を付ける。全面磨滅しており、脚内面にはシボリによるシワがみられる。胎土に粗石英・雲母片を多く含む。焼成良好で、暗黄褐色を呈する。

166は、高杯脚部下半である。下端近くは、壺口縁を作る時と同じ手法で、脚端部を接合して、外面に段をつくっている。端部外面には、沈線が切れぎれに全周まわる。裾部径17.6cmを測り、外面は段から下端までが横へう磨き、以上の脚柱外面は縦方向のへう磨き調整を施す。内面は全体に丁寧になでているが、中位には粗い斜めハケが残され、上位には指摺ナデがみられる。胎土に粗石英・雲母・長石粒をかなり含み、焼成やや良好である。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色をなす。

以上の包含層出土の弥生前期土器について、若干の年代観を述べてみたい。甕は、90~92の板付II式と、他の板付I式に大別される。口縁外面下端に刻目を施す90~92のうちでも、90・92は胴部も張らず、口縁の開きが少なく、かなり古相を残しており、板付II式でもより古い段階に位置付けられる。口縁端面に刻目を施し、胴の張らない板付I式甕は各種あるが、器表調整において2種に分けられる。即ち、外面のハケ目を丁寧にナデ消すものと、消さないものとなる。また、口縁部も、外傾的に僅かにしか開かないもの、やや長く丸く屈曲するものに分けられる。これらのハケの有無と口縁の開きの両者の因果関係はあまり明確ではない。個々が小片であり、全形を知り得ない難点もあることにもよる。口縁端面の刻目は、123・124の明らかなへう状工具によるもの他はすべて、ハケ工具端によるものと考えられ、棒状工具による太いものは皆無である。甕底部については、125は整然としたハケや焼成から、やや下降する可能性もあるが、他は板付I式を中心としたものである。明らかな円盤貼付による成形はみられず、丸底状底部の外周にリング状に粘土を貼付して成形したものがかなりみられる。夜白期のものにこの手法があり、両期の連続性がうかがわれるところである。

131の無文土器は、明らかな玉縁状口縁につくるもので、土器そのものも貴重な出土例となろう。更に、時期を明確にしなければならない。この土器が出土したW1南半上層というのは、包含層ではあったが、弥生前期土器が90%以上で、あと後期中頃から後半代のものが極く僅かみられるのみであった。前期土器のうちでも、板付II式となるものは図示した如く、極く少ない状況である。この無文土器に確実に伴うものを確定するのはもとより無理な話ではあるが、以上のような共伴状況から、板付II式のより古い段階をも含めて板付I式のものに伴う可能性が高いことを指摘しておこう。

壺は、132・133の中期初頭のものを除いて、他の大部分は板付I式である。細かくみると、

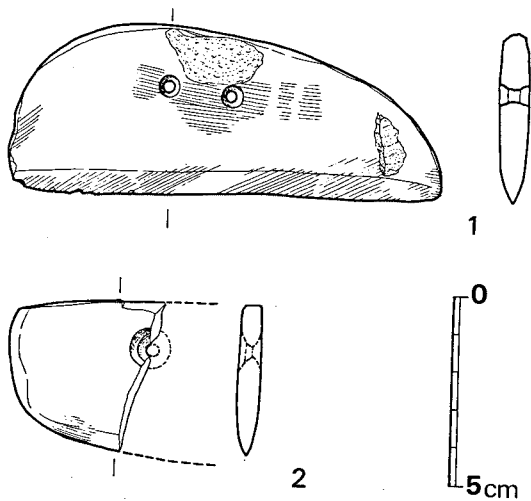
134・135は板付Ⅱ式となる可能性が強い。136～143の大型壺は、外面丹塗りがかなりみられ、口縁の開きも少なく、古相を呈しており、板付Ⅰ式とされよう。144～147も各々口縁・施文法などに古い特徴を有しており、板付Ⅰ式、降っても板付Ⅱa期までのものである。壺底部も、150・153・154等の大型品では底部がはっきりと作り出されていて、136から143の口縁部の特徴とよく対応しており、板付Ⅰ式とされる。

高杯は、口縁部で大きく2種に分けられる。即ち、口縁部の開きが大きく、内面に稜をつくり、かなり直線的に延びるものと、深い杯部から接合部で反転して、丸味をもって短く外反するものである。後者がより古式である。津屋崎町今川遺跡や三雲遺跡出土の口縁上面を肥厚させるタイプのものは皆無であり、この手よりも本遺跡例はすべて古相を有する。よって157・158は板付Ⅰ式、155・156は板付Ⅰ式の中でも、より新しい段階に位置付けられる。脚部は、杯部の開きが大きく内底面が広がる159・160は、脚部も長くなりそうで、新しい特徴を有する。163も脚が充実して長く、これらは確実に板付Ⅱ式に比定される。杯部の開きがより弱く、深い器形をなす161・162・164・165はより古相を示すが、中でも164は柱径が大きく、接合部から開いており、166等とともに、155・156のより新しい段階の板付Ⅰ式とされるものであろう。166は外面下位に段をつくっており、今川遺跡例の口縁上面が肥厚するものが、沈線を巡らすタイプであることと対称的であり、古相を示すところである。おそらく、板付Ⅰ式のより新しい段階、あるいは降ってもⅡ式の古い段階と考えられるものである。

b. 石 器 (第86・87図)

本遺跡の住居跡等の各遺構、黒色包含層中等から多量の打製・磨製の各種石器が出土した。それらのうちの大部分は夜臼期のもと考えられ、確実に夜臼の遺構・包含層から出土したものは勿論、後世の遺構・包含層出土のものでも明らかに夜臼期のものであると判断されるものも多い。しかし、特に黒色包含層出土の石器は、弥生前期のものや夜臼期のものとの明確に区別することは困難である。ここでは明らかに弥生期遺構に伴うものと、黒色包含層出土品の中で弥生期も前期末以降の所産と判断し得るもののみをとり上げることとしたい。他の弥生前期・夜臼期を主体とする石器は後巻の方にまとめて掲載することにした。

1は、35号住居跡出土の直線刃石包丁である。小豆色の輝緑凝灰岩製の所謂立岩の石包丁であるが、直線刃である点は珍しい。全長11.4cm、幅4.5cm、厚さ0.8cm、孔径0.3cmを測る。右半部分はやや細身になる。刃部の右半分は鋭く研ぎ出されており、それに対して左側半分はやや鈍い刃となる。右側端を先端部として、右半分を常時使用するためであろう。表裏ともに丁寧に磨いており、刃部を中心に研磨時の擦痕がかなり観察される。孔は小さめで、両面からの穿



第 86 図 弥生各遺構出土石器（その 1）（縮尺 1/2）

包丁の方は穂摘具として、収穫期の限られた期間により多数の量を必要とするために、すべてを鉄製品でまかなう余裕がなかった為であろう。また、実際の穂摘作業において、技術的にも、石製品でもそれ程能率的に差異がなく、充分使用に耐えた為でもであろう。これらの諸因は、他に木製や貝製のものがみられ、穂摘具自体に臨時的な性格を考え得ることからも、裏付けられる。鉄製品が穂摘具に普及するのが遅れたことは、他の石器がより日常の使用の必要性・能率の格段の差異等の理由によって、より早く鉄製品に変換していったことと対比されよう。

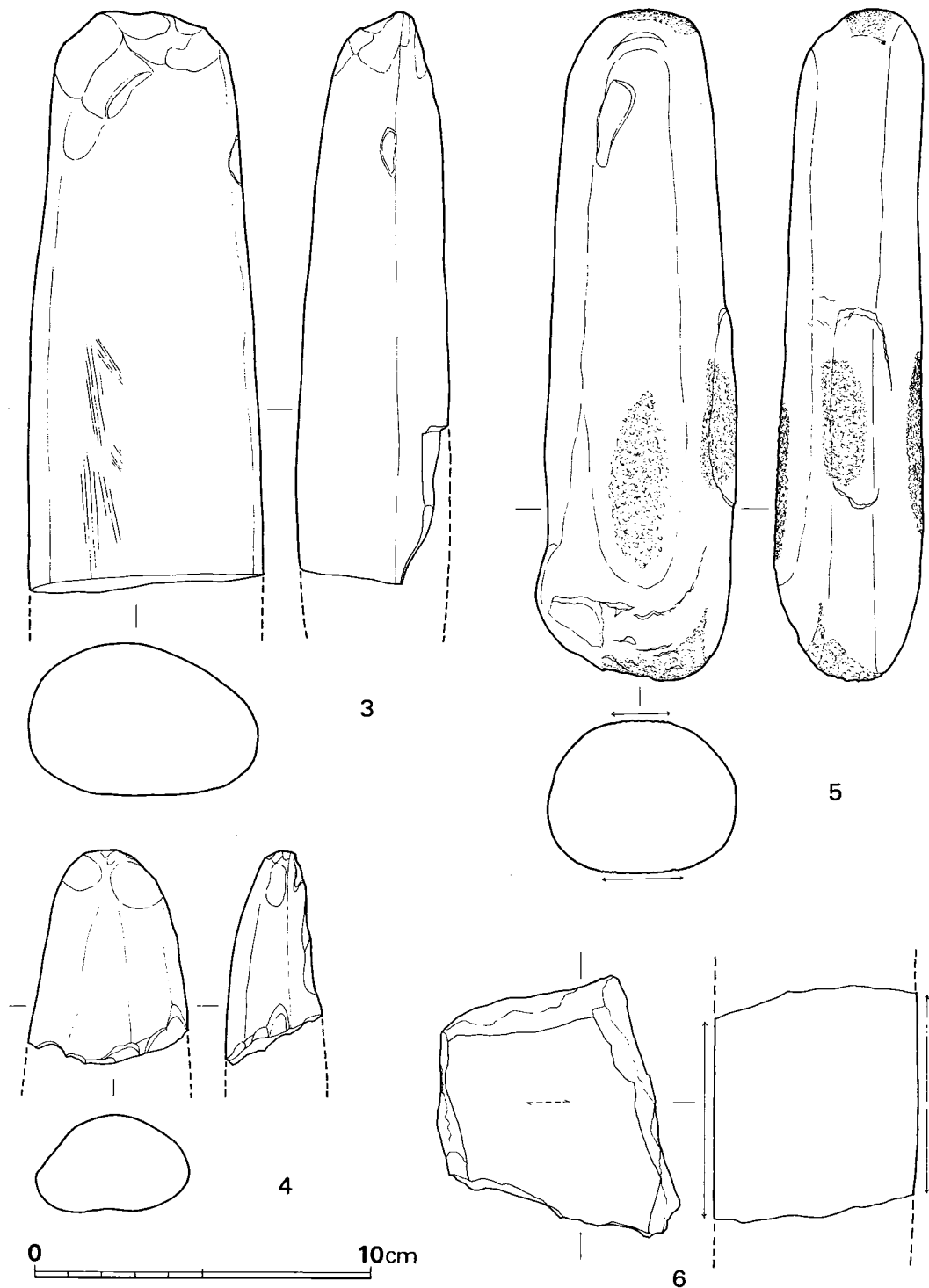
2 は、黒色包含層出土の外湾刃石包丁片である。現存長 4.0cm、現存幅 4.0cm、厚さ 0.6cm を測る。孔径は上端径で 1.0cm を測り、両面より穿孔している。小豆色の輝緑凝灰岩製で、表裏ともに丁寧に磨いている。

3 は、包含層出土の玄武岩製大型蛤刃石斧である。刃部側を欠く。現存長 17.3cm、幅 7.0cm、厚さ 4.5cm を測る。基部端に叩打痕を残すが、ほぼ全面に丁寧に磨いている。表面には若干の磨研時の擦痕が残る。

4 は、1 号住居跡に伴うもので、玄武岩製磨製石斧基部片である。現存長 6.4cm、幅 4.8cm、厚さ 2.8cm を測り、基部端を除いてほぼ全面が磨かれている。裏面がやや内反り状になるが、全形を知り得ない為、反った形態の石斧となるかどうかは明確に出来ない。

5 は、硬質の砂岩製磨り石、或いは石棒状叩き石とでも称すべきものである。4 と同じく 1 号住居跡に伴うものである。長さ 20.1cm、幅 5.8cm、厚さ 4.4cm を測る。ほぼ全面が磨かれているが、上下両端は擦れており、凹凸はそれほどみられない。表・裏と右側面はやや凹凸著しく、叩打痕がみられる。この 3 箇所は各々、一端からほぼ同距離の部位にあり、上半部を握り、何かを叩く状態に使用されたものである。

孔を行い、穿孔時の回転擦痕がよく残る。これが出土した 35 号住居跡は、弥生後期後半の年代が与えられている。北部九州で時たまこの時期の住居跡等に共伴して出土する例があり、弥生時代の終り近くまで、各種石製利器のうちで石包丁のみが残存・使用された状況が覗かれる。他の各種石斧・石のみ・石鎌・石製武器等が鉄器へと変換していった中で、石包丁のみが最後まで残存した理由は何であろうか。「手鎌」とされる小型鉄製品も共に出現してはいるが、石



第 87 図 弥生各遺構出土石器 (その 2) (縮尺 1/2)

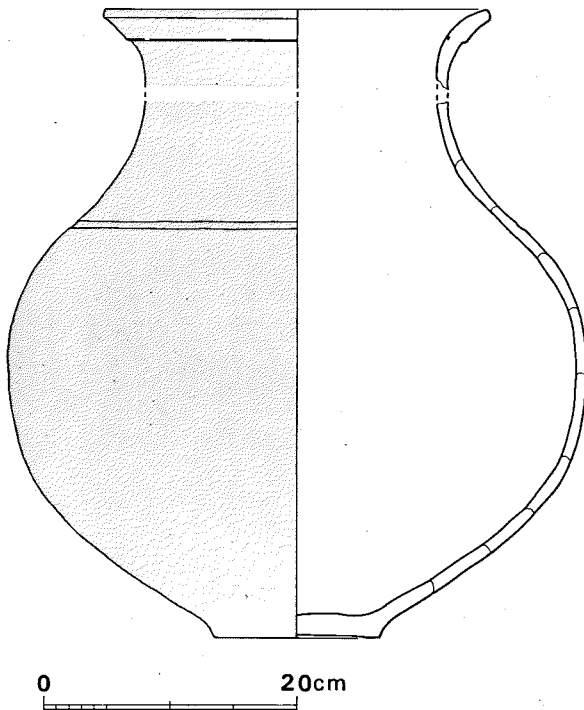
6は、35号住居跡出土砥石である。花崗岩製の粗砥で、表裏面ともに使用している。厚さ6.1cmを測り、全体的に二次的の火熱を受けて、暗灰赤色に変色している。

c, 甕 棺

イ) 甕 棺

1号甕棺 (第88図)

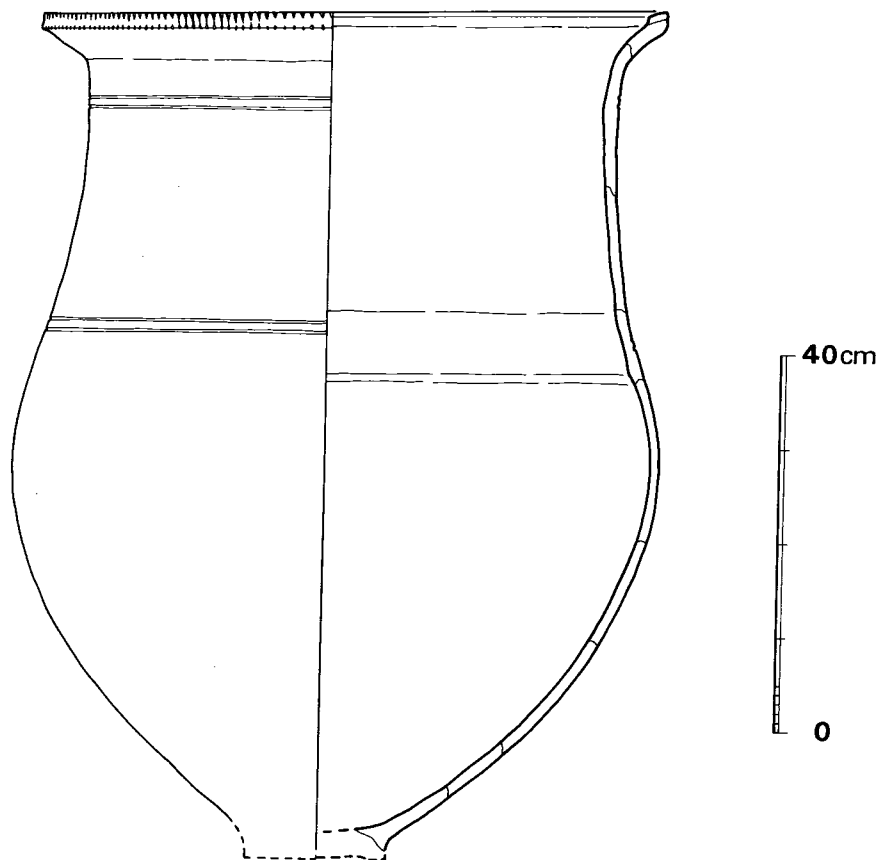
下甕 復原器高50cm, 復原口径30~31cm, 胴部最大径はほぼ中央部にあり45.7cm, 底径13.1cmの大形壺である。口縁は肥厚し、口縁下で段をつくる。肩部には幅8~9mm程の凹線をめぐらし、全体として古い要素を残している。粗土帯の幅は5cm内外で、器壁はやや厚く10mm内外である。器面は丹塗り磨研を施す。口縁から胴部上半にかけては横方向ミガキ、胴部下半は斜方向ミガキである。地色は黄褐色を呈し、丹は暗赤色。胎土には砂粒を含み、焼成はやや軟質で不良。日常容器の大形品を転用したもので板付IIa式に属する。甕棺編年に対応させるとKIa式併行期である。



第88図 1号甕棺下甕 (縮尺1/6)

2号甕棺 (第89図)

底部を若干欠失するが、復原器高90.3cm, 口径65.5cmの大形甕棺である。口縁は外に開き、口縁直下で段を形成し、内側には粘土帯を貼付する。口縁端には上下端ともに一緒に入れたへらによる刻目を施す。頸部は強くひきしまり、口縁下と肩にそれぞれ2条の沈線をめぐらす。頸部の最小径は55.5cm, 胴部最大径はやや上位にあり68.1cmを測る。復原底径は約15cmである。器壁の厚さは10mm前後でやや厚い。内面肩部には夜臼・板付

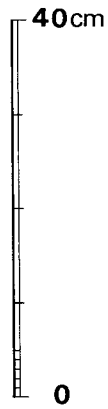
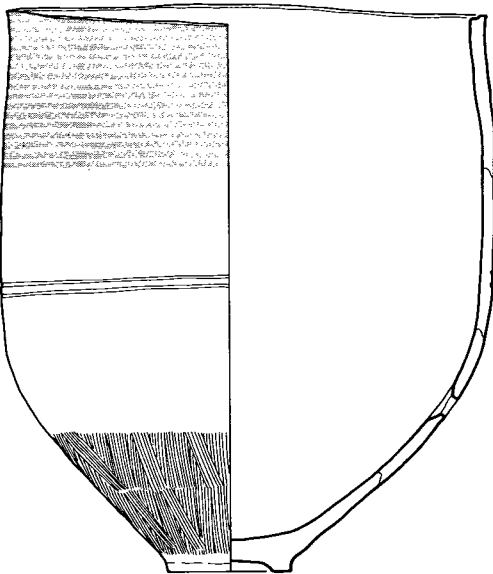
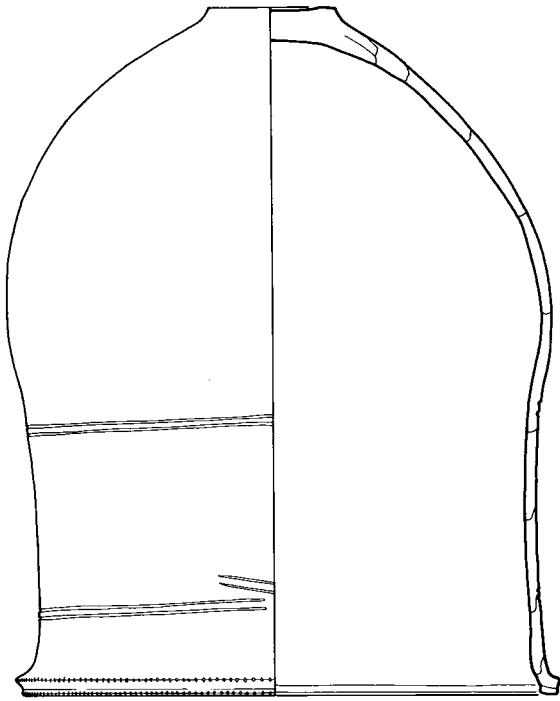


第 89 図 2 号 甕 棺 (縮尺1/8)

式壺に特有の段がみられる。口縁内外はヨコナデ，頸部はミガキを施した後，丁寧なナデを加え，胴部は横又は斜方向のミガキを施している。内面はナデ調整である。この甕棺のつくりは端整で良好といえる。淡赤褐色の地色に淡黄色の化粧土をかけて調整を施している。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良好である。肩部から胴部にかけてやや大きな黒斑があり，その反対側には小黒斑が頸部から胴部にかけて3ヶ所みられ，あたかも薪を並べたかのようなのである。甕棺の型式はK Ia式に属する。

3号甕棺 (第90図)

上甕 器高72.9cm，口径56.5cm，底径13.5cmを測る。口縁は外反し，内側には粘土帯を貼付



第 90 图 3 号 襄 棺 (缩尺 1/8)

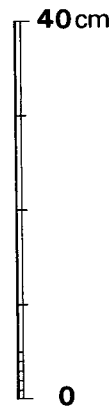
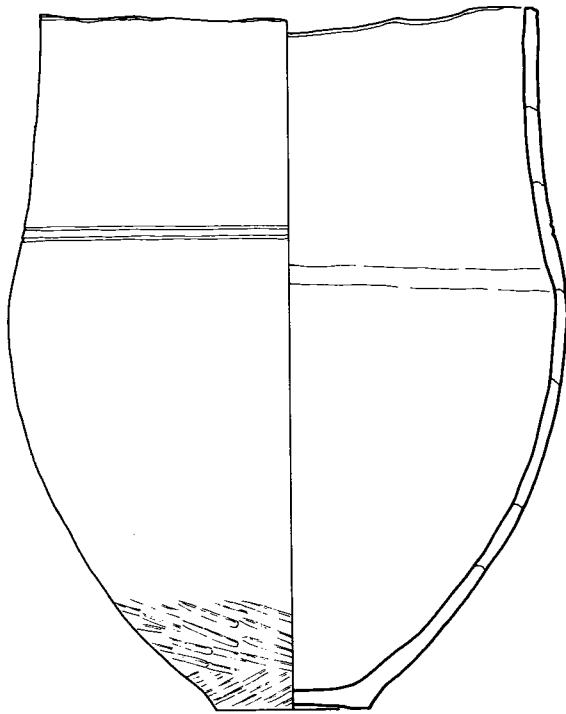
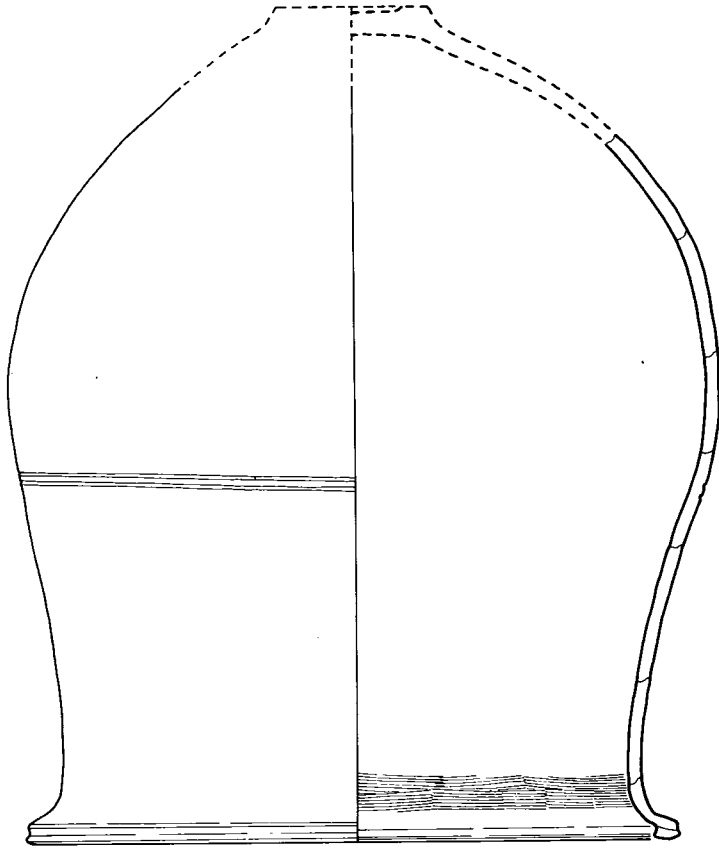
する。口縁端にはヘラによる刻目が上下別々に施されている。頸部のすばまりは弱い、頸部の曲線は未だ内側に彎曲している。頸部最小径は52.4cm。口縁下と肩部にはそれぞれ2条の沈線をめぐらしている。胴部はふくらみ、最大径は上位にあり57.3cmを測る。器壁の厚さは12～13mmと分厚い。口縁内外はヨコナデ、器表は丁寧なナデ、内面はナデを施す。淡赤褐色を呈し胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。頸部と胴部に大黒斑があり、その反対側の胴上半に小黒斑がみられる。K I b式に比定される。

下甕 口縁を打欠かれており器高はわからないが65cm以下のやや小さめの甕棺である。頸部のすばまりは弱く、胴部の張りも小さい。胴部中央に2条の沈線をめぐらしている。頸部最小径は50cm、胴部最大径は51.8cm、底部は13mm程の上底で径は13.1cm。器壁の厚さは11～15mmと分厚い。沈線より上はハケ目の後ナデを加え、ハケ目を消し、沈線下はハケ目の後、横方向ミガキを加える。胴部下半にはやや粗いハケ目が施されている。内面はナデ調整。淡黄色で、胎土には石英、金雲母を多く含み、焼成は良好である。沈線付近に小黒斑2ヶ所と、その反対側の頸部から沈線付近にかけて小黒斑が数ヶ所認められる。水ぬき孔は外からの穿孔で径は20mm強である。器表の全面に黒塗りの痕跡が残り、とくに頸部には横縞模様の黒塗りが施され、現状で幅6～7mmの縞17条が観察できる。又器表頸部内面の一部には丹塗りの痕跡も認められる。全体として新しい要素が認められるが、K I b式の範疇と考えてよい。

4号甕棺（第91図）

上甕 底部近くを欠失するが、復原器高88cm程の大形甕棺である。口縁は大きく外反し、口縁内側には粘土帯を貼付する。口径は68.7cm。頸部は強くすばまり、胴部は大きく張り出す。肩部には2条の沈線をめぐらす。器壁は11～14mmと分厚い。口縁内外はヨコナデ、器表はナデ仕上げ。内面は口縁下に粗い横方向のハケ目がみられるが、他はナデ調整を施している。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。頸部から胴部にかけて黒斑があり、その反対側には口縁から胴部上半にかけて、あたかも薪を並べていたかのようなまだらな黒斑が認められる。K I a式甕棺に属する。

下甕 口縁を打欠いているが、復原器高は80cm程になるものと思われる。頸部はつよくすばまり、胴部は張る。肩部の沈線は2条で、口縁下は現在1条しか残らないが本来2条と思われる。頸部最小径は52.3cm、胴部最大径は上位にあり、58.6cm、底径16cmを測る。器壁の厚さは頸部で15mm前後、胴部で13～14mm程でかなり分厚い。肩部内面は夜臼式、板付式の壺に特有の段が残っている。底部付近には幅8～9mm、長さ80mm前後のタタキ痕が残る（第99図）。その上から斜方向のミガキが加えられ、頸部から胴部の大半は横方向ミガキが施されている。内面の頸部上半はナデ、それ以下はミガキの後、ナデ調整を施している。黄褐色を呈し、胎土には



第 91 图 4 号 裹 棺 (缩尺1/8)

砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴上半に大黒斑があり、その反対側にはあたかも薪が置かれた跡と思われるまだらの黒斑がほぼ全面に認められる。又器表の全面に黒塗りの痕跡が認められる。甕棺の型式はK I a式に属する。

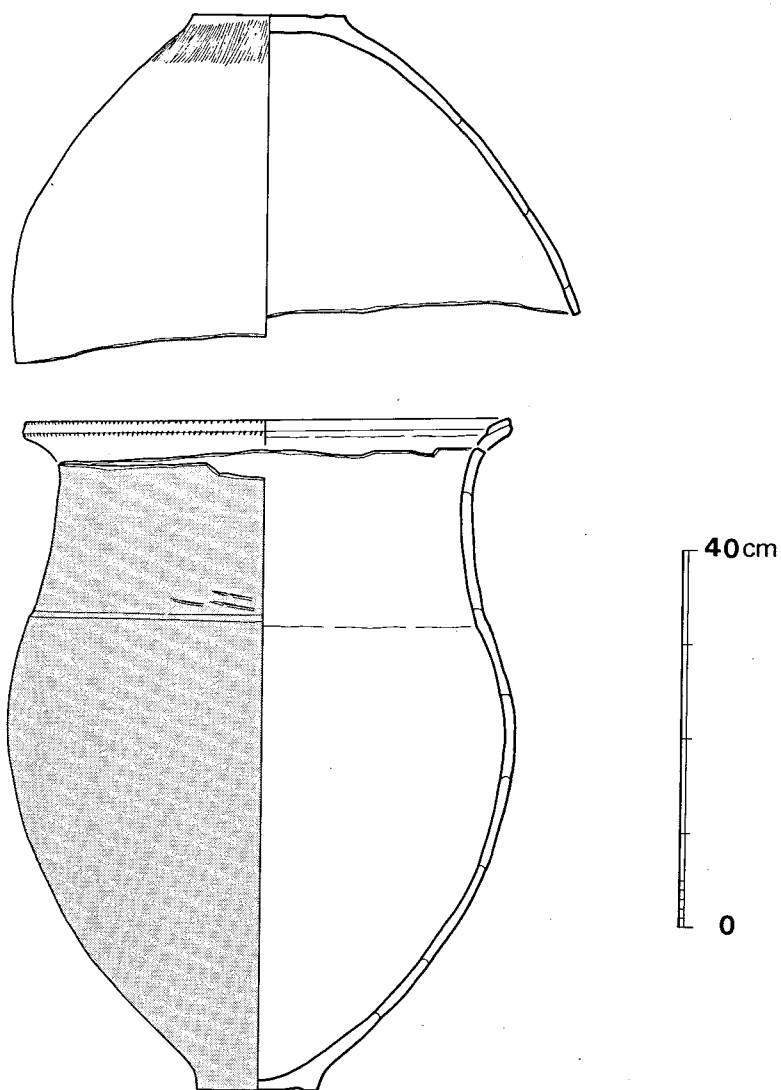
5号甕棺（第92図）

上甕 胴部上半から上を打欠いている。底部はわずかに上底で底径は16cm、胴部最大径は60cm弱である。器壁の厚さは10mm前後。器表はやや粗いハケ目を施した後、横方向ミガキを加える。底部付近にはハケ目が残っている。内面はナデ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。黒斑が胴部上位にあり、その反対側には小黒斑がみられる。胴の張り具合からいったら古い要素を残しており、K I a式に属すると思われる。

下甕 口縁打欠きであるが口縁は補強に利用されていたので全形はうかがえる。器高71.2cm、口径は51cm前後の甕棺である。口縁は大きく外反し、内側には粘土帯を貼付する。口縁端には上・下端別々にヘラによる刻目を施す。頸部は強くすぼまり肩には段をつくり、胴は大きく張り最大径は上位にある。頸部の最小径43.8cm、胴部最大径は53.7cm、底径は12.7cmを測る。頸部の器壁は11mm前後でやや厚く、胴部は9mm前後とやや薄い。口縁内外はヨコナデ、器表は横方向ミガキを施しているが、頸部に幅4mm、長さ55mm前後のタタキ痕が残り（第99図）、4号甕棺下甕とともにタタキ技法の存在を確認できた。内面はナデ調整。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴部中央に黒斑があり、その反対側には頸部から胴中央にかけて小黒斑が3ヶ所みられる。又器面全体に丹塗りの痕跡が認められるが、打欠いた口縁部には丹が認められないので使用直前に塗られたものと考えられる。丹は暗赤色とでもいおうか、どす黒い赤色を呈している。甕棺の型式はK I a式である。

6号甕棺（第93図）

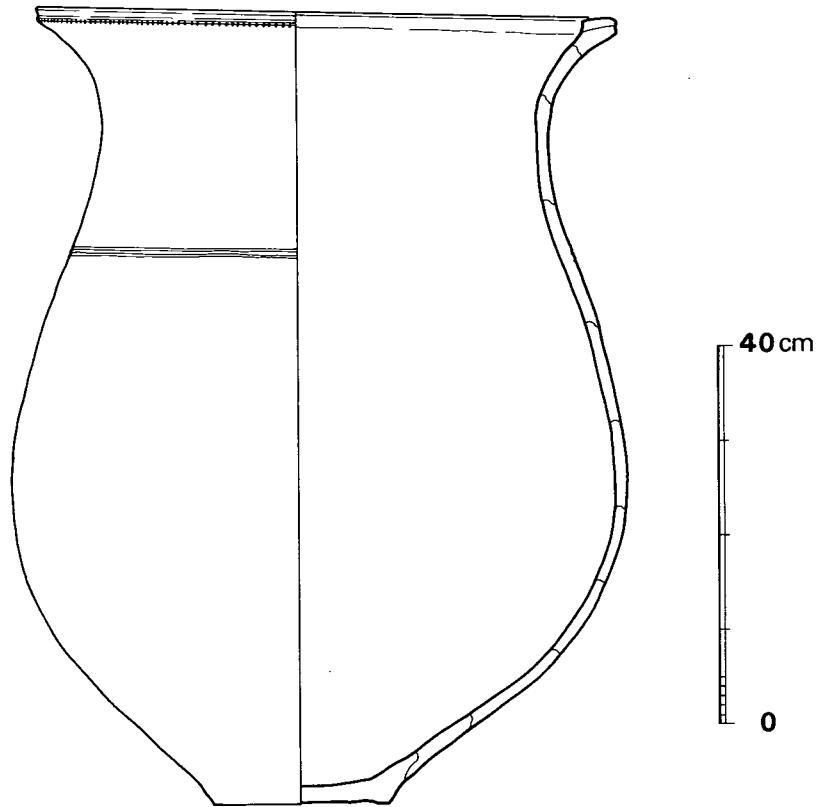
器高84.3cm、口径61cmの大形甕棺である。口縁は大きく外反し、口縁内側には粘土帯を貼付している。口縁端の下端にはヘラによる刻目を施している。頸部は強くすぼまり、胴部は大きく張り出す。肩部には2条の沈線をめぐらしている。頸部最小径は46.8cm、胴部最大径は中位にあり64.6cm、底部はわずかに上底を呈し、径は18.4cmと大きい。器壁の厚さは12～13mmで、やや分厚い。口縁内外はヨコナデ、器面は横方向ミガキ、内面はナデ調整。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。口縁から胴部中位にかけての大黒斑と胴下位にも黒斑があり、その反対側には胴中央部にやや大きな黒斑が認められる。甕棺の型式はK I a式に比定される。



第 92 図 5 号 甕 棺 (縮尺1/8)

7号甕棺 (第94図)

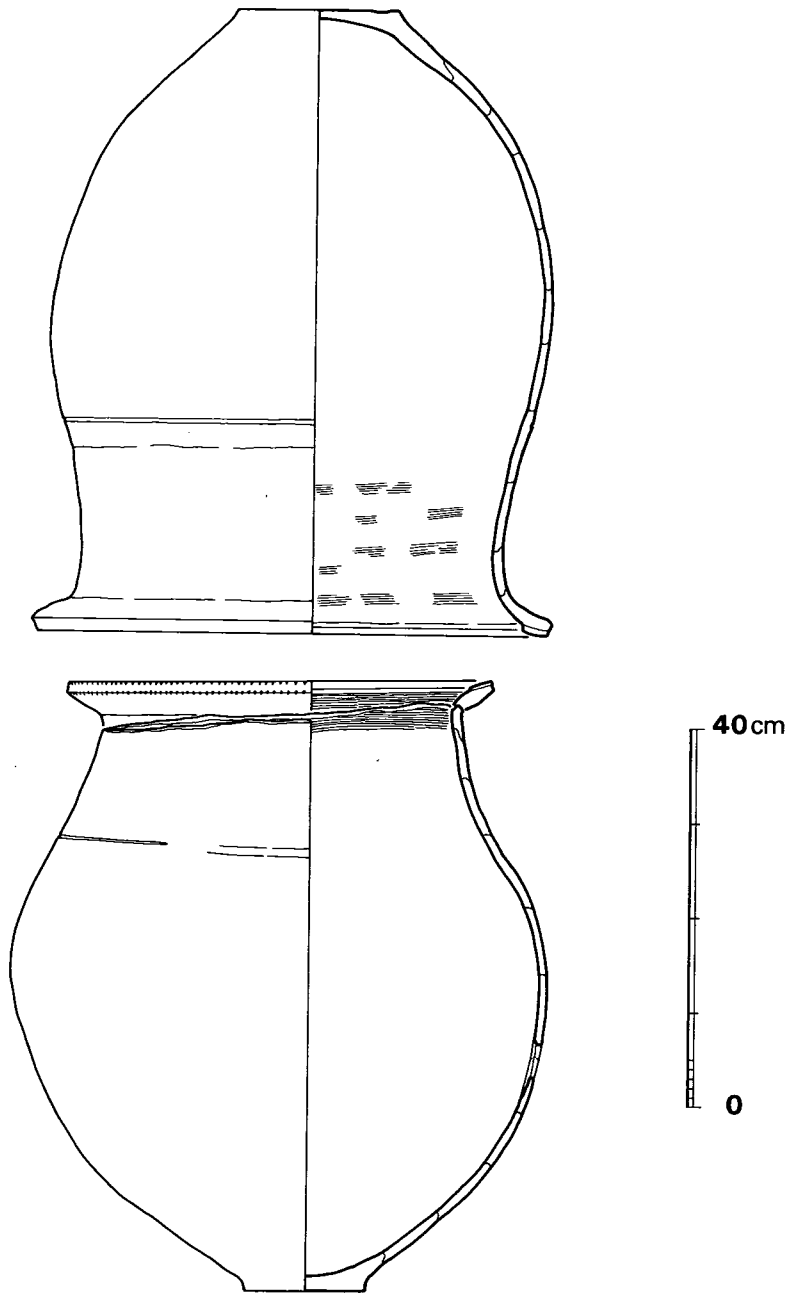
上甕 器高66.1cm、口径53.5cmのやや小さい甕棺である。口縁は大きく外反し、口縁下は段をつくる。口縁内側には粘土帯を貼付する。頸部はつよくすぼまり、肩部には不明瞭な段が認められる。この肩より3cm程下ったところにやや幅広の沈線1条がめぐらされている。胴は張り出し、最大径は上位にある。頸部の最小径は44.3cm、胴部最大径は52.5cm、底径は16.8cmを



第 93 図 6 号 甕 棺 (縮尺1/8)

測る。器壁の厚さはやや薄い。口縁内外はヨコナデ、器面はハケ目の後、頸部は斜方向のミガキ、胴部は横方向のミガキを加え、ハケ目を消している。内面の頸部は横方向ハケ目の後、横方向のミガキを加え、胴部はハケ目をナデ消している。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴中位に小黑斑があり、同側の口頸部の内面にもやや大きな黒斑が認められる。その反対側には口縁から胴中位にかけてまだらな大黒斑がある。甕棺の型式は KIa 式に属する。

下甕 口縁は打欠きであるが、補強に使用されていたので全形はわかる。器高は64.8cm、口径44.2cmのやや小さい甕棺である。口縁は大きく外反し、口縁下には段をつくる。口縁内外には粘土帯を貼付し、口縁端には上・下別々にヘラで刻目を施している。頸部は強くすぼまり、胴部は大きく張り出す。肩部にはわずかに段状をなす部分と沈線状を呈する部分がある。頸部最小径は37.4cm、胴部最大径はやや上位にあり56.1cm、底径は12.7cmを測る。胴中央部に外から内へ穿孔された径35mm程の水ぬき孔がある。器壁は7～9mmとやや薄い。口縁内外はヨコナ



第 94 图 7 号 甕 棺 (縮尺1/8)

テ、器面はヘラミガキ、内面の口縁下は粗い横方向のハケ目が残し、他の部分はナデ調整を施す。淡赤褐色の地に淡黄色の化粧土をかけている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良。胴上位に黒斑があり、その反対側の胴中位にはまだらな黒斑がある。甕棺の型式はK Ia式である。

8号甕棺（第95図）

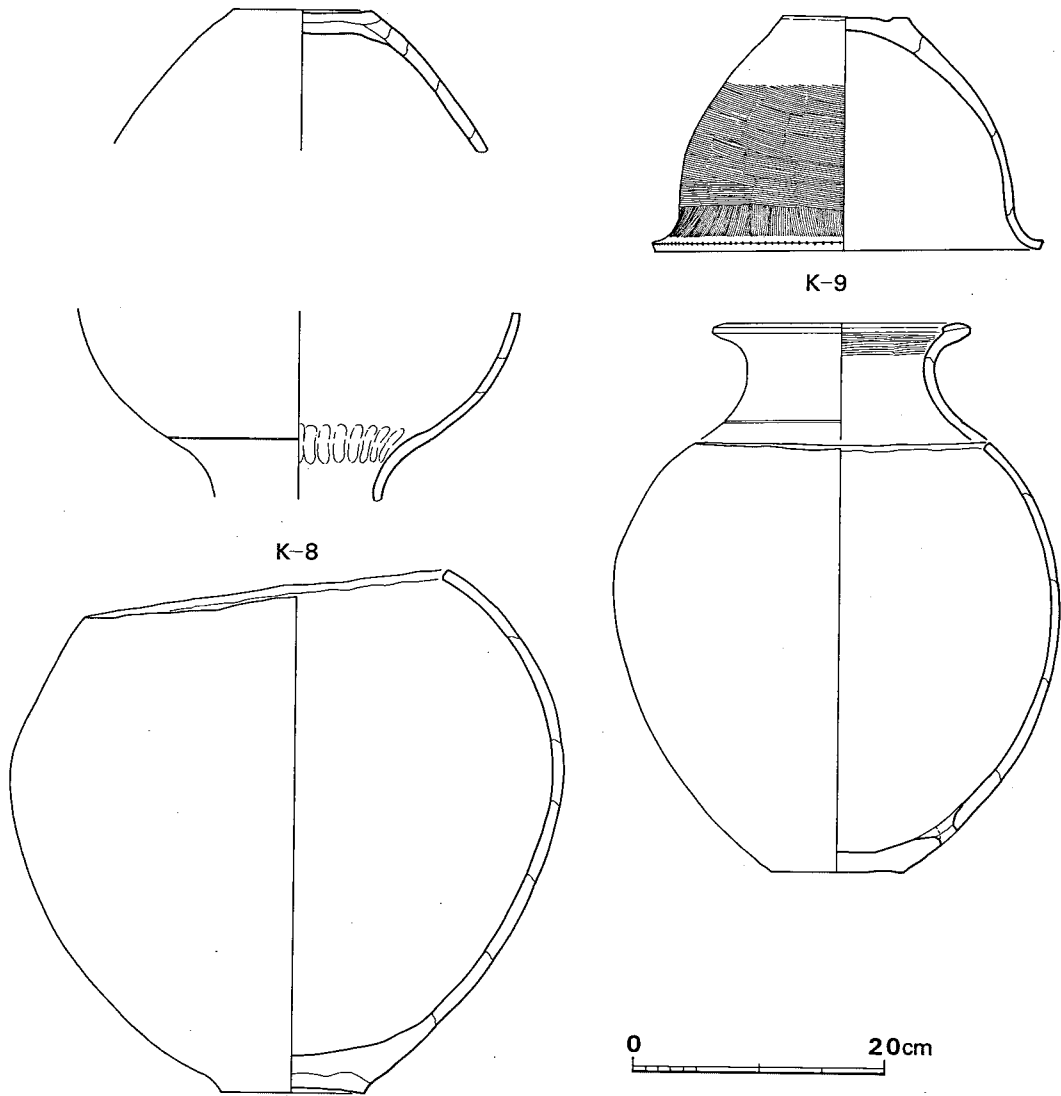
上甕 口縁を打欠かれ、胴中位も欠失する。復原器高42～43cm程の大形壺である。肩部には1条の沈線をめぐらす。器壁の厚さは上半で7mm前後、下半で10mm前後である。器面はヘラミガキ、外底はナデ、内面は肩部に指圧痕が明瞭に認められるが、その他の部分はナデ調整を施している。茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。胴部下半に黒斑が認められる。日常容器の大形壺を甕棺に転用したもので、板付IIb式に比定される。甕棺編年に対応するとK Ib式併行期である。

下甕 肩部から上を打欠いている。上甕より大きく、復原器高は50cm程の大形壺である。底径は11.4cmを測る。器高は8～10mmとやや分厚い。器面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴下半に黒斑が認められる。日常容器の大形壺を転用したもので、板付IIb式に比定される。

9号甕棺（第95図）

上甕 器高19cm、口径30.4cm、底径9.9cmの鉢である。口縁は外反し、口唇下端にはヘラで刻目が施されている。器面は口縁から下へ縦方向ハケ目、横又は斜方向のハケ目、底部近くはハケ目の後ミガキを加えるという順で調整されている。内面はヘラミガキされているが、口縁下だけは横方向ハケ目を入れた後ミガキを加えている。器面は赤褐色を呈するが、内面は黒色磨研ともいえるつくりのよさである。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。上半部に黒斑が認められる。典型的な板付IIb式の鉢であり、日常容器を転用したものである。

下甕 口頸部を打欠かれていたが、補強に使用されていたので全形をうかがうに支障はない。器高43.5cm、口径20.4cm、底径10.6cmの大形壺である。口縁は外反し、口縁内側には粘土帯を貼付する。頸部はすぼまり、胴部は張る。肩部には1条の沈線をめぐらす。胴部最大径はやや上位にあり35.2cmを測る。底部近くには外から内へ穿孔した径17mm程の水ぬき孔がある。器壁は7mm前後と薄い。口縁の内側はハケ目の後ヨコナデ、口縁端はヨコナデ、器面は粗いハケ目の後、口縁下から胴上半は横又は斜方向の粗いミガキ、下半は斜方向の丁寧なミガキを加えている。内面の口縁下は粗いハケ目、頸部は指圧痕の後ナデ調整、胴部はナデ調整を施している。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。板付IIb式に属するもので、日常



第 95 図 8 号 甕 棺 ・ 9 号 甕 棺 (1/6)

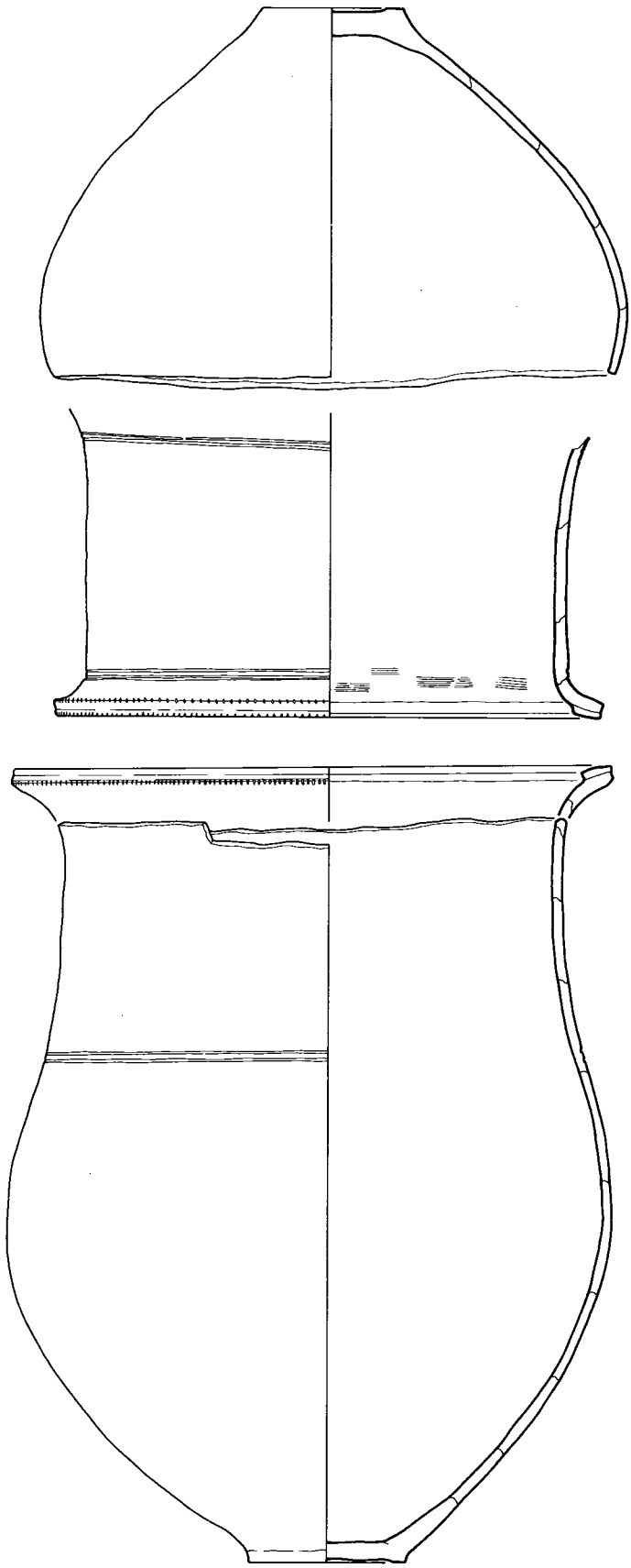
容器の大形壺を甕棺に転用したものである。

10号甕棺 (第96図)

上甕 肩部から上を打欠いているが、ほぼ全形はうかがえる。復原器高は82cm程、口径62.6cmの大形の甕棺である。口縁は外反し、口縁下は段をつくとともに2条の沈線をめぐらして

第 96 图

10 号 甗 棺 (縮尺 1 / 8)

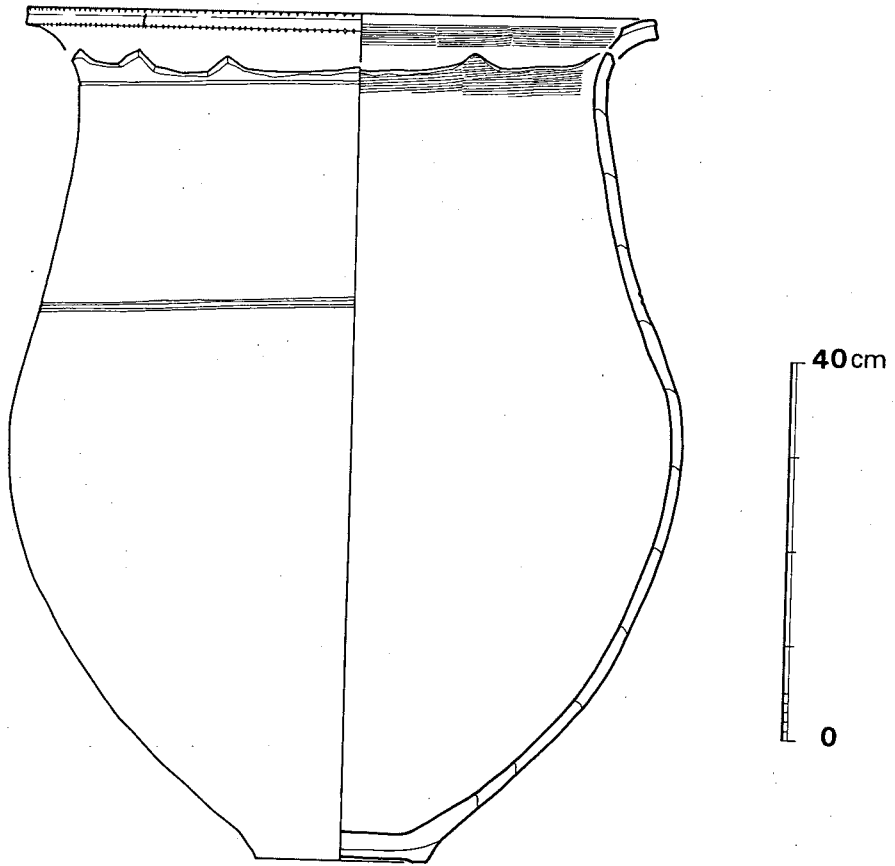


いる。口縁内側には粘土帯を貼付し、口縁端の上・下には別々にへらによる刻目を施している。頸部は強くすぼまるが直に近く、肩部には2条の沈線をめぐらす。胴部は大きく張り出し、最大径は上位にある。頸部最小径は55.2cm、胴部最大径は66.6cm、底部は4～5mm上底を呈し、径は16.2cmを測る。器壁の厚さは頸部で14～15mm、胴部で11～12mmと分厚い。口縁内外はヨコナデ、器面はへらミガキ、内面はハケ目の後ナデ調整を加えハケ目を消すが、口縁下には部分的に横方向のハケ目がみられる。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴上位に黒斑があり、その反対側には口縁から胴上位にかけてあたかも薪を並べて置いたようなまだらな黒斑が数ヶ所にみられる。甕棺の型式はK I a式に属する。

下甕 口縁を打欠かされているが、補強に使用されていたので全形をうかがうに支障はない。器高92cm、口径は68～73cmの大形甕棺である。口縁は外反し、内側には粘土帯を貼付し、口縁端の下端にはへらによる刻目が施される。頸部は強くすぼまり、胴部は大きく張り出す。底部は4～5mm上底を呈する。肩部には2条の沈線がめぐらされている。頸部最小径は57.2cm、胴部最大径は中位に近く69.5cm、底径は18cmを測る。器壁の厚さは頸部で12mm前後、胴部で9～10mm程度である。口縁内外はヨコナデ、器面はへらミガキ、内面はナデ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴上半に黒斑があり、反対側の口縁下から胴部中央よりやや下位までまだらな黒斑がみられる。甕棺の型式はK I a式に属する。

11号甕棺（第97図）

口縁を打欠かされているが、全形をうかがうに支障はない。器高は89.4cm、口径66.5cmの大形甕棺である。口縁は外反し、内側には粘土帯を貼付する。口縁端の上下には別々にへらによる刻目が施されている。頸部はつよくすぼまり、胴部は大きく張り出す。口縁下には1条、肩部には2条の沈線をめぐらしている。頸部最小径は55.7cm、胴部最大径は上位にあり70.9cmを測る。底部は4mm程上底を呈し、底径は18cmと大きい。器壁の厚さは頸部で13～14mmと分厚く、胴部は11mm前後とやや分厚い。口縁端はヨコナデ、器面はへらミガキ、内面の口縁から頸部上位にかけてはやや細目の横方向のハケ目が施され、他の部分はハケ目をナデ消している。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。胴部上半に大黒斑があり、その反対側には口縁下から胴部上半にかけては、あたかも薪を並べて置いたかのようにまだらな黒斑がみられる。甕棺の型式はK I a式に属する。



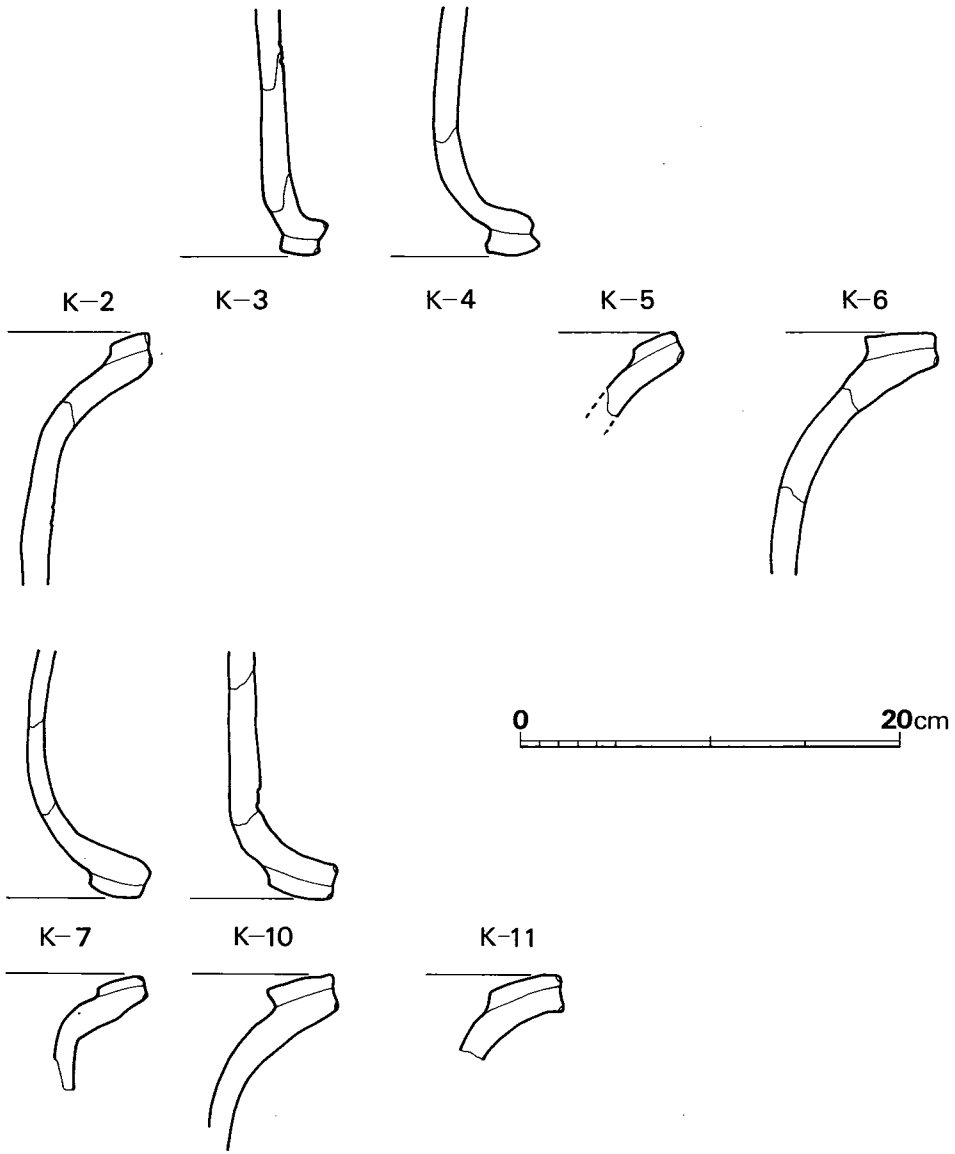
第 97 図 11 号 甕 棺 (縮尺1/8)

ロ) 人 骨

2号甕棺人骨

頭骨，上顎歯，左右大腿骨，左右脛骨，右腓骨等が検出された。出土時に測定した左大腿骨長は430mmであり，大きさからいっても成人の男性人骨とみてよい。大腿骨長からの推定身長は162.1cmである。

3号甕棺人骨



第 98 図 甕 棺 口 縁 部 (縮尺1/4)

頭骨，上顎歯，上腕骨，左右大腿骨，脛骨等が検出された。性別は不明であるが，歯の咬耗の度合からみて推定年齢は成年である。

4号甕棺人骨



0 10cm

2

1. 4号甕棺下ガメ底部 2. 5号甕棺下ガメ頸部
第99図 タタキ痕拓影(縮尺2/3)

左右大腿骨，齒等が発見されたが，特徴的部分がなく決め手に欠ける。性別は不明，推定年齢は成人。

6号墓棺人骨

頭骨，下顎，左右上腕骨，骨盤，左右大腿骨，脛骨等が発見された。性別は不明，年齢は成年と推定されるが，上顎の左小白歯，左大白歯の咬耗の度合は軽く，あるいは若年の可能性もある。

7号墓棺人骨

頭骨，齒，前腕骨，骨盤，大腿骨等が発見された。上顎左第1大白歯・左第3大白歯，下顎左第1・第2大白歯，下顎小白歯等があり，上顎第3大白歯は既に萌出しており，咬耗度は軽い。成年と推定される。性別は不明。

10号墓棺人骨

頭骨，齒，肋骨，左右大腿骨，脛骨等が発見された。成人と推定されるが，性別は不明。

11号墓棺人骨

齒，大腿骨，脛骨等が発見された。成人と推定されるが，性別は不明である。

人骨については九州大学医学部解剖学教室永井昌文教授から御指導・御教示を受けた。

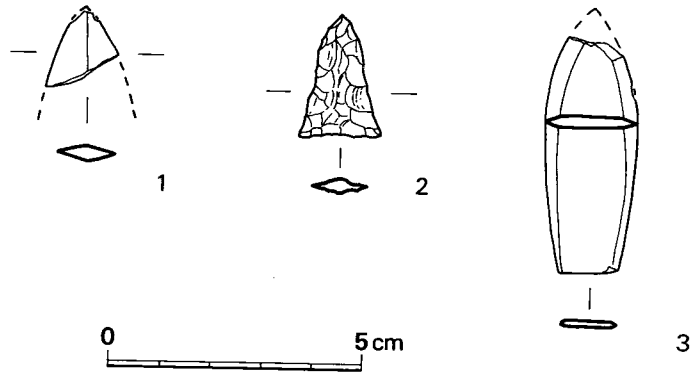
ハ) 棺内出土の遺物

2号墓棺内出土の石器(第100図)

1は石剣の切先で長さ15mmしか残らない。鎬は明瞭で断面は菱形を呈する。厚さは3mm強である。先端も一部つぶれている。灰黄色を呈する頁岩製のものである。これは刺突時に骨につきささり，先端がつぶれ，そのショックで折損したものであることは嘉穂郡穂波町スダレの石剣嵌入人骨の例(註1)をはじめとして現在までのいくらかの資料によって明らかである。

2はサヌカイト製の打製石鏃で長さ24mm、基部の幅17mm、厚さ3mm程のものである。

3は灰緑色を呈する粘板岩質砂岩製の磨製石鏃である。復原長53mm、基部での幅12mm、厚さは2.5mm、基部では1.5mmを測る。



第 100 図 2号甕棺内出土の石器（縮尺2/3）

先端を欠失するが、これも刺突時のショックによりつぶれたものと考えられる。

これらは人骨の残りが悪く、かつ倒立の甕棺内に座らされた被葬者に伴うもので、軟部腐敗後に人骨がくずれ落ちているので、原位置をおさえることはできないが、まず矢を打込まれ、剣でとどめを刺されたものと考えられ、個人的争いというよりも集团的戦闘による戦いの犠牲者といえるだろう。このような人を殺傷にまでおよぶ戦いが生み出される要因は水稻可耕地の開発をめぐる土地、水争いが最も大なるものであろう。

11号甕棺内出土の鉄製品（図版55）

この遺跡の甕棺内人骨は残りが悪く、痕跡的なものであったので、人骨は土とともにもち帰り水洗いをして検出した。この人骨水洗中に検出したものであり、1号井戸からの混入でないことは確実である。青味を帯びており一見して銅製品とも見まちがう感じであったので、九州大学医療技術短期大学部上原周三助教授に分析を依頼し、鉄製品であることが判明した。分析結果は別掲のとおりである。

はりがね状のもので径は約1.5mm、長さ5～10mm程のもの20片余がある。用途はわからない。弥生時代当初より鉄器が存在することは知られているが、はりがねとはいえ前期前半のものであり、我国初期鉄製品の貴重な資料となろう。

註1 永井昌文、橋口達也「磨製石剣嵌入人骨について」穂波町教育委員会『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書 第1集 1976 所収

二) 曲り田甕棺の編年的位置

2号・4号・5号・6号・7号・10号・11号甕棺は壺が大形化したものであり、口縁の外反の度合、頸部のつよいすばまり、胴部の張り等、又2号・4号下甕・5号下甕の肩部内面にみられる段は夜臼式、板付I式の壺の成形における特徴的な要素であり、これを残している点から言ってもかつて橋口の分類したKIa式(註1)の特徴をよく示している。これらのなかでも5号下甕・7号甕棺は頸部が短く、肩の段の部分が他のものに比べて古い要素をもっている。

3号甕棺は以上の甕棺に比べると口縁の外反度がよわく又頸部のすばまりも弱い。しかしながら未だ壺の大形化した形態を保ち、頸部の曲線は内側に彎曲しておりKIb式の特徴をそなえている。

1号甕棺に使用された大形壺は口縁が肥厚し、口縁下に段を有する点など全体として板付I式に近い古い要素をもち、板付IIa式に属することには異論はなかろう。そしてこれがKIa式に属する筑紫野市剣塚の15号・16号甕棺に副葬された小壺(註2)と同時期のものであることはまちがいない。したがってこの1号甕棺に使用された日常容器の大形壺はKIa式に併行する時期のものである。

8号・9号甕棺に使用された大形壺・鉢は1号甕棺に使用された大形壺に後出することは明らかである。大形壺であるがために底部が少ししまりがながい、これらは板付IIb式に比定し得ることはまた確実であり、3号甕棺と同じ時期のものと考えられる。つまりKIb式併行期のものといえる。

さて橋口の分類によればKIa式は板付II式の最古期(板付IIa式)からやや後出の時期まで、つまり前期中頃を、KIb式は板付IIb式つまり前期後葉を、KIc式いわゆる金海式甕棺には前期末の時期を与えている(註1)。これに対して柳田康雄氏はKIc式いわゆる金海式甕棺に属する三雲柿木3号甕棺墓の墓壙内より出土した上底の底部、同2号甕棺墓の墓壙内より出土した刻目を有する三角口縁の甕の口縁片を根拠にして、これを中期初頭の城ノ越式のものとして認識して、KIc式いわゆる金海式甕棺を中期初頭に下げ、橋口がKIb式の典型として呈示した大野城市中・寺尾2号・3号・17号甕棺とそれらの副葬小壺に言及し、KIb式甕棺を前期末に下げる見解を示している(註3)。青銅器副葬の開始期等にも関係して述べられているので検討を加えてみたい。

橋口はKI期の甕棺は「壺が大形化し、壺から発展した特徴をよく示し、残しており、器面調整に壺と共通する手法、主にはへラミガキが施される」という点をあげ、KIa~KIc式甕棺に副葬又は共伴する土器を示してそれぞれに先に述べたような相対的年代を付与した(註1)。柳田氏が三雲柿木2・3号甕棺に伴った口縁片、底部と同様のものとして指摘している三雲加賀石I-22・23地区の貯蔵穴から出土している甕(註4)は、刻目を有する三角口縁で、口縁下には

刻目凸帯をめぐらしており、底部近くでひきしまり裾では外に開く上底の底部である。このような形態の甕は一般に亀の甲式又は亀の甲型土器といわれ前期末のものと考えられてきた。橋口もKIc式に伴う土器として福岡市飯氏出土の同様の甕をあげており、この種土器が共伴することは当然と考えている。又氏が中期初頭に属するとする最も有力な根拠としているこの上底の底部は地域性をもつものであって、筑後に多く又早良平野・糸島地方にも多くみられるものであるが、この形態の底と、中期初頭に属するいわゆる城ノ越式の甕の上底とは若干形態を異にしているといえよう。城ノ越式甕の底部は細くひきしまるが、裾の開きは少く又底部は非常に厚いのを特徴とする(註5)。このような形態の底部は主として遠賀川流域に分布しているといえよう。したがって柳田氏が指摘した甕は亀の甲式又は亀の甲型と呼ばれている土器であって一般には前期末のものと考えられており、KIc式いわゆる金海式甕棺が中期初頭に下る積極的な根拠とはならず、かえって前期末に属するという反証ともなっている。

では亀の甲式又は亀の甲型と呼ばれる土器はいつ頃発生するものであろうか。亀の甲式、南九州の高橋II式、東九州の下城式土器等は夜臼系の土器であることは明らかで、板付I式土器の波及が遅れた地域で発生し、分布の主体をもつものである。板付I式が発生した北部九州にも夜臼式甕の伝統をひくもので肩の位置にあたる部分に刻目をもつ段、刻目凸帯をもつ甕はあるが量的にはきわめて少い。板付I式の波及が遅れた地域では北部九州で夜臼式の消滅した以後にも当然夜臼系土器が残るといえよう。たとえば鹿児島県高橋貝塚では丸底の甕でわずかに屈曲する肩部に三角凸帯をもつものなど北部九州にみられないものがある(註6)。このようにみてるならば板付I式の波及が遅れた中・南九州地域では夜臼系の土器から亀の甲式、高橋II式等へとは直接的に継起していくものと考えられる。亀の甲遺跡の1号溝出土の土器(註7)をみてもしかり、近年福岡県教育委員会が調査した筑紫野市大島遺跡出土のこの種の土器(註8)もしかりである。したがってKIa式の剣塚7号甕棺下甕の蓋に使用されたこの種の鉢も当然板付II式の古期のものと位置付けてよい(註9)。以上みてきたようにこの種の甕は板付II式的全期間に及び、又この系統の刻目をもたない中期初頭の甕も存在するので今後いわゆる亀の甲式又は亀の甲型と呼ばれる土器の細分が必要となろう。

さらに今一つ、柳田氏は口縁内側に粘土帯を貼付するのは「弥生前期後半といわれる板付II式土器の新しいもの」と述べている(註3)。はたしてそうであろうか。津屋崎町今川遺跡のV字溝出土の土器について報告者は板付I式の範疇であり、夜臼式土器を伴わない、若干新出の様相をそなえたものとしている(註10)。たしかに今川遺跡V字溝出土の土器群は地域的な要素もあるのだろうが、全体に古い要素を残している。しかし、板付II式の典型であるとされる甕口唇部の下端に刻目を入れたものもみられる。又板付I式としてもよい高坏はV字溝下層より出土した口縁が彎曲気味に外反する高坏1点である、口縁内側に粘土帯を貼付し脚が長くのび裾近くに段をつくる高坏は板付I式の範疇には入れられない。したがって今川遺跡V字溝出土

の土器群は板付Ⅱ式の最古期のものと位置付けるのが妥当であろう。口縁内側に粘土帯を貼付する手法は今川遺跡の高坏に示されるように、板付Ⅱ式の新しい段階で出現するものではないことは明らかといえる。むしろ口縁内側に粘土帯を貼付する手法の出現をもって板付Ⅱ式と把握されるのである。したがって大形壺、甕棺等の口縁内側に粘土帯が貼付されていることからこれらを板付Ⅱ式の新しい段階とのみ位置づけるのは不当である。

- 註1 橋口達也「甕棺の編年の研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXXI-中巻 1979 所収
- 2 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XXIV 下巻 1978
- 3 福岡県教育委員会「三雲遺蹟」Ⅱ 1981
- 4 福岡県教育委員会「三雲遺蹟」Ⅰ 1980
- 5 鏡山猛, 杉原荘介, 渡辺正気, 大塚初重「3 福岡県城ノ越遺跡」日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』1961 所収
- 6 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」九州考古学18 1963
河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」考古学集刊3-2 1965
- 7 八女市教育委員会「亀ノ甲遺跡」1963
- 8 福岡県教育委員会「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告」1982
- 9 橋口「前掲書」1979 ではこの鉢について“いわゆる亀ノ甲式又は亀ノ甲タイプとよばれる土器が、どの時点で出現するかはきわめて興味のある問題である”としながらもこの時点では原報告にしたがっていたが、以上の理由でこの上甕に使用された鉢もKIa式と考えてさしつかえない。
- 10 津屋崎町教育委員会「今川遺跡」津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981

d) 11号甕棺内出土はりがね状金属器および赤色顔料の蛍光X線分析

九州大学医療技術短期大学部

上原 周三
長 哲二

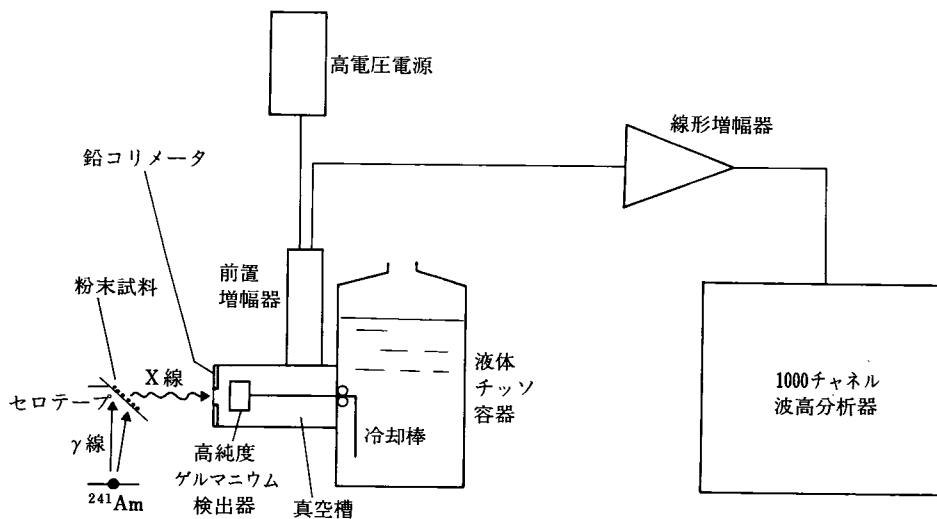
1. はじめに

蛍光X線分析法は、微量元素検出にとって有力な手段のひとつであり、非破壊検査が可能なが、大きな特色である。この方法の原理を簡単に述べる。

比較的、低いエネルギーのX線、または γ 線を試料に照射して、その中に含まれる原子を励起する。励起された原子はきわめて短時間に安定な状態に戻るが、その際原子（元素）固有のエネルギーを有するX線を放出する。このX線を特性X線、あるいは蛍光X線と呼び、すべての元素について精密なエネルギーが調べられている。

蛍光X線エネルギースペクトルを分解能の良い装置で計測することができれば、原子番号Zが20 (Ca) 以上のすべての元素については容易に元素の同定が可能となる。ただしZ<20の元素についてはX線エネルギーが小さくなり、しかもX線放出の割合（蛍光効率）が減少するので、検出はそれほど容易ではない。

この蛍光X線分析法によって二種（以下A：赤色顔料，B：はりがねと呼ぶ）の考古学的試



第 101 図 蛍光 X 線 分 析 装 置 図

料の定性的元素分析を行った。

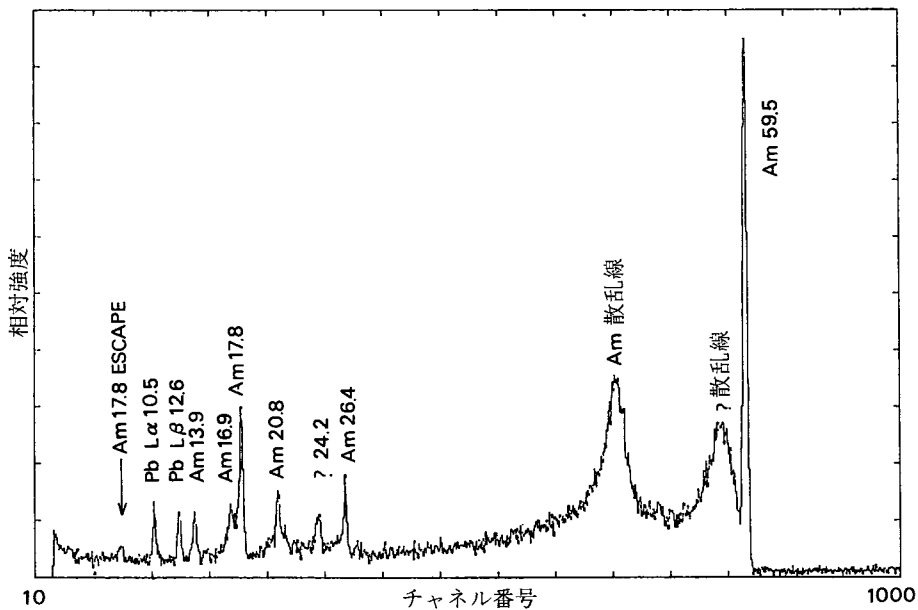
2. 実験方法

励起線源として ^{241}Am から放出される59.5keVの γ 線を利用した。また試料は粉末状に碎き、セロテープによって保持した。第101図に測定装置の概略を示す。

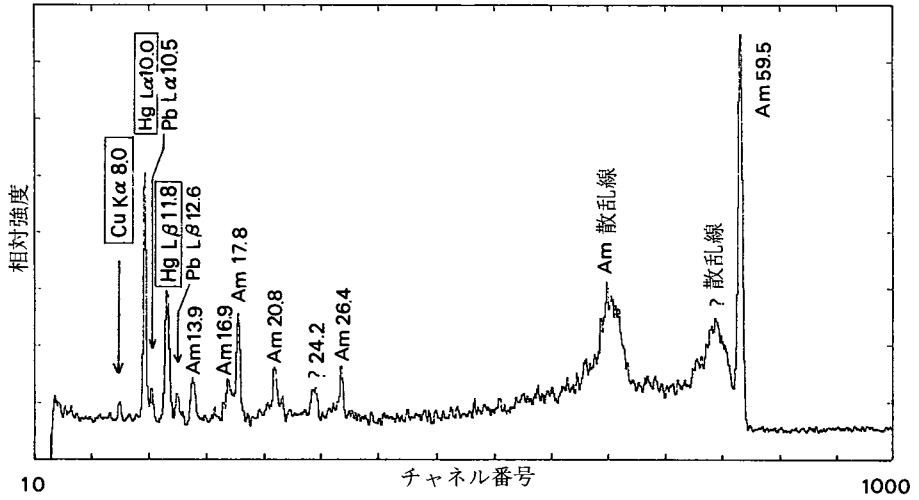
検出器は高分解能(半値幅600eV)の高純度ゲルマニウム検出器を用いた。測定可能なエネルギー範囲の下限は3keV(カリウムに相当)であった。検出器からの信号は前置増幅器と線形増幅器によって増幅し、そのパルス波高分布を1000チャンネル多重波高分析器により分析し、エネルギースペクトルを得た。

3. 結果

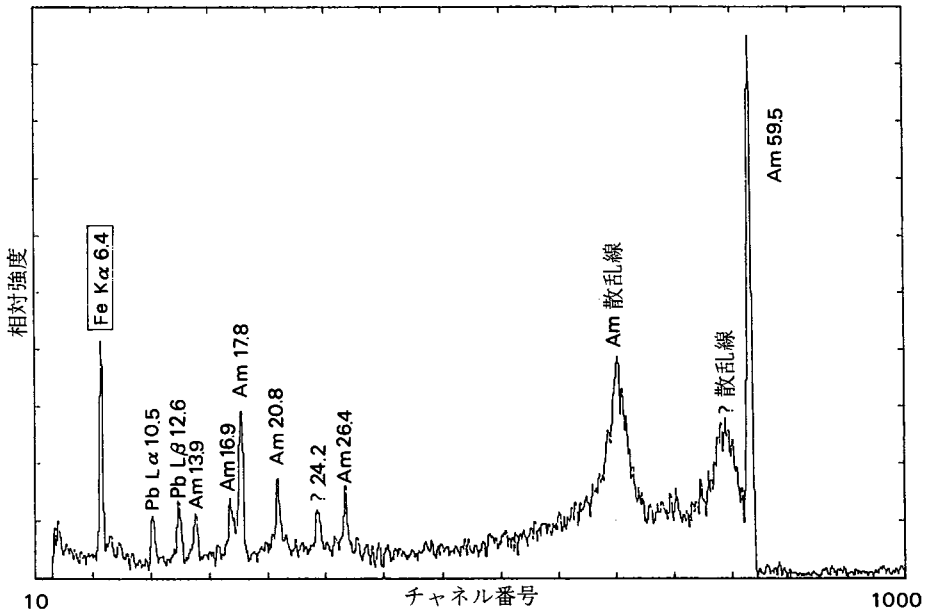
試料を取り除いた場合、つまりバックグラウンド・スペクトルを第102図に示す。図に見られるピークは ^{241}Am 線源からの直接線とその散乱線が大部分であるが、検出器の前方に設置されている鉛コリメータの LaX 線も見い出された。ただし24.2keV相当のピークだけは何に由来するのか、不明である。



第 102 図 バックグラウンド・スペクトル



第 103 図 試料A (赤色顔料) のスペクトル



第 104 図 試料B (はりがね) のスペクトル

試料Aのスペクトルを第103図に、Bを第104図に示す。それぞれの計測時間は試料によって異なるが、統計的ゆらぎが無視できる程度に長時間（4－5時間）計測した。これらのスペクトルから図2のバックグラウンドを差し引いて種々の計算を行えば定量も不可能ではないが、定性分析を目的としているので定量分析は行わなかった。

したがって、この場合エネルギーのみに注目すればよいことになる。バックグラウンドにあらわれているピークは第103図、第104図にも出ており、それらを消去していくと、残るピークはAにおいては、Cu-K α とHg-L、BにおいてはFe-K α のみとなった。

4. まとめ

以上より、試料の主要な成分は

A：赤色顔料 銅，水銀

B：はりがね 鉄

であることがあきらかにされた。

4) 堤田出土の遺物

堤田1トレンチ出土土器(第105~107図)

総てが第5層とした包含層出土品である。中でも1~3の歴史時代遺物は、トレンチ北端寄りの部分にかたまって出土したものである。

1は、須恵器杯片で、低く外端で接地する小さい高台を、体・底部の境よりわずかに内側に付ける。復元高台径9.1cmを測り、内外面回転ナデ、底内面にはナデツケがみられる。胎土精良で、焼成やや甘く、灰白色をなす。

2は、土師器高台椀で、外方へ張るやや長く厚い高台を、体・底部の境目に付ける。復元高台径10.9cmを測り、かなり大型となる。内外面ともに磨滅著しく、調整は不明である。胎土は精良で、焼成は良好である。内面淡褐色、外面は淡赤褐色をなす。

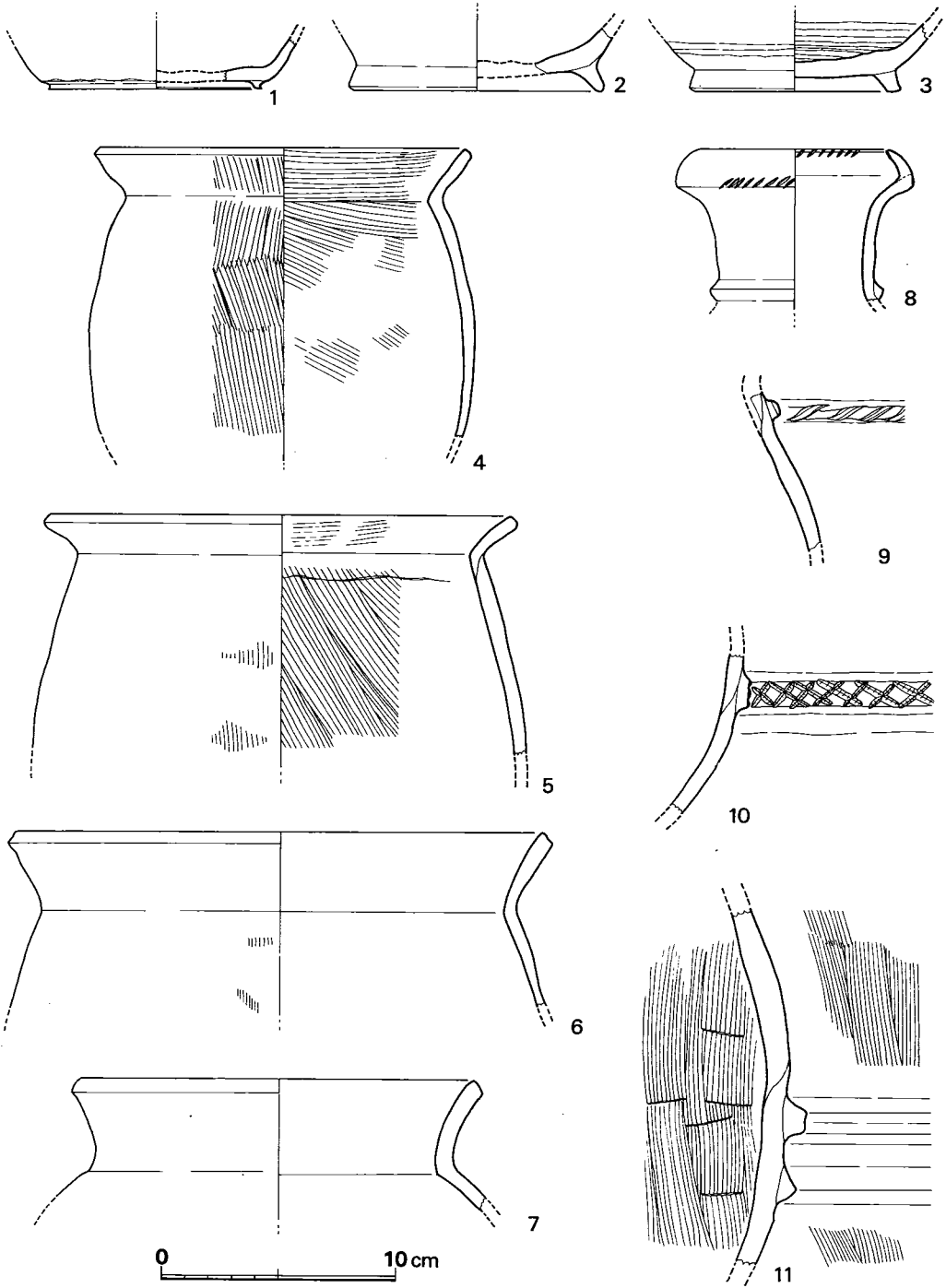
3は、土師器高台椀で、外方へやや張る厚手の内端で接地する高台を、体・底部の境目に接して付ける。高台径9.1cmを測り、高台部周辺は回転ナデを施す。内面と体部外面は、横方向への整然としたヘラ磨きが施されている。胎土は精良であり、焼成は良好であり、淡茶色を呈する。

4は、口径16.0cm、胴最大径16.4cmを測り、内面に稜をつくり、「く」の字状に開く口縁につくる弥生土器甕である。やや小型のものであり、口縁外面中途はわずかに中ぶくらみをする。口縁部内面は横ナデ、胴部内面も横から斜め方向のハケを施すが、かなり磨滅している。口縁外面から胴部外面はやや粗い縦ハケがみられる。胴部外面下半には煤が付着する。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡褐色を呈する。

5は、胴中位で張り、内面にシャープな稜をつくり、直線的に開く口縁をつくる甕である。口径20.1cm、胴部最大径21.0cm前後になると考えられる。口縁内外面は横ナデを施すが、内面には横ハケが残る。胴部内面は粗い斜めハケ、外面は磨滅するが縦ハケがわずかに残る。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は良好で淡褐色を呈する。

6は、復元口径22.4cmを測り、あまり張らない胴部から、内面に稜をつくり、長く外傾状に開く口縁につくる。口縁外端面はいくらか凹状となる。全体に磨滅するが、口縁内外面は横ナデ、内面はナデているかと思われる。胴部外面は縦ハケが施されている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。内面は淡褐色、外面は淡茶褐色を呈する。

7は、口径17.4cmを測り、口縁があまり開かない壺状の形態をなす。頸部内面には稜をつくる。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。内面は淡白褐色、外面は淡茶褐色を呈する。



第 105 図 堤田 1 トレンチ出土土器 (その 1) (縮尺 1/3)

8は、袋状口縁の外面に稜をつくってきている壺である。口縁は内湾状に内傾しており、頸部下端には断面三角形凸帯を付ける。口唇部内端部と、外面稜線直上に右斜めの細い刻目を巡らせている。頸部下端の凸帯上にも斜め刻目があるような気もするが、磨滅して不明である。口径8.2cm、接合部外径10.3cm、頸部径6.7cmを測る。全体に磨滅著しくて、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好であり、淡茶色から黒色を呈する。

9は、やや大型品で頸部下に凸帯を付け、斜めの大きな刻目が施される類である。凸帯部のところで、口縁部と胴部が接合されている。胎土には細砂粒をいくらか含むが、かなり精良である。内外面ともに磨滅しており、調整不明である。焼成は良好であり、外面は淡赤茶色、内面は白褐色を呈する。

10は、やや大型壺胴部片で、幅広い凸帯を付けて、斜めの交叉する×印状の文様を巡らせる。ちょうど凸帯下で器壁が接合されている。凸帯上面の文様はハケ工具端の押圧によるものである。凸帯周辺部は横ナデを施すが、他面は磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂粒をいくらか含み、焼成良好で、外面は淡赤茶色、内面は白灰色を呈する。

11は、大型壺胴部片で、最大径部より下位にコの字状凸帯と三角凸帯とを各一条ずつ付ける。コの字状凸帯上面はやや凹状となる。胴部外面はやや粗い縦ハケ、凸帯部周辺は横ナデを行う。胴部内面は縦ハケ調整を施している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は淡灰褐色、外面は淡茶褐色をなす。

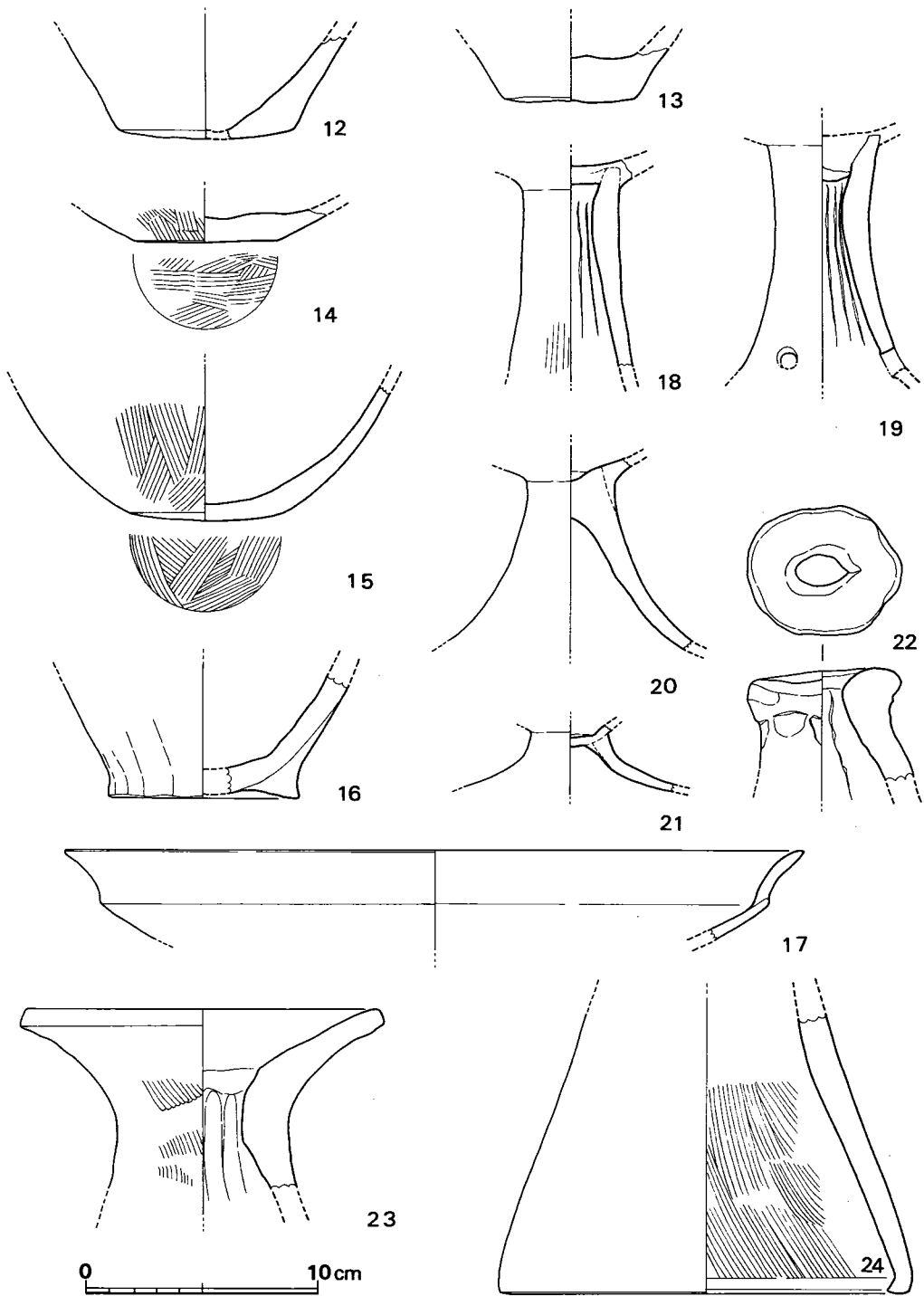
12は、底径7.6cmを測り、底部外面が凸レンズ状のふくらみをみせる。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面淡白褐色、外面は淡茶褐色をなす。

13は、部厚い底部片で、外面がやや凸レンズ状にふくらむものである。底径5.7cmを測り、内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土には粗砂粒をかなり含む。底部内面は指オサエにより、凹凸が著しい。焼成はやや良好である。外面は赤褐色から黒褐色、内面は暗灰褐色をなす。

14は、外面がわずかに凸レンズ状にふくらむ壺底部である。底径6.3cmを測り、胴部外面は雑なやや粗い縦ハケを施す。内面は荒っぽいナデがみられる。底外面にもやや粗い雑なハケが施されている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。外面は茶褐色から黒褐色をなし、内面は淡灰茶褐色を呈する。

15は、底外面が凸レンズ状にふくらみ、不安定な壺底部である。底径6.5cmを測り、胴部外面には雑な縦方向のハケ調整が施されており、内面はナデられている。底部外面にも雑なやや粗いハケ調整がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。外面は淡褐色から黒褐色（黒斑）、内面は淡茶褐色を呈する。

16は、やや上げ底状となる甕底部であるが、形態・手法から他遺物と異なり、夜臼期のもの



第 106 図 堤田 1 トレンチ出土土器 (その 2) (縮尺 1/3)

と考えられる。復元底径8.2cmを測り、胴部外面は、縦方向の板状工具による擦過痕が認められる。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好である。内面は淡褐色、外面は酸化鉄がこびりつき、茶褐色から白褐色を呈する。

17は、口径32.0cmを測る高杯口縁部である。杯部との接合部から、反転して短く外反する口縁を付ける。内外面ともに磨滅して、調整不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、淡褐色から灰褐色を呈する。

18は、長脚となる高杯脚部である。脚柱径4.2cmを測り、内外面ともに磨滅著しいが、外面下半に粗い縦ハケがわずかに残る。脚柱内面上半にはシボリによる縦方向のシワがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡褐色を呈する。

19は、高杯脚部で、下半部には円孔を3個配する。脚柱径4.1cmを測り、脚柱内上端は杯部を接合後に上から粘土を充填している。脚柱外面は縦へら磨きかと考えられる。内面にはシボリによる縦シワがみられる。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

20は、脚部上端から大きく開く類で、脚付壺乃至鉢の脚部であろう。上面の中央はへこんでいる。全面磨滅しており、調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、淡黄茶褐色を呈する。脚柱上端部径3.8cmを測る。

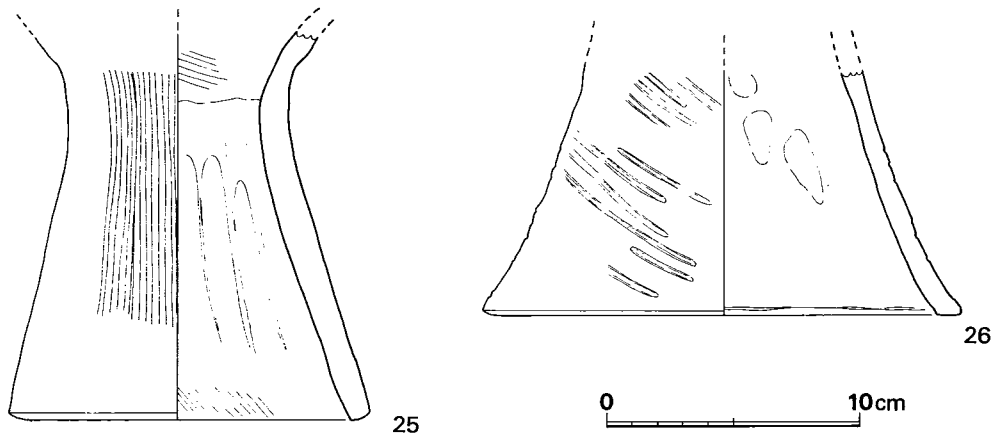
21は、小型の脚付鉢の脚部である。大きく裾へ広がるタイプで、全体に薄手品である。内外面ともに磨滅著しく調整は不明である。胎土に粗・細砂粒をいくらか含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

22は、手捏ね状の厚手の器台である。上面はいくらか斜めになり、楕円形の一端がわずかに外方へ突出しており、所謂杓形器台の一種と考えられる。外面には指オサエ痕、内面には指ナデ上げ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好である。外面各所に二次火熱による赤変部がみられ、地色は淡茶褐色をなす。

23は、上半部で締まり、上端部に大きく開くタイプの器台である。口径15.2cmを測り、締まった部分では器壁がかなり厚くなる。上端部内外面はナデており、以下外面は雑なハケの上をナデ消している。内面には指オサエナデ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は良好で、淡茶褐色から暗褐色を呈する。

24は、上半部で締まり、上下に開くタイプの器台下半部である。下端径18.0cmを測る大型品で、直線的に開き、裾部内端は内側へ張り出す。外面は磨滅しており、調整は不明である。内面は上半はナデ、下半は粗い雑な縦ハケを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は淡茶褐色、外面は淡褐色乃至赤褐色を呈する。

25は、上半に締まり、上下に開くタイプの大型の器台である。下端部径14.2cmを測り、外面は粗い縦ハケを施し、外面下端はナデ消す。内面上半には斜めのハケ、内面下半はオサエナデ痕がみられる。内面下端にも斜めハケ調整が施される。部厚い類ではなく、胎土に粗砂粒を多



第 107 図 堤田 1 トレンチ出土土器（その 3）（縮尺 1/3）

く含む。焼成良好で淡褐色から茶褐色を呈する。

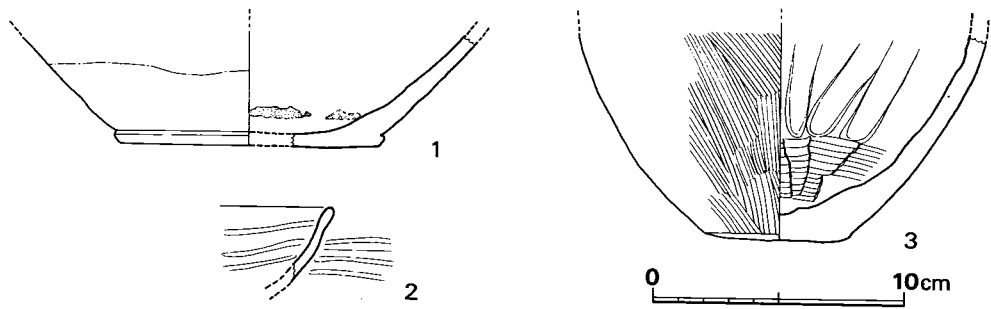
26は、上半に締まり、上下に開くタイプの大型の器台である。下端部径19.0cmを測り、裾部内端は極くわずかに突出する。薄手であり、外面には粗い斜めの叩き目を施し、その上からナデ消している。内面はナデているが、指オサエ痕は残される。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好である。外面は白褐色乃至赤褐色、内面は淡褐色から暗褐色をなす。

以上の堤田 1 トレンチ出土土器について、年代観を記しておきたい。1～3は、2の高台の状況に幾らか新しい様相も考えられるが、3の内外面のヘラ磨き手法や、しっかりした高台の状況などから考えて、総じて奈良時代末の年代が与えられる。

4～6の甕は、胴があまり張らず、いくらか長めとなる「く」の字状口縁の形態、内面ハケ調整などの手法からみて、弥生後期後半代と考えられる。6などには若干新しい傾向もみられ、より終末期に近いものであろう。壺や底部も、各々、甕と同時期と考えられる特徴を如実に示している。16は既述した如く、夜臼期のもと考えられる。高杯は、口縁部が短かく、かなり立っていることから、やはり後期後半と考えてよい。器台は上半部で締まり、大形で薄手のものが多く、終末期までは降らない。以上のことから、弥生後期後半代の範囲を出ないものが殆んどで、奈良末期のものが少量みられたということになる。

堤田 2 トレンチ出土土器（第108図）

1は、越州窯系青磁で、大宰府分類の椀Ⅱ-2類にあたる。底径10.3cmを測るやや大型品で、椀というよりも鉢的な感じを受けるものである。2と同じく、4層出土品である。体部下半から底部外面は露胎となり、円盤状の底部につくる。体部外面はロクロナデを行う。底部外面に



第 108 図 堤田 2 トレンチ出土土器 (縮尺 1/3)

は回転方向の細かいシワがみられ、糸切りにしているのかもしれない。釉は濃いオリーブ色を呈し、細かい貫入がみられる。暗茶褐色の3.5~1.0mm大の円形斑点がかなりみられる。胎土は灰色で、黒色の粒子が多く入る。露胎部分は紫灰色に発色している。内面見込みに白色の目土が付着するが、全周に何個所在かは明らかでない。

2は、1と同じく4層出土の瓦器碗口縁片である。口縁端部は丸く、内外面に粗い横へら磨きを施す。口縁外面上端から内面の上より2cm程までは黒色、他は灰色をなす。胎土は精良である。小片で全容を知り得ないのが難点である。

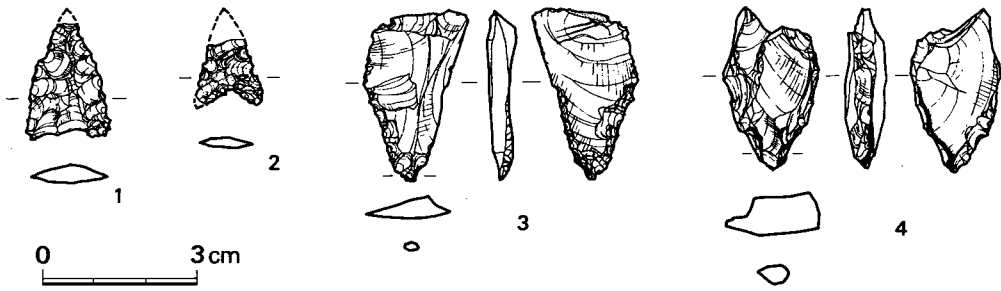
3は、6層出土の弥生土器甕底部である。凸レンズ状のふくらみをみせる小さい底部につくる。外面は雑なやや粗い縦ハケを施し、内面上半は指ナデ上げ、下端は回転方向への粗いハケを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、外面は淡褐色、内面は茶褐色から灰褐色を呈する。

以上の堤田 2 トレンチ出土遺物についてみてみると、上層の4層からの平安期遺物と、下層の6層からの弥生後期土器とに分けられる。1の越州窯系青磁碗は、曲り田包含層からも出土しており(第46図-5)、やや法量が異なるが、同タイプのものである。既に指摘した如く、この種製品の貴重さからも、単なる農村的な集落ではなかったことを推定させるところである。2は、小片で全容を知り得ない難点はあるが、大旨12C前半の段階を示すものであろう。3は、底部の特徴や、底内面のハケ調整の手法などから、弥生後期後半代のものである。

堤田出土石器 (第109・110図)

1は、黒曜石製打製石鏃である。鋒先部はわずかに欠損し、現存長2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測り、わずかな凹基状をなす。漆黒色で良質の黒曜石を使用し、表裏ともにわりと丁寧に調整する。現存重量1.2gである。

2は、やや半透明の良質の黒曜石製打製石鏃である。鋒先部を欠損し、現存長1.3cm、幅1.3



第 109 図 堤田出土石器 (縮尺2/3)

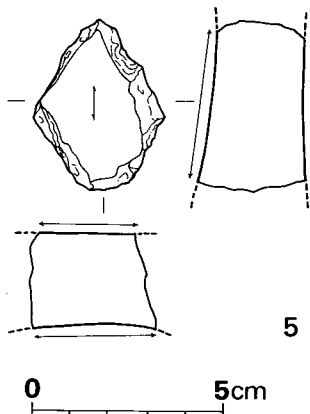
cm, 厚さ0.2cm, 重量0.2gで, 小型の凹基状となるタイプである。表裏面ともかなり雑に調整したままである。

3は, 縦長剥片を利用して, 下半両側縁を調整しただけの石錐である。やや半透明で良質の黒曜石製で, 長さ3.3cm, 幅2.0cm, 厚さ0.45cm, 重量2.6gを量る。先端部の使用痕は, 4の如き擦れた部分はみられず, 明瞭でない。

4は, 横長剥片を使用し, 両側縁に剝離を加えたのみのものである。先端部の両側は擦れており (図中の塗った部分), 実際に使用している石錐である。漆黒色で良質の黒曜石を使用しており, 長さ3.2cm, 幅1.9cm, 厚さ0.8cm, 重さ4.3gを量る。

5は, 2トレンチ7層出土の砥石である。砂岩製で粗砥に近く, 両面を使用している。現存長4.5cm, 幅3.5cm, 厚さ2.9cmを測り, 表裏面ともに, かなり使用しており, 中央が凹状をなしている。

以上の石器は, 1~4が夜白期から弥生前期に属するものと考えられ, 5は層位的にみて, 弥生後期以前のものであろうと推定される。



第 110 図 堤田出土砥石 (縮尺1/2)

III. まとめ

III. まとめ

第8集においては石崎曲り田遺跡の遺構と歴史時代～弥生時代の遺物について報告してきた。以下要点をまとめてみたい。

1. 平安時代初期に属すると考えられる2間×5間の掘立柱建物2棟分が検出された。この建物群の主軸方位は真北よりおおむね20°近く西にふれている。これらは前原町三雲、井田付近の条里の方向、その条里に規制されている波多江遺跡の掘立柱建物群等の主軸方向とほぼ一致しており、何らかの関連を思わしめる。遺物のなかにも少量とはいえ緑釉、越州窯青磁等もみられ、又瓦の存在は付近に寺院跡等の存在も推測できよう。これらのことを合せ考えるならば、奈良時代～平安時代にかけて、この地にかなりの勢力を有する階層の者が居をかまえていたといえる。

2. 弥生時代には前期の甕棺墓群、中期、後期の住居跡群が営まれ、又それらと対応する包含層とともに板付I式の包含層も一部に形成されていた。これらのことから板付I式期には、発掘区外の東北部および東南、西南部にひろがる台地の裾部の低平な部分のいずれかへ居住区が移り、板付II式の段階では発掘区に墳墓が営まれ、中期になるとまた居住区が発掘区の東北部に移り、又後期中頃以後この地を居住区にするという風に、居住区域が激しく移り変っている。これらは土地開発ともからむ問題であると考えられる。石剣切先、石鏃2を出土した甕棺もあったが、この被葬者は土地争い、水争いにかかる戦闘で殺傷された犠牲者であったと考えられよう。又無文土器の甕、金海式灰陶片2、無文土器と思われる把手等の外来系土器がみられ、この地域が地の利を得た対外交流の窓口の一つであった観をつよくした。

3. 甕棺はKIa式、KIb式の発生期の大型甕棺であり、それぞれ板付II a式、板付II b式に対応する時期に位置付けられる。これらの甕棺の埋葬法は直立、倒立のものであり、唐津地方との強い結びつきが指摘できる。又墓標石とするよりは支石墓の支石と考えるのが妥当と考えられる石を伴うものもあり、これらの甕棺が直立、倒立ということも支石墓である可能性を強くしている。又11号甕棺からははりがね状の鉄製品が出土し、我国初期鉄製品の貴重な資料を得た。

4. 我国における水稻耕作開始期の遺跡はこの近年唐津市菜畑遺跡、福岡市板付遺跡等が調査され多大な成果をあげている。曲り田遺跡においてはこの時期の住居跡と支石墓・包含層を調査し、貴重な資料を得ることができた。住居跡は一辺5～6mの方形を呈するが、なかには7mを越える大型のものも存在する。四本柱をもち、炉・屋内貯蔵穴等を有するものも確認されたが遺構の重複がはなはだしく不明な点も多い。支石墓は小形のものであり、その主体部には炭片が多くみられ、又焼骨も小片ではあるが検出された。縄文後晩期の数少ない例からではあ

るが、この時代に火葬が行われた可能性は大きい。又晩期の支石墓はこの縄文的な墓制と導入された支石墓が融合したきわめて日本的なものであるといえる。

5. 夜臼期の遺物については諸般の事情で今回は割愛せざるを得なかったが、来年度第9集としてまとめる予定であるので御期待を乞う。

版 图



a. 遺跡遠景 1 (西側から望む)



b. 遺跡遠景 2 (南側から望む)



a. 遺跡俯瞰 1 (西側から)



b. 遺跡俯瞰 2 (西側から)



a. 遺跡俯瞰3 (南側から)



b. 遺跡俯瞰4 (南側から)



a. 遺跡 附 廠 5 (東側から)



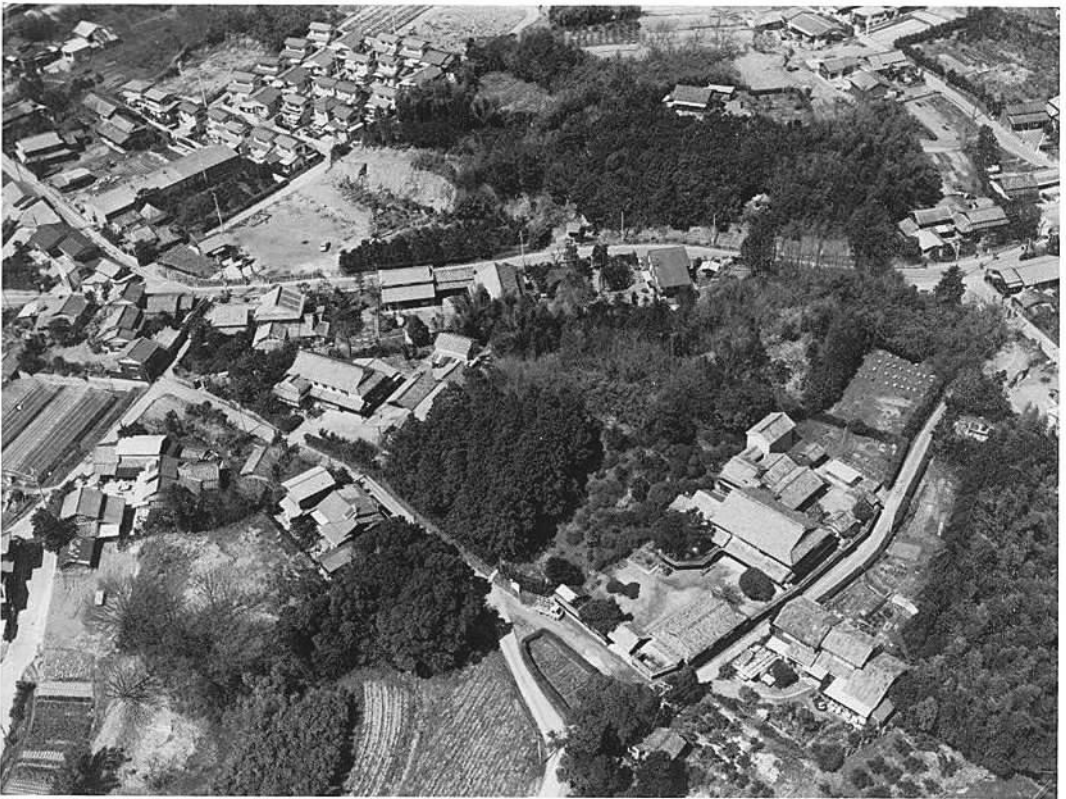
b. 遺跡 附 廠 6 (東側から)



a. 遺跡俯瞰7 (西南から)



b. 遺跡俯瞰8 (北側から)



a. 一貴山 銚子塚 附 廠 (東南側から)



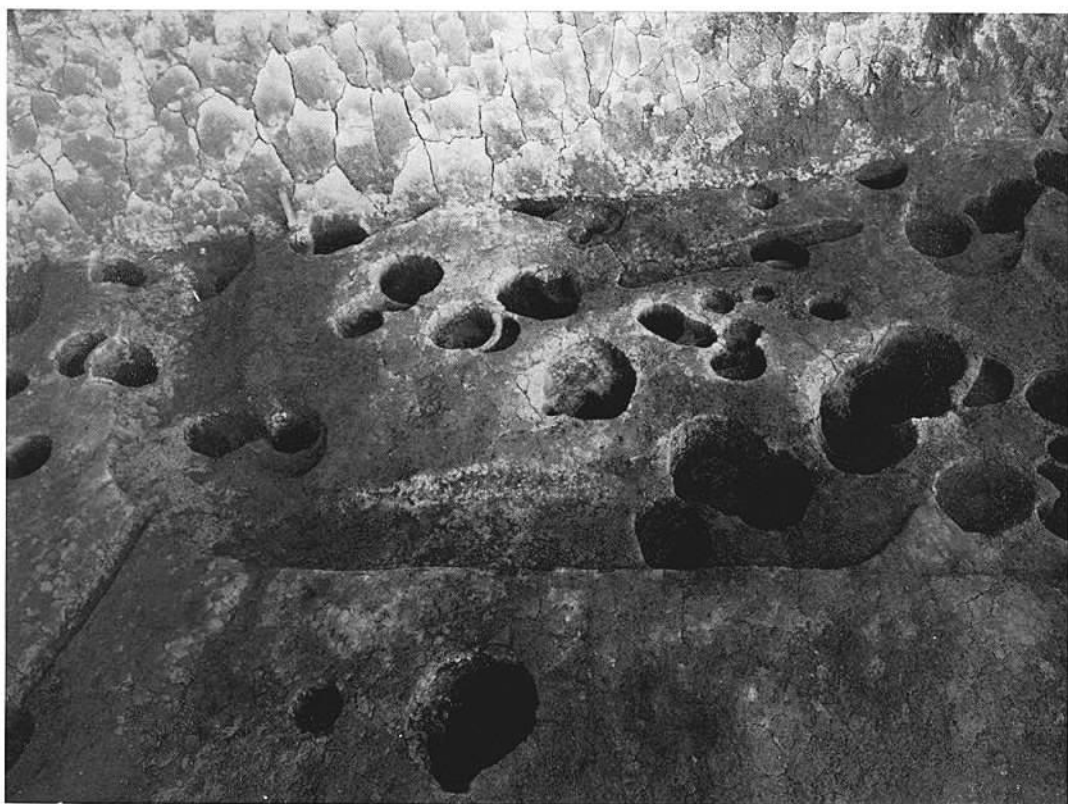
b. 二塚 古 墳 附 廠 (北側から)



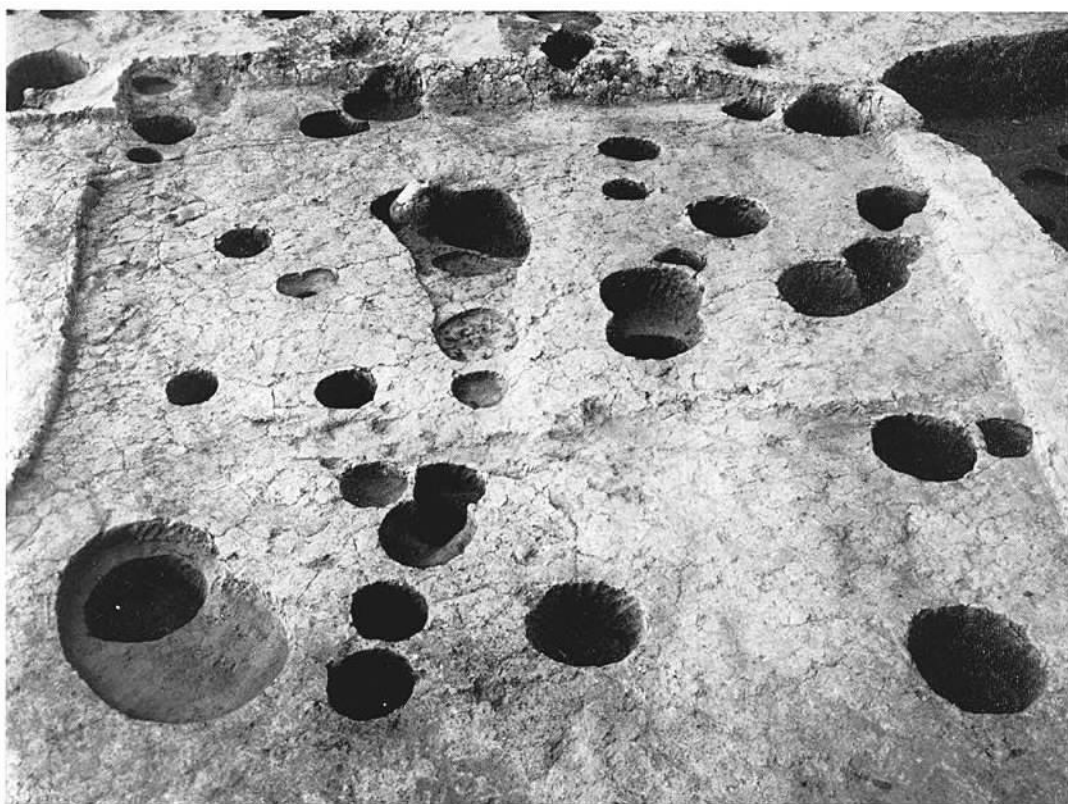
a. 遺跡全景 1 (東南側から)



b. 遺跡全景 2 (南側から)



a. 4号住居跡



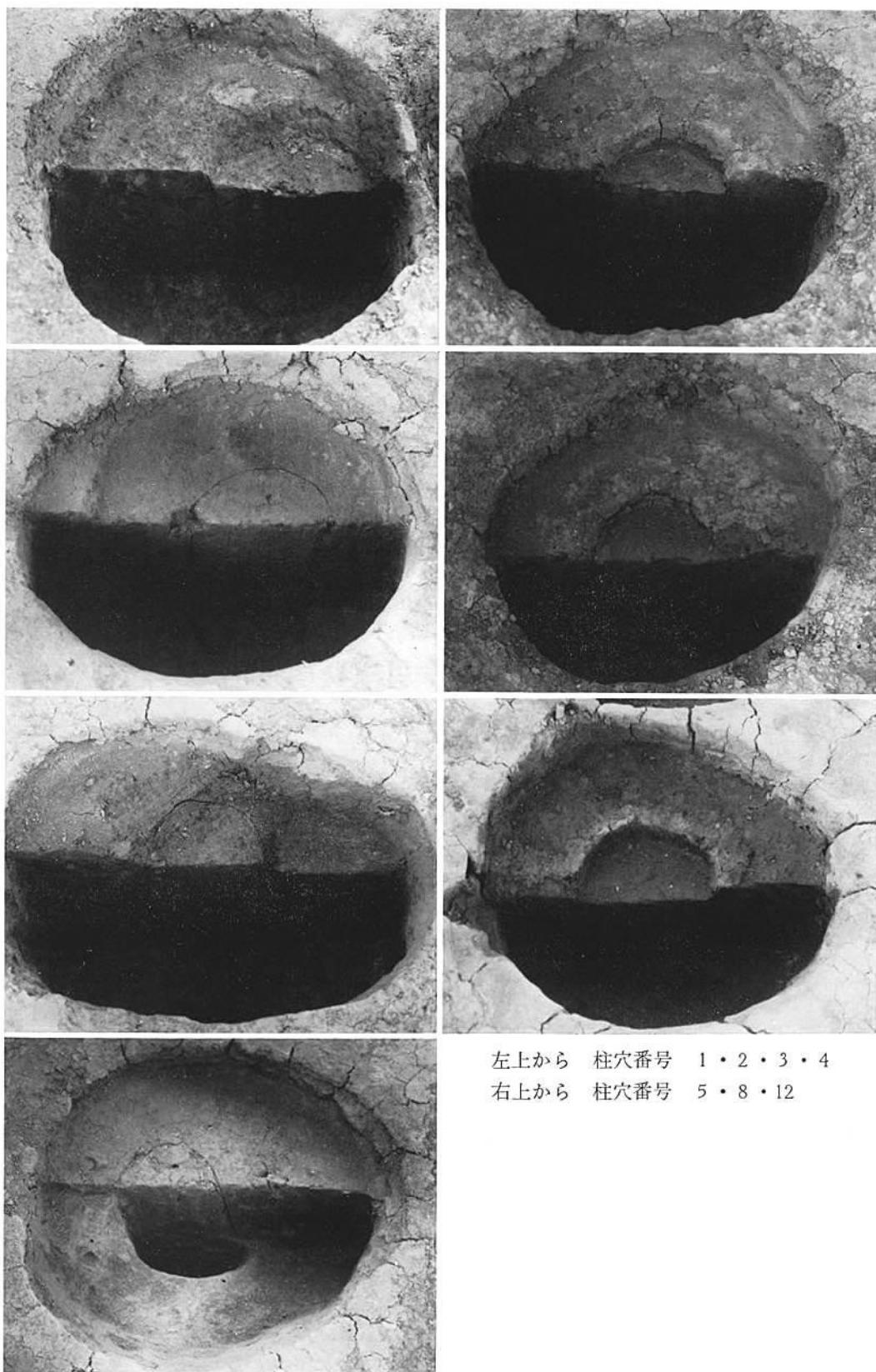
b. 27号住居跡



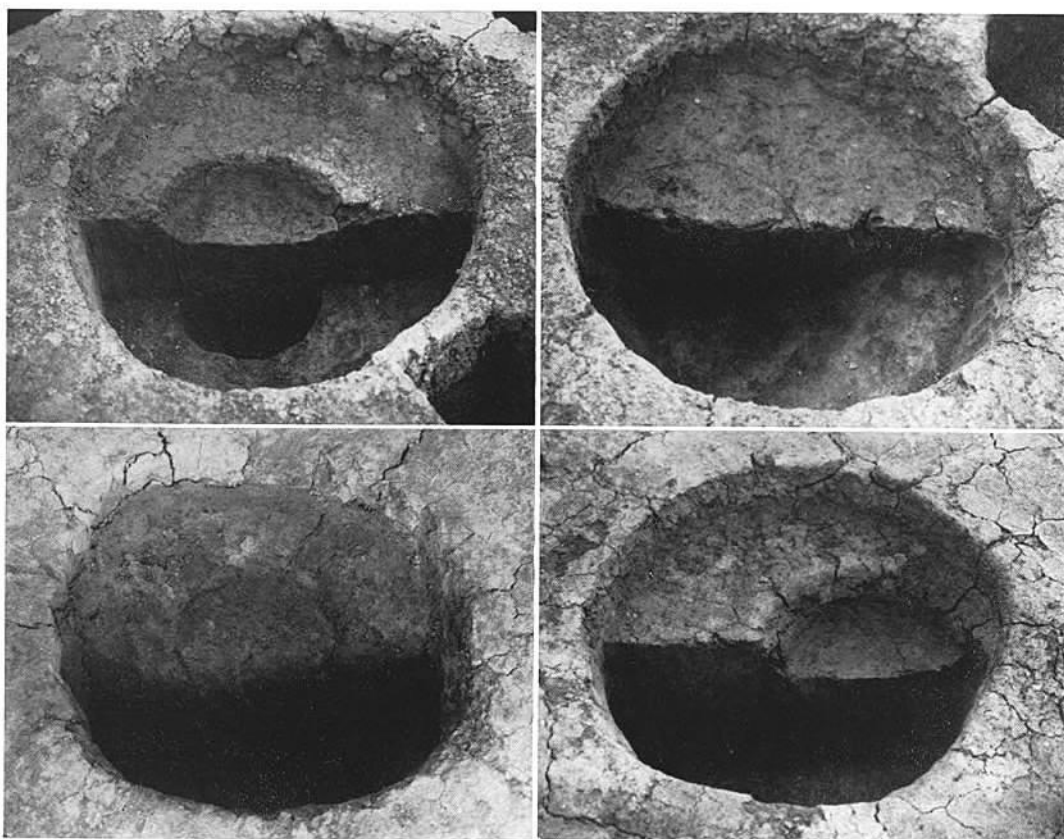
a. 1号掘立柱建物



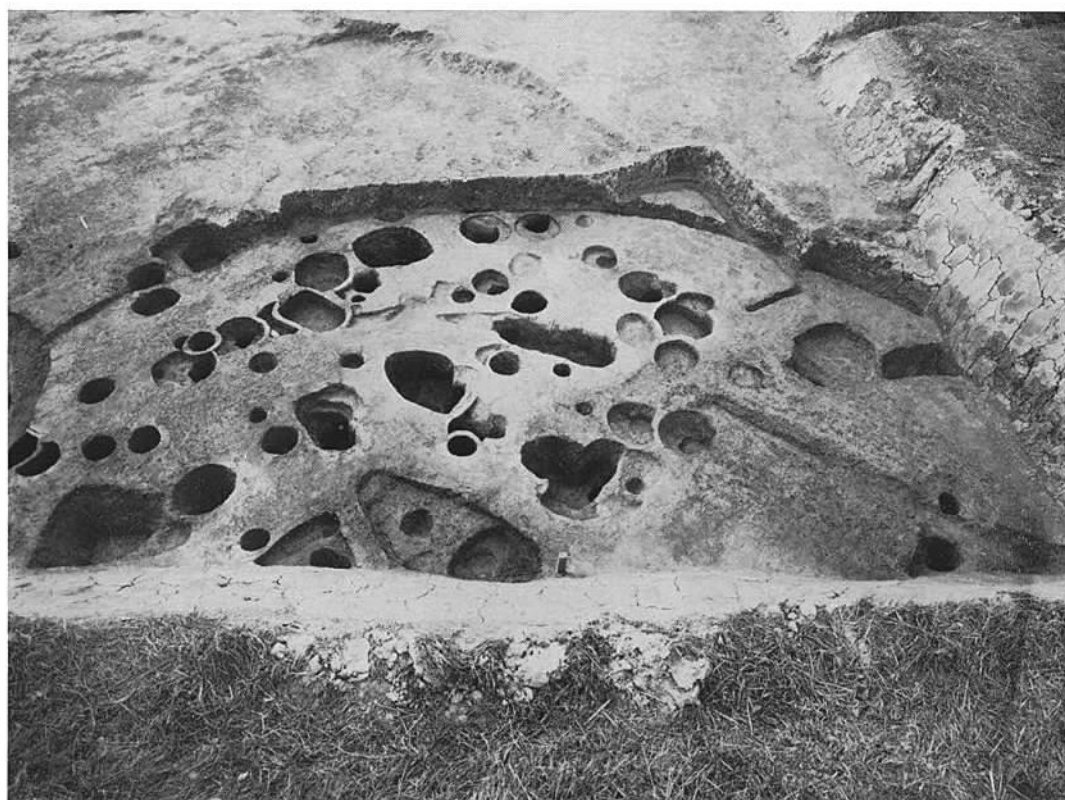
b. 2号掘立柱建物



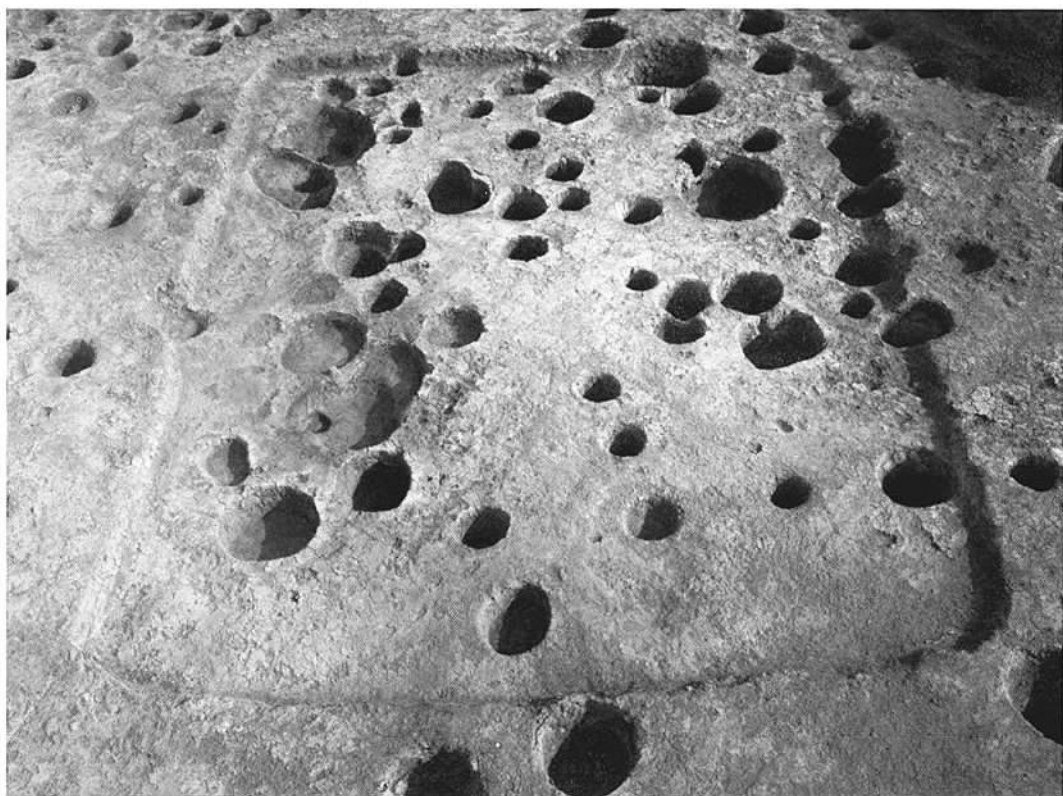
1号掘立柱建物の柱穴



a. 2号掘立柱建物柱穴 左上より柱穴番号3・5, 右上より柱穴番号7・10



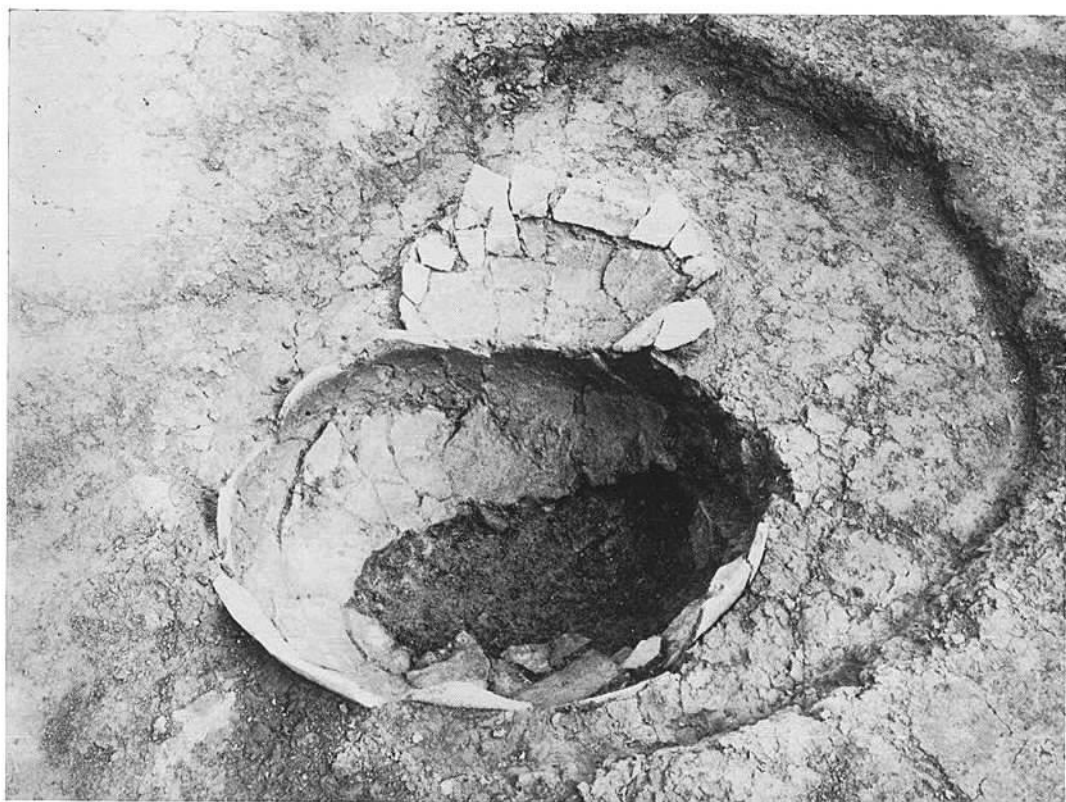
b. 1・2・3号住居跡



a. 31 号住居跡



b. 35 号住居跡



a. 1号甕棺出土状态



b. 2号甕棺出土状态



a. 2号甕棺内人骨および石剣切先出土状態



b. 2号甕棺内石鏃出土状態



a. 3号甕棺出土状态



b. 3号甕棺出土状态



a. 4号甕棺出土状态



b. 5号甕棺出土状态



a. 6号甕棺出土状态



b. 6号甕棺出土状态



a. 6号甕棺内人骨出土状态



b. 7号甕棺出土状态



a. 7号甗棺出土状态



b. 8·9号甗棺出土状态



a. 8号甗棺出土状态



b. 9号甗棺出土状态



a. 10号甕棺出土状态



b. 4号甕棺出土状态



a. 11 号 甕 棺 出 土 状 态



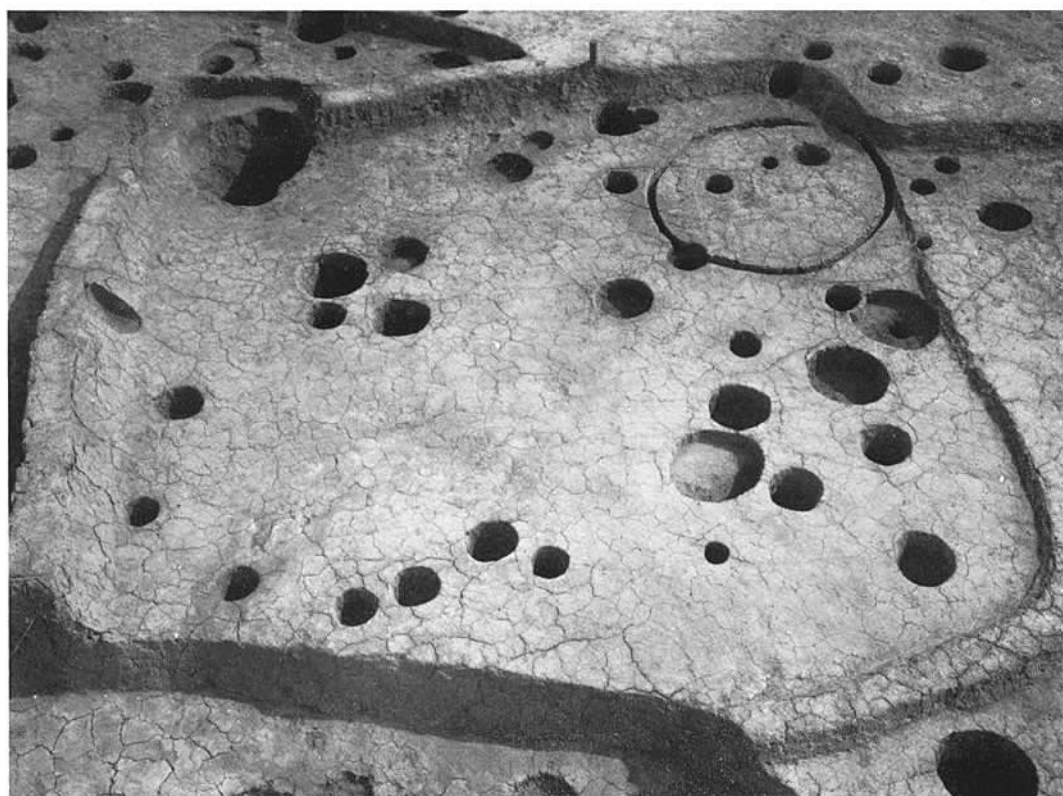
b. 支 石 墓 出 土 状 态



a. 8 号 住 居 迹



b. 17 号 住 居 迹



a. 18 号 住 居 迹



b. 33 号 住 居 迹



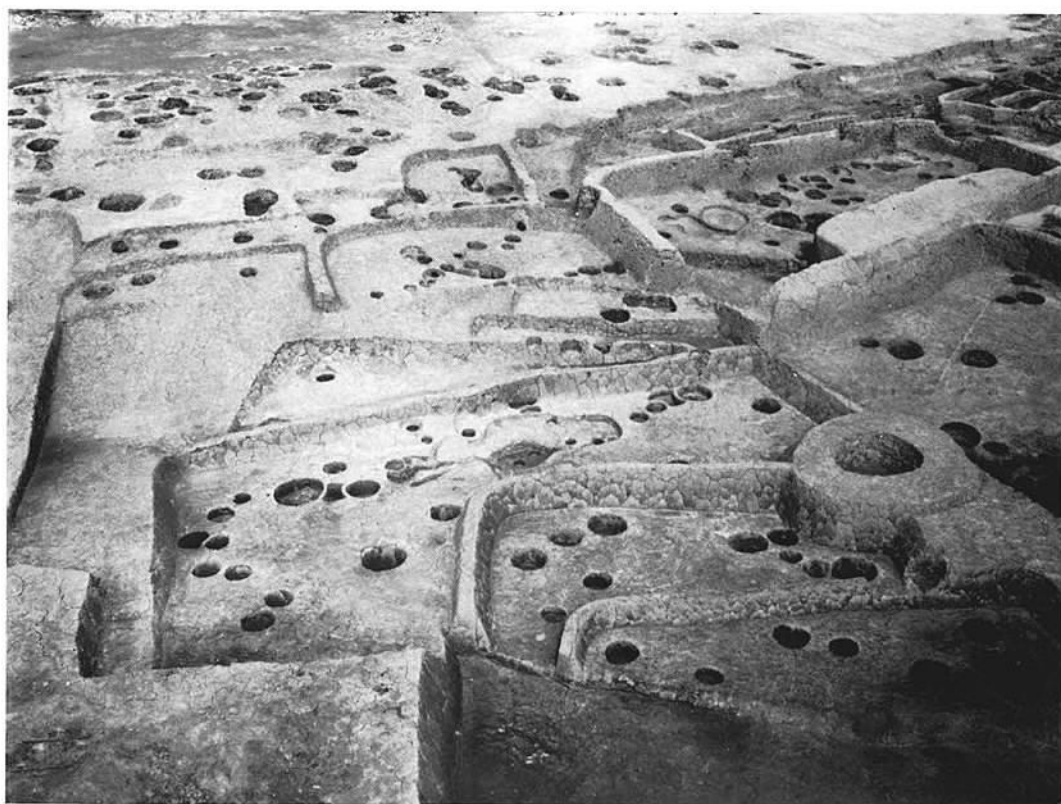
a. 13·16·17·18号 住居跡



b. 13·16·17·18·33号 住居跡



a. 13・16・17・18・33・40・41・42号 住居跡



b. 13・39・40・41・42号 住居跡



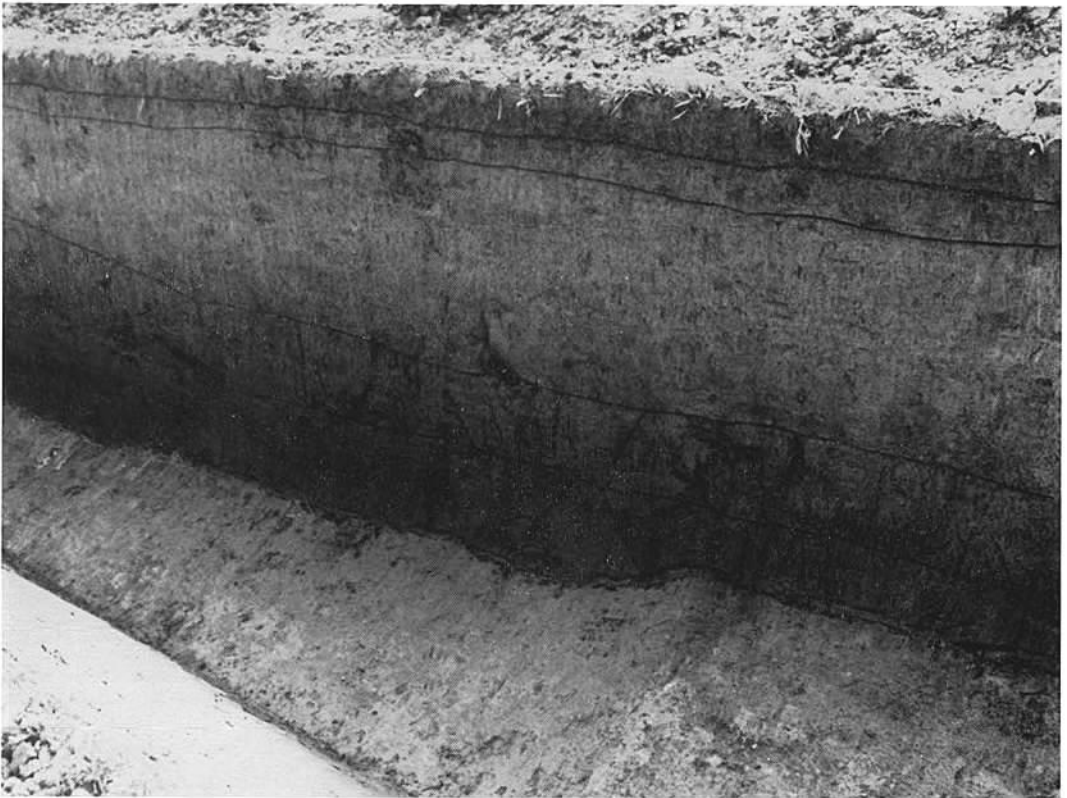
a. W-3区 トレンチ



b. W-3区 トレンチ東壁土層



W 3 包含層西壁の土層



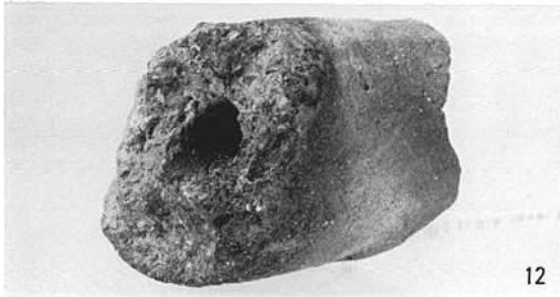
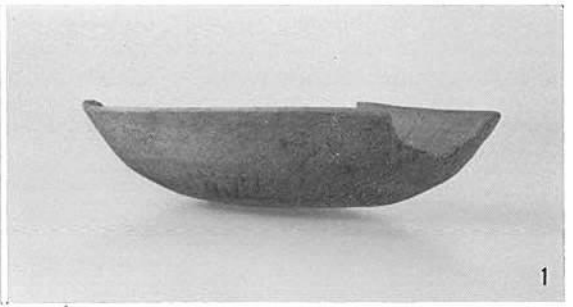
a. 堤田 1 号トレンチ西壁土層



b. 堤田 2 号トレンチ西壁土層



a. 4号住居跡出土土器



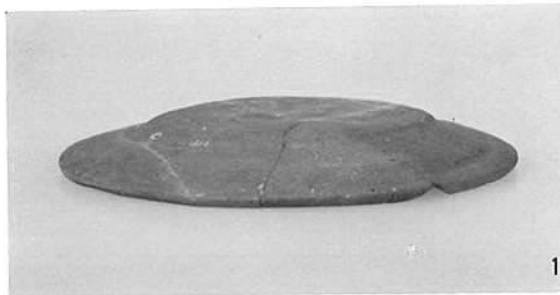
b. 27号住居跡出土遺物



c. 1号溝出土遺物



e. 包含層土師器



d. 包含層須恵器



f. 包含層出土内黒土器



7



9



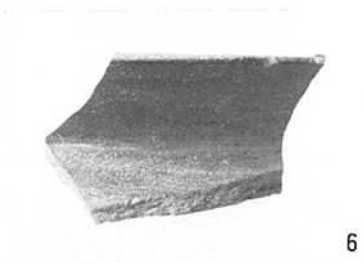
10

a. 27号住居跡出土土器

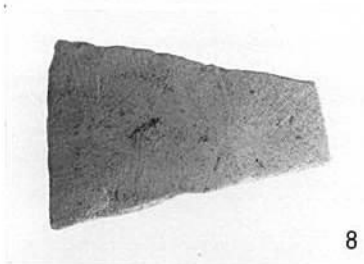


3

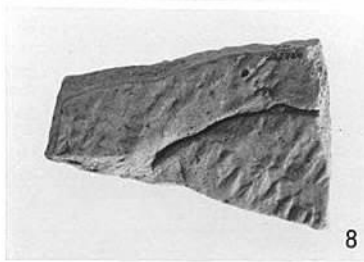
b. 1号溝出土土器



6



8

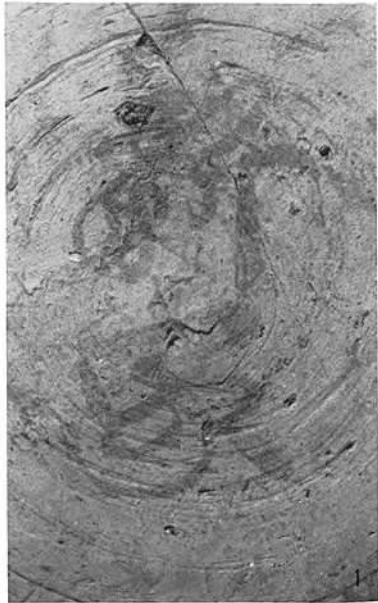


8

c. 含包層含出土須恵器



1



1



6



10

d. 包含層出土土師器



17

e. 包層出土土師器



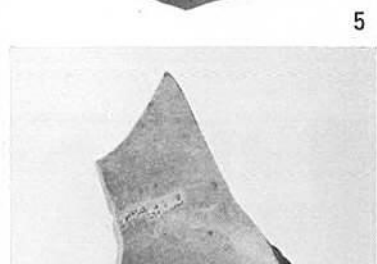
3



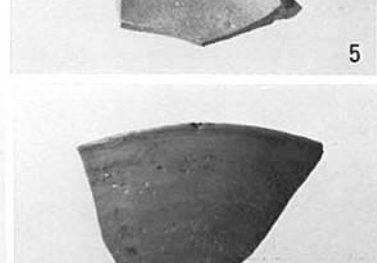
4



5

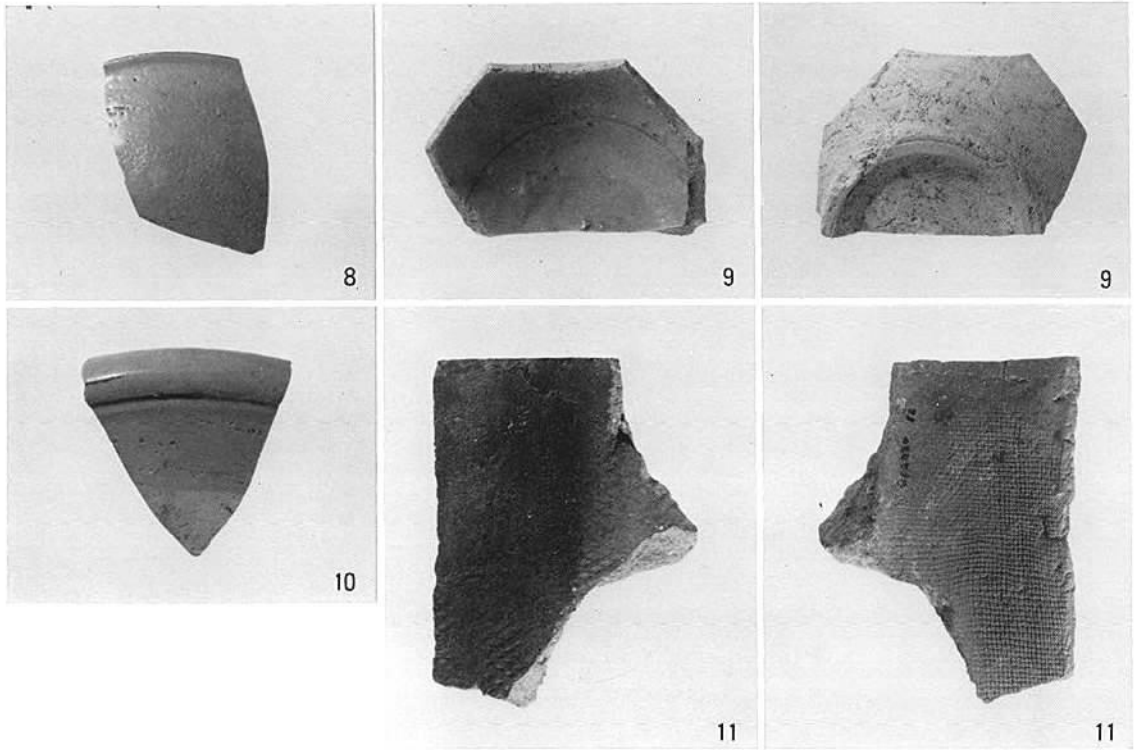


5

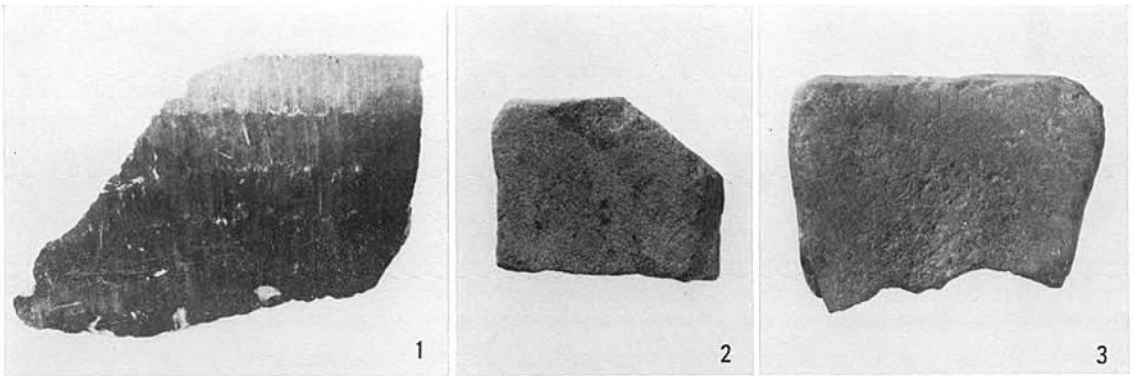


7

f. 包含層出土瓦器緑釉・青磁



a. 包含層出土の青・瓦



b. 遺構出土の石製品



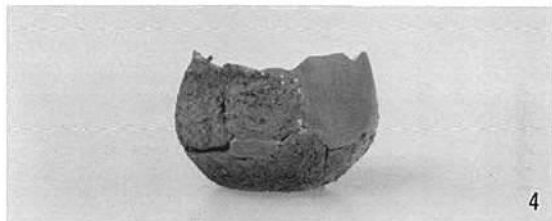
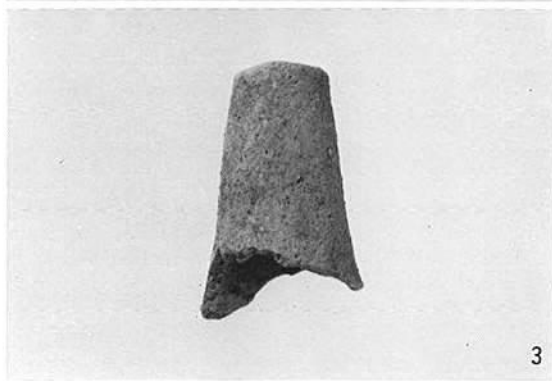
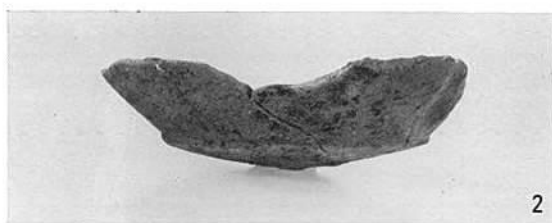
c. 包含層出土滑石製石鍋



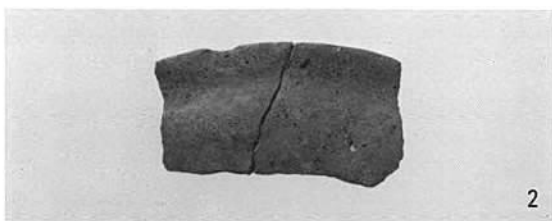
a. 東北隅土師穴出土土師器



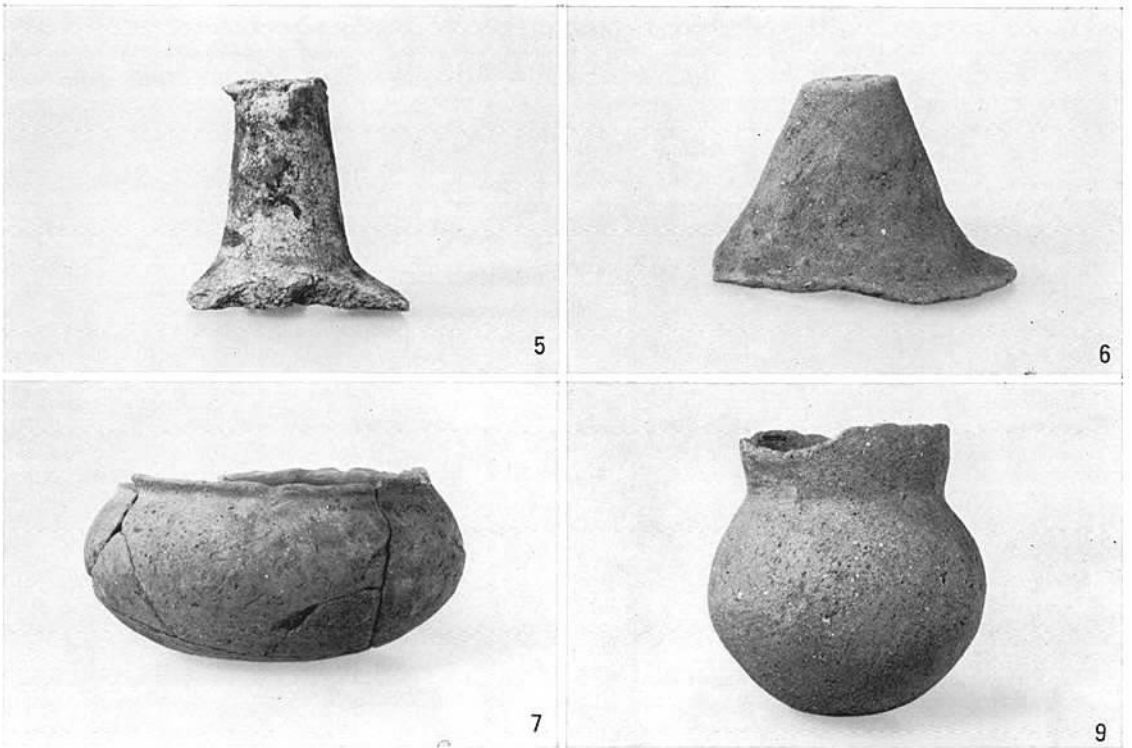
b. 35号住居跡内柱穴出土土師器



c. 35号住居跡内柱穴土師器磁



d. 包含層土土師器

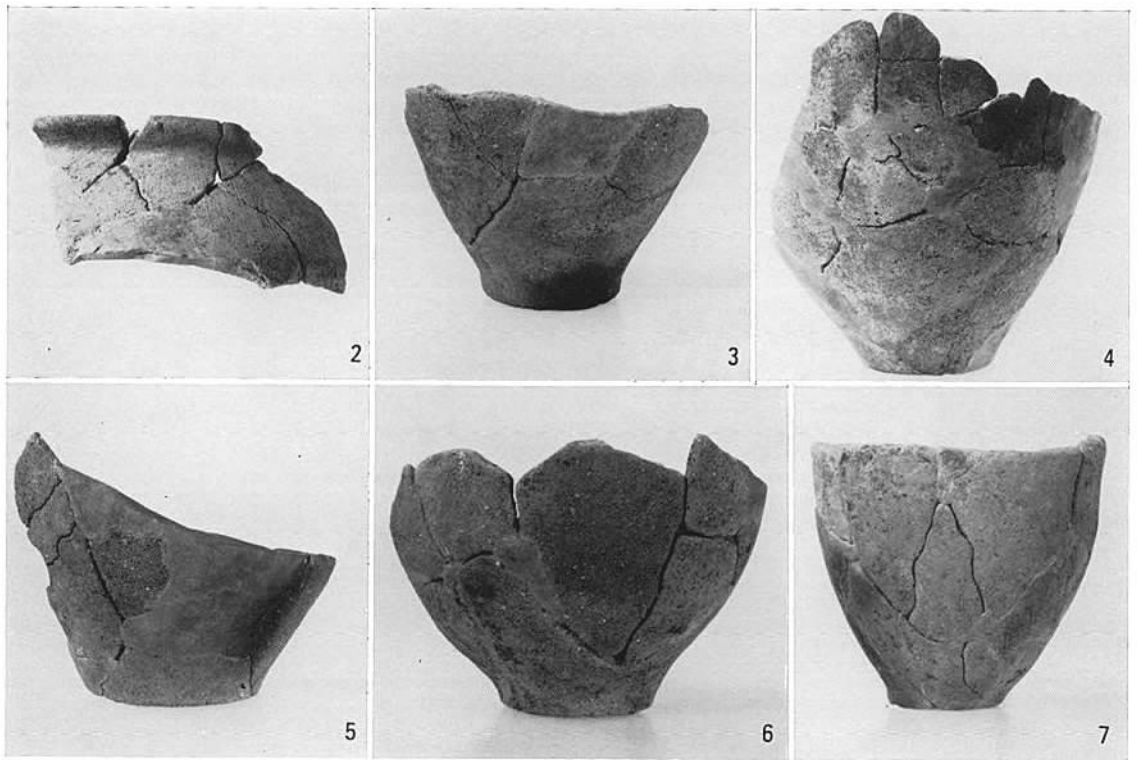


a. 包含層出土土師器

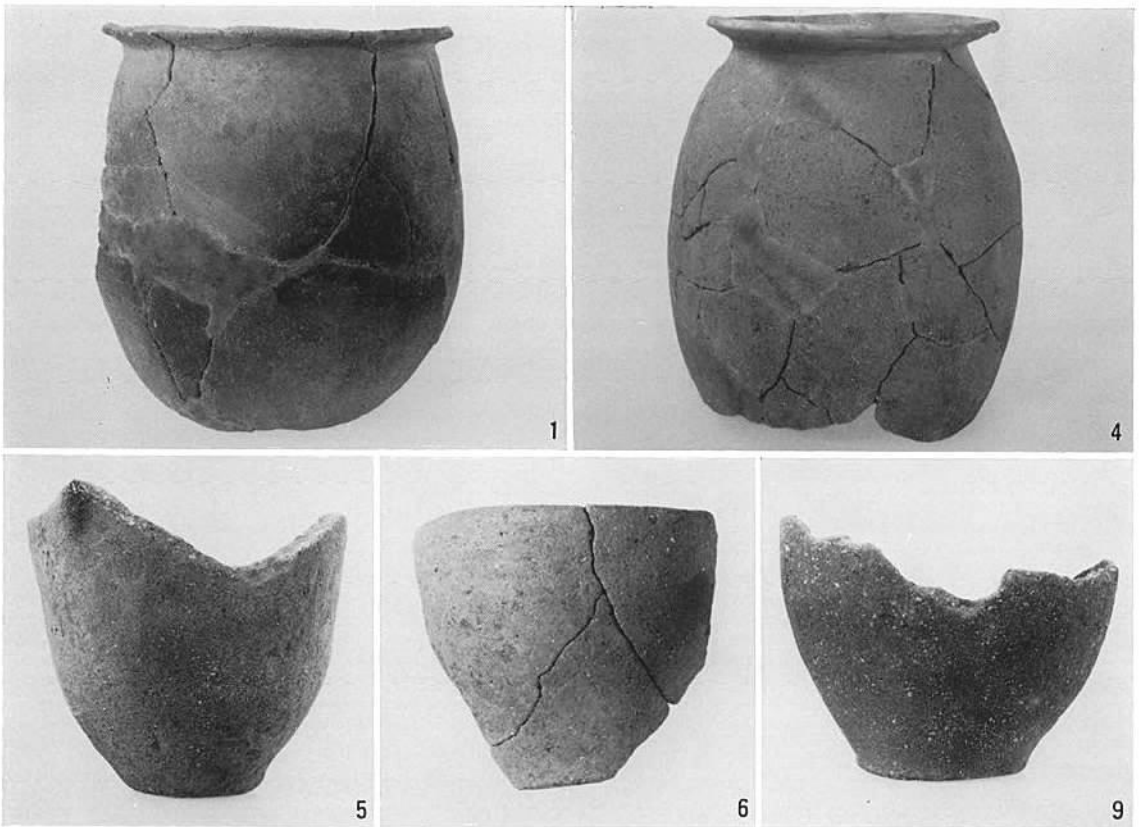


c. 滑石製紡錘車

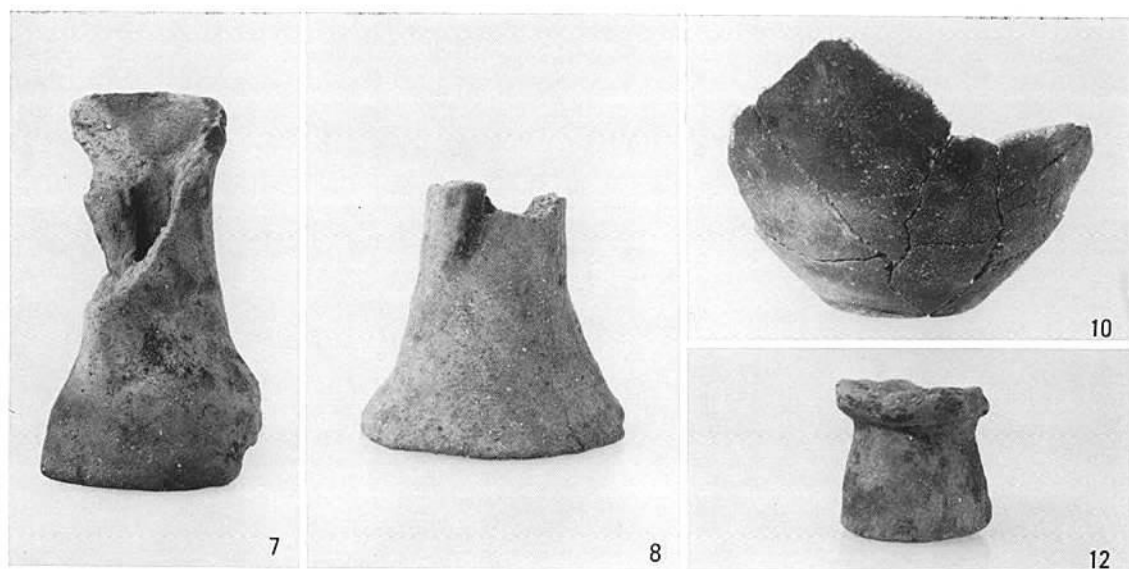
b. 1号住居跡出土土器



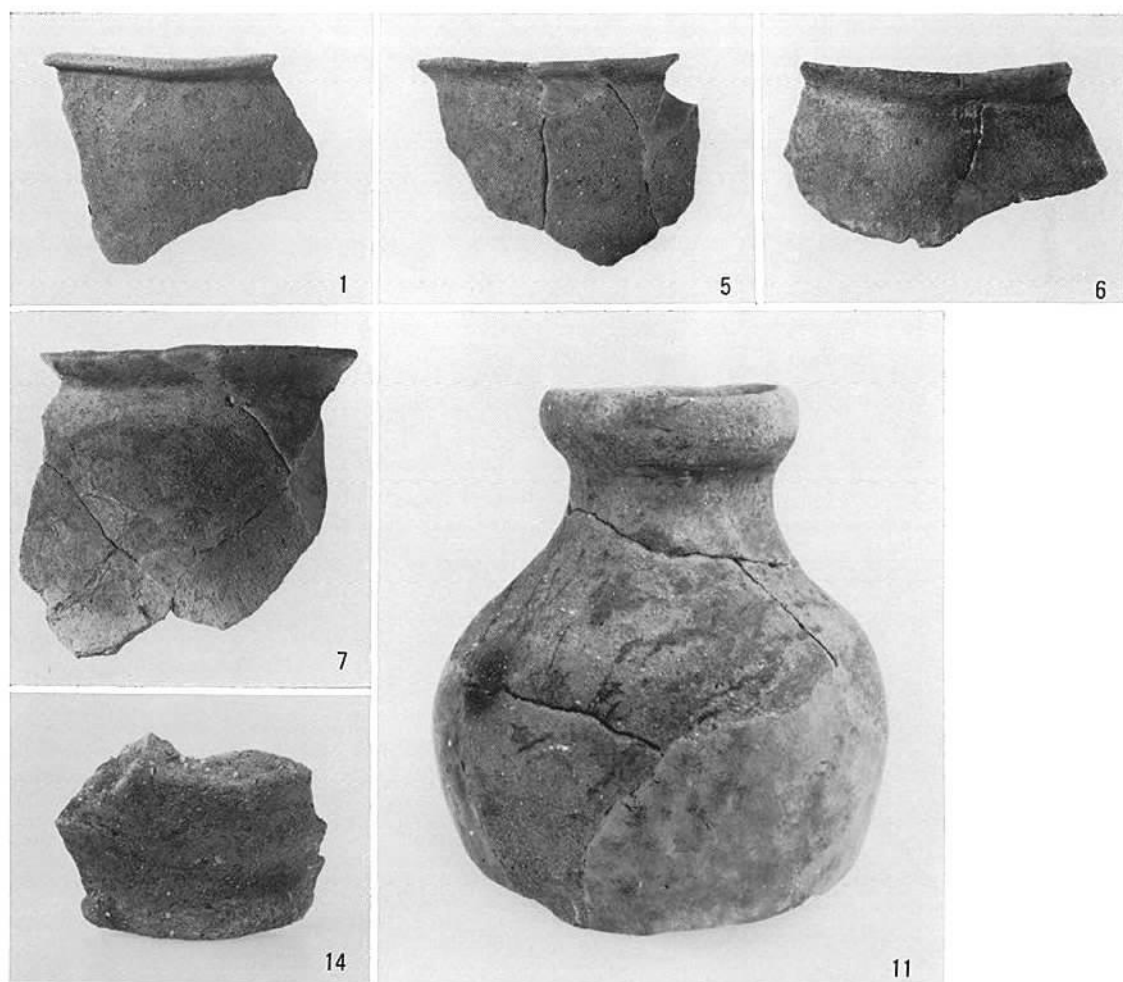
a. 1号住居跡内 3号ピット出土土器



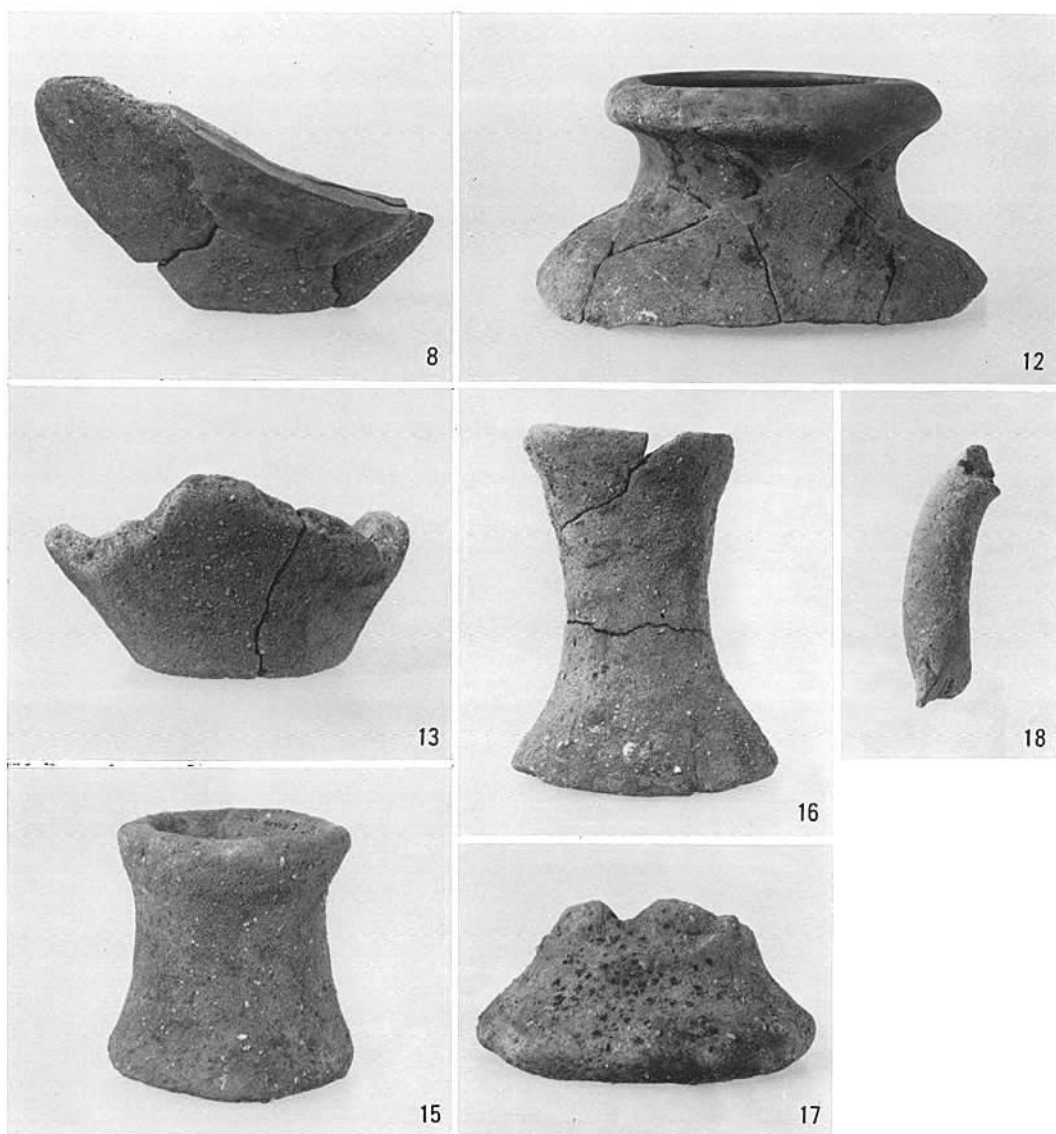
b. 2号住居跡出土土器



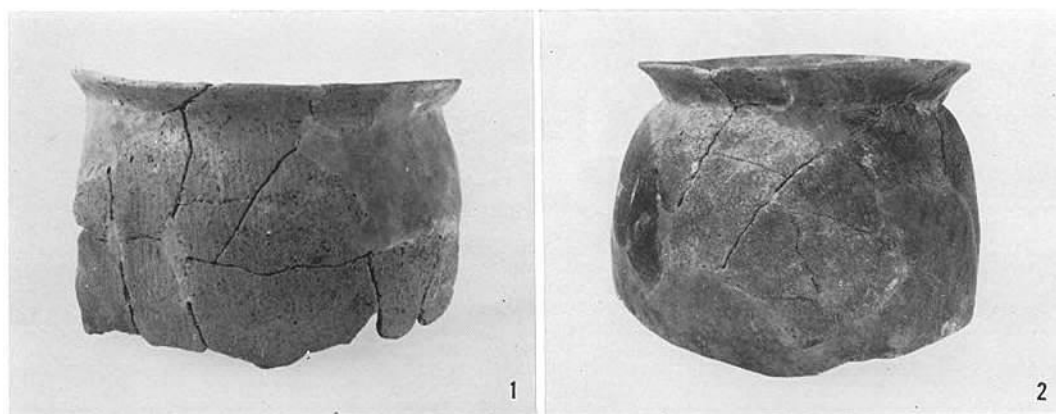
a. 2号住居跡出土土器



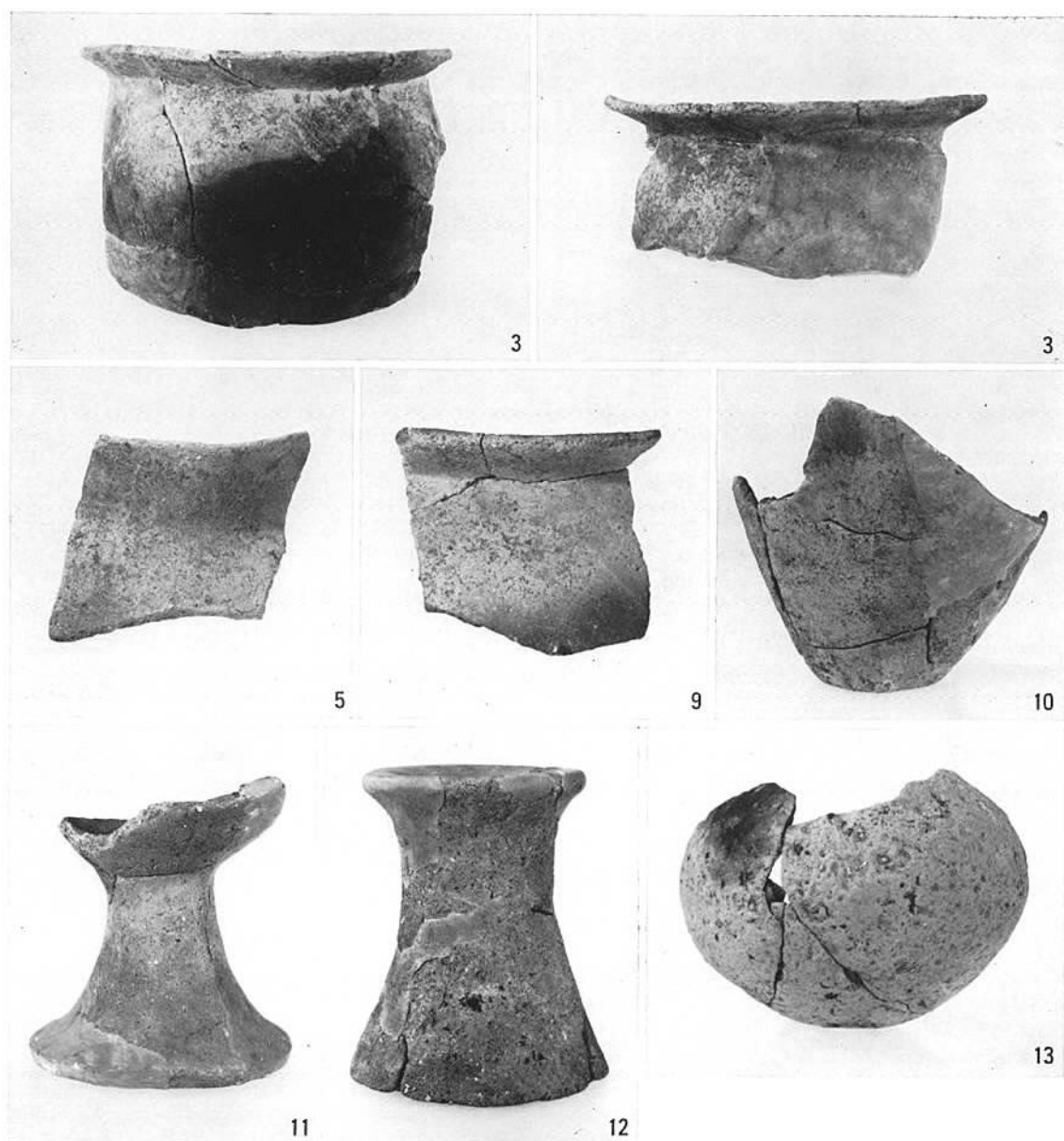
b. 31号住居跡出土土器



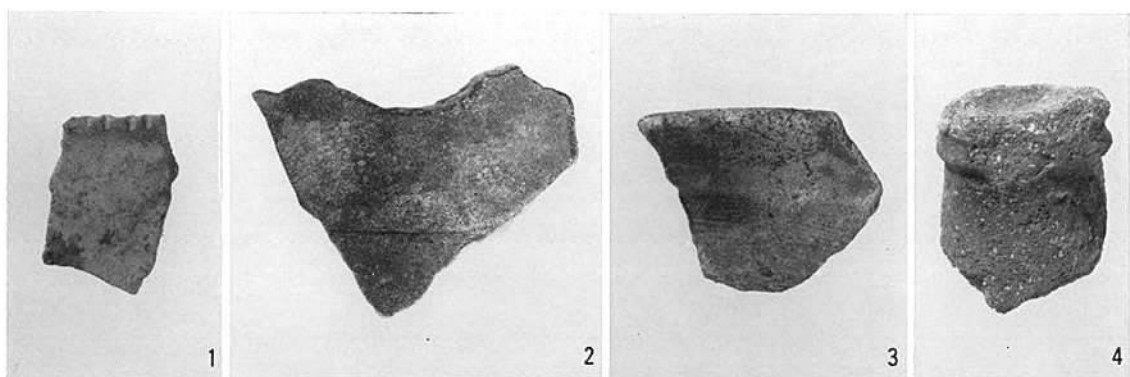
a. 31号住居跡出土土器



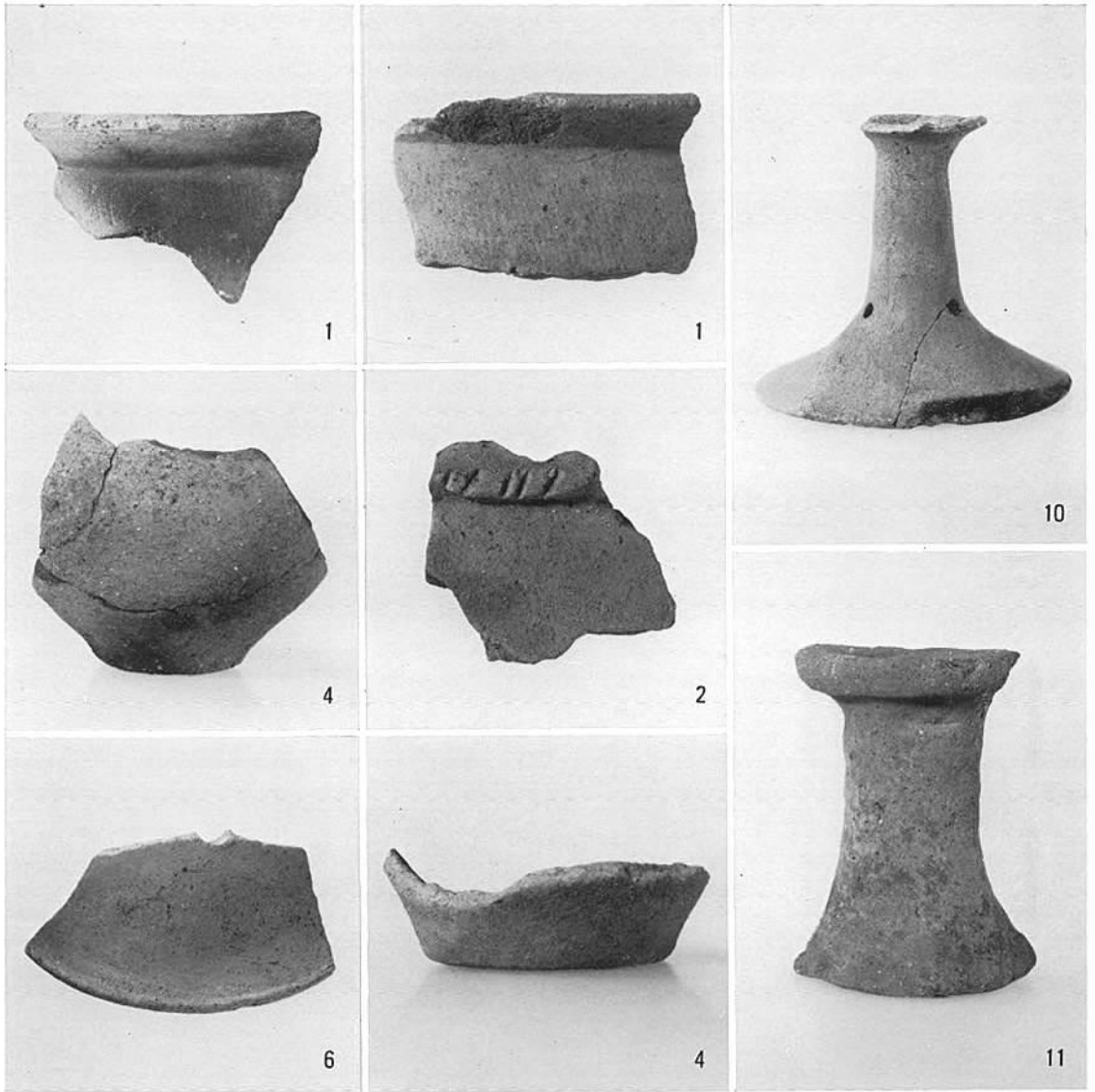
b. 35号住居跡出土土器



a. 35号住居跡出土土器



b. 35号住居跡柱穴内出土前期土器



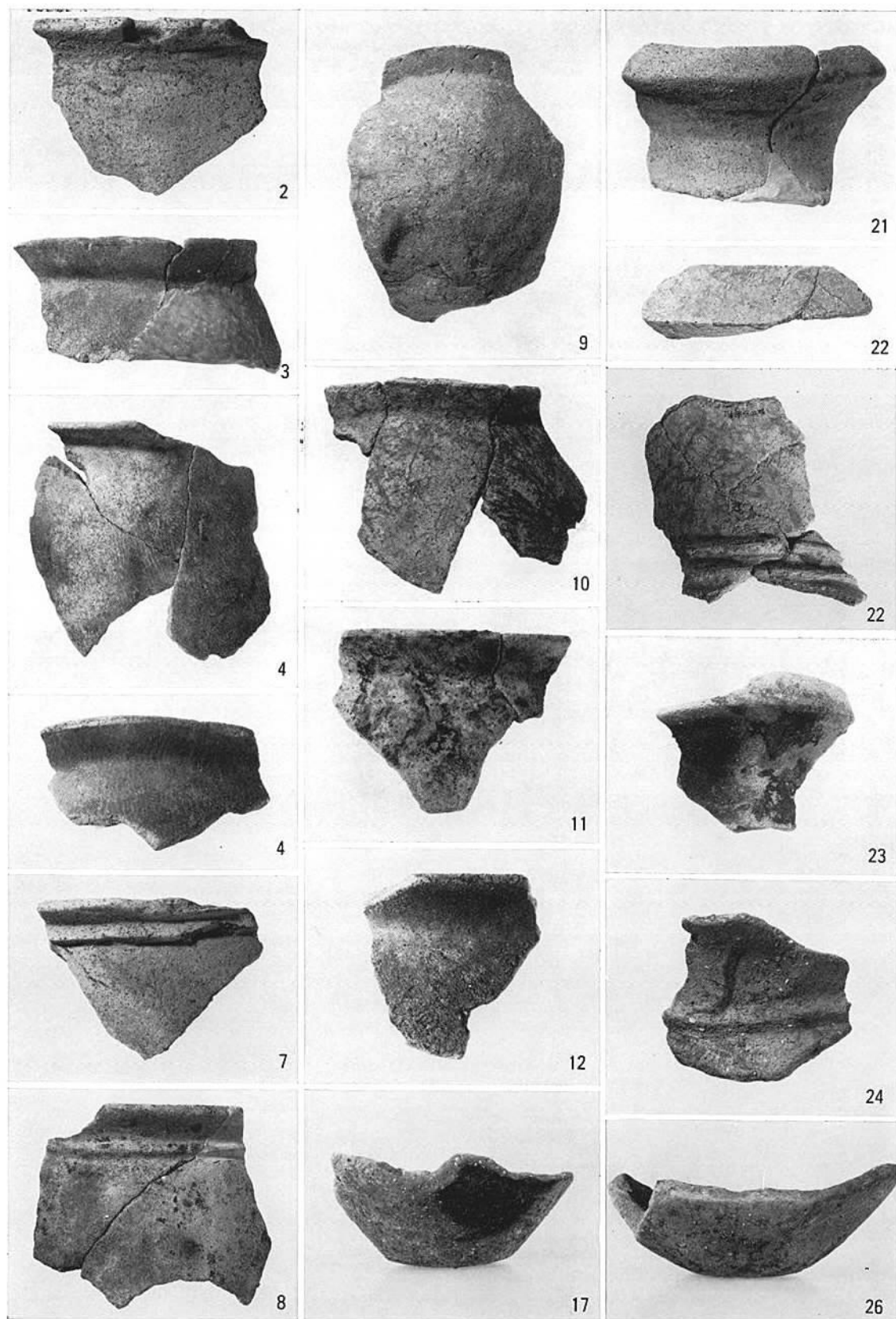
a. 37号住居跡出土土器



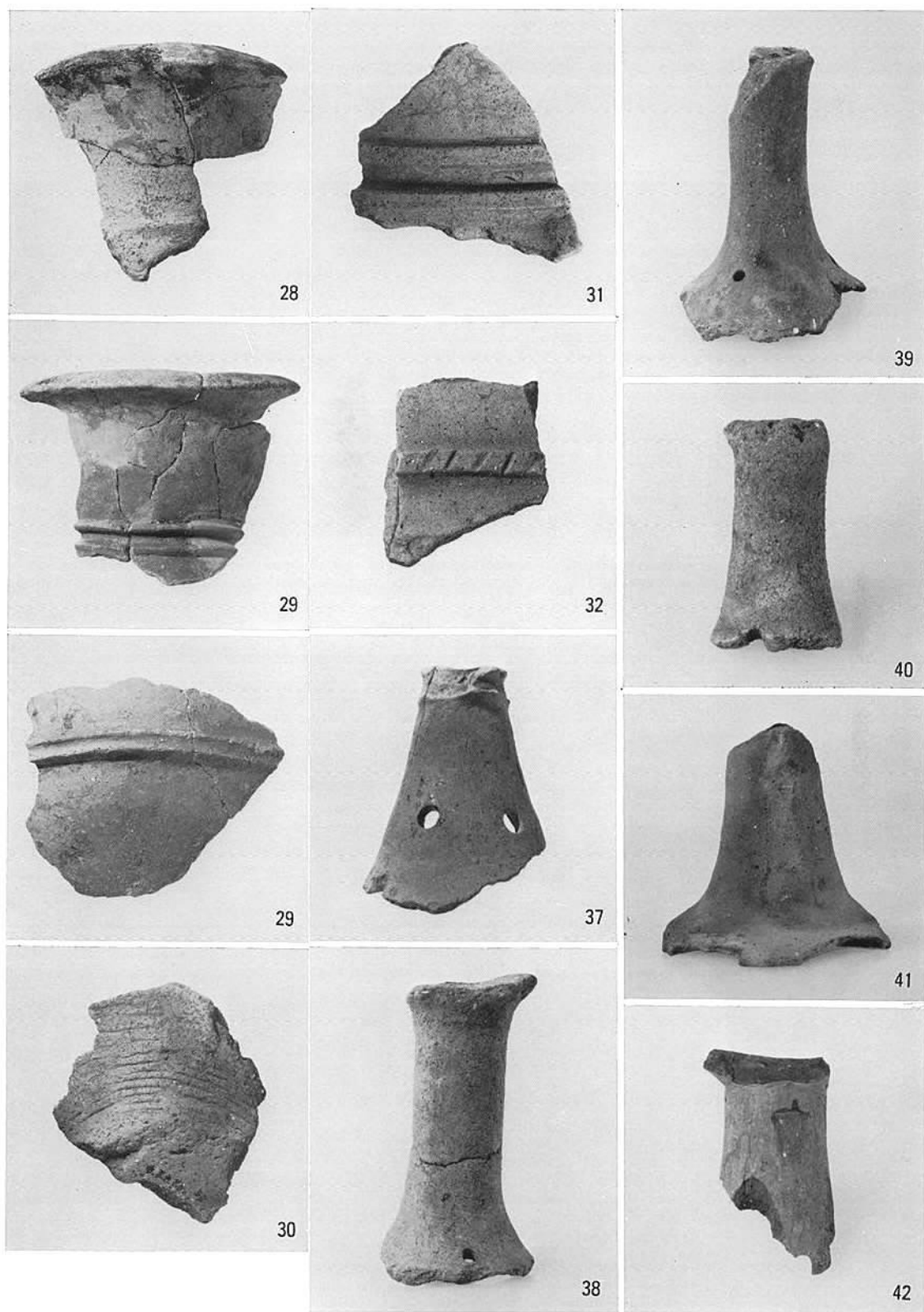
b. 43号住居跡出土土器



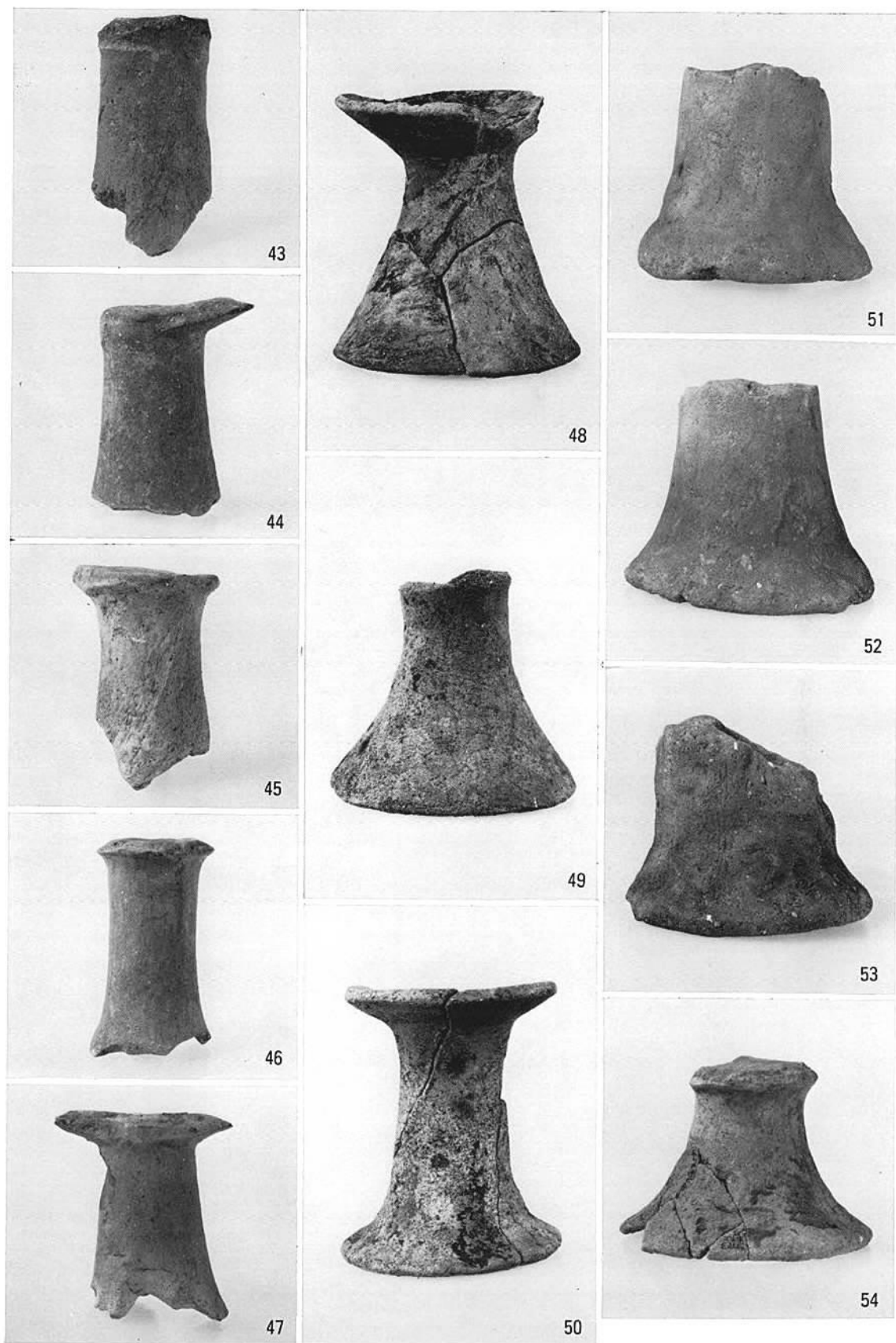
c. 南西トレンチ出土土器



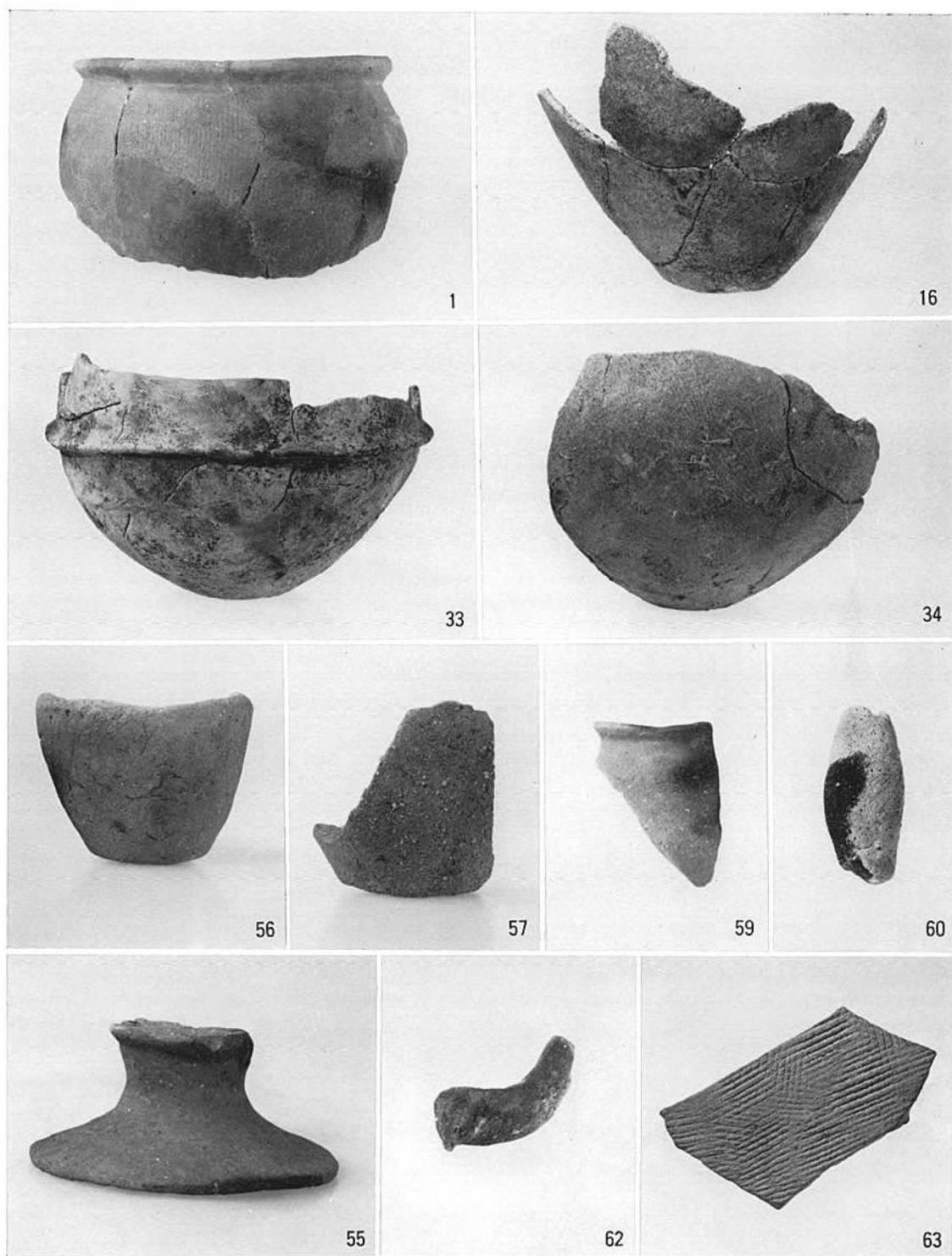
包含層出土土器 (1)



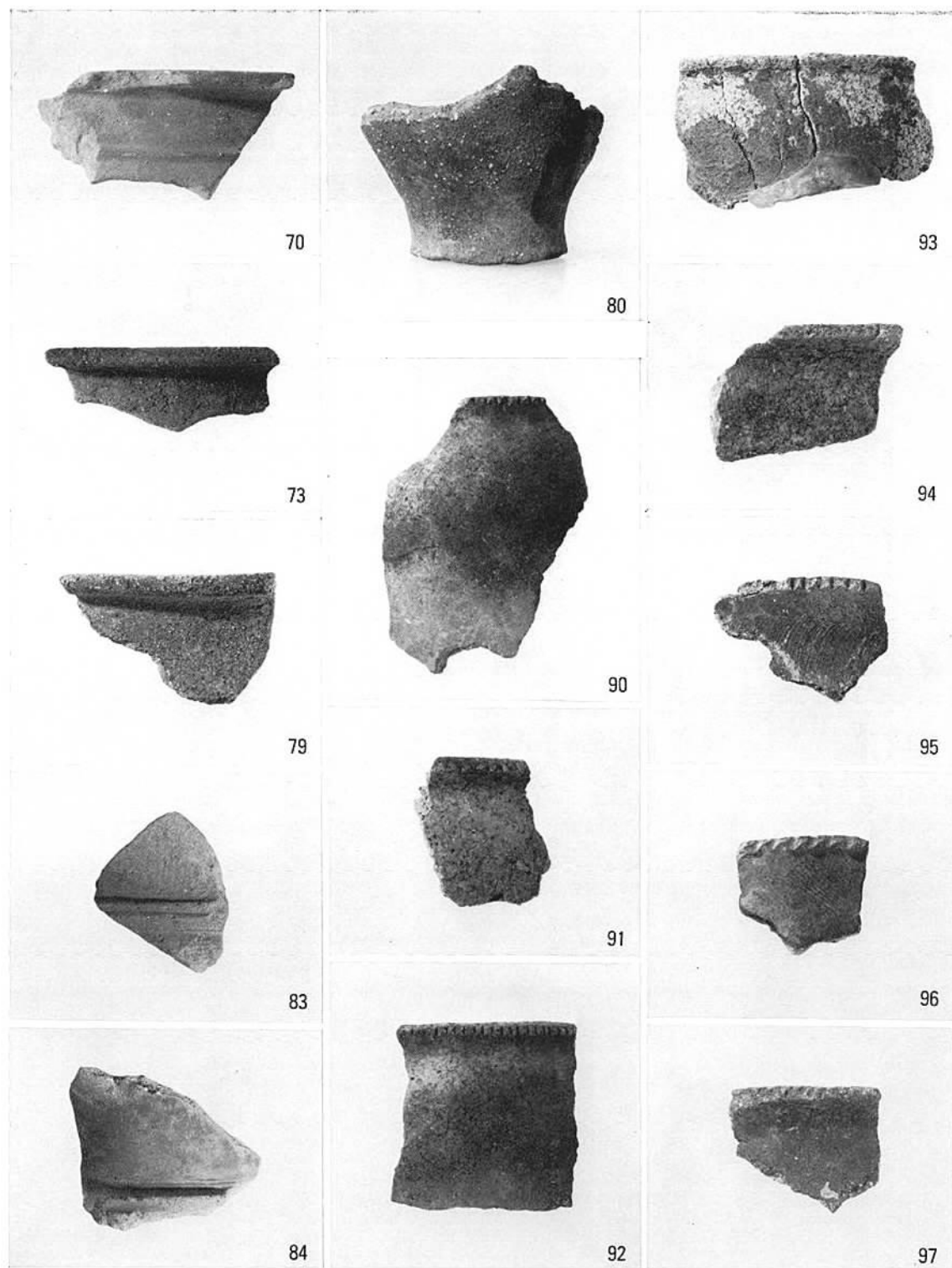
包含層出土土器(2)



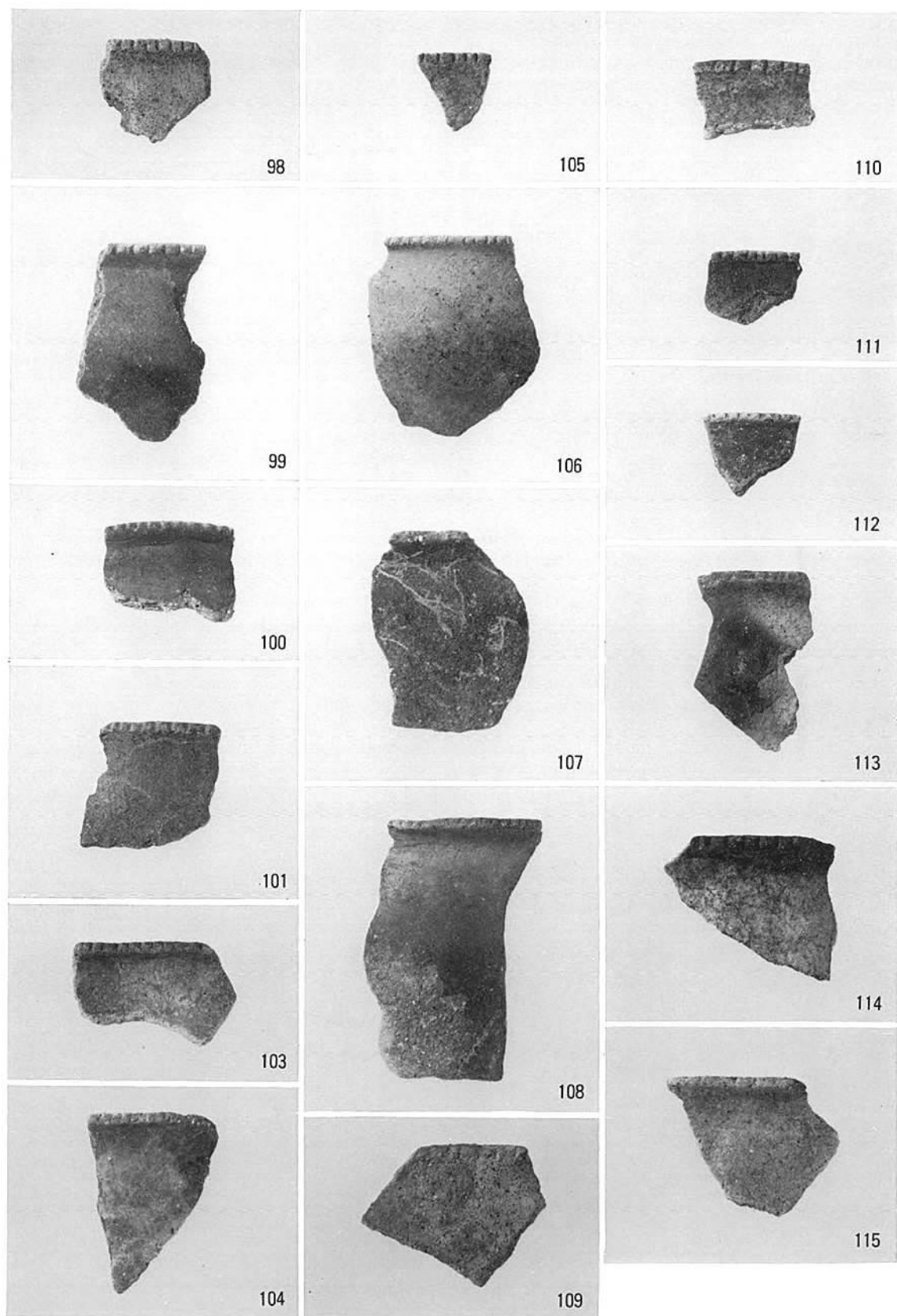
包含層出土土器 (3)



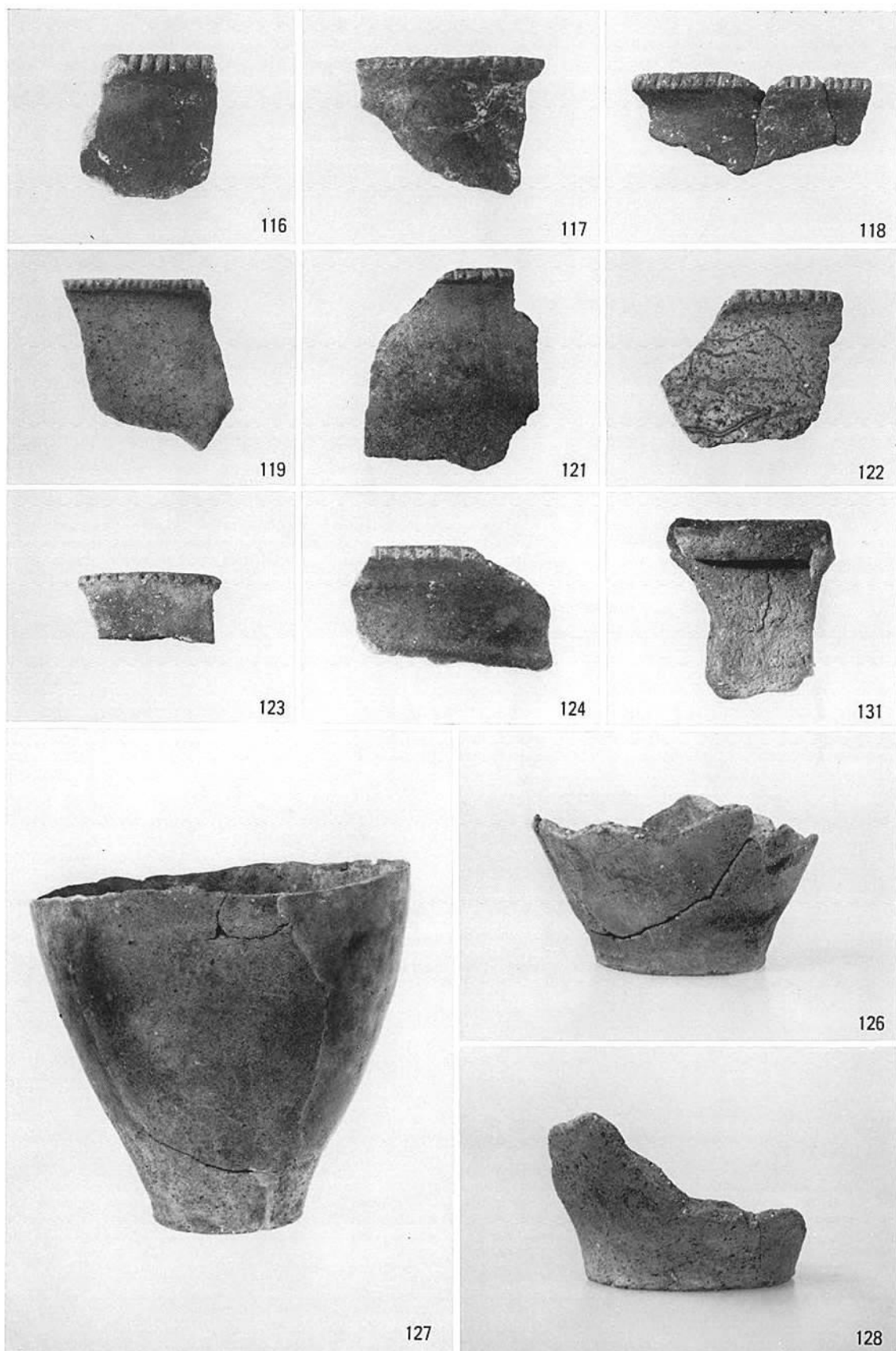
包含層出土土器 (4)



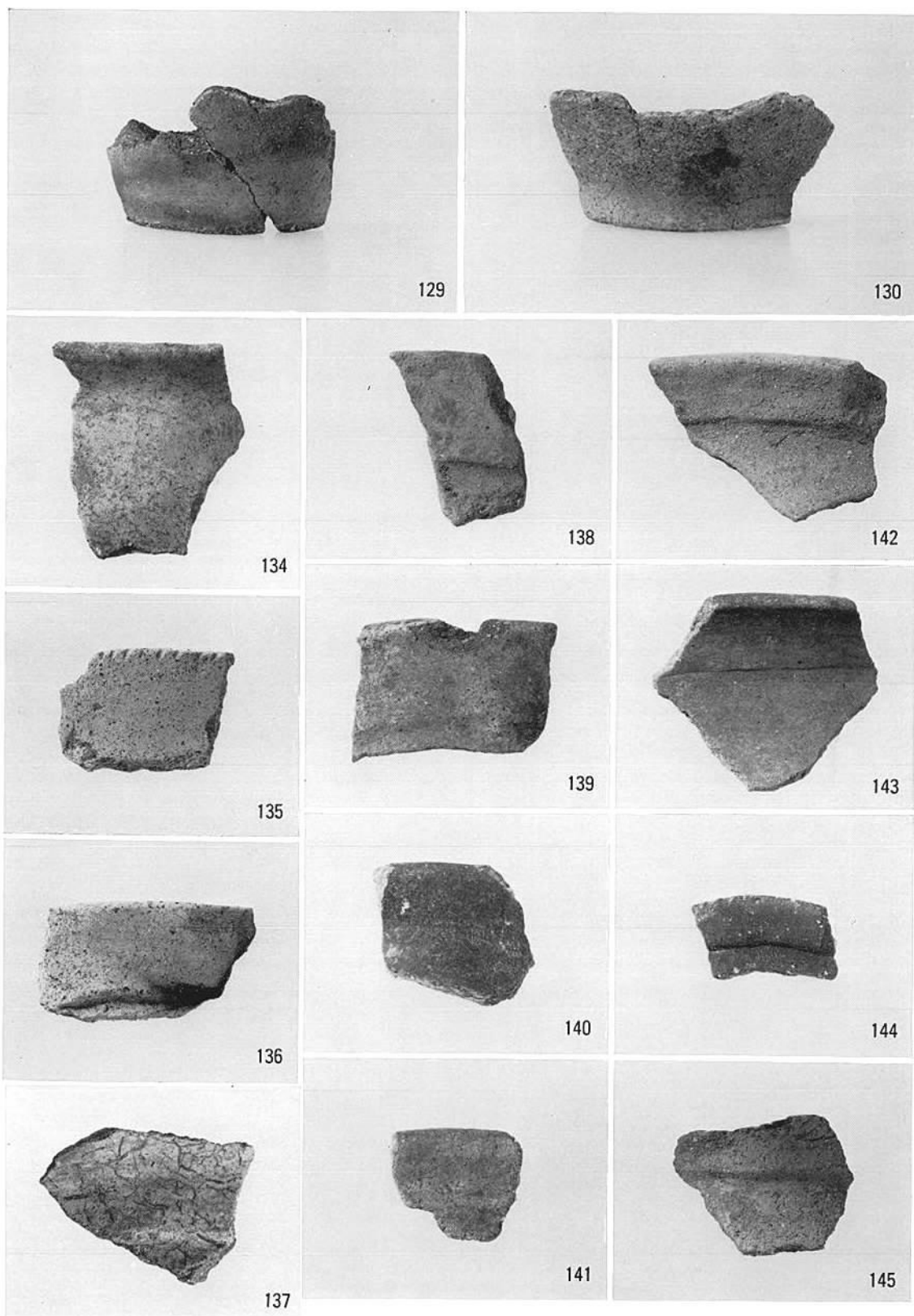
包含層出土土器 (5)



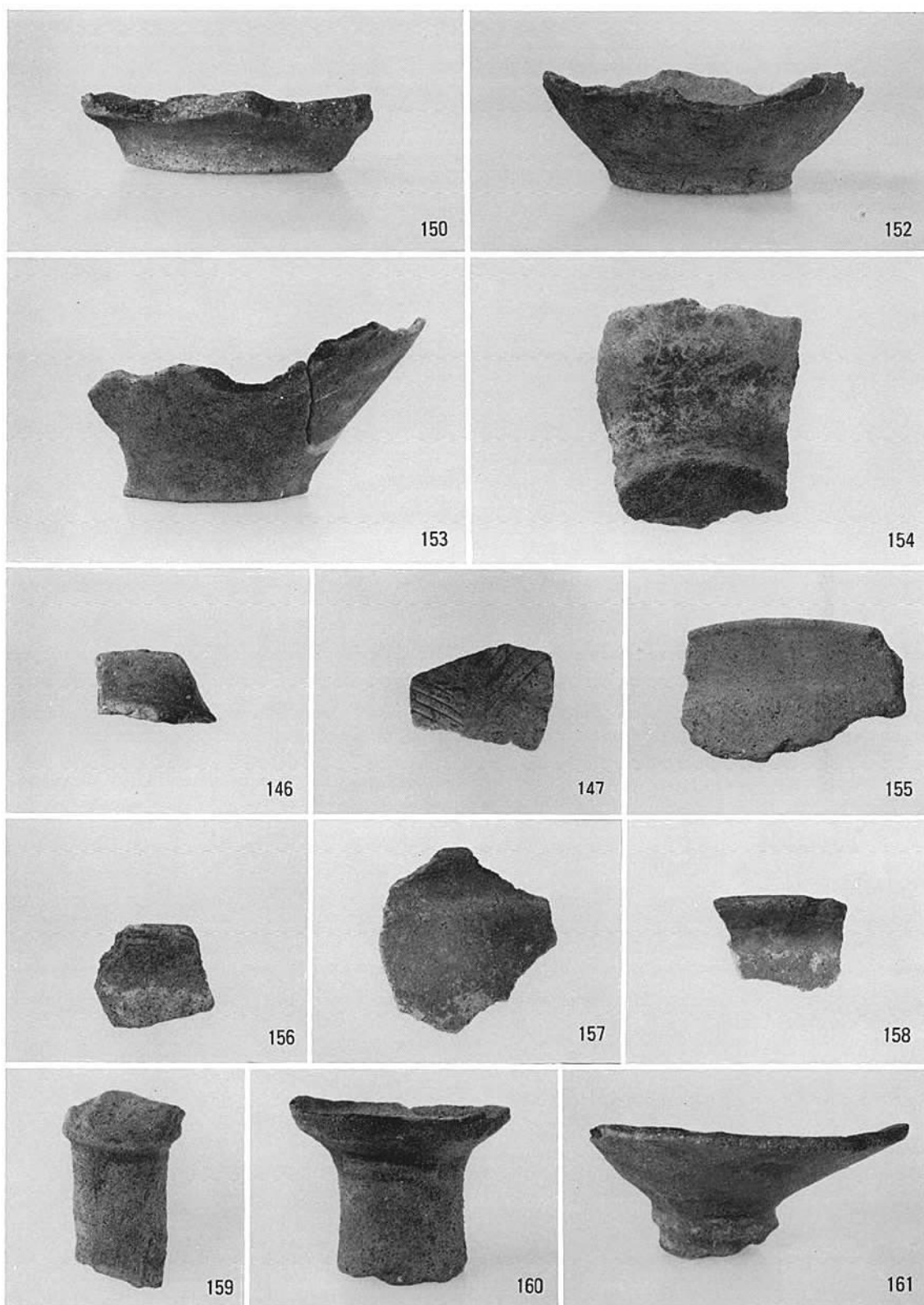
包含層出土土器 (6)



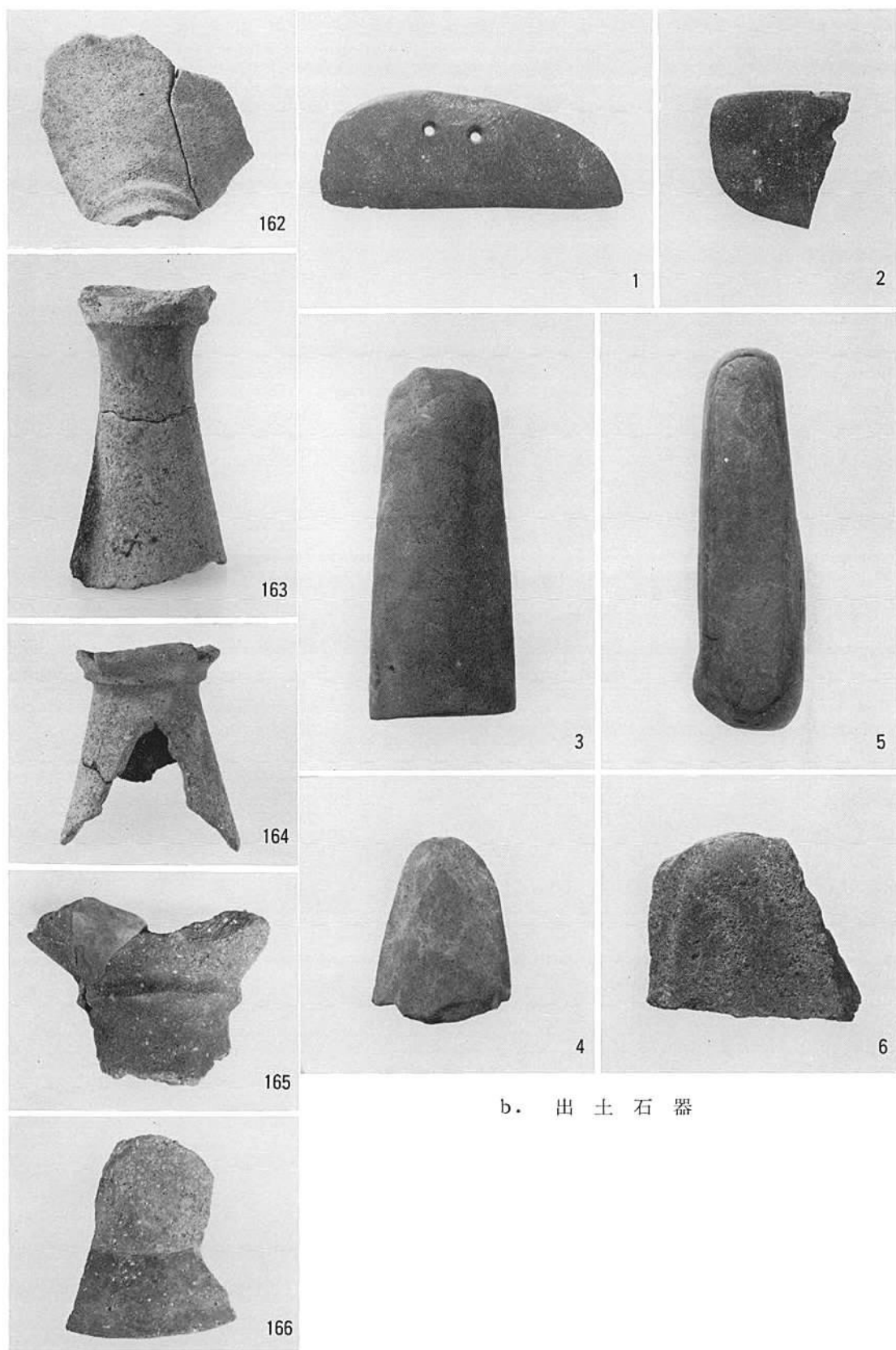
包含層出土土器 (7)



包含層出土土器 (8)

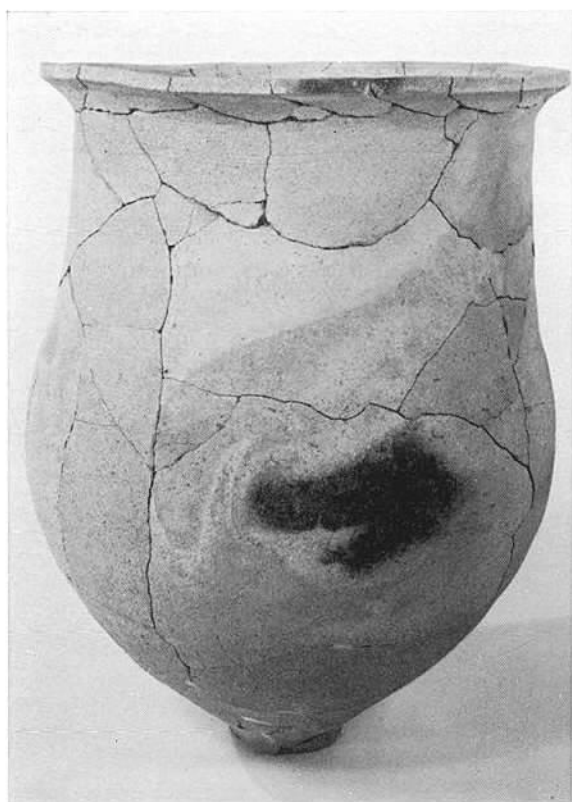


包含層出土土器 (9)



a. 包含層出土土器(10)

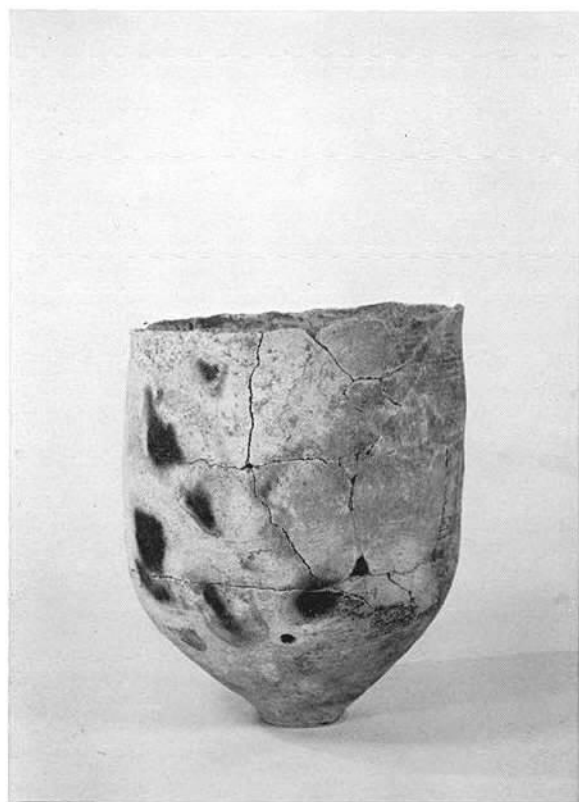
b. 出土石器



a. 2号甕棺



b. 3号甕棺上甕



c. 3号甕棺下甕



d. 3号甕棺下甕



a. 4号甕棺上甕



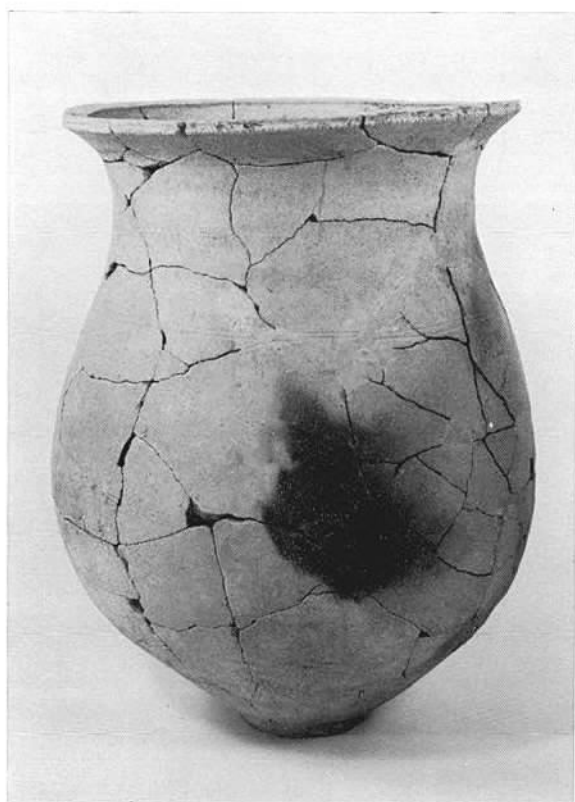
b. 4号甕棺下甕



c. 5号甕棺上甕



d. 5号甕棺下甕



a. 6号甕棺



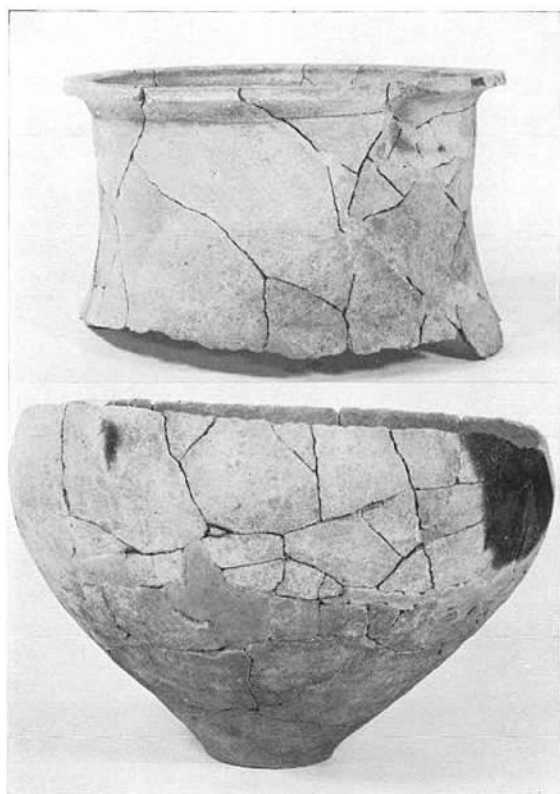
b. 7号甕棺上甕



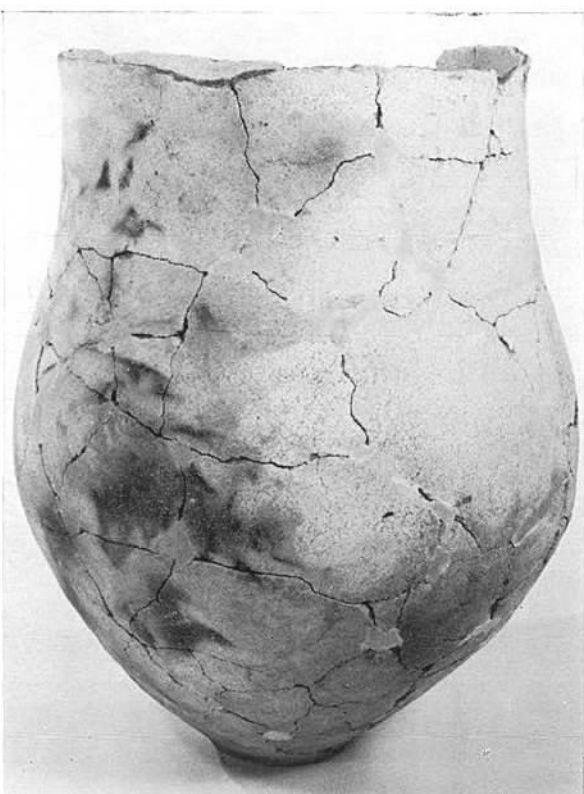
c. 7号甕棺下甕



d. 7号甕棺下甕



a. 10号甗棺上甗



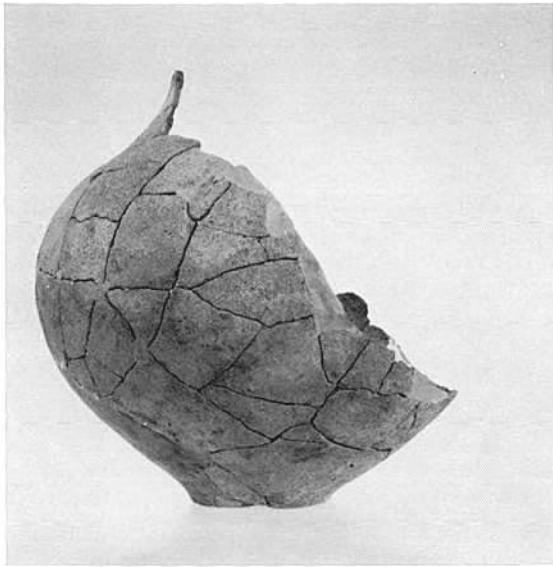
b. 10号甗棺下甗



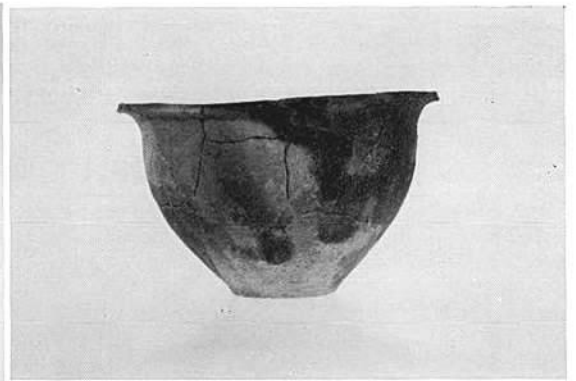
c. 11号甗棺



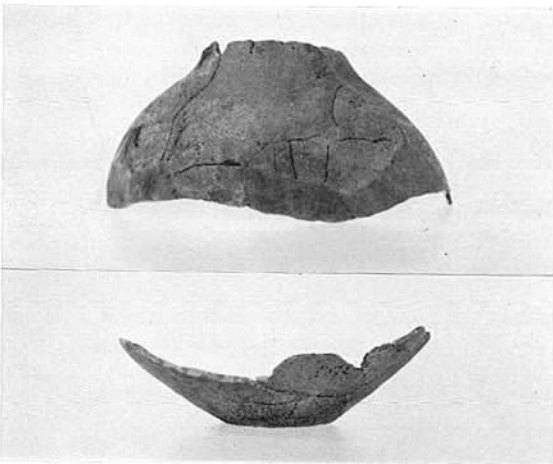
d. 11号甗棺



a. 1 号甕棺下甕



c. 8 号甕棺下甕



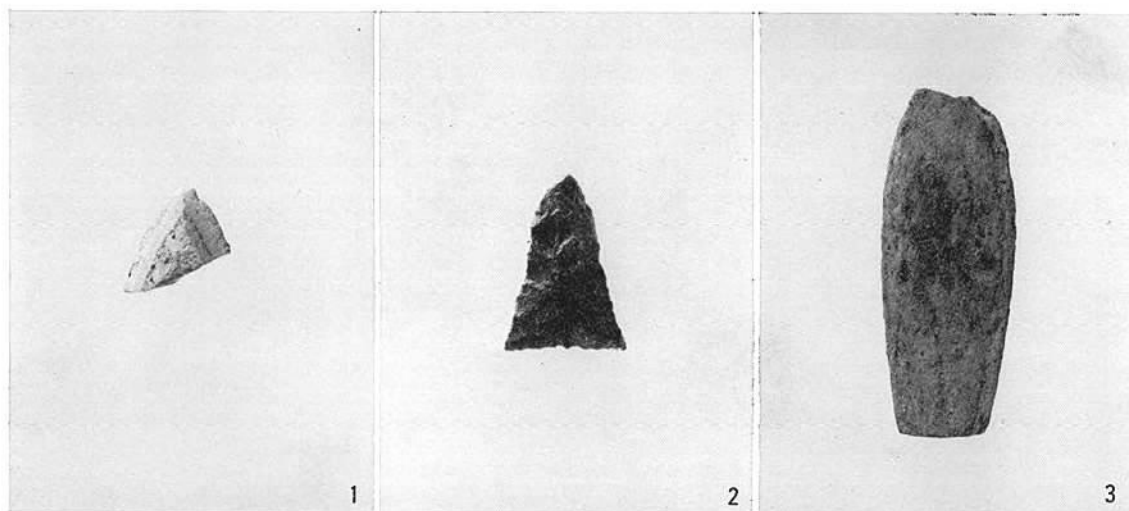
b. 8 号甕棺上甕



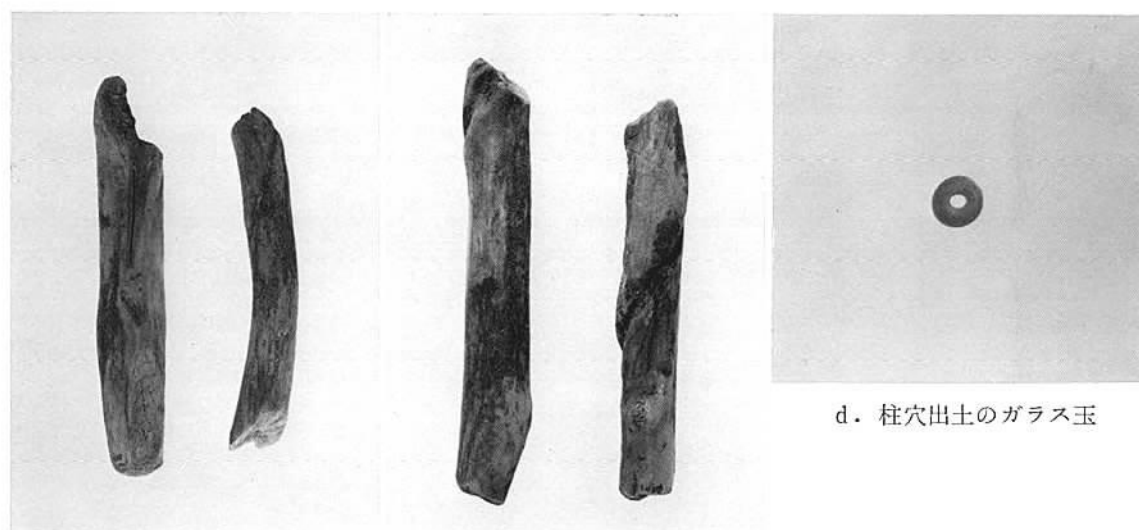
d. 9 号甕棺上甕



e. 9 号甕棺下甕



a. 2号甕棺内出土石器

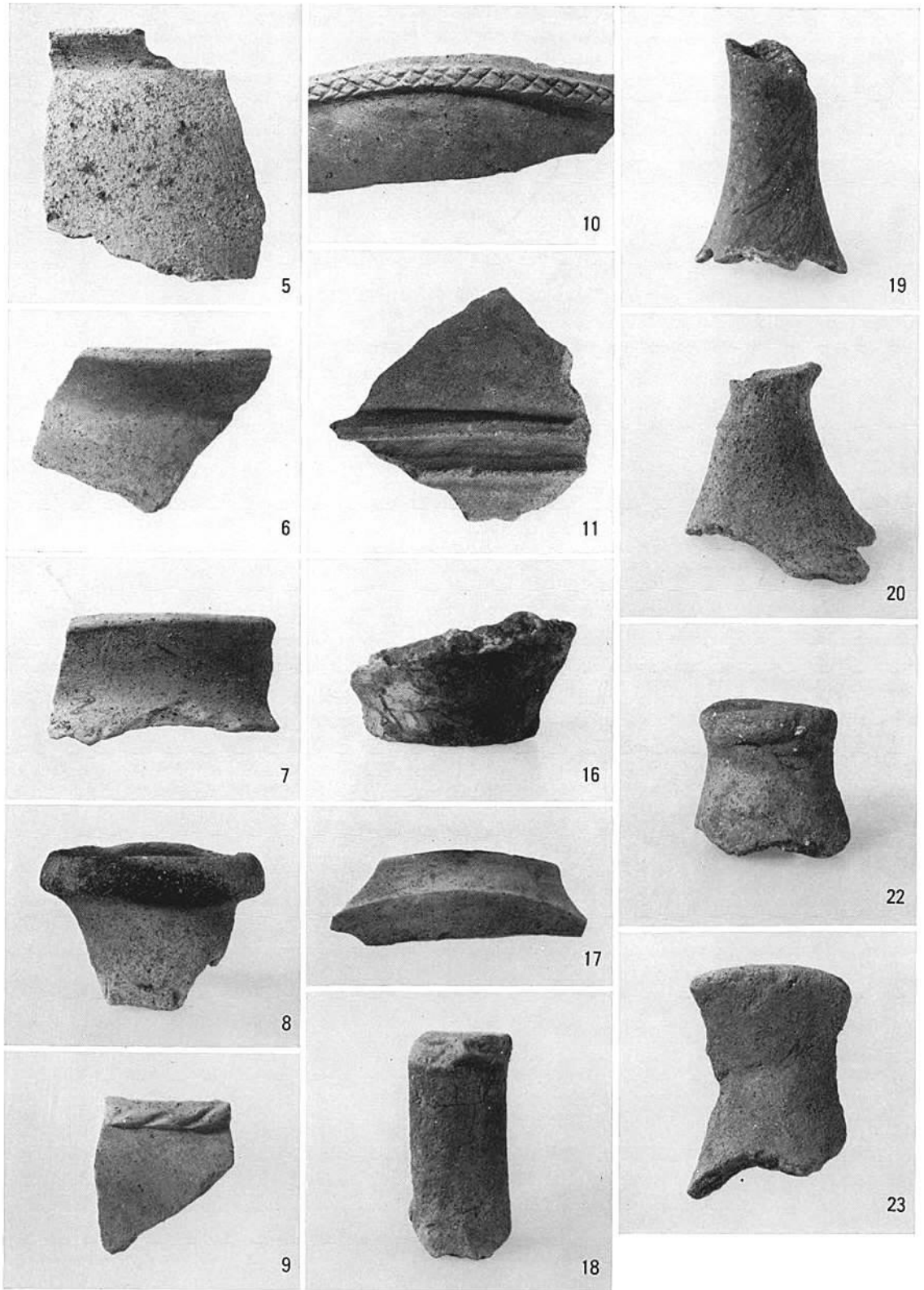


b. 井戸1出土木器

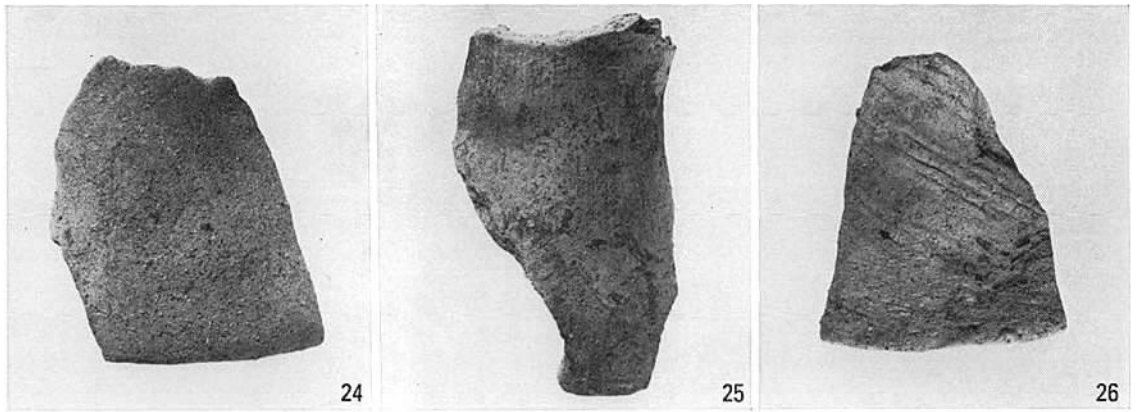
d. 柱穴出土のガラス玉



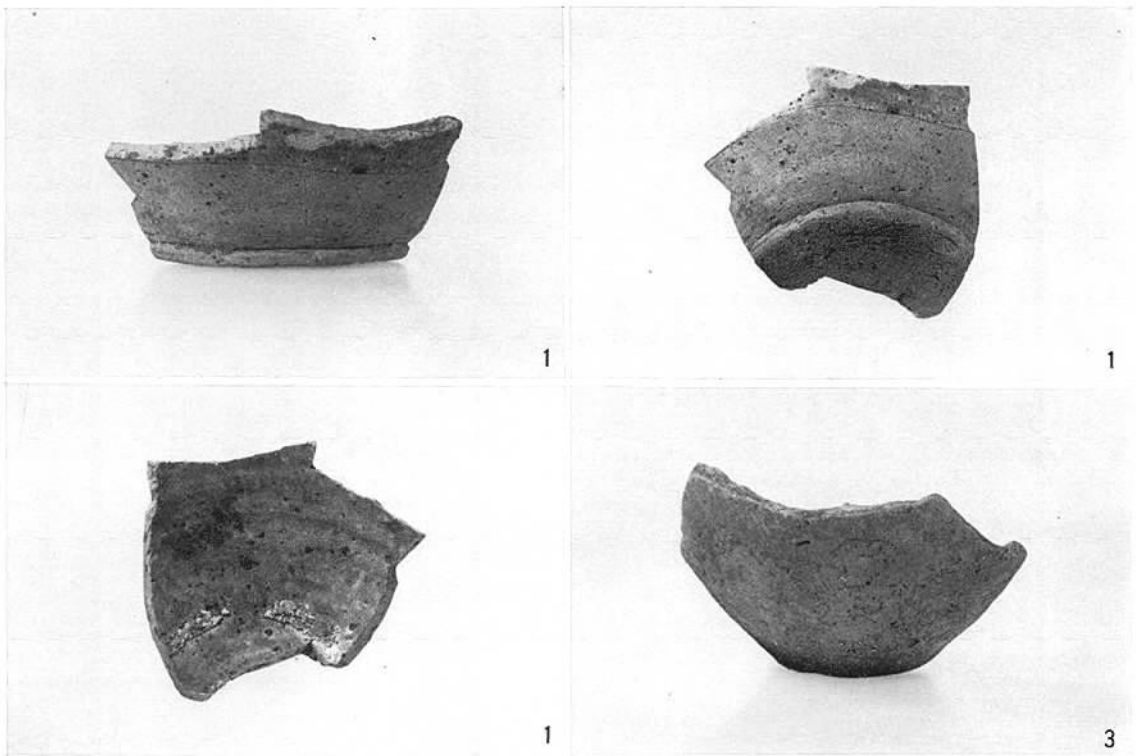
c. 11号甕棺内出土鉄製品



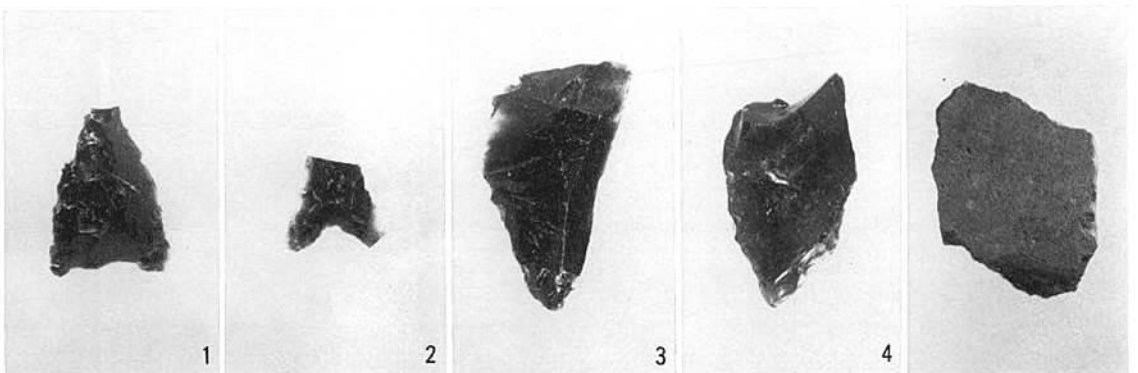
堤田 1 トレンチ出土土器 (1)



a. 堤田 1 トレンチ出土土器 (2)



b. 堤田 2 トレンチ出土土器



c. 堤田 トレンチ出土石器

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集

石崎 曲り田遺跡 I

昭和58年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号